

転生先の学友の顔が強すぎる件

流水麴と豪州侍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦国時代の畿内とかいう魔境に放り投げられてしまった高校生・佐々木高広。

スマホもなく、向こうでの親もいない。

そんな、ないない尽くしの中で彼が出会ったのは……。

目次

第1章 Childhood

第1話 友 | 1

第2話 秘密 | 4

第3話 お市 | 7

第4話 元服 | 10

第5話 恐怖の夜 | 14

第6話 暗天 | 19

第2章 Declaration of war

第7話 代償 | 23

第8話 顔見知り | 26

第9話 偽善 | 31

第10話 敵将、浅井長政 | 35

第11話 世代が変わる | 39

第3章 The antagonism

第12話 次の戦雲 | 43

第13話 遭遇 | 47

第14話 阿吽 | 51

第15話 仕上げ | 55

第16話 蠍の毒 | 60

第17話 観音寺騒動 | 64

第18話 唐橋 | 68

第19話 石山崩れ | 72

第20話 騎馬殺しの陣 | 77

第21話 腹芸 | 82

第22話	貴公子	86
第23話	暴れ馬	90
第24話	口約束	94
第25話	因果	99
第4章	<i>Eastern strategy</i>	
第26話	巨星、墜つ	106
第27話	それぞれの初手	111
第28話	亀山合戦	116
第29話	河原田の戦い	122
第30話	將軍の暗躍と今孔明の出慮	128
第31話	奇遇	132
第32話	対面	137
第33話	思惑の稲葉山	142
第34話	転換	148
第35話	江尾対談	155
第36話	一つの策	160
第37話	一夜にして	165
第5章	<i>Hot war is decided</i>	
第38話	熱い戦争	172
第39話	手荒い歓迎	176
第40話	緋色の硝煙	180
第41話	再考と器	185
第42話	狩場	190
第43話	退き佐久間	195
第44話	雲の上まで	201

第45話 目覚め 205

第46話 水の城 211

第47話 三河赤坂の戦い 217

第48話 自分の仕事 222

第6章 A little peace

第49話 新秩序 227

第50話 清水寺の戦い 232

第51話 待ち人 238

第52話 夢の続き 244

第53話 穏やかな時の終わり 249

第7章 Snow fairy

第54話 発火点 253

第55話 苦い記憶 258

第56話 偶発 264

第57話 雲出川の戦い 269

第58話 装い 275

第59話 白刃 281

第8章 Pain

第60話 ふっかけ 288

第61話 牢中 293

第62話 216分の1 297

第63話 果てを見る 304

【二周年記念】 人物特集 六角高村 310

第64話 仮託と移ろい 315

第65話 三方ヶ原 320

第66話 長蛇を逸する 326

第67話 開戦 333

第68話 十二段 340

第69話 解 346

第70話 変われなかった男 354

第9章 Rebellion tiger

第71話 老境の身を顧みて 359

第72話 泥に塗れて 364

第73話 山が動く 370

第74話 知り難きこと陰のごとし 374

第75話 一閃一条一文字 前編 378

第76話 一閃一条一文字 後編 382

第77話 父と子 前編 388

第78話 父と子 後編 395

第79話 日本初の試み 400

第80話 信玄と信長 406

第10章 Game of tag

第81話 やはり織田信奈は持っている。 412

第82話 亡霊 417

第83話 若紫 421

第84話 罪科を背負う 426

第85話 クガイ、法難 431

第86話 鬼ごっこ 438

第87話 臆病者 445

第88話 餞別 450

第89話	浅井久政	456
第90話	小谷城の月	463
第91話	下天の君	467
第92話	雛月院	473
人物特集	浅井長政／雛月院	483

第1章 Childhood

第1話 友

俺には父親はいない。

かつては二人いたが、二人とも失った。

一人目は前世の父。令和に入っただけの頃に俺はこの世界に存在を移された、いわゆる転生者という奴になってしまったからだ。転生したということは向こうの俺は死んだのだろう。記憶がないから死因は定かではない。

二人目の父はこの世界の父。血を分けた肉親だったが、俺が5歳の頃に老衰で死んでいった。

「新十郎？ 何を呆けておるのですか？ 和尚の授業が始まってしましますよ?。」

「……ああ、そうだな」

隣の少年が呼びかけるも、いまいちしつくりこない。

新十郎。こんな名前の令和の高校生なんてまずいないし、俺は佐々木高広という人間であるという意識が頭からこびりついて離れない。

転生してから十年経つてもなお、俺はこの戦国の世に馴染めないでいる。

「それにしても、だ。和尚の話は無駄に長いからなあ。暇で暇で仕方ない」

「だからといってサボるのは良くないだろう、新十郎。仮にも貴方は六角の支族で、将来は家を支えなくてはならない」

転生した先は南近江を領する六角家。当代ではかなりの名門なのだが、メジャーどころしか戦国大名を知らない高校生だった俺にはあまり有り難みはない。

むしろ、それよりも。

「へいへい、北近江の大名様の嫡子に言われたら仕方ないな、猿夜叉丸さんよ」

目の前にいるこの少年こそが、浅井家の嫡子。つまりは浅井長政だということの方が重要だった。

*
なぜ、浅井家の嫡子が他家の一門の子と勉学を共にしているのか？

この問いに答えるためには、ここ数年の近江の情勢について説明しなくてはならない。

まず、近江にはぎっくり北の浅井、南の六角と2つの大名が割拠していた。

南の俺が血を引く六角家は古くから続く名門で佐々木源氏の棟梁格である。一方、北の浅井家は猿夜叉丸の祖父である浅井亮政の代に四職の一つ、京極家を下克上で打ち倒して、北近江の支配者にのし上がった新興勢力だ。

パツと見て浅井家の方が強そうに見えるが、それは新興勢力という響きが美しいだけだ。

浅井亮政は下克上を果たしたはいいが、北の越前と南の六角の挟撃を受け、小谷城を占拠されてしまう。

それ以降は浅井家と六角家の力関係はやや六角優位に転じ、なおかつ浅井家は国内の支配強化、六角家は中央への介入が最優先のため小康状態となっている。

だから、俺が浅井家への人質として向こうの居城の小谷城にいるわけではない。猿夜叉丸が人質として、こっちの観音寺城に來ているのだ。

(流石は後世にイケメン武将扱いされるだけはあるよなあ)

だが、人質といっても猿夜叉丸にはなんかオーラみたいなのがある。

男のくせにまつげが長くて、髪もさらさら。割と同じ物を食ってるはずなのにこうも違うとは。どう取り繕ってもモブ感が否めない俺とは雲泥の差である。

「どうした？ 新十郎。まじまじと私の顔なんか見て」

「相変わらず可愛らしい顔してるなって思っただけだ。将来、男色家

に食われないように気を付けろよ?」

「……む。そうか、ご忠告傷みいる。大人になったらきをつけるよ」

顔を赤くした猿夜叉丸がそっぽを向いて言う。

「ははっ、相変わらずその手のことに弱いんだな。あと数年したら、俺らも祝言とか挙げる身だというのによ」

この世界の結婚はやたらと早い、前世で言う大学生頃には大抵1度は結婚している。ちなみに男子もだいたい中学生頃にはケツを掘られる。

特に六角家の場合は当主の義賢様が女狂い、嫡子の義治様はホモだから、その辺りの風紀は乱れまくり。あれ? まともなのは義治様の妹の義定と俺しかおらんじゃん。

これは六角家、滅びますわ。

ともあれ、猿夜叉丸と俺は仲良く友達をやっているわけだ。将来敵になるのが悲しいところではあるが。

いや、それよりも悲しいのは家中で猿夜叉丸以外に心を明かせるのが、義定を含め、ごく少数しかないということなのかもしれない。

*

「ただいま……って言っても誰もいないよな」

屋敷に主人が帰って来たとしても返事などない。

そんな生活が4年続いていた。

俺の父が死んでからたった1年で母も跡を追うように亡くなり、わずかばかりの領地と遺産が俺にだけだ。使用人を雇う余裕はあるが、屋敷に帰ってやるのが洗濯と寝ることぐらいなら必要ない。

六角の一門だと言っても当主の一族からやや外れるため、こんなもんだ。

「猿夜叉丸が人質なら、俺はペットだよ。死なないように面倒を見られて、家のために使われて、いずれは死ぬのだろう」

ひとりごちて眠るべく布団を被る。

ただ、どうも寒くて完全に寝付くにはしばらくかかった。

第2話 秘密

寺での講義が終わると今度は近場の川で水練となる。

俺は薄手の着物に着替えて、猿夜叉丸を探した。

寺での講義や道場の稽古では猿夜叉丸といつも一緒にいた。

理由は単に気が合うだけじゃない。学力も武術の腕も俺と猿夜叉丸は近い。

学力はまあ前世の知識で下駄を履いているだけで、補正がなければ確実に猿夜叉丸に負ける。武術は幸いなことに俺にも才能があつたらしい。槍は猿夜叉丸に負けるが、刀と馬術では俺の方が勝つていた。

だが、事あるごとに一緒にいる猿夜叉丸も水練の時だけは違う。誰とも距離を取り、世話役の浅井家からきた家臣しか近づけない。着替えの時だって藪に隠れて行っている。

「二応、友達だからなあ。あんまり隠し事はしないで欲しいんだが」
水練の時の猿夜叉丸の態度の急変。

それが気になって、俺は早めに着替え次第近くの藪を漁った。

ただ、それは案外難しいことだったりする。

なぜか浅井からきた家臣が辺りを見張っているからだ。

(いや、なんで野郎が着替えるのに警備がいるんだよ。中学高校ならまだしも、俺らまだ10歳児だぞ?)

ただ逆に浅井家臣の配置から、猿夜叉丸がどの藪に隠れているのかは想像がつく。後はどう接近するかだが、これが難しい。

奴らちゃんと死角がないように陣取ってやがる。

となると、あそこから引き剥がすしかないな。

一つ策を考えた俺は、堂々と家臣の一人に歩み寄る。

「ねえねえおじちゃん。あそこに猪が出たから退治して欲しいなー」

「なぬっ? それはまずい。何処か教えてくれ」

「ちよつと下がった大銀杏のところだよ」

「あいわかった。では、者共向かうとしよう」

ちよつと純真そうな子供を演じて騙す。

それでころつと騙されて家臣が斜面を降り、陣形に穴が開く。残った奴らも俺よりは猪や熊の方に意識が向く。

となると、俺が茂みに近づくのは容易い。

「さて、そこにいるのは分かっているぞ、猿夜叉丸。なんで水練のたびに姿を晦ますのか、洗いざらい吐いてもらおうか」

意気揚々と茂みを覗き込む。

そこには、一糸纏わぬ猿夜叉丸の姿があった。

だが、俺はすぐさま見なきやよかったと後悔する。

なぜならば、

「え？ 猿夜叉丸、お前チ○ポないんか」

……男だと思っていた猿夜叉丸が女だったからである。

*

その後のことはあんまり覚えてない。

彼女の悲鳴で駆けつけた家臣団にぼこぼこにぶん殴られて、気づいたら屋敷の中で目が覚めた。

目の前には、行儀良く座る猿夜叉丸の姿があった。ただ、いつもの男装ではなく結っている髪は下され、少女らしい小袖を着ている。

(こう見ると、本当にこいつはお姫様なんだな……)

人形のように整った猿夜叉丸の姿を見て思う。

おそらくは今まで見た誰よりも美人かもしれない。……それが、男友達だつての癪だが。

「ようやく、起きたな。……それで覚えているか？」

「ああ、お前に竿がなかったことだろ？ あんな衝撃的な絵面、そうそう忘れられるか」

「そうか。忘れられないか」

「ああ。……悪かった。お前が女だなんてつゆほども思わなかったんだ。どうせチ○ポが小さいから恥ずかしくて隠れて着替えているとばかり」

「いや、そう思わせないように今まで振る舞っていたのだからな。……それにあまりチ○ポ言うな。女だと知ってもそれが」

「男だろうが、女だろうが変わらんよ。友達なんだから、それにあまり

無理に変えたくない。ぎこちなくなるのが嫌なんだ」

そう俺が言うのと罪悪感からか、猿夜叉丸は黙り込んでしまう。

「女であること。隠していて悪かったな。だが、こうするしかなかったのだ」

「顔を上げろ、猿夜叉丸。まあ、仕方ねえよ。当主一族は変態だからな。か弱い女でいるよりは、男のフリをした方が危険は少ない。……それに誰だって隠したい秘密の一つや二つある」

実際、俺とて自分が四世紀以上先の未来から転生してきたことを誰にも伝えてないのだから、実はあんまり人のことを言えなかつたりする。

……そろそろ堂々巡りになりそうだから、締めるか。

そう思った俺は、居住まいを正して猿夜叉丸に向き直る。

「お前が女であること。それは俺の胸の内に留めておく。だから、これからも友達として頼むよ」

猿夜叉丸が男であろうと、女であろうと関係ない。まして、将来は敵味方になって分かれることも。

こいつがこの俺、六角新十郎の親友であることは、変わらないのだから。

第3話 お市

12歳になった。

この頃になると、男女の性差が見た目にも明らかになってくる。いわゆる第二次性徴つてやつだ。

ざっくり言うとなんは筋肉質に、女子は丸みを帯びた身体になっていく。

栄養状態が現代とは違うとはいえ、戦国時代でもそれは例外ではない。

「ぐつ、やはり打ち合いで新十郎に勝るのは苦しいか……っ！」

二人きりの道場で猿夜叉丸が腹を押さええうずくまっている。

講義が終わった後、俺たちは自主練として立ち合いを何度かくり返していた。

「これで4戦3勝か。得物が互いに木刀なら、俺が勝る。それは昔から変わらないだろう」

「単純な技量で勝てないのは知っているさ。だが、最近は膂力で押し負けてばかりだ」

悔しがる猿夜叉丸。だが、俺はそんな彼女を直視できないでいる。けして何度も打ちのめして申し訳なくなつたからではない。

（悔しがるのもいいけどさ、まずはその胸元を直してくれない？ ばっちり見えてるんだよなあ……）

意外にも猿夜叉丸の発育はかなり早熟な方で、同年代の女子の中では一番大きかった。だから、稽古だとかで激しく動くとき着物がはだけて双丘が見えてしまうことがある。

前世分上乗せで精神が歳を食ってるせいか、激しく興奮することはないけど目と下半身に悪すぎる。

普通、男の娘枠つて貧乳から普乳が相場なのでは？

俺は訝しんだ。

「何をほうけている、新十郎。構えろ！ 5戦目だ！」

気づけば、猿夜叉丸が木刀を握り直して構えをとっている。

勇猛果敢なところは変わっていない。

「5戦目をするのは吝かではないが、少し身なりを整えろ。そうした方がそつちもやりやすいだろう」

遠回しに「お前、社会の窓が空いてるぞ」と忠告してやる。それでようやく猿夜叉丸も気づいたのか、すぐさま俺に背を向けた。

「新十郎……、お前気付いていたならば、早く言えこの助平が」
「言ったところで、どうせ怒るだろお前。自分で気付けよ」

顔を赤くして猿夜叉丸が言うが、ぶっちゃけ自業自得だろう。

ちなみに5戦目も俺は猿夜叉丸をこてんぱんに打ちのめし、5戦4勝で立ち合いは打ち止めになった。

*

自主練が終わった俺たちは観音寺の城下を散歩していた。

俺は別の服に着替えただけだが、猿夜叉丸は男装を解いて髪を下ろし、小袖に着替えている。

こうなると、傍目にはただカップルがデートをしているだけに見えるだろう。実際は猿夜叉丸のストレス解消に付き合っているだけなのだが。

「仕方ないとはいえ、やはり男装は気が詰まる。……そういう立ち居振る舞いをしなくてはならないとはいえ、私は女だからな」

猿夜叉丸の足取りも心なしかのびやかなものになっている。

あの日俺が猿夜叉丸が女だと知って以来、猿夜叉丸は二人で屋敷内で過ごすか、身分を隠して城下を散歩する時だけ俺の前では女として振る舞うようになった。やはり性別を偽るのは、かなりの負荷がかかっていたらしい。

「んで、今日は何を食べに行くんだ？ たこ焼きか？ 八つ橋か？」

観音寺の城下は大叔父にして前当主の定頼様が楽市楽座を始めて以来、発展を続けている。教科書に載っているせいか信長が始めたものだと思われがちだが、本当は楽市楽座の創始者は定頼様なのだ。

この楽市楽座の効果は大きく、もともと東山道と北陸道、東海道が交わる交通の要所だった南近江に全国の商人が集まるようになった。

一番多いのは堺商人で、彼らのおかげで大阪の粉物文化はすでに南近江に浸透している。

「そうだな、八つ橋にしようか」

言うと、猿夜叉丸は茶店に足を向ける。

冷静沈着な貴公子を気取ってこそはいるが、甘いものに目がないのだ。

「わかったよ、猿夜叉丸」

「おい、新十郎」

返事をしたところ、猿夜叉丸は不機嫌になる。

……ああ、忘れてたな。

「そうだな、女として振る舞っている時は猿夜叉丸は禁句だった。悪かったな、お市」

「それでいい。私はお市、しがたい武家の一人娘だ」

少し前から、二人きりである時に猿夜叉丸は猿夜叉丸呼びを嫌がるようになった。

理由を聞いたところ、猿夜叉丸は男として振る舞うためにつけられた名前で、響きが女子的に気に食わなかったらしい。

ならば、と俺が名付けたのがお市という名前だ。

浅井家絡みの女性ってだけの理由でつけたが、お市はかなり喜んでくれた。

「……なあ新十郎。私は女らしく振る舞えているだろうか？」

八つ橋を食べている時、不意にお市に問われた。

「どうした、急に」

「少し自信がなくなてな。今までが今までだったからな……」

「大丈夫だ。可愛い女の子に見えているよ」

「可愛いは余計だ、馬鹿」

満足気に八つ橋を食べるお市の姿は疑うべくもなく、一人の女の子にしか見えない。

この世界では、姫武将という慣習がある。

お市に関してはやや事情が異なるが、前世とは違って女の子が戦場に出るのはそこまで不思議なことはない。ならば、いつか俺がこんな愛らしい彼女達を討ち果たすことだってあるのだろう。

そのことを思うと最近憂鬱になる。

第4話 元服

時は戦国。

六角家が治めるここ南近江でも、戦乱は絶えない。

西に目を向ければ、三好長慶が優秀な姉妹を率いて版図を拡大。將軍の足利義輝を圧迫している。

東では美濃で下克上を果たした斎藤道三が国内を切り従え、織田信秀は尾張で着々と力を蓄えていた。

「新十郎。これからは四方で戦が起こる。南近江で繰り広げられる些細な戦とは比べ物にならない大戦がな。北の浅井はわしが屈させたが、長くはあるまい。ゆめゆめ忘れるな、新十郎。六角はこれからの十年が、勝負よ」

ある日の夕暮れのこと。

大叔父の定頼様が屋敷の縁側で語りかけてくる。

今は当主の座から退いているが、六角家の最盛期を築いたまぎれもない英傑だ。父母を失った俺を哀れに思い、金子などの支援をしてくれた徳人でもある。

「なにゆえに十年なのですか？」

「わしの寿命がそこまで保たないのが一つ。まあ、これは越前の朝倉宗滴にも言えることだがな。……言葉は悪いが、朝倉義景も義賢も並以上を出ることはない。先代のわしらが蓄えてきたモノを浪費しているようにしか思えん」

定頼様の実子への評価は辛辣だった。

事実、義賢は上り調子の三好家に対し、中央介入を目論んでは失敗を重ねている。

「猿夜叉丸には酷な話ではあるが、六角はいたずらに中央に関わるよりも、北の浅井を徹底的に叩き、滅した方が良い」

「確かに、今の六角には中央に介入する力はないですね。頑張っても京をいつとき取れるかどうか。天下人にはなれない」

「左様。その点、浅井久政は賢い。世間的には愚将とされるが、それは形から入る者の目に過ぎぬ。あやつは領国を整えて捲土重来を企ん

でおる。名を捨て、南北の安全を確保することだな」

「ここまで話されたら、俺にも定頼様が何を言わんとしているのか分かる。

「十年以内に力を溜めた浅井が攻めてくる、ということですか」

「左様。だが、それが分かかっていて手をこまねいているほど、わしは愚かではないつもりだ」

言うのと、定頼様は傍らに置いていた太刀を俺に手渡してきた。

「受け取れ、新十郎。我が愛刀と共に六角の命運はお前に託したぞ。この十年、わしはお前をみっちり鍛えてきたつもりだ。わしが居なくなったら、六角を守るようにな」

「ありがたいく存じます。こんな貴重なモノを……。しかし、俺で良いのですか？」

定頼様には、よくしてもらっているが、俺はせいぜい定頼様の兄の孫に過ぎない。本来ならば、義賢様や義治様が受け取って然るべきものだろう。

「あやつらには家督をやった。それで充分ぞ。……。そうだ、新十郎。少し頭を撫でてもいいか？」

「別に構いませんが、何故？」

「家族を慈しむのに理由があるのか？ まあわしのわがままじゃ、大人しく撫でられておれ」

渴ききって、しわがれた手が頭に伸びる。ごつごつした感触に思わず身動きしてしまう。

（これが、長く戦ってきた武将の掌か……）

この掌でこの人はどれだけのモノを掴んできたのか、はたまた切り捨ててきたのか。それはもう数えきれないほどだろう。

「……大きくなつたのう。今や目一杯腕を伸ばさねば届かぬほどだ。お前ならきつと大丈夫じゃろうて」

ボソリと言った定頼様の呟きが俺には嬉しかった。

この日から十日後、定頼様は亡くなった。

俺は最も頼れる大人を失ったのである。

*

14歳になった。

この頃になると、戦国ならば元服して成人になる。

俺は六角高村と名乗るようになった。高は前世の高広と、数代前の六角家の当主から拝借した。村は真田幸村が好きだったからだ。

お市は浅井賢政と名乗らされるようになった。

なぜ浅井長政ではないのかって？ それは偏諱という慣習があるからだ。

端的に言えば、主君が自分の名前の一字を家臣に与えるというものであり、偏諱を受けるのは家臣にとつては名誉あることである。

だが、お市に関してはそれは当てはまらない。

知つての通り、お市は浅井家の嫡子。それが、偏諱を受けさせられたということは浅井家は六角家よりも下だと対外的に示されてしまったことになる。

「お市、やはり悔しいか」

「ああ、悔しいぞ。新十郎、まだ浅井家は滅びてはいない。六角の家臣に成り下がったつもりはないんだっ！」

元服した次の日の夜。

俺とお市は、城下の店で管を巻いていた。

この日のお市はかなり荒れている。無理もない、六角家は元服してもお市を返すつもりはなく、観音寺城に留め置いていた。

「……私は小谷に帰らなければならぬ。帰つて家督を継ぎ、浅井家を再興させねば……」

お市が呟くが、そうなった場合は六角家にとつてはあまりよろしくない。

お市、いや浅井長政は文武両道の武将に育つた。あとは経験さえ補えればかなりの名将となり、北近江の脅威になるだろう。

(だから六角家のことだけを思うならば、ここでお市を殺して、浅井を叩き、義定なり俺なりを養子に食い込ませればいい。事後統治にやや難があるが、一応北近江は手に入る)

一瞬、恐ろしい策謀が脳裏をよぎるが振り払う。

だが、さりとてお市が観音寺に留め置かれた結果、好色な義賢様の

手にかかるのも見たくはない。

「俺は、どうしたいんだろうな……」

元服してもなお、未だに俺個人には夢や野望はない。

定頼様に六角家を頼まれた身の上ではあるのだが、それは半ば義務付けられたものである。「自分で選んだ道か？」と問われたら首を横に振らざるを得ない。

とはいえ、お市との友情もまた断ち難い。

つまるところ、俺の心は未だに定まってはいないのだ。

ただ、一つだけ分かることがある。

(……もう、迷っていられる時間は限られている気がするんだよなあ)
この世界の時代の流れ方は俺の知る歴史と比べると異様に早い気がする。

武田信玄が父の信虎から家督を奪ってから数年で川中島で上杉謙信と対峙していたりするからなあ。

となると、何年も悠長に待てるとは到底思えないのだ。

それでも、やはりすぐに答えは出せない。

これは俺の在り方に関わる問題だから、まだ時間が欲しいと思ってしまう。

「さて、遅ればせながら俺も呑むとするか。元服まで、成人までたどり着いた祝い酒としよう。……乾杯は、もう遅いか」

元服して早々にヤケ酒に走る友を見やりながら、一献呷る。

何気に初めての酒だ。前世は二十歳までたどり着かなかったからなあ。

「ははは、出来上がるのが早いじゃないかお市」

すでに仕上がっているお市の姿を見ると思わず笑ってしまう。

半ば現実逃避気味だが許して欲しい。

別れが来るのは分かっている。

ならば、せめて限られた日々を俺は大事にしたいのだ。

第5話 恐怖の夜

とある秋の日の早朝。

私が住まわされている観音寺城下の浅井家の屋敷に文が届けられていた。

「この書状の内容は真か？ 直経」

小谷城との連絡を任せている家臣・遠藤直経に問うと、直経は首を縦に振った。

「浅井家中にて反六角の機運が高まっております。先んじては、猿夜叉丸様の御身を奪還せんと息巻いております」

「反六角派の暴走という訳か……。父上はこの動きについては何と申された？」

「久政様は何も仰せになりませなんだ。……まだ、機を待っておられましよう」

「……そうか。もう良いぞ直経。伝令、大儀であった」

言うのと、私は直経を下がらせる。

そして、壁を殴りつけた。鈍い音が屋敷内に響く。

「……いつまで、私は観音寺にいらなくてはならないのだ……！」

父上の目的は分かる。未だ収まらない領地を整えることだ。だが、あまりに時間がかかり過ぎている。このままでは浅井は完全に六角の風下に立つことになってしまう。

そして、さらに悪いことにいよいよ義賢が私が女であることに気づき始めた。

今までは母上や新十郎がなんとか誤魔化してくれていたが、ここまですべてが女性として成熟してくると厳しい。

まるで舐め回すような義賢の好色な目つきが目には焼き付いて離れない。

(このまま、観音寺にいては私は近いうちに操を義賢に奪われる)

聞いたところによると義賢に呼び出された女は強引に押し倒されて、痛がっても顧みられることもなく、一晚中子種を注ぎ込まれるの

だと言う。

母も、呼び出された翌日は疲れ果てて丸一日寝込んでいた。

この観音寺は女にとつてはもはや地獄に等しい。

私もいつ母と同じ目に遭わされるのかと思うと、恐ろしくて仕方なかった。

*

翌朝。

目が覚める。そして、私は安堵した。

昨夜を無事に乗り切れた、と。

義賢の情欲の昂りは唐突だ。丑三時だろうと女を叩き起こし、自分の寢屋に連れ込むのだ。

幸いなことに昨夜の対象は私ではなかった。

「こんな夜は、いつまで続くのだろうか」

観音寺にいる限り、この恐怖は女の盛りを過ぎるまで続く。

果てしない恐怖の夜が何年も続くのだ。

「さて、新十郎に挨拶でもしに行くかな。……いや、今はいないのか」
口にして、ようやく気づいた。

今日、新十郎はいない。昨日に重臣の蒲生家の与力として伊勢方面の経略へ出立したのだった。

新十郎が一門として働き始める一方で私は敵国の人質である以上、特に役を与えられることはない。生かさず殺さず、監視を受けるだけだ。

(最近、新十郎と会えていないな……)

そのためか、新十郎と会うことは減った。きっとこれからはもつと減っていくだろう。

新十郎は優秀だから、すぐに知勇兼備の将として家中に名を売り、より多くの役を果たすことになる。そうなると、敵方の人質の女に会う時間など確保できるわけもない。

「初めは同じ机を並べて、学びに励んでいたのだが……。それが今となってはこうも違うのか」

敵地の中でただ一人得た心の拠り所。

それが私にとっての新十郎だ。

破廉恥な話もするし、がさつなところもある下品な男だが、なによ
り彼といるときだけは私は一人の少女・お市としていられるのだ。

*

冬の日の深夜のことだ。

母の部屋から話し声が聞こえた。

気になった私はいざという時のために開けておいた覗き穴で様子
を見ることにする。

「猿夜叉丸もそろそろ年頃の娘。男を知った方がよいであろうよ。
なあ阿古よ」

「お戯れを、義賢様。猿夜叉丸はおぼこい娘ゆえ、まだ耐えられませ
ぬ」

察するに義賢と母上だ。

どうやら、いよいよその夜が来てしまったらしい。

「左様か？ 猿夜叉丸の肢体はいよいよ家中のどの娘より艶かしく
育つておるぞ？ あの恵体でおぼこい訳がなからう。すでに、高村と
寝ているのではないか？」

「我が娘に対する侮辱はそこまでに致したく存じます」

「まあ、お前の口から真偽など期待しておらぬ。初めから欺くために
猿夜叉丸と男名を偽ってつけるほどだしな。……あやつの身体に聞
いてみるのが、早かろうて」

言うのと、義賢は私の部屋につながる襖に手をかけた。

しかし、逃げようと思っても身体が恐怖で震えていることを聞か
ない。

（嫌だ……。助けてくれ、新十郎！）

助けを求めても、もう喉から声が出なかった。

（ああ、私はあの男に汚されてしまうのか……。恋も知らず、ただあの
男の肉欲を果たすためだけに私の純潔は散らされるのか……！）

絶望に苛まれながら、私はあの汚らわしい男に蹂躪される未来を見
た。

……しかし、そうはならなかった。

母が、義賢の足にしがみついて止めていたのだ。

「おやめくたされッ！ 私は如何様にされても構いませぬが、娘だけは！ 娘だけはお頼み申す！」

泣きながら義賢に懇願する母上。

「阿古、邪魔をするな！ ええい！ まずはお前から組み敷いてやろうぞ！」

あまりにしつこい母上に業を煮やしたのだろう。

義賢は母上を蹴り転がし、馬なりになった。そして流れるように着物を剥ぎ取り、自らも裸になる。

それからは一方的だった。

ひたすら義賢は餓狼のように母上の体をむさぼるばかり。

母上は自慢にしていた長い黒髪を振り乱して、泣き叫びながら義賢の乱暴を一身に受け続けた。

その姿はさながら未来の私そのものだ。

私は見ていられなくて、覗き穴から離れて布団を頭から被る。

それでも、母上の泣き声と喘ぎ声、義賢の狂ったような笑いは耳に届く。私は寝ることも出来ず、じっと耐え続けた。

結局のところ、義賢が母上を解放したの朝日が昇ってからであった。

「よくこらえた、阿古。お前の頑張りに免じて今晚は猿夜叉丸を見逃してやろう」

意識を失い、倒れ伏す母上に対して偉そうに義賢は言う。

が、義賢自身はすでに朝が来ていることに気づいていない。恐ろしいほど狂っていた。

*

「母上っ！」

義賢が屋敷を去つたのを見計らって私は母上に駆け寄った。

「……猿夜叉丸、ですね。……見られてしまいましたか」

母上の着衣はぐちよぐちよに乱れ、部屋は散らかり放題。まるで妖怪が暴れた後のような有様だった。

「……怖い思いをさせてしまいましたね。……けれど、大丈夫です。

猿夜叉丸、貴女だけは私が何としてでも守りますから」
そう微笑む母上の顔は美しく、そして悲しかった。

胸のうちから途方もない罪悪感がこみ上げてくる。

(もう、待てない。母上にこのような苦しみを与えたくない)
私はずい、決意した。

第6話 暗天

母上が犯される姿を目の当たりにした後、私は親しい六角家臣の妻女へと根回しを始めた。

幸い、私は男装しても美しく見える背丈と声をしている。

人質の妻女など姫武将ならいざ知らず、兵書すら読んだことがないような女がほとんどだ。甘い言葉を耳打ちして、誑かすのはそう手間ではなかった。

(女は美少年に弱い。……そういうものだと思いはいたが、まさかこれほどとは)

誑かした身ではあるが、拍子抜けするほど着々と準備は進んでいく。

直経を使つて小谷城側とも連絡を取り、逃走経路も手配済みだ。

後は、新十郎の目をどう掻い潜るか。

それだけが、観音寺脱出の壁になっていた。

(いざ敵に回して考えてみれば、六角新十郎高村は手強い相手だな……)

私が女として心を許せる六角家唯一の人物。

武勇では私を上回り、知略は互角。なによりも、長く一緒にいたためか私の思考を熟知していた。

しかし、策がないわけではない。ただ一つだけ、新十郎に弱点があることを知っている。

(新十郎の戦国の武将らしからぬ甘き。そこを突くしかない)

思えば、六角新十郎は変わった男だった。

敵国の浅井家から人質である私はいつも周りから避けられていた。

それはそうだ、あそこにいたのは城下に住まう家臣の子弟で、うかつに私に関われば禍根の種になる。

しかし、新十郎はそんなことなどお構いなく踏み込んできたのだ。

あいつにとつてはなんでもないことなのだろう。けれども、そのなんでもないことが私の心を救った。

(……)最近、新十郎のことばかり考えているな)

母上にこれ以上、苦しみを与えたくない。

そう決意して私は此度の脱出計画を練っている。

しかし、計画を練れば練るほど新十郎のことが頭を過ぎる。その度に心に靄がかかるのだ。

新十郎に、会わなくてはならないと思った。

この心の靄を晴らさなくてはならない。

私の推測が正しいのであれば、この感情はこれからの私には不用なものだ。

きつと今晚に幸せな時間は終わる。

だから、最後に燃やし尽くしたかった。

*

それは、既定路線だったのかもしれない。

お市が俺の屋敷を訪ねてきたのである。新月の夜のことだった。

「夜分にすまない、新十郎」

光のない夜だというのに、やたらお市の姿はこの世のものではないほどに美しく見える。かぐや姫は彼女だと言われたら、俺は容易く信じるだろう。

「いや、いい。無聊を慰める相手が欲しいと思っていたところだ。

……少し待ってくれ、酒とつまみを用意してくる」

そう言つて、一旦場を離れる。

(やばいな……)

心のざわめきが抑えられない。

知っていた。

いずれ、浅井長政が観音寺城から脱出する未来だと。お市が言いづらいことを言う時はやたらと唇を気にするのも。そして、一度決意したことは決して翻さないことを。

きつと、今晚に彼女は発つ。

そんな予感をひしひしと感じた。

対して俺は、ついで決められなかったのだ。

「待たせたな。……星でも見ながら呑むか」

「ああ、そうだな」

縁側に2人並んで座って夜空を見上げる。

手を伸ばせば、すぐに互いの手に触れる距離。彼女が使っている椿油の匂いが鼻腔をくすぐった。

たわいもない話をしながら酒を進めていく。そんな中、彼女はふとつぶやいた。

「月が綺麗だな、新十郎」

新月の夜に月など見えるわけもない。

だから、その言葉の意味するところは一つしかなかった。

「俺も月は好きだよ。……ただ、手が届くものだとは思わない」

きつと心の底では、気づいていた。俺がお市に抱いていたのは、友情だけではないことを。

育ててくれた恩に報いなくてはならず、それを果たすには不要なもの。抱えたままでは苦しくなると知っていてもなお、ついぞ捨てられなかった大事な思い。

(……ああ、俺はお市に恋をしていたんだ)

しかし、もうそれだけを選んで生きてはいけけない。そうするにしては、あまりにこの身体に課せられたものは重かった。

お市は俺の返答を聞き終えると、

「ならば、ごうしよう」

と言ってお市は俺の頭を抱き寄せて、唇を奪った。

あまりに鮮やかな手並に俺はただ目を見開くことしかできない。

初めてのキス。あまりの心地よさに脳が痺れそうになってしまう。

「ぶはっ……。なあ新十郎、ここまで降りてきても無理か？ 私と共に来てはくれないのか？」

頬を上気させながらお市は誘う。それはあまりに艶かしく、甘美な夢だった。

何もかもをお市に委ね、共に天下の夢を見る。

ああ、それもいいかもしれないと思ってしまった自分がいる。

けれども、何か『違う』と本能が訴えかけてきた。

「はあ、はあ。……無理、だな」

だから、俺は首を横に振った。

結局のところ、天と地が交わらないように俺たちの道は交わることはない。

浅井家と六角家はそれほどまでに掛け離れていた。

「……そうか、ならば私たちは不倶戴天の間柄なのだな」

お市が天を仰ぐ一方、俺は目を伏せた。

見られたくはなかった。

涙を流してこの別離を恨む姿を見せるなど。そんな、子供みtainな姿を見せたくはなかった。

「長い間ありがとう。新十郎、お前のおかげで観音寺での暮らしに寂しさはなかった。だが、私はもう行かなくてはならない」

そう言ってお市は旅立つ。もう彼女が振り返ることはないだろう。

決して彼女を追い立てるようなことはしない。

それだけが、俺が友達として出来る最後の親切だった。

「さよならだ、お市」

闇夜の中に消えてしまうまで、俺はお市を見送る。

その姿が見えなくなっても、俺はしばらくその場から動けず立ち尽くしていた。

第2章 Declaration of war

第7話 代償

二晩で観音寺から小谷城まで駆け抜けた。かなりの強行軍となったが、それは一晩で六角領を抜けたかったからだ。

私だけならともかく、母上もいる。直経と二人だけで母上を守りながら追っ手を防ぐ自信はなかった。

「ああ、ようやく帰ってきたのですね……！」
感嘆する母上。

聞けば、十年以上も帰っていないかったとのこと。

私の場合は、小谷城にいたのは物心つく前だったから、深い感慨はない。ただ、母上を安全なところまでお連れできたことに安堵していた。

「よう帰ってきたな。阿古、猿夜叉丸」

本丸御殿で父上から労われる。久方ぶりを見る父上はかなり老けて見えた。

「勝手に帰ってきたことに関しては何も言わぬ。起きてしまったものは致し方ない。……しかし、家督は渡さぬぞ」

「それは、何故ですか」

「武家とは男がやるものよ。当世はやりの姫武將は認めぬ。あやつらは本分を履き違えておる」

父上の言うようにかつては男は武器を取り、女は祭祀を司ると役割が分かれていた。だが、今となってはあまりに時代遅れの理屈だった。

「猿夜叉丸よ。そなたの才覚が優れていることは知っている。だが、決まりは決まりだ。家督は越前か六角から養子を取る。そうよな、高村殿辺りを養子に取って継がせようか」

しかし、頑なに父上は譲らない。だから、私は食ってかかった。

「それでは駄目なのです父上、朝倉義景は文弱で頼れない。六角もただ北近江を奪われて浅井の名跡が残るだけ。そのようにして名を継いでも誉はありません！」

父上のやり方では、結局のところ浅井は変わらなかった。十年かけても領内がまとまらず、国人の寄り合い所帯の頭のままだ。

だが、それが許される時は過ぎた。

たとえば美濃の斎藤家は美濃をまとめきって尾張の織田信奈と手を組んで虎視眈々と近江を狙っている。

六角では新十郎、いや六角高村が武将としての資質を開花させ始めた。

敵が強くなっている今、浅井が近江の主権を握れなくては浅井家はただ滅ぼされる存在になるだろう。

(なんとしても浅井は変わらねばならない。さもなければ、忍従の日々は続く。恐怖の夜も続く。そうなってしまつては帰ってきた意味がない)

私は母上を守るために帰ってきただけではない、

浅井を変えに来たのだから。

そのためならば、私はあらゆる手を用いる覚悟がある。

「……失礼します。それと、名を賢政から長政に改めます。もう私には不要な名ゆえ」

もう、父上との交渉の余地はない。

そう見た私は母上と直経を残して本丸御殿を去った。

その後は、先に書状を渡してきた反六角派の諸将と渡りをつける。

その数は思ったよりも多く、かなりの数がすぐに集った。

(浅井のためとはいえ、父上から家督を奪おうなどと。私はいったい何をしようとしているのだろうか)

胸のうちに虚しさが去来する。

しかし、それでもやらなくてはならなかった。

*

小谷城の制圧は容易かった。

門番すらも私に味方したため、本丸御殿まで誰にも妨げられること

なくたどり着く。

簡単に事が運ぶのはよいが、それだけ父上の信望が失われていたことが分かって悲しかった。

「……そうか。止められなんだか。致し方あるまい」

居並ぶ諸将の前で父上は容易に屈した。

「だが、代価としてお前は女としての幸せを諦めろ。姫武将は認めぬ。それだけは譲れん。お前は浅井長政として、北近江の一人の男として立て」

異様なほど父上は姫武将を認めない。だが、それで家督を継げるなら構わなかった。もとより覚悟をしているし、未練は余さず観音寺に置いてきたつもりだ。

なにより、怯えて震える夜を過ごすよりはずっと良かった。

「心得ました、父上。では、しばらくお休みください」

言って直経に父上を連れて行かせる。

家督を奪った以上、城に父上を置いてはおけない。ほとぼりが覚めるまでは琵琶湖中に浮かぶ竹生島に居ていただく。

「ついに、私はここまで来てしまったのだな」

事が終わり、誰もいなくなった本丸御殿で私は呟く。

家督を継ぐまでにすでに私は2つ大事なものを捨ててしまった。

この代償を無駄にしてはならない。

必ずや浅井の旗を天下に誉高く翻さなくてはならない。

そう決意する私がいる。

しかして、どこかで泣いている私もある。

ただ、ここまで来てしまったからには最早足を止めることは出来ない。

第8話 顔見知り

浅井賢政の脱走から始まる一連の家督奪取劇は、六角家には内外から衝撃を与えた。

すぐさま諸将が観音寺城に集められ、どう対応するのか決めるための評定が開かれた。

「おのれ、猿夜叉丸……！ このわしをコケにしおつて……！」

と言つても、怒り心頭の義賢様から察するに浅井に対する征伐が行われるのは確定的に明らかで、すぐに2万の軍で浅井を攻めると決まった。

(ついに、この時が来てしまったか……)

評定が終わり、屋敷までの道を歩く。

あの別離の夜からこうなることはわかっていた。

しかし、それでも俺の心のざわめきは抑えられそうにない。

「顔が暗いよ、新十郎。大丈夫？」

それを見かねたのか、義定に声をかけられた。

六角次郎義定。現当主の義賢様の長女で、長い茶髪が特徴的な姫武将である。

一見ほわほわしているが、あなどるなかれ。弓に関しては六角一門随一の腕を誇る剛の者だったりする。年は俺と同じだが、弓が絡むことに関しては今まで一度も勝てたことがない。

「義定か。いや、大丈夫だぞ」

「他の人はともかく、わたしには分かるよ。猿夜叉丸のことでしょう？」

猿夜叉丸について仲が良かったのが義定だ。少しの強がりなど易々と看破されてしまう。諦めて俺は口を割ることにした。

「ああ、そうだよ。猿夜叉丸のことだよ。俺はこれから無二の友と戦わなければならない。これで、思い悩まずにいられるか！」

思わず叫んでしまう。

戦わなければならない理由は明確。しかし、戦う動機は義務感のみ。とはいえ、戦わない選択を放棄した以上は敵として立ち塞がなくてはならない。

そのためには、心を殺さなくてはならない。
決めた以上は繰り言を言いたくはない。

そんなルールを半ば自覚的に課していたが、どうやら限界だったらしい。

「そう、だったらわたしの前で隠すのはやめようか。体面上隠さないといけないのは分かるけど、どうせ思い悩むことだし、そうそう抑え切れるものじゃない」

だから、と義定は続ける。

「新十郎が猿夜叉丸にしてあげたように、わたしが新十郎を受け止めるよ。苦しむ新十郎の姿を見たくはないからね」

そう言う義定の表情はとても同年とは思えないほど穏やかだった。

それを見て敵わないなあと思う。

俺とお市は共に競い合いながら進む関係性だった。一方で義定は一步離れたところから優しく見守ってくる。年が同じだけで、感覚としては姉に近い。

「ありがとう、義定。やっぱり俺は友達に恵まれたな」

俺の大事な人はお市だけではない。義定だって大事だし、他にも離れがたい人はいる。

だからこそ、俺は六角をそう容易く捨てられなかった。

*

浅井征伐の軍は観音寺城を出たのち、手始めに浅井に寝返った肥田城を攻めることにした。

義賢様は熱心に城を攻めたものの、落とせずにいる。

もたついているうちに猿夜叉丸率いる援軍の1万が到着して、六角軍と対峙した。

「肥田は落とせなかったが、かえってちようどいい。皆の者、浅井を叩きのめすのだ！」

義賢様が号令をかけ、六角軍が宇曾川を渡る。

先鋒は俺と蒲生定秀殿。

「敵に回った以上は容赦はしない。者共、俺に続け！」

二千の騎馬隊を率いて、浅井の陣に切り込みをかける。

まずは騎馬で陣を散らし、後続の蒲生殿の三千を通しやすくする。それが今回の役割だ。

「あれが、六角高村だ！ かかれ！」

視界の右奥にこちらを指差して叫ぶ武将がいる。

確かあれは、阿閉殿あつじか？

一時期、猿夜叉丸の世話役として来ていたから顔は覚えている。

「弓を貸せ、左平次」

隣で駆けていた兵から短弓を借り、矢を番える。

狙いは阿閉殿。本人はそこまで強くないが、家臣に腕が立つ者を何人か抱えていた。彼の隊を機能不全に出来れば、この辺りの形勢は確実にこつちに傾くだろう。

(さて、問題は俺がぶれないことだな)

馬上は揺れて狙いを付けにくいのが、俺に関しては問題はない。阿閉殿に狙いを定め、射る。

放たれた矢は真つ直ぐに飛び、狙い通り阿閉殿の頭を撃ち抜いた。

「敵将、阿閉貞征。六角新十郎高村が討ち取つたり！」

高らかに名乗りを上げる。

だが、勝ち誇るのはまだ早い。

浅井家中でも屈指の武辺ものが集う阿閉家臣団が、俺に的を絞つて襲いかかってくる。

「貞征様の仇を討つ！ 渡辺了、参る！」

渡辺了わたなべさとし。かれも観音寺城で見たことがある。

阿閉貞征の娘婿で『槍の勘兵衛』と謳われたほどの名手だ。一時、猿夜叉丸に稽古をつけていたこともある。

明らかに俺より力量が高い格上の相手だが、馬上ならやりようがないわけではない。

「新十郎とて、容赦はせぬぞ！」

互いに馬を駆り、馳違う。

俺の刀と渡辺殿の槍が打ち合つて甲高い音が辺りに響いた。

手がビリビリと痺れる。やはり、まだ膂力では渡辺殿には及ばない

か。

となると、搦手を使うしかない。

「はあっ！」

もう一度、馳違う。

だが、今度はまともにも受けはしない。槍を弾くことに集中する。その狙いは当たり、渡辺殿の重心が弾かれた槍に引きずられて下に傾く。

その期を俺は狙っていた。

馬腹を蹴って渡辺殿に飛びかかり、渾身の力で馬上から蹴り落とす。

「くっ！ 槍がッ！」

蹴り落とされた拍子に、渡辺殿が槍を手放す。

こうなってしまうば、槍の勘兵衛も怖くない。

渡辺殿の腹を足で押さえつけ、力の限り刀を首に向けて振り下ろした。

「敵将、渡辺了！ 六角新十郎高村が討ち取つたり！」

渡辺殿の首を掲げて、名乗りを挙げる。家中屈指の剛の者が討ち取られた影響は流石に大きく、阿閉遺臣の勢いが減退した。

(すまない阿閉殿、渡辺殿……)

本日2度目の兜首。勲功としてはかなりのものだろう。

ただ、心は晴れない。

初陣ではないから、敵を討ち取ったことは何度もある。

しかし、それでも今回の戦ほど後味の悪さを感じることはなかった。

「やっぱり、あれか。相手の顔を知ってるのが問題か」

阿閉殿も渡辺殿も何度か顔を合わせたことがあり、彼らの背景をわずかだが知っている。

だからこそ、自分が壊したものが何か把握出来てしまう。

幸せだったあの頃にはもう戻れない。血に塗れていくうちに遠ざかっていく気がする。

けれども、俺は進むしかなかった。

*

阿閉家中が壊乱した後、蒲生殿が浅井軍に進撃する。すでに抵抗の核を失った浅井の先鋒はナイフを入れられたバターのようにあっさり切り崩される。

とはいえ、存亡の危機を迎えている浅井の粘りは凄まじく大勢を決するまでには至らなかった。

第9話 偽善

開戦初日の夜。

初戦を快勝したこともあってか、六角軍の陣中は賑やかだった。

まだ戦は続いているが、遊女だとか商人を引き入れてどんちゃん騒ぎをしている。

（風紀の乱れは六角軍の色だがなあ。さすがにまだ気が早いだろう）
一応、俺はどんちゃん騒ぎには加わらず、手勢を警戒に当たらせている。

まだ戦が終わっていないのに酒盛りとか、今川家や関東の両上杉家とおんなじような末路をたどりかねない。

「皆の者、よくやってくれた。おかげで浅井はもはや風前の灯火ぞ」
そんな事例などつゆほども気にしてないのか、評定中にもかかわらず義賢様は傍に酒瓶を携えながら評定を進めていく。

「特に高村。此度はお前が阿閉貞征を討ち取ったことで、当方有利に傾いた。お前が一番手柄ぞ。やはり、猿夜叉丸よりお前が強い。お前がいれば、当方安泰ぞ」

義賢様が肩をバシバシと叩きながら、褒めちぎる。

評価されるのは嬉しいのだが、酒臭いのはキツイ。

「そこで褒美を用意した。義定、連れて参れ」

言うやいなや、義定が評定の間に数人の姫武将を伴って現れる。

皆、後ろ手に縛られており装束は血や泥に塗れていた。

彼女たちの登場に、男の家臣が色めき立つ。

無理もない、彼女たちは捕虜として捕らえられた姫武将たちだ。姫武将は殺さないという暗黙の了解こそあれど、彼女たちの未来は暗い。尼として寺に閉じ込められるか、敵の慰み物になるかの二択だ。そして、だいたい後者になる。

義賢様はおそらく彼女たちを褒美として、下賜するつもりなのだろう。

「さあ、高村。この中から好きな女子を選ぶがよい。安心せい、全員生娘なのは確認しておく」

ニタニタとキモい笑みを浮かべながら、義賢様は言う。

「皆、上玉ではないか。羨ましいぞ高村」

義治様や家臣団までもが囃立て、完全に場の空気が狂ってしまった。
いた。

正直選びたくはないのだが、酒が入った義賢様の機嫌を損ねると割と面倒くさいので、穏便に選ぶことにする。

「なあ、義定。この中で一番気性がまともそうなのは誰だ？ 俺はそいつにするわ」

「なら、この娘だね」

義定に連れられて件の姫武将のところに足を運ぶ。

先端だけ黒くなっている長い栗色の髪に、豊満な身体つき。背は割と高く160後半ぐらいか。顔はすつきりと整っていて、現代でも普通にモデルとしてやっていけるぐらいには美人だった。

「ほう、その娘を選ぶか。お目が高いな、わしも同じ選択をしただろう」

義賢様、いいや色ボケ親父で。

色ボケ親父が鼻を伸ばしてうんうんと頷いている。

それを聞いてなおさら、この娘にすることに決めた。

「決めた以上、俺は帰らせていただきます。見張りの番に付いている以上、長々と陣を空けておくのはまずい。後の皆さんはどうぞお楽しみください」

そう言って、俺は評定の間を辞した。

*

持ち場に帰ってまず俺がしたことは、連れてきた姫武将の縄を外してやることだった。

「えっ、よろしいので?」

突然解放された彼女は目をぱちくりさせてこちらを見る。

汚される覚悟はどうに出来ていたのだろう、そうでなくてはあの変態どもが騒ぐ評定の間で落ち着いてはいられない。

「ああ、別にお前を抱こうとも思わない。さりとて、殺しもしない。ただ単にあの場からさっさと立ち去りたかっただけだ。騒がしいのは

「苦手だね」

勝ち戦の時の六角の宴はいつもああだ。酒と捕らえた姫武將を肴に男衆が騒ぐ。戦国のならいとはいえ、現代人の倫理観が残っている俺にはキツくて仕方がない。

「とりあえず、気づかれぬようにどこへなりとも行け。今はあのバカどもが騒いでいるから、監視の目は緩い」

言つて、彼女にわずかばかりの金と餅を渡して陣を追い出す。

これでやるべきことは終えた。あとは見張りに徹してればいい。

ただ、今夜は何かと忙しいらしい。

逃した姫武將と入れ替わるように義定が今度は入ってきた。

「ずいぶんとかつこつつけたね、新十郎」

「見てたのか」

「お父様たちのところに居ても酒臭いだけだから。まだ新十郎と見張りをしてる方がいいよ」

義定の助力は割とガチ目にありがたい。

弓の名手たる彼女は夜目も利く。それに眠気覚ましのための話し相手にちょうどいい。

「それで、なんであの娘を逃したのかな？ あの場合から離れるだけではないよね。猿夜叉丸に似ていたから？」

言うと、義定は嗜虐的な笑みを浮かべる。やっぱこいつ察しが良すぎて腹立つ。まさか、お市が女だつてことも気付いてるんじゃないだろうな……。

「いや、猿夜叉丸は男だろ。んなわけねえ。かわいそうに思っただけだ」

ただ、事実をそのまま言うつもりはない。

確かに彼女はお市に雰囲気似ていた。だから、汚される姿を見たくないと思つて庇つた。

お市が六角を出た理由は俺には分からない。だが、一つ言えるのは、俺がいたとて義賢様からずっと守り切れるとは到底思えないことだ。

だから、お市は逃げざるを得なかった。

そう思うと自分の不甲斐なさが悔しくなる。

今回は本当に彼女を助けたかったわけではない。

お市を助けられなかった罪滅ぼしをしているだけで、ただの代償に過ぎない。つまるところは偽善でしかないのだ。

「新十郎が何を考えてあの娘を助けたのかは知らないけど、それでいいんじゃない？ 結果としてあの娘は救われたんだから」

「そう言ってくれるのはありがたいが、あの娘はもうこっちの風紀が緩んでいることを知ってるぞ？ 逃がした俺が言うことじゃないが、敵に隙を晒したことになる」

「別にいいよ。そもそも遊んでたこっちが悪いんだし。それで滅んだらそれはそれで天命じゃない？ 自業自得なんだから勝手に滅べばいい。わたしは上手いこと逃げるけどね」

義定の味方に対する辛辣ぶりに思わず苦笑いを浮かべてしまう。こいつが一方的に義賢様たちを嫌っているのは知っているが、ここまですき放したことを言うとは思わなかった。

「まあ、全部は猿夜叉丸次第だよ。この好機を活かせるかどうか、それで全部が決まる」

言うところ、義定は一旦席を外して警戒に当たる。俺もまた櫓に登り、浅井の陣を眺めた。

浅井の陣には篝火が煌々と点けられており、喧騒からは程遠い。

その様子を見ておそらくは明日、この戦の帰趨が定まる。そんな気がしてならなかった。

第10話 敵將、浅井長政

怪宴がおわり、夜が明ける。

呑み過ぎ、遊び過ぎ、盛り過ぎの三超過で案の定、翌日の六角軍は弱体化していた。

「浅井の残りは少ないとはいえ、流石にこの六角のザマではきついかもしれない」

昨日の宴で、本陣とそれを固める諸將の戦力は明らかに低下した。義賢様に至っては腰を振りすぎて疲れて寝込んでいるらしい。

万全な状況で戦闘に参加できるのは輪番で見張りをしていた俺、義定、蒲生家と宿老の後藤殿の四軍だけだった。

（昨日、浅井の先鋒をだいぶ痛めつけた。すぐには動けないはずだが、なんというか嫌な予感がするんだよな……）

六角にとつては今回の戦はいくら強い言葉を使ったとしても、浅井にお灸を据えるぐらいの認識でしかない。あれだけ激怒していた義賢様ですら浅井を根絶やしにするなど、口にする事はなかった。

一方、浅井にとつては今回は存亡の機をかけた大戦という認識だろう。囚われていた嫡子が帰ってきて独立を図ろうとしている。

戦意の差では明らかに雲泥の差だ。

そして、お市にはいざというときは迅速果断を重んずる傾向がある。

（もしかすると、さらに踏み込んだ一手を繰り出してくるかもしれない）

万が一のため、俺は義定や蒲生家の軍に陣を固めるように指示を出した。

*

六角軍の勢いが落ちている。

その知らせが入ったのは、払暁の時だった。

六角の陣に捕らえられ、脱走してきた姫武將が言うにはどうやら六角義賢は捕らえた姫武將を肴にして乱痴気騒ぎをしていたらしい。

「そうか、報告感謝する」

私が言っていると、彼女は跪く。脱走するのに苦労したのだろう、彼女の装束は土と血に塗れていた。

「加えて申し上げます。今、油断しきっている六角を攻めるべきかと。恐れながら初日のぶつかり合いで兵を失った浅井は正攻法では勝てませぬ。隙をつかなくてはなりません」

彼女の策に理があると思った。

こども都合よく、六角が弱るとは。

天の時さえもわたしに味方していた。

「その献策を容れよう。で、六角方の情報と此度の献策は見事なものだった。感状を書きたいのだが、名を教えてはくれないか」

「藤堂与右衛門高虎。阿閉貞征の遺臣でございます」

「藤堂高虎か、礼を言う。お前のおかげで浅井は生まれ変わることができる」

その後、ひとまずの恩賞として高虎に金子を渡して本陣から去らせる。

六角義賢は弱っているが、高村は違う。あいつはそんな乱痴気騒ぎに加わるとは思えない。確実に軍の力を温存していることだろう。

となると、この戦いは実際のところは私と高村の対決になる。

(果たして、私はあいつに勝てるのだろうか)

一瞬、不安が過ぎだったが、すぐに頭を振って打ち消す。

勝たねばならないのだ。相手が六角の誰であっても。

そうでなくては、私を信じてくれている家臣たちに申し訳が立たなかった。

「皆の者、聞け！ これより浅井家は全軍を挙げて六角の本陣に攻め込む！ この一戦こそが浅井の分かれ目となる。独立の機は今ぞ！」

家臣たちの前に出て号令を発する。

そして、駆けた。

浅井を再興させるために。

恐怖の夜を越えるために。

はじめに当たったのは、家老の後藤賢豊の隊。彼は堅陣を並べて待ち構えていたが、容易く突き破った。

「前備えの首は捨てよ！　なんとしてでも本陣を突け！」

声を枯らして私自らも槍を振るって敵を討つ。

油断しきった相手に真正面から乾坤一擲の強襲。

とても策とはいえない狂気の沙汰だが、縮こまっていたは未来はなかった。

私たちの勢いに押されてか、数が多いはずの六角軍は後退していく。

敵の本陣周りの陣を破却し、いよいよ六角義賢の隊を射程に収めた時だった。

「流石にここまでではやらせはしないぞ！　勝負だ、猿夜叉丸！」

聞き慣れた声が左方からかすかに聞こえた。

眼を凝らしてみるとあいつは千騎の騎馬を率いて、大混戦の中を海を割るように進んでくるのが見える。

「来たか、高村……！」

軍を止め、迎撃態勢を取る。

いよいよ、六角新十郎高村に敵としてまみえる時が来た。

*

お市が攻め込んでからは、形勢は完全に浅井有利へと傾いた。

警戒し陣を固めさせた後藤殿の軍が突破されてからは、脆弱な本陣周りを徹底的に浅井は攻め立てている。

縫り付くようにまだ動ける蒲生軍が鈴を付けに行っただが、焼け石に水だった。

「家運を賭けるならば今日だとは思っていたが、その突破力は想像のはるか上だな。それだけ浅井長政という将の器量が優れていたということか」

感嘆すると同時に對抗心が燃え上がってくる。

ことここに至って、ようやく俺は自らの心の在り処を知った。

俺にとってお市は初恋の人だ。だが、元来は競い合い学んできた間柄。

対等な関係でありたい、負けたくない存在だったのだ。

「なあ、義定。後詰を頼む。俺が身体を張ってあいつを止める。それで首尾良くあいつが止まったら、横っ腹から弓を食らわせてくれ」
策を話し、俺は浅井長政目掛けて突進する。

乱戦の海が邪魔するが、鍛え上げた馬術と武勇で無理やりこじ開ける。

そうして長政を視界に捉えた俺は叫んだ。

「流石にここまではやらせはしないぞ！ 勝負だ猿夜叉丸！」

思わず、普段の口癖で「猿夜叉丸」と呼んでしまった。

だが、今はもう違う。

初恋の人のお市ではなく、男友達の猿夜叉丸でもない。

あいつは敵将、浅井長政。

俺が倒したい相手だ。

「いや、違う。浅井長政ッ！ お前の相手はこの六角新十郎高村だッ

！」

叫ぶと同時に馬に鞭を入れ指示を伝える。すると馬は嘶き、易々と盾兵を飛び越えた。

眼下には初めて見る具足姿の長政がいる。

俺は太刀を抜き放ち、そのまま斬りかかった。

第11話 世代が変わる

空からあいつが、六角高村がやってきた。

今まで見たことがないほどに鋭い目つき、感じたこともないほど重い太刀。

「ぐう……ッー！」

その渾身の一撃を受けた私は、苦痛に顔を顰める。

相変わらず桁外れな膂力だ。なんとか受け止めたものの、乗馬ごと弾き飛ばされてしまう。

「やはり、受けたか」

高村はそう呟くと、すぐさま追撃を仕掛けてくる。

飛越をしたばかりだというのに、態勢を立て直すのが早い。それが高村の持ち味だとは知っているが、相対すると脅威でしかなかった。

高村の刀術はかなり特殊で徒手でもすでに達人の域にあるのだが、騎乗するとさらにその位階は上がる。

人馬一体に立ち回り、馳達う際の一太刀に馬の速さを加えて斬り込んでくるほか、馬上を猿楽師のように自由自在に跳び回り、変幻自在の一刀を食らわせてくるのだ。

六角の一族は義賢や義定のように弓馬に優れている者は多い。しかし、異質さで高村に並ぶ者はいなかった。

（あいつの間合いに入ってはならない。入ったら最後、確実に私は討たれる）

馬に指示を出し、高村から距離を取る。

高村と馬上で戦う時は馬首を並べてはならない。飛びかかられて組み打ちに持っていかれる。

さりとて、背を見せるほど距離をとってはならない。一瞬の間で距離を詰め、人馬合力した一刀で斬り捨てられる。

流鏑馬の腕も刀術と比べれば見劣りするが、他とは冠絶しているため逃げ切ったと油断してはならない。

出来ることは槍の穂先が漸く掠めるような間合いを保ち、じわじわ

と削り取ることのみ。

余程の膂力か胆力がない限りはこれが最適解だと私は経験から知っていた。

*

俺と長政の一騎討ちは千日手に陥っていた。

やはり、手の内を知られると少々辛い。俺の我流刀術は速さと膂力で押し切り、短期決戦を図るものだ。

だから、見切られてしまうと決め手を失う。

(だが、今回はこれでいい)

今回の目的は、長政を止めて義賢様たち本陣近辺の兵を逃がす時間を作ること。

悔しいが、ここまで大々的に攻められてしまった以上は六角の負けは覆せない。せめて再起が出来るように損耗を減らすことしかできない。

つまるところ、積極的に長政を討つ理由はないのだ。

「ちつ、やはり馬術の差か！」

長政はちまちまとアウトレンジで攻め立ててくるが、難なく躲せる。その表情にはやや苛立ちが見えた。

戦の大勢は決したが、時間が残されていないのはむしろ浅井方だろう。

俺が浅井軍の突撃を止めたことで義賢様たちは逃げ、後背に食らいついた蒲生軍の勢いが増した。さらには、側面には義定の軍が回り込もうとしている。

いつまでも俺にこだわっているのは浅井軍の包囲が完成する。……もつとも残存兵数が少ないため、完全に浅井軍を倒すことはできないのだが。

まあ、それでも浅井軍は国力も兵数も六角に比べれば劣る。後のことを考えれば、手痛い打撃は食らいたくないだろう。

「長政様ッ！ お取り込み中、申し訳ございません。今すぐお退きなされ！ 義定隊が右に回り込んでおります！」

遠藤直経が長政に戦況を伝える。それを聞くと彼女は槍を下ろし

た。

「それは誠か、直経！ くっ、これではこれ以上義賢を追うことはできないではないか！」

明敏な彼女はすぐに撤退の準備を開始する。

俺たちはそれを追い立てて浅井軍にいくばくかの被害を与えたが、主な家臣の首を取ることは出来なかった。

結局のところ、此度の合戦は六角ばかり被害が出て、浅井の被害は少なかったのだ。おそらくこの戦を境に近江での浅井の勢力は伸長することになるだろう。

（おめでとう、長政。俺たちにとって不本意だが、お前たち浅井はようやく独立を掴んだ）

口には出さず、去っていく長政を寿ぐ。

悔しいが、あいつは自ら行動して望むものを手に入れた。

やはり、浅井長政はひとかどの英雄だったのだ。

*

その後、六角側が乞う形で両家の間で書状が取り交わされてこの戦は水入りとなった。

かくして、のちに野良田の戦いと呼ばれる合戦は浅井長政の勝利で終わることになる。

浅井は独立を手にし、浅井長政の武名は近隣諸国を席卷した。

六角家中にも動きはあった。

「皆の者、わしは今日で当主の座を下りようと思う。以後は出家し、家中を裏から支えようぞ」

義賢様が隠居を表明したのだ。

口には出していないが、敗戦の責を負ったのだろう。家督は義治様が継ぎ、義賢様は六角承禎に名乗りを変えた。

「野良田表の事、大儀であった。お前たちの働きで負けはしたものの、滅亡は免れた。よってそなたたちにもみ恩賞を与える」

家督を継いだ義治様がしたことは、野良田の戦いの後始末だった。

まず、俺と義定、蒲生定秀殿が呼ばれて恩賞を賜った。

俺は此度の戦功で名馬を、義定は金を、蒲生定秀殿は書物を貰って

いる。

俺の名馬好きは家中では有名だが、定秀殿が書物を所望したのは意外だった。

「わしはそれほど書に対する情熱はないのだがな、孫に強請られてしまつては仕方がない」

理由を聞くと、定秀殿は好々爺然とした笑いを浮かべる。

「鶴千代のためですか、それならば合点がいきます」

蒲生鶴千代。のちに蒲生氏郷と呼ばれることになる姫武将である。史実での才人ぶりはこの世界でも健在で、俺たちより一つ下ながら確かな評価を得ている。

「そういうえば、鶴千代のことでは話があるんですけどな。今、よろしいか？」

「ええ」

「あの娘は来年に元服を控えている。学び舎ですることももうない。高村殿でさえ良ければ、鶴千代を引き取って鍛えてくれませぬか？」

それは渡りに船な話だった。

最近、政務が忙しくなつてきて手が足りなくなっている。軍務も野良田の戦いで長政の突破力を目の当たりにしてから「もっと打たれ強くしなければ」と危機感を抱いていた。

蒲生氏郷ほどの才人が来てくれれば、これほど有り難いことはない。

「承知しました。では、手はずは後で整えまする」

快諾して、俺は定秀殿と別れる。

野良田の戦いを機に様々なことが変わろうとしていた。

第3章 The antagonism 第12話 次の戦雲

野良田の戦いから1年が過ぎた。

あの戦い以後は六角浅井間で大きな戦いは起こらず、戦間期になっている。

ただ、ついに桶狭間の戦いは起きた。史実通りに織田家が勝利を収め、今は美濃への侵攻を開始している。

(いよいよ、時代が動き出す頃合いか)

史実に拠れば、もうそろそろ浅井と織田が同盟を模索し始めるだろう。もつとも当主がどちらも女だから結婚に関してはどうなるかわからない。この世界には婚姻の他に親族を義理の弟妹として送り込む手法があるからだ。

(どちらにせよ、浅井と織田が組むのは六角には良くない)

地味に六角家の所領は南北に長く、南近江のみならず伊賀も含む。厳密には家臣ではないのだが、北伊勢の関家とも深い関係がある。

この関家と織田家の所領が隣接してしまっているのである。浅井に圧をかけられている間、織田に北伊勢を切り取られる事態は充分考えられた。

ちなみにこの関家は蒲生家と強いつながりがあり、二代に渡って蒲生家から妻を迎えている。蒲生家と付き合う以上、この関家の取り扱いかにも気を付けなくてはならない。

(むしろ六角と織田が組む方がいいのか？ 織田側からしてみれば、北伊勢の脅威は無くなって美濃に専念できる。浅井が織田側につかなくても、東海道で伊賀から南近江に抜けられるし、今から手を組めば上洛した後の扱いも良くなるかもしれない)

ざっくり理解だが、悪くないような気がする。問題は承禎様が聞き入れてくれるかどうかだが。

ともあれ、俺は時代の流れを肌で感じながら屋敷の掃除をしてい

た。

四代前の当主である六角氏綱の遺産であるこの大名屋敷は、一人で全部を掃除すると丸一日かかる。

「鍛える約束とはいえ、蒲生の嫡流の私を顎で使うとは……。良い度胸をしているわね、高村様？」

庭の掃き掃除をしながら氏郷がぼやいている。潔癖性な彼女にとってはこの屋敷の有様は目に余るのだろう。しきりに姑のように小言を繰り返していた。

「悪いな、頼める人手がお前しかいなかったんだよ」

初めは義定に頼んだが義治様の補佐に忙しく断られた。さりとして、他に親しい一門はいない。一応一人だけ同居している姫小姓がいるが、そいつは今は学び舎にいます。

というわけで、学び舎時代から親交のある後輩の蒲生氏郷に白羽の矢が立つことになった。

「それでもよ。せつかく休みが取れたというのに、こんな埃ばかりの家を掃除させられるなんて、あんまりだとは思わない？」

だが、氏郷の愚痴は止まらない。

お互い多忙の身。休みの有り難さは知っている。そうだな、さすがにただ働きをさせるのは気が引ける。

というわけで、俺は伝家の宝刀を抜くことにした。

「終わったら、プリン作ってやるから許せ」

プリンと聞いて、氏郷の目の色が変わる。

現代ではありふれたスイーツだが、この時代では違う。

砂糖は南蛮船から買い入れなくてはならず、卵も今までの日本では仏教的観点から忌避されて常食する習慣がないために入手に苦労する。

強い甘味がこの時代には少ないことも相まって、価値が大暴騰していた。

以上の事柄から、ぶつちやけ俺の懐には痛いがねぎらうにはちょうどいい。

「必ずプリンを作りなさい。さもなくば、シメるわよ」

長政といい、女子は甘味には弱いのだろうか。
意欲的に働き始める氏郷を見て、俺はそう思った。

*

承禎は激怒した。必ず、かの邪智じやちぼうぎやく暴虐の三好を除かなければならぬと決意した。……と、走れメロス風にモノローグをつけてみる。

久々に行われた軍評定。呼ばれて出席したところ、上座に唇を引き締めた義治様と苛立たしげな承禎様がいた。

「三好長慶よ。このような卑劣、わしが許すと思うてか！ 今すぐに京に出向き、晴元殿を解放させん！」

承禎様が吠える。六角家中に、三好と和睦したはずの細川晴元が長慶の手によって捕らえられたと知らされたのは昨日の夜のことだった。

細川晴元。

かつて畿内を約20年に渡って戦乱に巻き込んだ両細川の乱を終わらせ、畿内に政権を打ち立てたものの、かつて肅清した功臣の子である三好長慶に復讐されて国を失った男である。

承禎様とは親戚関係にあり、反三好で長らく戦ってきた盟友であった。

「すでに畠山高政殿から密書はもらっておる。畠山が紀伊から河内を、我らが六角が京を攻めることで、三好を打ち払おうぞ！」

畠山高政も三好と対立している畿内の武将だ。細川と同じ三管領家の一つだが、居城にしていた河内の高屋城を追い出され、いよいよ没落の一途を辿っている。

(正直、手を組む相手としては弱いんだよなあ)

内心で俺は嘆息する。

細川も畠山も完全に天の時から見放されかけている。それは長年に渡って畿内の乱に首を突っ込んできた六角の家臣団には薄々勘付いていたことだった。

それでも、六角家が三好派に鞍替えしないのは面子の問題である。

定頼様の代からずっと手を組んだ細川を見放してしまえば、六角の名は地に落ちる。すでに野良田で浅井に独立されていることもあり、

ここで株を落とすようなことはあつてはならなかつた。

「しかし父上、今の六角には中央に干渉するだけの力はありません。野良田の傷を癒し、斎藤家と手を組んで浅井の勢いを削ぐ方が先決なのでは？」

義治様が承禎様に具申する。俺もそちらのほうが良いと思う。

長政の勢いは昇竜だ。このままでは中央で権勢を振るう以前に本国がやられる可能性が高い。

蒲生殿もまた「若殿の申される通りよ」と、義治様に賛成していた。「ならぬぞ、義治ッ！ 斎藤などという何処の下賤の者か分からぬ家と手が組めるかッ！ そのような真似をしてはなおさら六角の名は地に落ちるわ！」

しかし、承禎様は受け入れなかつた。

義治様は当主を譲られはしたものの、実権はまだ承禎様が握っていたのである。

ただ、義治様の認識は違うかもしれない。それを裏付けるかのよう
に具申を棄却されてからの義治様の拳は強く握られていた。

かくして、半ば強行される形で六角家は三好との戦いを再開するこ
とになった。

第13話 遭遇

鴨川の東岸、北白川に隅立て四つ目の旗が翻っていた。

管領・細川晴元の処遇に対し、抗議をした承禎様は2万の兵を動員して鴨川を越える機会を伺っている。

未来で京の北白川といえはラーメンが有名だが、この時代ではたびたびこの地で鴨川を挟んで京の争奪戦が行われた。

「永原重澄は將軍山城へ入れ。わしは麓の神樂岡に布陣する。義治、義定、高村、蒲生家も神樂岡に参れ」

どうやら俺も神樂岡に布陣することになった。將の質的に考えれば、永原殿は大身とはいえ、戦は強くないから補給線を確保する役割だろう。

瓜生山を丸ごと城に仕立て上げた將軍山城は比較的堅く、平野で負けてもこの城に籠れば、時期を凶ることができる。

(とはいえ、長期戦は臨むところではない。かつてとは違い、長政が六角の后背を脅かす存在としている)

承禎様の戦略は何がなんでも、勝つために粘ることだろう。それだけ、此度の六角は勝ちを熱望していた。

「なあ山岡殿、西岸に詰めている三好軍に誰が来ているんだ？ 十河一存はもう死んだが、京の守りだ。生半な相手ではないんだろう？」隣に座していた山岡殿に問う。

山岡殿……山岡景隆は南近江の西端の瀬田に所領を持ち、地勢上生き残るために細川や三好の京都勢力と六角の間を渡り歩いてきた経歴を持つ。

そのため、彼女は動向を気にされながらも六角家随一の事情通として重宝されていた。

「敵の総大将は長慶の幼少の弟の三好義興ってことになっておりますが、高村殿より幼い。事実上の総大将は松永久秀と見て間違いありません」

「あの戦国の梟雄が相手か……」

松永久秀。その名は流石に俺でも身構えざるを得ない。

今はまだ三好の家臣だが、のちに三好に下克上した上で東大寺の大仏を焼き、挙句の果てには將軍の足利義輝まで殺した稀代の悪人である。

長政も名将だが、松永久秀の得体の知れなさにはまだ及ばない。

この時点で、この戦が真つ当な戦いになるとは思えなかった。

*

案の定、俺の予想は当たった。

北白川に布陣してから一月が経った頃、北と西から敵軍来襲の狼煙が上がった。

西の軍は三好義興が率いており共に在陣していた細川の軍を攻め、北の松永久秀は將軍山城を突いてくる。

それを受けて承禎様は

「総兵数では三好が1万4千、六角は2万。兵の数では我らが勝つておる。そのまま迎え撃ち、追い返せ」

と俺たちに命じたが、数で戦が決まるほど甘くはなかった。

義興の軍が思ったより強く、細川の軍は瞬く間に壊滅。

松永久秀は永原殿を討ち、將軍山城を突破し神楽岡へと迫っていた。

「思ったよりも六角兵、弱いな。また防戦一方じゃないか」

「そんな軽口を叩けるほど、六角軍に余裕はないよ。新十郎は北をお願い」

義定と別れ、俺は北の將軍山城を目指した。

比較的元気な神楽岡にいた軍は今や四方に散って戦線の補修に励んでいる。

義治様は西に行き三好義興の軍と対峙し、蒲生殿は將軍山城から敗走してきた兵の収容。俺は北の松永久秀の迎撃。義定は弓隊主体のため、遊撃をして四方を援護する立ち回りを選んだ。

北の戦線は將軍山城の麓の平野で、松永軍とは半ば偶発的に対峙した。

参戦している兵の内訳としては、松永隊が1万。俺の隊が騎馬2千と、氏郷の3千。数でも2倍の差をつけられており、承禎様が言っ

いた数の有利はとつくのとうに失われてしまっていた。

「こうなつてしまつては真つ当に戦つたら終わる。縦横無尽に動き、兵の力点を分散させなくてはならないな」

向かつてくる松永軍の前に氏郷の三千を置いて堰き止めてから、左右から騎馬で攻め立てる。別に包囲を目的にしているわけではない、ひたすらに遊撃を繰り返すことで松永軍を疲弊させることが目的だった。

まあ、中から散らすか外から散らすかという違いだけで、野良田の戦いの初日とやりたいことは変わらない。

そんな具合にちくちく攻め立てては逃げるヒットアンドアウェイ戦法を繰り返していたところ、ついに大物がかった。

「ふふ、煩わしい蠅ですこと」

後背から異相の姫武将が迫ってくる。

年は三十になるかならないかぐらいだろう。

日の本らしからぬ彫りの深さと褐色の肌。装束は日の本の鎧でも、さりとして南蛮風でもない。強いていうならチャイナドレス風の赤い服。

右手に十文字槍が握られていて、一振り二振りでこちらの騎兵を打ち落としていた。

「敵将、こちらに向かつて来ております。どうなされますか？」

隣で走る紀之介が問うてくる。どうやら並々ならぬ使い手らしい。俺が出なければ蹂躪を許し、貴重な精兵が失われるだろう。後のことを考えると、それは避けたい。

「俺が出る。いざという時の軍の差配はお前に託すぞ、紀之介。まだ元服はしていないが、お前の才幹なら山岡殿の補佐さえあれば問題ない」

決断した俺は采配を紀之介に預けて馬首を翻し、件の姫武将に向き直る。

鼻につくのは、白檀の香り。いや、そんな生優しいものではない。

数多の戦場を潜り抜けた末に得たのだろう、死の匂いと完成した強烈な女の色香。

畿内でこんな匂い立つ気配を漂わせることが出来そうな武將を俺は一人しか知らない。

「松永久秀か」

俺が問うと彼女は「いかにも」と嫺やかに笑った。

「貴方が六角高村殿ですね。聞きしに勝る武者ぶりですこと。されど、我が主の御為に討たせていただきますわ」

「かの松永久秀公にそう言って頂けるとは光栄の限り。だが、そう易々と討てると思わないでもらおうかつ！」

口上を垂れ流した後、馬を駆けさせる。

膂力ならまず負けないだろう。俺はそう判断して馳せ違いざまに斬り捨てようとした。

しかし、手応えは思いのほか固い。十文字槍の穂先でがっちり受け止められていた。

「槍は宝蔵院流。受け、突き、払い、斬り……おおよその武器の精粹を束ねたこの流派。極めれば、誰よりも自在に戦さ場を舞うことが叶いますわ」

妖艶に笑う久秀に刀を弾かれる。流派の技かもしれないが、そもそも前提としてある程度の膂力は要る。やはり、松永久秀は嫺やかな見た目には似合わない曲者だった。

(こいつも長期戦になりそうな相手だな……)

俺はこめかみに、じとりと汗が滲んでいくのを感じた。

第14話 阿吽

「松永久秀は高村様の方に行っただけ、残った兵も強いわね……」

采配を振るいながら、蒲生氏郷は苦虫を噛みつぶしたような表情を浮かべていた。

騎馬の機動力でもって敵陣を揺るがし、隙が生じたら蒲生隊含めた全兵で攻めかかる。

これが、高村が初めに選んだ戦術構想だった。

しかし、松永久秀は騎馬を率いる高村を鎮めに本隊から四千を引き出して分断。本隊は弟の松永長頼に任せていた。

「六角高村は厄介だが、姉上の触手に絡めとられてしまつては長くあるまい。このまま蒲生を討つ」

松永長頼は姉の松永久秀とは異なり堅実な用兵を得意とする。

いかんせん地味に思われるが、その実力は姉にも劣らない。姉が大和を攻めて領国としたように、長頼もまた丹波をほぼ平定し、国衆をまとめる立場となっていた。

「今はまだ持ち堪えられているけど、元々の兵力差は洒落にならないわ」

じりじりと押されてく蒲生隊。

氏郷の才は江州でも上位に入るが、さすがに天下の副将軍・三好の軍団長を相手するにはまだまだ開花しきっていない。

（来るなら早く来なさい。間に合わなくなつても知らないわよ……！）

戦線を必死にまとめながら、氏郷は瓜生山の方をにらみつけていた。

*

俺は松永久秀と一騎討ちを続けていた。

久秀の技量は凄まじく、馬上で戦つたとして決定的な一撃を当てることはできない。

なんとというか、強いというよりは上手い。最適解を先回りされているような感じすらする。

「十河殿ほどではありませぬが、重い一太刀と途切れぬ手数。不規則な太刀筋。定頼公以来の英雄ですわね」

久秀がお世辞を言ってくるが、楽な手応えで受けられているからちつとも説得力がない。

「それに引き換え、義賢殿は暗愚の一言。無為な戦を繰り返し、女に溺れるのみ。嫡子の義治殿も特に見るところはありません」

「何が言いたい」

「私が思いますに、六角は貴方が仕えるに値しない家ではないかと。莫逆の友に刃を向けてまで尽くす価値はあるのでしょうか？」

久秀はどうやら俺と長政が友だったことまで知っているらしい。それだけに久秀の言葉は身につまされるものがある。

だが、その問いかけはすでに解を出した後だ。

「確かに、義賢様たちには仕える価値はないかもしれない。だが、家中にはまだ守りたいやつがいる。それで充分だろう？」

義賢様の乱脈ぶりを見る限り、氏郷や紀之介がその毒牙にかかる可能性がある。こと紀之介に関しては実際にかけれられそうになる前に義定が助け、俺に託したようなものだ。

君を愛し、国に殉ずる。

それが家臣としては一番の理想だが、どうも俺はそうなれそうにない。

けれども、俺という名の傘で親しい者たちを守る。

その道なら俺も歩むことができる。

「ならば、致し方ありません。ここで、塵芥となっていただけまししょうか」

「それは、こちらの台詞だ。……いや、もうその時は過ぎたか」

將軍山城の方角からピーッと風切音が聞こえる。

それを合図に数多の矢が松永軍に降り注いだ。

「なっ、これは？」

思わず久秀は山の手を振り返る。

そこには、隅立で四つ目の旗がはためていた。

「ようやく来たか。いつ来るかは分からなかったが、どうやら天命は

まだ俺の方にあるらしい」

「いつの間に將軍山に兵を伏せていたとは……。これは一杯食わされましたね」

「全部計画通りなら良かったんだがな。結局はあいつのご機嫌次第で訳だ。とりあえず、一騎討ちをする意義はないから俺は帰るぞ」

そう言い捨てて、俺は刀を納めて軍の方に戻る。

ともかく、策とは到底言えない他力本願の極みだったが、最後の一手は成った。

初めは松永軍を騎馬で攪乱して足を止め、陣が乱れば全軍で攻め立てるつもりだったが、久秀が騎馬を潰すために兵を割いたため叶わなかった。

だが、それは各個撃破の好機を得たことにもなる。

久秀を釣り出して捕捉しやすい状況にすれば、きっと彼女はやってくる。

無駄に察しのいいあいつのことだ。この好機をむぎむぎと逃すわけがない。

「義定の援軍が来たぞ！ 全軍、松永久秀に攻めかかれっ！」

義定隊の高所からの狙撃と、俺たちの反攻で久秀隊は瞬く間に潰走した。その後、取って返して松永長頼が残った本隊にも痛撃を加えて松永姉弟を鴨川の対岸に追い返すことに成功する。

情勢の不利を悟った三好義興は退却を決断。

これにて三好軍は全軍後退し、六角軍は鴨川を渡り上洛を果たしたのだった。

*

「ありがとうな、義定。今回ばかりはお前が来てくれなかったらどうなっていたかわからなかった」

戦が終わった後、俺は義定のもとに向かう。すぐに会って感謝を告げたかった。

「いいよ、わたしだって新十郎がいなくなったら困るからさ」

気恥ずかしげに義定がはにかむ。

不思議なことに、こいつは結構自分から絡んでくる割には、いざ受

けになると弱い。だから、ここぞとばかりに俺も攻めることにした。「なに照れてんだよ、俺とお前の仲だろ」

「それでも嬉しいものは嬉しいんだって。だってさ、新十郎っていつもあまり頼ってくれないじゃん。なまじ色々できるし」

言われてみると、確かに義定の言う通りかもしれない。

前世の知識で六角が織田にやられることを知っていて話しづらいこともあるだろう。

長政の時だって、あいつが女であることを隠さなくてはならなかったから下手に他人を頼ることは出来なかった。

「だからさ、今日は力になれて少し嬉しかった」

義定はそう言ったつきり、すぐに戦後処理に戻った。

多分、照れ臭さに耐えられなかったんだろう。

俺にとつても、義定がすぐに仕事に戻ってくれてよかった。

(あれ? 義定ってここまでしおらしいやつだったっけ?)

そうでなくては、胸に残るこの違和感を抑える暇がないからだ。

第15話 仕上げ

俺たち六角軍が上洛を果たした一方、河内和泉方面でも大きな動きがあった。

久米田の地で畠山高政をはじめとする連合軍が三好軍を倒して、河内和泉方面の総大将だった三好義賢を討ち取ったのである。

三好義賢は三好長慶の弟であり、三好家の故国の阿波を任されていた。長慶に限らず、その祖父の之長や父の元長の代でも阿波の兵はその精強さで畿内の政局を動かしている。

阿波の兵の強さ、それが三好家の強さの源であった。

だから、それをまとめた義賢の死は三好軍にとっては相当な痛手だろう。

翻って畠山や六角にとってはチャンスではある。

それも、立ち回り次第では天下を獲れるほどの特大のチャンスだった。

「畠山の連合軍は、その後は長慶の居城である飯盛山城を囲んでいますね。勢いに乗る畠山軍とはいえ、飯盛山城は堅城。どうやら攻めあぐねているようです」

そう言つて山岡殿は報告を終え、俺の前を去った。

「天下か……」

獲れる機会が回ってきたとしても、いまいちぴんと来ない。

ただ、現在やることははっきりしている。

さらなる追撃をし、京の南西の勝龍寺城と山崎に籠る松永姉弟を追い散らして河内への道を開く。そして、飯盛山城を囲む畠山軍に後詰めする。

その進撃の最中に、今は石清水八幡宮にいるらしい将軍・足利義輝を確保すればいよいよ天下への大義名分も獲得できる。

後方の浅井は義輝様の名を使って停戦させるか、あいつに敵対している斎藤義龍を動かして釘付けにすればいい。

それでまず、畠山と天下を分ける段階までは行くだろう。

「うまくいけば、天下はともかく畿内は獲れるな。だが、問題は承禎様

がそこまで決断してくれるかだな……」

とりあえず、思いついた戦略を書状に書き残しておく。

しかしまあ、天下か……。

獲れても、承禎様じゃ平和にはならないだろうな……。絶対全国から美女を集めて大奥作るだけだろ、きつと。

*

ともあれ、畠山軍の戦勝は、六角の家中を積極的な好戦論に傾けるには十分だった。

上洛前は中央に関わることに否定的だった義治様は進撃を唱え始めた。六宿老と呼ばれる大身の中では、進藤殿と平井殿も進撃派である。義定もどちらかと言えば、進撃派に傾いていた。

非戦論を唱えるのは、蒲生殿と後藤殿ぐらいか。

俺はどちらかと言えば、非戦論だ。思い描いた戦略ならば、畿内を獲れるかもしれないが、きつと畿内平定の間には織田信奈がやってくる。

国力を多少増やしたとて、織田信奈……おそらく現代でいう織田信長に相当する英傑に勝てるとは到底思えなかった。

(ただ、それを理由に反対してもまともに取り合ってはくれないだろうな……)

なぜならば、今の織田信奈は桶狭間で今川義元を降伏させ、美濃を切り取っている最中。時期にしても、国力にしてもとても畿内の政局を左右する存在ではなかった。

「今週の評定を始める。皆の意見を聞かせて欲しい」

義治様の音頭で週始めの評定が始まる。普段この評定で大したことが決まることは滅多にない。町内会の定例報告みたいな感じだ。

だが、今回は違った。

「それで、父上。勝龍寺城はいつ攻めるのです？ この好機を掴まねば、六角は天下の笑い者になりましようぞ」

義治様が、承禎様に食ってかかったのだ。

「義治。お前には時期尚早と言っているだろうに」

「畿内を席卷した鬼十河も阿波衆もなく、我ら六角は上洛を果たして

いる。敵の松永姉弟は連絡を断たれ、孤立している。むしろ今以上の時期があるならば、教えていただきたい」

「ならぬ。家臣たちにも告ぐ。まだ、六角は天下を獲るのは時期尚早ぞ。わかつたら、評定を続けよ。わしは帰る」

そう言うと、承禎様は評定の間を辞した。既に自分の分の報告を終えた義定もそれに続く。

残された義治様や諸将は、口々に「臆病な方だ」とため息を吐いている。

ともあれ、今のように当初は畿内に参戦する決定打になった承禎様が何故か進撃に消極的なため、六角家は動くに動けない状態だった。

*

評定の日の夜。

義定は承禎の寝所に向かっていた。

「お前が、わしの寝所に来るとは珍しいこともあるものだ」

意外そうな顔をして義定を迎える承禎の股下には、妙齡の美女が裸になって組み敷かれている。

それを見て、義定はため息をついた。

「ああ、後家奉仕ですか。精が出ますね、父上」

「これから出すところだったんだがな……。それで要件はなんだ？」

おそらくはわしが軍を進めるのを渋る理由だろうが」

「合ってますが、そういう情報はいららないです。ちよつとその人は退けておいて下さい。母上を思い出して、集中できないんで」

義定が言うと、承禎はしぶしぶ美女を帰して着衣を直す。

「……義治には言つてはないが、義定になればいいか。六角にはもはや天下を狙う力はない。それだけのことだ」

承禎はそう言って寂しそうに笑った。

「わしには、天下人の才はない。それは義治やお前も同じことだ。せめて、父上がいた時にこれだけの機会があればと知らせを聞いた時に思った」

六角定頼。管領代にまでなった六角の名君。

その影を承禎はずっと追ってきた。しかし、すぐにそれは永遠に届

かないものだを知る。

「義定よ、実はわしはすでに満足しておる。こんなわしでも上洛を果たすことが出来た。当主としてはもう十分であろう。この戦を最後に畿内からは手を引こうと思うておる」

胡座をかいていた脚を崩し、承禎は天を見上げる。

その様を見て、義定は「父上は戦いを倦んでいる」と察した。

だから、女に溺れたのだろうかとも。

しかし、同情する気にはなれなかった。

(それでも、父上は母上を殺した……！)

義定は彼女が6歳の頃、母を承禎との行為中に腹上死させられている。対外的には病死となっており、知る者は少ない。

義定の母は元々は他家に嫁いでいたが、後家奉仕で承禎に性行為を強要されており、その過程で産んだ義定は彼女にとっては当初望んだ子ではなかった。

(だから、わたしは母の呪詛を子守唄にして育った)

産まれた瞬間に唾を吐きかけられようとも、それでも義定にとって母であり、愛情もいくばくか与えてもらっている。

だから、義定は承禎を仇として認識していた。

そんな義定の内心を知る由もなく、承禎は続ける。

「さて、後は義治に託さざるを得ないが、まだわしにはやることがある。今度は逆に問うぞ。……義定、新十郎が謀反を企てているとは誠か？」

完全に寝耳に水で、今度は義定が驚く番だった。

「そのような噂を誰から聞いたので？」

「義治からよ。なんだ？ その様子だと奴と親しくせに知らぬのか。ならばいい、帰れ。中途半端に止められたせいも、情欲で狂ってしまうわ」

言うのと、承禎は手を振って義定を追い出す。

外に出た義定は走り出した。

(伝えなきや、新十郎に……！ このままじゃ父上に殺されるって……！)

承禎は戦いには倦んでいた。

だが、代わりにこの洛中で六角新十郎高村という家中最強にまで成長した政敵を排するつもりでいる。

自身が在世している間に、次代への総仕上げを行うつもりだった。

第16話 蠍の毒

河内国、飯盛山城。

天下の副将軍・三好長慶の居城にして、現在進行形で天下の趨勢が争われている最前線だった。

「ええい、何故に六角は動かぬっ！ 京を抜いてから一月も経つというのに、何をしているのかっ!？」

飯盛山城を囲む連合軍の総大将である畠山高政が地団駄を踏む。

久米田の戦いで阿波衆を率いる長慶の弟の義賢を討ったところまでは良かった。しかし、飯盛山城が落ちない。一度総攻撃を仕掛けたが、敢えなく追い返された。

「再度、六角に督促の使者を出せ！ 最早この戦は時間との勝負じゃ！ 三好が体勢を整える前に攻め切らなくてはならぬ！」

畠山高政は焦っていた。

大和と紀伊の諸勢力をまとめたのはいいが、所詮は反三好で集まった烏合の衆に過ぎない。この優勢を保てなくなれば、自壊する定めだと自覚していた。

*

「ふふっ、久米田から一月も経ち、いささか畠山殿も焦っておられるようで……。しきりに使者を飛ばしておりますけど、意味はありますまい」

いつの間にか飯盛山城に帰還していた松永久秀が嘲笑する。

「そういうえば久秀。何故に飯盛山城に帰っているのです？ 京には六角は未だに健在でしょうに」

その横で穏やかな顔立ちの黒髪の美女が苦笑いを浮かべる。

この人こそが、三好長慶。

父を奪われた阿波の少女から天下の副将軍にまで登り詰めた当代きつての女傑だった。

「六角軍の脅威が薄れたからですわ。私が六角義治に「六角高村が謀反を起こして、嫡子の座を奪おうとしている」と告げ口を致しました

の。そうしましたら、身の危険を感じた高村一派は瀬田の山岡景隆の元に逐電して京を離れましたわ」

そう言つて、久秀が茶を点てる。

本人は何事もないように言うが、この策一つでかなり情勢は三好側の有利に好転していた。

「ああ、だから軍の一部を割いて飯盛山城に戻つてこられたのですね。となると、反攻の時は近いかもしれません」

点てられた茶を飲みながら、長慶は思案する。

畿内屈指の鬪将として名高い六角高村がいない六角軍など、最早脅威ではない。勝龍寺城に残した松永長頼だけでも十分対処できるだろう。

久秀の働きで、摂津の反三好の動きも収まりつつある。そうすれば、播磨や丹波からの増援を引き込めるようになる。

「二存が不慮の死を遂げ、義賢が討たれたと聞いた時はいよいよ三好は終わりだと覚悟しました……。しかし、まだその時ではないようですね。私の心が持ち直つたのはあなたのおかげです、久秀」

「有り難き御言葉。されど、今は畠山高政を追い払うのが先決にございます。彼こそが六角に並ぶ古き畿内の象徴、倒さねば真の意味で天下人足りえませんわ」

優しいな声音で久秀は長慶を宥める。

両者とも年は十ほどしか離れていない。それでも、久秀は長慶をまるで実の娘のように慈しんできた。

その姿は到底『蠅』と渾名され、恐れられている姫武将には見ええない。もし高村が見たならば、まず自分の目を疑うだろう。

(ひとまず流言で六角の牙にひびは入れましたわ。後は、畠山。彼こそ討ち、六角の牙を手折れば畿内に安寧は訪れる。……長慶様の心を癒す暇を手に入れられますわ)

三好長慶は感受性が強い少女だった。

父を謀略によって失った時は、誰よりも嘆き悲しみ、復讐に燃えた。

しかし、狂気に染まるにしては彼女は聡明かつ生真面目過ぎたのかもしれない。復讐を果たした後の畿内は乱れに乱れ、長慶はその責を

自らに背負い込んで戦いを続けることになる。

その結果、ただでさえ強い感受性が最中で牙を剥いて彼女の心を痛めつけた。

弟妹の十河一存と三好義賢を失ったのが決め手になったのだろう。この頃になると、長慶の心は完全に摩耗し切っていた。

(長慶様の御為に平穏をもたらさなくてはならない……。そのためならば、私は鬼にでもなりますわ)

久秀の決意は固い。しかし、その深情けこそが災いになることを今は誰も知る由はなかった。

*

松永久秀の着陣後、三好義興も畿北の三好勢を集めて着陣。その後、に久米田の戦いの敗兵も集結し、三好勢は5万にまで膨れ上がった。その三好勢と畠山連合軍は教興寺で衝突。僅か1日で決着が着き、畠山勢は敗退した。

「これで三好が息を吹き返したわけか。さて、俺たちはどうしようか……」

いわゆる教興寺の戦いの顛末を俺は山岡殿の瀬田城で聞いていた。「承禎様は撤退を決意しました。すでに全軍が鴨川を越えております」

「ありがとう、山岡殿」

報告を聞き終えて、山岡殿を下がらせる。

すると、今度は義定が訪ねてきた。

「で、どうする？ わたしたちも観音寺に帰る？」

「ここに逃げる事を勧めた人間の言うことじゃないだろ、それ。観音寺に帰ったら帰ったでめんどくさそうだし、ひとまずは残るよ。とりあえず、三好に備えなくてはな」

ちよつと考えた結果、俺は瀬田に残ることにした。

観音寺から距離を取ると同時に、ここに俺がいれば多少は威圧になると打算しての判断ではある。

瀬田城は一山越えれば京に出る位置にあり、西には瀬田川が流れている。万が一の時は、対三好の最前線になる要衝だった。

その後は、撤退する六角軍を護衛して無事に南近江に返すことを優先する。三好勢は京までは攻めてきたが、山科を越えてくるようなことはなかった。

ただ、忍びによれば河内や大和には盛んに兵を出し、完全に平定。紀伊にも大きい影響力を持つようになった。

これで三好家の畿内制覇に立ちはだかるのは六角家ただ一つ。後は東進するだけである。

(三好にも気をつけなきやだし、北には長政がいる。東は斎藤と織田は不干渉だけど、義治様が怪しい。……あれ？　これ普通に四面楚歌じゃね？)

我が身を取り巻く事実気付いて震える俺だった。

第17話 観音寺騒動

京から帰った六角の家中は荒れていた。

理由としては三好への対応と高村の処遇を巡って家臣団が論争を繰り広げているからだ。

俎上に載せられている2つの議論はどちらとも重大事がかつ密接に関わり合っている。親三好を選ぶならともかく、反三好を採る場合は高村を復権させないと軍事的に対抗できないことを重臣一同は理解していたからだ。

「最早、天下の大勢は三好に決した。今や中央で覇権を狙う時は終わったのだ。これよりは三好の力を借りて浅井を呑み、近江を統一するべし。その時、浅井に好を通じていた高村は後難の基になるゆえ始末した方が良い」

現当主の義治は親三好、反高村派で六角家は三好政権の一翼として天下に参与すべきだと主張している。

「ならぬわ、義治。此度こそ三好が勝ったが、すでに政権を担うべき2人の弟妹がおらぬのだぞ？ 長慶本人もそう長くはないと聞く。……畿内は再び荒れるぞ。その時、高村の武力なくしてどうするつもりだ？」

一方、隠居の承禎は反三好で、高村に関しては帰参を認める方針に転じていた。

もともと承禎は高村の力を買っている。権限を削ぐつもりではないが、始末するまでの敵意はない。義定の口添えや領国に帰る際に高村がきっちり護衛を務め上げたことも、承禎の態度を軟化させるのに作用した。

「そもそもお前が高村を廃する根拠にしていた浅井と内通している、というのも怪しいものだ。やつと猿夜叉丸は親しかったとはいえ、野良田では共に打ち合ったと聞く。それに、奴がいる瀬田は浅井領からは遠い。内通は現実的ではなからう」

「むむむ……」

承禎に正論をぶつけられて、義治は押し黙る。

だが、理屈的には納得していても、感情的には納得できていない。義治にとって高村は家督争いの最大の敵である。どうにもこれから先、自分と高村が共存する未来を思い浮かべられないのだ。

(たとえ家督を俺が掌握しても、高村に軍権を奪われる。……俺はそんな傀儡みたいな当主にはなりたくない)

今現在において現実的に隠居の承禎が最高権力者であると分かっているとしても、軍の第一人者が高村だということを理解していても、義治は「当主である以上、俺に主権がなくてはならない」と信じている。(だが、どうやらその現状も今のままでは変わらないらしい。……一手、打たねばならないな)

評定が終わると、義治は静かに退室する。

その表情はひどく張り詰めていた。

*

六角義治が後藤賢豊を討ち、六角承禎を追放した。

その報を聞いた俺は、思わず知らせを持ってきた山岡景隆の肩を揺さぶっていた。

「山岡殿ッ！ それは本当なのか!? 義治様が後藤賢豊殿を討ち、承禎様を観音寺城から追放したというのは!」

「信じ難きことなれど、事実です」

「そうか、そうか……」

あまりの事態の急転ぶりに頭の整理が追いつかず、頭を抱える。

聞いたところによると三好と俺の対応について揉めたことが原因らしい。

「追放された承禎様は、蒲生定秀殿を頼り日野城へ向かったそうです。我々の去就はどう為されますか?」

「……流石に考える時間をくれ。ちと即断できる内容じゃない」

「されば、黄昏時に評定を開きます。それまでに素案をお考えください」

言うのと、山岡殿が部屋から退室する。

それを見送ってから、俺は大きいため息をついた。

「いや、義治様。何してんだよ」

こみ上げてくる怒り。

今は三好長慶が天下を獲る最終局面に入っている。六角家の生き残りを考えると間違えてはならない大事な局面だ。

「だというのに、なんで親子で喧嘩するんだよ。あいつらは阿呆かよ」
これで状況は最悪になったと言っている。

西には戦意剥き出しの三好、東は内乱。

援軍もなく、敵軍の前に立たされている形となる。

『私が思いますに、六角は貴方が仕えるに値しない家ではないかと。莫逆の友に刃を向けてまで尽くす価値はあるのでしょうか？』

不意に松永久秀の言葉が頭に過ぎる。

ああ、確かに。今ならば六角を捨てて三好に奔るにはいいかもしれない。
ない。

しかし、それでは話が違う。

俺は定頼様に六角の命運を託されたのだ。長政と歩む未来を切り捨ててまで、六角に残る決断をしたのだ。

我が身が怖くて他家に逃げてはあの日々の苦悩が無為になる。

それは、許せなかった。

「腹を括るしかないな……」

刀掛けに飾られている定頼様の刀を佩く。

貴重な刀だったから、普段使いはしてこなかった。惑いまくっていた俺には勿体なかったから敬遠していたということもある。

「俺は、家中を乱した義治を許さない。さりとて、承禎様が返り咲くのも紀之介たちのことを考えると気が引ける。……となると、俺が立つしかない」

俺が六角家の当主になる。

今まで考えたことはなかった。あくまで俺は一門の一人で支える立場である。そう認識していた。

けれども、この定頼様の刀を佩くからには覚悟を決めなくてはならない。

俺が六角を守る、と。

*

「そうか、六角承禎が追放されたか。いい気味だな」

北近江の小谷城にも、観音寺の変事は伝わっている。

報告を聞いた長政はまず六角承禎の凋落を鼻で笑った。

「殿はどうなされます？」

側に侍る藤堂高虎が問う。

野良田の時は一介の侍大将に過ぎなかったが、以後はその武勇と伶俐さで頭角を現して遠藤直経に次ぐ長政の側近にまで栄達を重ねていた。

「幸いなことに厄介な高村は西の端の瀬田にいる。この隙に六角領に侵攻し攻め滅ぼす。今の情勢ならば六角家中からの内通者も出てこよう。高虎は三好への取り次ぎを任せる」

「力強く長政は宣言する。」

直経も高虎も異議を唱えることはない。

浅井家にとっては最大の好機が訪れていた。

第18話 唐橋

「どうも思いの外、義治殿は軽率なようで……」

大和国・信貴山城で松永久秀は観音寺の変事を掴んでいた。

義治を焚き付けたのは自分だとしても、その性急さには呆れを通り越して笑ってしまう。

「長慶様にも知らせておきましようか。瀬田さえ抜けば、南近江を獲ることが叶います。北近江の浅井が好を通じてきている以上、この戦さえ乗り越えれば、天下の大勢は三好に固まることでしょう」

すぐに久秀は筆を取り、書状を記して長慶に送る。

その後の三好軍の行動は迅速だった。

長慶はすぐに二万の軍勢を手配し、すぐに諸将を京に集めた。

「総大将は私。第一陣は三好義興。第二陣は安宅冬康。まずはこの三人で瀬田を抜き、久秀は大和から伊賀に侵攻。これで六角を滅ぼします」

諸将の前に立ち、長慶は語る。

弟妹は失われたが、三好家の勢威は過去最高の域にまで達していた。

「この戦こそ、三好の天下を固める正念場。各々がた、万事抜きかりなくその力をふるいなさいっ！」

長慶の号令に二万の兵が熱狂した。

一言でそれを為せる辺り、三好長慶の資質が天下に冠たるものである証とも言える。

ついに、天下の副將軍が直々に牙を剥いたのだ。

三好軍を見送る京の人々は口々にこう囁立てる。

「江南の暴れ馬も、長慶様の頸城に繋がれることになる」と。

*

瀬田川の西岸の石山に三好軍がひしめいていた。その数は一万五千。長慶自身は膳所に五千の兵を率いて在陣している。

三好軍の来襲を知った高村は何度か山岡景隆を使者に和睦を持ちかけたが、全て退けられていた。

瀬田城さえ抜けば、後は義治方の領地が広がっている。瀬田城に籠る高村一党はさながら、絹に付いた一点の染みでしかない。

畿内屈指の闘将とはいえ、四千の孤軍にそこまで警戒する必要を三好勢は感じなかったのだ。

「ふふ、高村一党の姫武将は美人どころばかりだと聞く。甲越では散々な目に遭ったが、今度こそ俺さまのものにしてやるぜい！」

三好家の第一陣の将、小笠原長時は舌舐めずりをする。

長時は元々は信濃守護を務めていたが、武田晴信に敗れて長尾景虎に身を寄せていた。

しかし、生来の女癖の悪さが災いして、景虎の上洛中に景虎に夜這いをかけて失敗。そのまま逐電して小笠原から分派した三好家に駆け込んだという経緯がある。

「高村一党の姫武将はともかく君の武勇には期待しているよ、長時」

その隣に立つ色白の美少年は三好義興。長慶の年が離れた弟でその聡明さで早くから後継者として囑望されている。

とはいえ、線が細いため武勇には乏しく、小笠原流の礼法と弓馬の達人である長時を側に置くことでその弱点をカバーしていた。

「まあ、そんなことをいわずに聞いてくれ義興くん。江南には可愛い子ばかりだぜ？ 例えば蒲生氏郷ちゃん！ 近江屈指の名門の出身のお嬢様でちっちゃくて可愛いんだ。可愛いといえば大谷紀之介ちゃんだが、純朴で守ってあげたくなる感じだな。使者として会った山岡景隆ちゃんは知的だが、絶対寝所では乱れて、すごいえっちな俺さまにはわかるんだ」

もう姫武将の事を語らせたなら長時は止まらない。どこからか仕入れた情報をもとにした妄想を垂れ流していた。

「僕としては六角義定が気になるかな。江南一の美少女として知られる一方、弓の達人だと聞く」

「そうだよな、その落差が最高だと思わないか義興くん？」

「やれやれ、僕は彼女の狙撃に気を付けろって言いたかったんだけどな……」

気を取り直して義興は六角軍を見据える。

大軍の前に浮き足立ちもせず、自分たちを待ち構えている。油断で
きない相手だと思った。

だが、長時はそうは思わなかったらしい。

総大将の三好長慶が進撃の下知を発すると、矢のように瀬田の唐橋
を渡り始めた。

「者共進めーッ！ 高村一党の姫武将は全部俺さまのものだッ！」

長時の士気は天を衝くほど高い。他の三好軍もそれに続き、相方の
義興も長時を孤立させないように軍を進めた。

安宅冬康は辺りを警戒しながら進む。

三好軍一万五千の力押し。

守城の基本とも言える攻撃三倍の法則を凌ぐ戦力差が六角軍に叩
きつけられる。

「やはり、この戦力差はきついわね……」

唐橋を守る山岡景隆が顔を顰める。

彼女はどちらかと言えば、文官系。乱波をまとめて情報の網を張る
能力はあるが、力押しとなるといささか分が悪い。

「力む顔も可愛いな。だが、俺さまを止めるには実力不足だったよう
だな！」

案の定、すぐに小笠原長時に押し切られて唐橋を通してしまう。

だが、それは景隆のひいては高村の目論見通りだった。

*

「よく頑張ってくれた山岡殿。では、橋を落とせ」

唐橋が抜かれるのを見たと同時に、俺は義定に鏑矢を射させた。

どんなに頑張ってもこの戦力差では真正面から守り切ることはで
きないのは、わかっていた。

瀬田川を堀にしたとはいえ、瀬田城は決して堅い城ではない。

だから、それを当てにせず、地形を眺めて策を練っていたのだ。

「なっ、唐橋が落ちただとッ!？」

まずは瀬田の唐橋を落として敵の先鋒を孤立させる。

かかったのは二千ぐらいか。それぐらいならば、東岸に残して置い
た兵でも相手出来る。

俺は虎の子の騎兵五百を率いて、小笠原隊のもとに赴いた。

「よもやこの瀬田の地で、あなたと見えることになるとは思わなかったな。小笠原長時公。領国はいかがなされた？」

「知ってて言ってるだろお前。腹たつが、早々と出てきてくれて助かるぜ！ さあ、俺さまに姫武将をよこすのだ！」

犬歯を剥き出しにして小笠原が吠える。

端正な顔立ちだが、生来の粗野さが滲み出ている台無しになっていた。

「生憎、お前に抱ける女はいねえよ。……というか、俺も抱いてないしな。まあいい、とりあえずここで死ね」

吐き捨てて、馬腹を蹴って駆ける合図を送る。

それを見た小笠原も構えてはせ違う。

馬の勢いを乗せた重い一撃。割と渾身の一撃だったが防がれる。

流石は武門の名家の御曹司といったところか、変態だが弱くはない。

けれども、まあ一合打ち合えばわかってきた。

「ぜえ、はあ。なんだよ、その膂力。化け物かよ……」

小笠原が肩で息をする。もう女に目を輝かせていた色ボケの姿はない。ただ、畏怖する兵の顔になっていた。

互いに体勢を整え、もう一度はせ違う。

すると、小笠原の方が崩れる。豪剣を受けきれずに小笠原が落馬したのだ。

「ちっ、高村の首は惜しいが、命あつての物種だ。俺さまは逃げる！」

腰をさすりながら、いかにもな捨て台詞を残して小笠原は遁走する。

それを俺は積極的に追おうとはしなかった。

確かに小笠原の武勇は少しは厄介である。

だが、それ以上に瀬田川西岸の情勢の方が大事だった。

「小笠原の残軍を掃討し次第、山側を越えて西岸に渡る！ この戦はここからが正念場だぞ！」

その後、小笠原の残軍は頑張っていたが、大将が遁走した後ではどうしようも無い。囲んで叩いて寡兵で徹底的に打ち崩した。

第19話 石山崩れ

「私にこんな大役務まるかなあ……」

石山寺の坊の中で、大谷紀之介は不安に苛まれていた。

今、紀之介は千の兵を率いている。元服してはいないながらも、高村の側仕えとして彼を補佐してきたことを評価されたがゆえの人事だった。

『これだけの大仕掛けをやる以上、俺は流石に瀬田城に詰めて全体を把握しなくてはならない。だから、西岸の主力は氏郷とお前に任せるほかない』

開戦前に高村が言っていたことが脳裏を過ぎる。

そうなのだ、此度の戦は氏郷とこの大谷紀之介が大勢を決する役目にある。

すでに東岸に入り込んだ小笠原軍は撃滅された。高村と義定は余勢を駆って西岸へ行軍している、兵数は八百程度。戦況を変えられるだけの力はない。

「行くしかないけれど……」

眼下の河原では橋を落とされた三好軍が右往左往し、横っ腹を晒している。石山寺から降りて強襲を仕掛ければ、大打撃を与えられることだろう。

けれども、その数は1万は超えている。彼我の戦力差は3倍はあり、その数が紀之介の足を竦ませていた。

「蒲生氏郷隊！ かかれ！」

逡巡している間に、先鋒の壊乱に動揺した三好軍を叩くべく蒲生隊が石山寺を降りた音が聴こえる。

「私にも、氏郷殿のような勇気があれば……」

迷いなく進める氏郷を紀之介は羨ましく思った。

もつとも、この場に高村がいたならば「あいつはただ目立ちたいだけだ」と苦笑いをする類の蛮勇であるのだが。

「気落ちなさるな、紀之介殿。その方には勇はなくとも義がある。違うかな？」

「そうですね、私は義を以ってこの戦に立っている。働きで救っていただいた恩義を返さねば……」

与力につけられた湯浅五助に促されて、紀之介は前を向く。

高村とは学び舎の時から一緒だった。二つ上の兄貴分として紀之介を引つ張つてきてくれた。時が経ち、野良田の戦いで父が死んだときは義定と協力して母子共に義賢の魔手から助け、屋敷に置いてくれている。

思えば、高村には何かを貰ってばかりで何も返せてはいなかったのだ。

「励ましてくれてありがとう、湯浅殿。……では、向かいますね」

傍らの采配を掲げ、紀之介は進撃を開始する。

蒲生軍に遅れこそ取ったものの、その勢いは遜色ないものだった。

*

石山の三好軍は総崩れとなっていた。

突出した小笠原長時はすでにその隊を失い、彼に続いた三好軍は蒲生氏郷と大谷紀之介に追い立てられて瀬田川を枕に討ち死にしていた。

「六角新十郎高村……！ 傑出した騎馬武者だとは思っていたが、ここまでの戦術巧者だとは思わなかった……！」

馬上で三好義興は悔恨する。

義興の隊は北は琵琶湖、東は瀬田川、西南に蒲生隊と大谷隊に囲まれていた。

（石山寺を利用した中入り。北を琵琶湖に阻まれた石山の地ならば、瀬田の唐橋を落とし、南から強襲をかけて西を軍で防げば容易く包囲が成立する……！）

寡兵で大軍を討ち、かつのちに近江を駆けるための余力を残す。

高村はこの難題を地形を活かし、敵軍の勢いを削いだのちに包囲するという形で対応した。

「義興様、お逃げを」

家臣に守られながら、義興は後退する。

なんとしてでも姉の長慶が待つ膳所に戻らなくてはならなかった。

(義賢様も一存様ももういない。この二人を喪われてからというもの、姉上の笑顔は少なくなつた。この上、僕まで討たれてしまえば、姉上は最早笑うことはないだろう)

家臣が討たれゆくのに心を痛めながらも義興は完全に大勢が決した戦場を駆け続けた。

しかし、悲しいかな。

義興は、三好家は惨たらしいほどに天の時に恵まれていなかった。必死に逃げる彼の進路を数百の騎兵が阻んだ。

「三好義興殿とお見受け致します。その首、獲らせていただきますね」

群勢の先頭に立つ姫武将が会釈をする。

腰まで長くほどの栗色の長髪にあどけないながらも整った顔立ち。

これだけの修羅場であるというのに、その艶やかな装束には泥一つすらついてないこともあり、彼女の姿はいよいよ浮世離れしていた。

「六角義定か」

義興が問いかけると、義定は微笑む。

その笑みは義興が見た誰よりも美しかった。

(長時が姫武将に溺れるのも分かるかもしれない。血と泥にまみれた戦場の中にあつては彼女達は何よりも輝いて見えるのだから)

見惚れているばかりではいけない、そう思い直して義興は刀を構えて駆ける。

しかし、彼の意識が保つたのはそこまでだった。

ドスつと頭蓋を射抜かれた感覚に、視界を染める鮮血。馬上から落ちた時の背中の痛み。

それが、義興が最後に感じたものであった。

(……姉上、申し訳ございません。よもや、僕まで貴女を置いていくことになるとは……)

*

石山から少し離れた膳所で長慶は石山で起きている事態を聞いていた。

第一陣は壊滅し、第二陣は逃亡兵を多く出しながら壊走。

三好義興は六角義定に討ち取られ、安宅冬康は退却の陣頭指揮を取っている際に狙撃されて命を落としている。

僅か3時間の間に関わることだけのことだ。起きてしまつては流石の長慶でも手の施しようがなかった。

「悪いことは言わねえ、長慶ちゃん！ もう戦の大勢は決した！ 兵はまだこっちの方が多いが士気が完全に地に落ちてやがる！ 悔しいだろうが、もう退くしかねえ！」

逃げ帰ってきた小笠原長時が地に這いつくばって具申する。

逃げに徹していた長時ですら、血と泥にまみれていた。それだけでもこの戦の惨たらしさが長慶にもわかった。

だが、彼でもまだマシな方である。第一陣、第二陣に参加した将の中で名のある者は長時しか膳所に戻れていなかった。

「そう、だな。……もう完全に時期は逸している」

長時の進言に長慶は首を縦に振る。

しかし、最早その表情に生氣はなかった。

(……私は復讐のために、畿内をさらなる戦乱に引き込んだ……。私なりに責任を取ったつもりだが、これが御仏の出された答えなのだろうか)

いよいよ残された弟妹の安宅冬康と三好義興までもを失った長慶の心はこの時、完全に折れた。

長慶は高村たちに追い立てられながら山科を越えて京に帰還するも、最早軍を起こせる力はなく逼塞することになる。少なくとも天下への道は閉ざされることとなった。

対して高村は動員した四千の兵のうち二割の八百を失い、虎の子の騎兵隊に至っては十人ほどしか失わなかった。

損失が全体の二割というのは、そこそこの痛手ではあるが相手のことを考えると大戦果と言える。充分、六角領に転戦するだけの余力を確保していた。

高村が孤軍奮闘し三好長慶の進撃を止めて畿内の情勢を変えたこの戦は後世に『石山崩れ』と呼ばれることになる。

だが、高村の戦は終わらない。

「これで、三好はしばらく口を出しては来ないだろう。皆、次は日野に行くぞ。包囲する義治と浅井軍を討ち、承禎様と定秀殿を救うのだ」
むしろ、この石山崩れを制さねばスタートラインにすら立てなかつたのだ。

勝利の余韻に浸ることなく、高村一党は東進を開始した。

第20話 騎馬殺しの陣

鈴鹿の山を左に眺めながら、私は六角領を行軍していた。

我が浅井家が江南に侵攻してからというもの、国人の寝返りが相次ぎ、箕作城の辺りまで侵攻が進んでいる。

今までなら浅井が一方的に侮られていたため、そんなことはあり得なかった。それだけ、此度の騒動は六角の屋台骨を揺るがしたのだから。

ともあれ、この城さえ越えれば承禎が籠る日野城までは目と鼻の先である。今は日野城を義治の手勢が囲んでいるが、決め手に欠き攻めあぐねているらしい。しかし、私が後詰めすれば問題は解決する。

「それにしても、よもや浅井と六角が合力するとは思わなかったな……」

呉越同舟。今回の六角義治との共同作戦は端的にこの故事で説明がつく。

六角承禎という共通の敵を討つために、天を共に抱けない両家が手を結んだのだ。

初めは我らが単独で六角を倒そうとした。しかし、三好長慶が義治を支援していたため、そこまですると三好までもが敵になる。

(正直に言えば不本意だが、最悪は承禎と高村さえ追い落とせばいい。義治ならば、与し易いからな)

今までの経緯に思いを馳せながら箕作城を囲む。すると、高虎が早馬を飛ばしてきた。

もたらされたのは、六角高村の戦勝報告。

三好長慶率いる二万が瀬田に籠った高村の四千に追い返されたのだという。

「そうか、高村がこちらに来るんだな……。にわかには信じがたいが……」

この石山崩れの情報は私にとっては信じがたいものだった。

相手は日ノ本の副王・三好長慶、当代の天下人と言いつてもいい。教興寺の戦いで畿内の旧勢力を根こそぎ仕留め、天の時を得たよう

な勢いをもっていた天下人を高村が止めたのだ。

それも、寡兵での完勝である。

「しかし、困ったことになったな……。安宅冬康殿はどうなった？」

「討ち死にしております」

「そうか……」

思わず私は天を仰ぐ。

この浅井と六角の合力は三好長慶殿を仲立ちにして行われている。私と義治の折り合いは悪く、何度も条件が合わずに頓挫しかけた。そこを安宅冬康殿に仲介してもらって今に至る。

(こうなっては、六角義治と意思疎通を図るのは難しいな……)

浅井と三好、六角義治。この三軍で六角承禎と六角高村を討つ。それが今回の戦の題目だった。

だが、肝心の三好は挫かれ、高村は江南で味方を集めながら日野に向かっている。

「やはり、ここでも高村は壁として立ちはだかるのか……。まあ、いい。早々と箕作城を落として南下するぞ」

報告に来た伝令を下げて、指示を出す。

箕作城を攻めさせつつ、私は高村のことばかり考えていた。

*

俺たちが水口辺りまで進軍すると、六角義治は日野城の包囲を解いて西の守りに入ったと報せを受けた。

「六角義治は殿と承禎様に合流されることを恐れているようですね。義治の軍は八千ほどかと」

「ありがとう、山岡殿。さて、俺はどうするかな……」

水口に来るまでの間、東海道沿いの義治派を討ち従えて俺たちの兵は三千弱から六千五百までに増えている。

数は増えたといえど、その練度は俺たちには及ばない。さらに義治が布陣した場所が水口と日野の間に横たわる森林地帯であり、虎の子の騎馬隊が使いつらいという不利を抱えていた。

「地形を見たところ、大軍が布陣できるのは日野側の出口に広がる盆地だけか。義治にしては考えたな」

(現代)

氏郷に提供してもらった日野の地図を見て唸る。

互い違いに山林が入り乱れる地形はこの上なく騎兵と相性が悪く、軍の進出も分散的にならざるを得ない。

「まずは、南側の二番目に広い盆地を取ることからだな。拠点を作らないことには始まらない。はあ、力攻めはできればしたくないんだがなあ」

あくまでこれからの一連の戦は内乱である。

自軍もそうだが、義治派の兵の損害も可能な限り抑えたい。兵の損失、それ即ち国力の減退に直結するのだから。

決断した俺はすぐに軍を進めた。

主街道と脇街道の双方を使った電撃戦である。義治の防衛の重心からは離れているため、氏郷と紀之介は一日で南の盆地を確保した。「義治の本命は日野口ってことか。……ったく、本当に厄介な所に陣取りやがって……」

二人の戦果を賞した後、俺は齒噛みする。

南側の盆地の攻略の間、日野側の盆地から援軍が来ることはなかった。どうやら義治はこの天然の要害に完全に籠るつもりでいるらしい。

一応、蒲生家が義治の後方を扼する勢力でいるが、北にはそれより強大な浅井が義治支援に回っている。

浅井に後詰めされたらいよいよ兵力の差が明らかになり、甚大な被害が出る。そうになると、最早誰が勝とうが六角は斜陽の運命を辿るだろう。それだけは避けたい。

「そうになると、いよいよ時間がないな……。はてさて、どうしたものか……」

顎に手をやり、思考を巡らす。

堅い敵を速やかに討つ。それも後の浅井に備えるために寡兵で。

うん、いつもながらひでえ展開であった。

*

「ふはは、さしもの高村もこの地の前には苦しまざるを得ない」

南の盆地で停滞する高村を見て、義治は高らかに笑った。

高村の主力は騎馬隊。それを無効化する森林地帯で守る。凡庸だが、流石は国主。地の利を活かした見事な作戦と言えるだろう。

高村側は蒲生氏郷と大谷紀之介が必死に攻め立てるが、隘路を盾に寄せ付けられないでいる。無益な力攻めを繰り返すばかりで、高村の軍は疲弊していくばかりであった。

「さて、いつ高村は音を上げるか……」

義治は愉快でたまらなかつた。

いつも軍事において自分を上回ってくる高村がなす術もなく追いつ返されているのである。

「義定も見る目がないものよな。あの男について行ったが故に斯様な目に遭う。俺に抱かれた方が幸せだろう」

一応、義治と義定は兄と妹である。

しかし、互いの感情は違う。義定は自身との境遇の違いから義治を家族として同一視出来ず、義治はあろうことか義定のことを情欲の対象として見ていた。

（俺にとつて最も不幸なことは惚れた女が妹であったことよ。何故、天はあれほど美しい女人を血の繋がった妹にしてしまったのか……）

義定の美貌は冠絶していた。それは六角家中の中では周知の事実である。

お市こと浅井長政は顔の造形こそは匹敵するが、実の兄すら惑うほどの色香はなかつた。

しかし、義定は違う。

生母の双葉が持っていた美貌と胸に秘した父を討つという復讐心、擲揄うことが好きでフットワークが軽い性格の3つが交わった結果、年齢にしては異様に大人びた魔性の美少女に仕上がっていた。

そんなのが身内にいたら多感な思春期の義治の性癖はねじ曲がるに決まっている。次第に義治は女は義定以外に情欲を持てなくなり、美少年で溜まつたりビドーを解放するようになった。

「高村を討ち、義定をこの手に取り戻す。そして、俺はこの近江の王に

なるのだ」

義定がその場にいたら「お兄ちゃん、何を恥ずかしい勘違いをしているの？」と冷や水をぶっかけられるような決意だったが、義治は本気だった。

第21話 腹芸

「流石にきついな……」

山向こうを眺めて俺はひとりごちた。

南側の盆地を落としてから4日間、俺は力攻めを続けた。

しかし、隘路を抜けられそうな気配はない。

さりとて、兵を抽出し山越えて側面を狙ってもすぐに捕捉されて片付けられてしまっていた。

「ここまで苦戦するなんて、新十郎にしては珍しいじゃん」

「それだけ向こうが本気つてことだな」

義定の軽口に対応する余裕はまだある。とはいえ長政の進軍が思ったより遅滞しているのが、唯一の救いだった。

「もう少しこつちに兵力があるなら、山城を完全に封鎖して間断なく攻めかかって疲弊させることができるが厳しいな」

少しでも兵力を増やすべく、日野城の承禎様たちに出馬依頼を出したが、浅井を理由に断られた。

つまりは現有の戦力だけで地の利も兵数も上回る相手に立ち向かわなくてはならないのである。

「うん、やはり無理だな。あそこで戦うのは諦めるか」

義定が驚いたような目で見てるのが、何日か考えてもダメなものはダメである。ここで力攻めをして無為に兵を散らすよりかは、逃げて後日を期した方が良さそうな臭いがしたのだ。

「悔しいが、ここで戦っては義治に勝てない。石部城に戻って立て直そうか。殿は義定、お前に任せる」

義定の目を見て告げる。露骨に嫌な顔をされたが、致し方なかった。

「私？」

「弓なら距離を取って逃げれるからな。心苦しいが……、わかってくれ」

必死に懇願する。義定しか適役がないのだ、そう説いた。

「分かったよ、殿をやる。新十郎はさつきと逃げて。もうただの一武将じゃない、大事な私たちの大将なんだから。……それに、どうせ策の一つでもあるんでしょ？」

「まあ策はある。それにはめられるようにこつそり手を回したが、もうこつちから出来ることは退くことしかない。後は義治次第だな」

「なんだ、あるんじゃない。だったら早く言つてよ」

やはり義定は無駄に察しがいい。味方にすら隠しておくつもりだった策の存在を感知されていた。

「悪いな。本当に退くつもりじゃないと、この策は使えん。だから、腹芸が出来るお前が引き受けてくれて本当に助かったよ」

義定に感謝の意を伝えて撤兵を開始する。紀之介や山岡殿、氏郷も少し遅れて続いた。

馬腹を蹴って俺は西南に進む。

後ろは振り返らない。なぜならば、後方の義定に絶対の信頼を置いていたからだ。

「そういえば、殿。何故に義定殿をしんがりにしたのですか？ 他にも適任がいたのでは？」

紀之介に問われる。まあ、余人には不思議な人事ではあるだろう。

義定自身は弱くないが、隊は近接戦闘にあまり向いていない。

「武勇ならば氏郷で充分だ。あいつの家臣団は騎兵を除いては家中最強の練度を誇る。頭だつて悪くなく、むしろ優秀。雑に使っても強いのが彼女だ。……だが、その強みを打ち消すほどに、義定は巧い。弓だとか騎兵だとか兵科以外のことを考えても、彼女を置くのが最善だった」

紀之介と話しているうちに、後方から狼煙が上がる。

それを見て、俺は勝利を確信した。

やはり、あいつやりやがったな。本当、無駄に頼もしくて困る。

「紀之介。軍を反転させるぞ。義治を討つ」

戸惑う紀之介を尻目に俺は軍を回頭させる。

ハナから南側の盆地に留まって力攻めで義治のいる日野側の盆地

を抜くつもりはなかった。

何度か力攻めはしたが、本気じゃない。優勢だと向こうに思わせて腰を軽くさせるためではない。

敵が難所にいるならば、釣り出せばいいだけの話だ。

(まあ、その釣り出しに苦労したわけだが……)

義治は生真面目なほど、盆地を固守した。

しかし、それも相手がいなくなつては意味がない。さらに言えばあの盆地は難所だが、本来の目的地の日野城からは数キロは離れており戦術的にはともかく戦略的に価値はなかった。

「このために、俺は退いてみせたんだ。あんまりやりたくはなかったが、敵を釣りたいなら敵のお望み通りに動いてやればいい。……さて、義治。そろそろ優勢を返してもらおうぞ」

采配を振るい、さらに行軍の速度を早める。

義定と伏兵が義治を止めている間に片をつける腹だ。

対外戦ならともかく、これは内戦ではない。

こんなくだらない戦いは一刻も早く終わらせなくてはならなかった。

*

時は少し遡る。

「六角高村、退却です！」

「そうか、重畳重畳」

六角義治はその報せを本陣で満面の笑みを浮かべて聞いていた。

「松永久秀が瀬田に侵攻したようだし、いよいよ高村も終わりよ。殿は義定か、決して傷つけるなよ。俺の大事な妹だからな」

三好の再起の報も後押しし、義治は八千の兵を率いて進軍を開始した。

しんがりの義定は迎え討ったが、さすがに分が悪い数でじりじり後退していく。

かくして、義治軍は高村軍が詰めていた南側の盆地に到達した。

しかし、そこに待ち受けていたのは矢の雨だった。

「なつ、計られたか……！」

周囲の森から弓兵が出てきて矢を射かけてくる。そして、退却していたはずの高村もまた氏郷を率いて盆地内に強襲を仕掛けてきた。「場所は悪くなかったよ、義治。だが、お前は俺という将を誤解していた」

采配を振るい、麾下の兵を動かす。

騎兵を動かせないこともあつてか今回の高村はいやに周到だった。致命的にならない程度の損害になるように調整した力攻めで、義治を油断させ、釣り出す。それだけでは不足だったため、山岡景隆に命じて『松永久秀が瀬田を攻める』という虚報まで流させる。

そして、動いた機に義定の弓で盆地に縫い付けて、蒲生隊で挟む。

「確かに俺は畿内随一の騎兵だとは思うが、それだけじゃないぞ」

言つたのち、高村はダメ押しとばかりに山中に伏せさせていた中村一氏の千を日野側の盆地との結節点に出現させて完全に南側の盆地の包囲を完了させた。

もともと逃げ場が限られる盆地の中で矢で射竦められ、包囲された義治軍は最早なすすべもない。

多くの被害を出して、義治は観音寺に向かつて敗走した。

「俺が欲した武将としての才も惚れた女も須くあいつの手にある……」

！ 何故、天は俺と同じ時代に高村を産んだのか——ッ！」

天を睨みつけながら、義治は慟哭する。

義治と高村。

六角の次代を賭けた日野西の戦いは六角高村が勝利したのである。

*

「よし、幸いこの地は堅い。義治に倣ってここを固守すれば、浅井との戦いは多少楽になるだろう」

戦後、高村は日野側の盆地を占領して逆茂木や櫓を建てるなど、要塞化を進めた。

その最中に、浅井軍はようやくやってきたのである。

第22話 貴公子

完全に出遅れた。

私は、高村の陣容を見て焦燥を募らせていた。

箕作城は落とし、日野の蒲生家は城こそ落とさなかつたものの、野戦でその兵力を削いだ。

承禎と高村の連絡を断ち、横槍を排した上で万全の状態で連戦後の高村と戦い、討つ。

その甘い目論見は音を立てて崩れていった。

「流石は六角高村ですね。釣り出して囲み、討つ。この戦運びをこのような明らかな守勢有利の地で成すとは……」

高虎もまた伝え聞いた高村の戦ぶりを知って身震いをしていた。

「さて、お二方。敵を褒めるのはよろしいですが、どう相對するか決めねば、始まりますまい。軍議を、お願い致しまする」

直経に促されて、冷静に考える。

そうだ、次に高村のその機略は私たちに向けられるのだ。

浅井は一万、高村は六千。歴然とした兵力差があるが、高村相手にその程度では優位に立てないことは明らかだ。

策では勝てない、ならばやはり勇で挑むしかないのだろう。

「直経、軍議は不要だ。一気呵成に高村を攻める。堅陣が完成する前に崩す。相手は連戦で疲れているし、日野からの援軍はない。今こそが我らの好機なのだ」

直経にすぐに出陣の準備をさせ、敵陣を視界に収める。

……卑怯かもしれないが、許せ新十郎。それが、私たちの選んだ道だ。

胸に微かに残る罪悪感。

私はそれを踏みしだいて、馬を駆けさせた。

*

長政の攻勢は苛烈を極めていた。

義治が残した陣地を活かして守ってはいるが、その勢いは凄まじいものがある。こつちが作っている陣が完成すれば多少はマシになりそうだが、流石にそれは長政は許さなかった。

「やっぱり長政の突破力は狂ってやがるな……」

櫓の上から軍勢の先頭を駆ける長政を見下ろす。

武勇に優れてはいるが、俺には及ばない。しかし、兵の鼓舞となると話が違う。

「こうやって遠くから見てもあれが長政だとわかる。近くにいる兵には言うに及ばず。その存在感は俺が持ち得ないものだ」

長政は元が絶世の美少女だが、幼少期を俺以外には男として通せる中性さがある。それは今も健在で胸さえなんとか誤魔化せれば、絶世の美少年に化ける。

そんな美少年が最前線で敵を討つその姿は将兵にとってはずいぶん鮮烈に、頼もしく見えるだろう。先頭でのあまりに見事すぎる武者ぶりです。でいつしか長政は『江北の貴公子』と渾名されるようになっていた。

「山岡殿、前線の状態はどうなってる?」

「浅井軍が圧してはいますが、完全には押し切るほどではないですね」「直ちに崩壊するほどではない。かといって被害は多いってことか。……嫌な流れだ。押し止めなくてはならないか」

呟いて手元の地図に目を落とす。

長政は川を背にして日野側の盆地を攻め立てているような形だ。

その川を遡っていくと日野側の盆地の東部から流れ出でているのがわかる。盆地ほど広くはないが、ある程度開けていて回廊になっていた。

「敵の勢いを落とすならば、やはり力の集中を妨げるのが楽だ。ここは中入りだな」

「しかし、義治の時は不発に終わりました。あまり得策とはいえないのでは?」

「あれは半端な奴を使った俺が悪い。あと山越えだから騎馬を使わなかったこともある。だから、今回は俺自身が騎馬で往く」

最精銳を楔にして崩す。それで乱して時間を稼ぎ、陣を完成させ

る。そうなれば、ややこちら側に有利な持久戦に戦況を変えられるだろう。

「あと、山岡殿。長政の後方の国人たちの調略も準備しておいてくれ。日野の兵が蹴散らされている以上、どうにもこの近辺だけでは決め手に欠くからな」

言うど、俺はすぐに隊の準備を始める。

策単体としては平凡なものだからいずれ長政なら気づくだろう。ならば、少しでも先んじた方がいいような気がした。

*

「……来たな……！」

第六感と言うべきなのだろうか。

微かに東方から地鳴りのような音が近づいているのが聞き取れた。おそらく高村が動き出したのだろう。

あいつはこのまま私の優勢を座して見ている人間ではない。なんらかの方法で手を入れてくるのは予想できたことだった。

「磯野隊と宮部隊を左方に回せ。敵の横撃を許してはならない」

対応として磯野員昌と宮部継潤を起用し守らせる。

彼らもかなりの勇将だ。隙を突かれたならばともかく、あらかじめ告知されている相手に不覚を取るほど安い武将ではない。

(……それでも、不安なのはあいつだからかな)

野良田では私が名を上げたが、その後の畿内での戦い……特に石山崩れは高村の名声を確認たるものにした。

今の高村は多少の劣勢ならば力づくでひっくり返して来そうな、そんな怖さを感じる。

「やれやれ、いささか水を空けられてしまったようだが、私とてこのままでいるつもりはないさ」

意識を戦に戻して指揮を取る。

ともあれ高村が手を入れるほど戦況はこちらに傾いている。速戦即決を志した方が良さだろう。

(近江の南北を代表する若き将が再度激突する。……まるで東国の武田と上杉のようだ。かつては同じ学び舎で過ごした幼なじみだとい

うのにな……)

運命の意地悪を思わずにはいられない。もし、どちらかが妥協していれば、近江は統一され、三好にも負けない天下取りの有力候補となれただろうに。

しかし、夢想は夢想でしかなく、現実を乗り越えられるものではない。

仕方なく、私は左方の雄敵を睨みつけた。

第23話 暴れ馬

どうやら俺の中入りは戦況を加速させたらしい。

浅井軍の横腹を突き、勢いを抑えようとする俺と、勢いを削り落とされる前に日野側の盆地に入ろうと激しい攻勢を加える長政とそれを受け止める高村軍。

(ちっ、被害は明らかに増えてるな。長政め、勝つにしろ負けるにしろ六角の勢力を徹底的に削るつもりだな)

悪態をつきながら、磯野員昌の首を刎ねる。宮部継潤はすでに敗退し、戦場の北側に逃亡していた。

「どうやら、あの2人では止められなかったようですね……!」

そのまま浅井に横撃を加えようとしたところ、新手がその行手を遮る。

隊列の先頭に立つ姫武将の姿には見覚えがあった。

「野良田での餅の恩。忘れたわけではございません。しかし、今は戦さ場なれば。六角高村殿、その首頂戴致す」

すらりとした長身に腰まで伸びる栗毛と黒が混じった長い髪。

その冠絶した美貌と存在感はなかなか忘れられるものじゃない。

「あの夜の姫武将か……!」

俺は囚われている彼女しか知らなかった。しかし、現在目の前に立ちほだかる彼女はあまりに勇壮だった。

「私の名は藤堂与右衛門高虎! 敵に囚われた哀れな姫武将としてではなく、貴方を破った将としてその名を刻ませて頂く!」

その名を聞いて俺は目を見開いた。

藤堂高虎といえば、主君を変え続けて最後は伊勢伊賀二ヶ国の大名にまで成り上がった武将だ。その経歴をざっと見るに槍働きに築城、謀でもなんでもござれの万能武将であることがわかる。

いざ相手するとなると、ここまで恐ろしい存在は珍しいかもしれない。

「すでに知ってはいるだろうが、もう一度名乗る。六角高村！ 江南の暴れ馬とは俺のことよッ！」

名乗りを上げると同時に馳違う。

一合、二合、三合。何合か馳違いが続いたのち、俺たちは距離を取った。

……姫武将にしては膂力がある方だな。やはり性差よりかは体格がものを言うのだろうか。長政よりは上だ。

手応えを反芻しながら、高虎の方を見やる。

相手の方は多少肩で息をしているが、まだ余裕はありそうだ。

(これは厄介な相手だな。速く沈めるか)

腹を決めた俺は猛然と高虎に向かい、一太刀を繰り出す。それは受け止められたが、これで決められるとは思っていない。

ガラ空きになった高虎の腹に二本目の……定頼様の太刀を抜き放って斬り付ける。

「うっ……」

これにはたまらず高虎もよろけ、槍を握る力が緩んだ。

その隙を見逃すほど、甘くない。

返す刀でもう一度、腹を斬る。

フリーになった一本目の太刀で袈裟懸けに斬り下ろし、二本目を納刀。息を吐かせぬ間に空いた左手で高虎に掴みかかり、馬上から落としました。

「なっ……！」

「卑怯で悪いな。だが、お前ほどの剛の者と長く遊んでいられる時間はないんだ。討ち取るところまでいくのは手間だからまた捕らえさせてもらおう」

そのまま押さえつける。じたばたと高虎は暴れたが、それも太腿に太刀を突き刺して無力化させた。

一口に捕らえるといっても、こいつ相手には中々の難事だ。正直、野良田の時は何で捕まったんだろう、と思うぐらいには手強い。

だから、俺は執拗に搦手を使わざるを得なかった。

「くっ、二度も縄目の恥など受けたくはない……！ 殺せ……！」

「嫌だよ。手間だし、それに助けた奴を殺すなんて、まるで俺が馬鹿みたいじゃねえか」

屈辱に震える高虎を完全に制圧し、縄でぐるぐる巻きにして幕営に放り込む。死なれたら困るから治療を命じておいた。

ともあれ、ようやく浅井の側面までたどり着いた。

長政が苛烈な攻勢を仕掛けている分、脇の警戒は緩い。

少し突っ込んで乗り崩したら、瞬く間に隊列は意味を為さなくなつた。

「ぎゃあ、六角高村だ！ 逃げろーッ！」

一部の兵は逃げようとしたが、あいにく背後は川に阻まれており次々と溺死するか討たれてゆく。

「これで浅井軍は崩れましたな。……それで、どうされるのです？」

「ここで勝敗をつけたら一番楽だが、八百しか率いてないから深追いは厳禁だ。帰るぞ」

適度に浅井軍を崩し、俺たちは本陣に帰還した。

完全に大勢を決するとまではいかないが、さすがに浅井側も事態の収拾を図る必要はあるだろう。

少なくとも、もう初めのようにがむしゃらには攻めてこれないはずだ。

*

高村の読み通り、中入り後の浅井の動きは穏やかになった。

これは藤堂高虎というブレーンが敵の手に落ちたこと。横腹を見せたら、三軍をもつても防げない高村による強襲が行われるのではなにかという危惧が生じたことが理由に挙げられる。

また、高村軍も陣を完成させたため、浅井軍をより能率的に退けられるようになっていた。

要するに、戦況は完全に膠着状況に陥ったのである。

そうになると、不利になるのは浅井方だった。

「目賀田殿はどうやら、高村方に走ったようです。三雲殿も同様でした」

「そうか……」

国人の寝返りに長政は頭を抱える。

(義治と義賢には人望がなかった。だから、他国の私にも付く豪族や国人は一定数いた。だが、流石に高村相手には分が悪いか……)

いくら勢力が増したとはいえ、南近江の国人や豪族にとつて長政は他国の人間でしかない。さらにいえば、武名においても畿内全体に名が売れている高村に劣る。

時間が経つにつれて、当初寝返ってきた国人や豪族が高村方に鞍替えをし始めていた。

「このままですと、退路を塞がれかねない勢いですぞ。……御決断を」
神妙な顔で直経が進言する。

北近江から駆けてきて数週間。駆けている間はまぎれていた疲労が膠着した間に噴出し始めていた。

(そろそろ、引き際かもしれないな……)

高虎が囚われたと聞いた時、嫌な予感はしていた。

その後、隊列を崩されて統制が乱れた。その再編に時間がかかり、今に至る。

(おそらく、高村はこの絵図を初めから描いていたのかもしれない) 力付くで覆すだけの兵力はまだある。まだ完全に負けたとは言えない。
難しい。

しかし、それをやっては浅井も六角ももう立ち直れなくなるだろう。そのことを長政は理解していた。

感情と利害、その二つが長政の中でせめぎ合う。

そして、苦渋の果てに長政は決断する。

「高村に和議を申し込む。……戦はもう終わりだ」

すぐに長政から乞う形で和睦の使者が高村に送られる。

その使者が持ってきた書状を見て高村は「やっぱり、長政はわかっているな」と破顔した。

第24話 口約束

和議のために長政と日野城の近くで会談することになった。会談自体は早く終わり、しばし近所をうろつく。いささか不用心なのはわかっているが、其れでも一人になれる時間が欲しかった。

「三好を追い返し、義治も長政も撃退した。後は観音寺城を落とすだけ。ここまで来るのにだいぶかかったな……」

ふっと息を吐く。

俺の肩には重荷が乗っている。兵の命だったり、定頼様から託された思いだとか色々だ。

その荷を背負い慣れた気ではいたが、直近の三連戦では違った。

今までは一武将として戦ってきたが、今回は当主として振る舞ったからか、普段から背負っている荷がさらに重く感じたのだ。

(この重さを定頼様や義賢様、さらには長政も背負っていたんだな……)

俺は改めて当主の責任の重さを知った。だからこそ、義治の軽挙妄動が許せない。

「さて、一服したところだし帰るとするかね」

そう区切りをつけて来た道に戻ろうとして振り返る。

しかし、俺の足は動くことはなかった。

「高村、いや新十郎。奇遇だな」

なぜならば、そこに長政……いや、お市がいたからだ。

「女装か、長政。精が出るな」

「わかっているくせに。悪趣味だな、お前は」

「悪い、お市。……まさか、もう一度その姿を見られるとは思っていなかったからな。つい驚いてしまった」

かつて見慣れた小袖姿。

しかし、一年弱も過ぎれば人は変わる。特に中学生ぐらいの年頃ならば尚更だ。

もともとお市は大人びた美貌の持ち主だが、この一年でより気品と艶やかさも増した。胸も別れた時と比べるとかなり大きくなっている。

(そういえば、俺はこの娘とキスをしたんだよな……)

ふと、あの夜の唇の感触を思い出す。

そうになると、もう駄目だった。あまりに照れ臭くてお市の顔をまともに見る事が出来ない。

「なあ、新十郎。あの夜を後悔しているか？」

そんな俺の状態を知ってか知らずかお市が問いかけてくる。

「……後悔なら何度でもした。だが、お前を選んだとて俺は後悔してただろうよ。義定や氏郷だって俺の家族だからな……」

「……だろうな。すまない、愚問だったな。で、これからはどうする？」

浅井と六角、両家の和睦は成った。お前が当主ならば、私たちはきつと共存できるはずだ」

お市のそれは魅力的だが、いささか現実味がなかった。それを成すにしているあまりに六角と浅井は血を流し過ぎたように思う。

「悪くないが、おそらく互いの家臣団が納得しないだろうな。特に浅井は六角の下風に立つのが嫌で独立したわけだし。いっそのこと、俺とお前で結婚でもするか？ 正直イスパニアみたいに対等な同君連合の形まで持っていけないと恒久的な同盟は結べないと思う」

「……そうできたらどれほど良かったことか。世間的に浅井長政は男だからな」

冗談交じりの問いに、お市は寂しげな笑みで返してきた。

わかっていた。野良田の戦いは俺たちの決裂を明らかにしたと同時に、乱世に『江北の貴公子・浅井長政』を刻み込んでしまったことを。

浅井の姫君としてのお市はこの乱世において表舞台に立つことを許されてはいない。

「まあ、出来もしないことを話していても無駄か。それで、新十郎。当主になったらどうするつもりだ？」

気を取り直してお市が再度問いかけてくる。これに関しては答え

は既に決めていた。

「俺は伊勢を取りに行く。中央に関わるのは正直言ってこりごりだからな。んで、時期を見計らって天下人の側について甘い汁を啜らせてもらう。天下はいらねえ。六角が栄えたまま生き長らえればそれでいい」

天下を取るなんて覇業は到底成せる気がしない。

最終目標が家名存続ならば、無理をして背伸びをするよりはそれが成せる人物にすりよって数世代分の存続を保証してもらう方が効率がいいような気がするのだ。

「私は美濃を取るつもりだ。国力を増して天下を取る準備を整える」

一方、お市は天下を取るつもりでいるらしい。だが、いささか見通しが甘い気がしてならない。俺は思わず口を挟んでいた。

「それはいいが、北近江と美濃だけでは天下を取るには足りないぞ。三好は東瀬戸内の利権を持っていた。本気で天下を取るならば最低限それに匹敵する経済圏を保有しなければならぬ」

三好が持っていた東瀬戸内は西国の物流の大動脈と言っている。自由商業都市の堺をも有し、足利義満から細川時代までは大規模な遣明船団も往来するほどだ。

天下を獲るといふ大事業は、それだけの富の集積がなくては絵に描いた餅にしかかなりえない。俺はそう考えている。

「ならば、近江、美濃、尾張、三河、伊勢、この五国を手に入れて伊勢湾と琵琶湖、二つの経済圏を掌握する。それならば、問題はないだろう?」

「そこまでやれば問題はない。できるかどうかは知らないがな」

長政の言に頷いて見せる。

事実、その五国を掌握した信長が織田政権を築いている。畿内の東の物流の利を元手に信長は軍を整える費用を得た。まとめさえすれば洛東の五ヶ国はそれだけのポテンシャルを秘めている。

「そうか、新十郎のお墨付きなら間違い無いな。礼として五国を取った暁には、部下として重用してやろうではないか」

「その五国を取れたなら、まあ天下人と言って差し支えないか。俺の

目的にも沿うからお前に従ってやるよ。ただ……」
「ただ？」

「俺が小谷城を落とすようなことがあったら天下は諦めて、俺に従え。こっちは家の命運を賭けてるんだ。お前もそれぐらい身体を張ってくれないと公平じゃない」

言ってる側ではあるが、思わず苦笑いしてしまう。

売り言葉に買い言葉で、まるで子供の言い合いのようなやりとりだ。だが、不思議とそれが俺たちにはしっくりきているような気がしていた。

「約束しよう。到底、文書に残せるようなものではない口約束だがな」

「それでいい。所詮は私事だ。表に出して家臣達を振り回すのは互いに忍びないだろう？」

俺が問いかけるとお市は……長政は笑った。

まさか乗ってくるとは思わなかったが、おかげでやるべきことはつきりしたように思う。

(伊勢を取り、国力を増したのちに小谷城を獲る。和睦を結んでいるから表立って長政の邪魔はしないが、国力を増やされると厄介だな……)

言い換えると、これは洛東を舞台にした俺と長政の陣取りゲームだ。

相手の国力増強を阻害し、自身の国力を増やす。織田信奈というプレーヤーにも気をつけなくてはならない。

(これは、なかなか骨が折れそうだな)

俺は内心でひとりごちる。

今回の三連戦は六角の国力を大いに落とした。終盤は調略で長政に着いた豪族をこちらに引き戻したが、それでも観音寺騒動以前とはほど遠い。

今や六角と浅井の国力はかなり肉薄してしまっていた。立ち回り次第でいくらでも変わるだろう。

洛東の情勢は新たな局面へと向かっていた。

*

陽が傾き始めた頃に俺とお市は別れた。

もつと話していたかったが、ここまでらしい。名残惜しさが募るがこれ以上は義定たちに心配されてしまう。

「……長かったね、新十郎」

陣では義定が待ち構えている。かなり待ちくたびれたのか、やや眠気眼になっていた。

「悪い、道に迷ってた」

後ろめたいが、そう言つてごまかす。まさか長政と話するのが楽しくて長引いたとは言えない。

義定はしばし訝しげに見つめてきた後、ふっと息を吐いた。

「まあ、いいや。観音寺城の調略は終わったよ。もう私たちが着いたら城門を開くつて確約ももらつてる」

観音寺城は日本五大山城に数えられるほどの巨城だ。

実はしよつちゆう落ちてはいるが、それでも生半可なことでは落とせない規模と険しさを誇り、俺たちにとつては最後の壁だった。

それが、一兵も損なわずに済むのは非常に大きい。

「ありがとう、義定。本当によくやつてくれたな！」

嬉しさのあまり、義定の手を取る。

「……喜ぶのはいいいけどさ、ちよつと近すぎない？」

義定が身をよじらせて何事かを呟いているが、何を言ってるかは聞こえなかった。

ともあれ、観音寺騒動から始まる長い戦いにようやく一区切りがっこうとしている。これでようやく一息つける。

肩の荷が下りたような気分だった。

第25話 因果

義定の調略通り、観音寺城は俺たちの軍を確認すると無血開城した。

城内に義治の姿はない。おそらく調略に気づいて脱出したのだろう。

「ようやく帰ってこれたか……」

思えば京に出陣して以来、かれこれ半年は帰っていない。懐かしさを感じるのも無理はない。

帰ってきて初めにしたことは、人事の刷新だった。

義治方や長政についていた国人や豪族の領地を削減し、俺たちの側についていた者に振り分ける。

ただまあ、思ったよりも多くの豪族が長政についていたため、彼らの力はかなり落ちた。例外で言えば、終始承禎様についていた蒲生家ぐらいか。六角六宿老は蒲生を除いて完全に没落した形となる。

あと、今までは流動的な動きをしていた山岡殿が完全に六角の被官になった。これは別に強い訳ではないが、山岡殿自ら「貴方の影となつて働きたく存じます」と臣下の礼を取ってきたのだ。

理由を聞いたら「謀略で閉塞した畿内の情勢を武力でねじ伏せた貴方には逆らえない」と返されて、俺は思わず苦笑いを浮かべてしまった。

「さて、人事配置は大まかは終わったけど承禎様をどうするかだな……」

帰ってきてすぐの評定で承禎様の扱いだけは決まらなかった。

どうにも、政治に口を出したくて仕方がないらしい。これは俺の能力云々ではなく、承禎様の性分に依るところが大きいのだろう。

俺としてはもう承禎様に完全に隠居してもらって欲しい。

縁戚関係を含めて考えると承禎様の影響力は凄まじく、国内の求心力はないものの本猫寺とのパイプがあり、さらに手を伸ばせば武田にすらその手は届く。ここまで顔が広いと正直、義治が排除したくなる

のもわかる気がする。

「ただ、追放してしまえばこちらの世間体が悪くなる。すでに家督を武力で奪っているから今更感があるが、それでも必要以上に悪名を広める意味もないよな……」

評定を終わらせ、屋敷に戻って考えても妙案は出てこない。力づくで押し込めて蟄居させようとしたら承禎様は抵抗するだろう。それではまた観音寺の二の舞になる。

「どうしたの、新十郎？」

うんうん部屋で唸っていると、義定が部屋に訪れて来ていた。

「いやなに、承禎様の扱いに困ってるんだよ。無駄に国外への影響力があるからな、あの人。無闇に扱うと外交に支障をきたす」

「なら、わたしに任せてよ」

義定が言う。だが、承禎様を仇としている義定のことだから多分穩便に済む予感がしない。

「一応、聞いてごうか」

「普通にお酒と女の子を与えて満足させるだけだよ？ 父上は目先のことしか考えてないから、毎日が楽しければそのまま何も考えなくなるんじゃないかな？」

義定の案は思ったよりも穩便だったが、えげつないものだった。

事実上廢人にするって言ってるようなものである。下手したら死ぬ方が救いがあるかもしれない。

「……まあ、追放したり処刑するよりかはマシか。わかった、承禎様に関してはお前に任せるよ」

とりあえず承禎様に関してはこれで一区切りをつけることにする。

国内の回復に、対三好の外交。あと織田がちよつと北伊勢にちよつかいをかけてきてるから、そちらの対応もしなくてはならない。

やるべきことが多すぎて、今更家中問題に関わりたくはなかった。

*

高村が六角家の当主になって2ヶ月が過ぎた頃、新しく観音寺城の本丸の近くに一軒の館が建てられていた。

その館の落成式を終えた高村はぽつりと呟いた。

「いや、義定に任せるとは言ったけどさあ……。これはやりすぎじゃね?」

館の名前は快樂亭。

割と大金を注ぎ込み、六角の持ちうる文化を徹底的に注ぎ込んだ大豪邸である。

館の目玉は能登の大絵師・長谷川等伯を2ヶ月丸々逗留させて描かせた5枚の障壁画でそれぞれ『天山汗血馬図』、『湖底大鯰図』、『六角姫武将立姿像』、『深閑竹林図』、『匂梅図』と名付けられていた。

「いやー、あの欲深い父上を満足させるつてなるとこれぐらいじゃないとダメかなって。一応、父上の隠居だけじゃなくて外交の使者の応対とかできるようにしたから許して?」

可愛らしげに義定が言うが、高村のため息は尽きない。

高村は否定的だが、快樂亭は高村の武勇と共に六角の誇る威信材として機能していくことになる。

特に長谷川等伯が描いた5枚の障壁画は『六角の秘宝』として後世に伝えられていく。

そのことを高村は未だ知らない。

*

「うむ、女を抱く生活も悪くはないが、さすがに飽きてきたな……」

快樂亭が建てられてから一ヶ月。

承禎は寝台の上でひとりごちた。

朝に女を2人抱き、昼は酒を呑んで眠り、夜は5人の女を抱く。

快樂亭ができてからはそんな爛れたルーティンが構築されていた。

だが、人間は欲深いものでその酒池肉林にも浸り続ければ、満足出来なくなる。承禎もその例には漏れなかった。

「最近の女も悪くはないのだがなあ……。今まで抱いてきた女に比べると一段劣るか。阿古も大谷の後家が恋しくなる。いや、それでもまだ足りぬな」

呟いて、酒に手を伸ばす。あまりに飽いたためか、今や酒に酔わないと意図的に勃たせることができない。

「嗚呼、双葉のような女が今一度現れてくれれば、この無聊は慰められ

るやもしれん。求め続けて10年経つが、未だに逢えてはおらんがな」

数多の女を抱いてきたが、双葉ほど承禎を執着させた女はいない。そのあまりに優れた美貌と退廃的な雰囲気は傾国の美女といって差し支えなかった。

しかし、彼女は承禎の腰の上で果てた。

「さて、そろそろ次の女の番か……。もう少し酒を足しとくか」
気怠げに酒をあおる承禎。

しかし、その女の姿を見てその器を取り落とした。

年の頃は15、6だろうか。長い栗色の髪にあどけなくも精緻に整った顔立ち。彼女は物憂げな眼差しを承禎に向けていた。

(なんとということだ。まるで若かりし頃の双葉に瓜二つではないか……！)

イチモツに熱が滾るのを感じる。

この少女を犯して鳴かせと魂が叫ぶ。

酒に酔っていたこともあるのだろう。

熱に浮かされたように、承禎は彼女を組み敷くべく飛びかかった。

「……なぬ？」

しかし、組み敷かれていたのは承禎の方だった。

力点を巧みに押さえつけられ、力が出ない。

「ようやく、ですね。父上」

少女が耳元でささやくと同時に心の臓に脇差を突き立てられる。

途方もない激痛が承禎の身体を甦る。この痛みのおかげでやっと

承禎は状況を理解した。

「義定か……」

双葉が唯一この世に残した名残。そして、自身の罪の象徴、それが六角次郎義定だった。

「……そうか、お前にならば殺されても文句は言えまい……。なあ、義定。少しいいか……」

残された力で承禎は義定の頬に手を伸ばし、撫でる。その乾いた手

触りに義定は身動きするが、振り払うことはしない。

「お前はわしのことを嫌っておつたが、わしはお前を愛していたぞ。双葉の娘ということもあるが、何よりわしの娘だからな……。そのことだけは、心に留めておいてくれ……。しかし、それにしても……」
承禎は目を細める。それはまるで太陽でも見ているかのようにだった。

「恐ろしいほど美しく育ったものよな……」

ここまで口にしたところで承禎の手がだらりと落ちる。

不思議と義定は確かめずとも自らの父が逝ったことを理解していた。

「ありがとうございます。父上。そして、さようなら」

一礼して、義定は去る。

振り返ることはなかった。

*

義定が快樂亭に向かった。

そう聞いた俺は胸騒ぎが止まず、本丸に駆け出していた。

(無事でいてくれよ……!)

義定の個人の武勇は弱くはないが、馬術の達人でもある承禎様を上回るものではない。返り討ちにされることだって十分考えられた。

夜の山道を駆けることしばし、本丸で彼女は立っていた。

「あ、新十郎。来たんだね」

満月の下で義定は笑う。艶やかな小袖にはべつたりと血がついている。

その姿はさながら幽鬼のようで、浮世離れしていた。

「無事か?」

「血を見て言ってるなら大丈夫。これは返り血だから。わたし自身はどこも傷ついていないよ」

「……そうか。なら、終わったんだな」

俺が問いかけると、義定はうなずいた。

ついに今晚、彼女の10年にわたる仇討ちは終わった。

俺としては喜ぶべきかは迷うところだ。

承禎様は義定やお市、氏郷達にとっては明確に敵だった。しかし、俺に限ってはそうではない。

承禎様は普通に俺の力を評価し、用いてくれた恩人という側面がある。

「新十郎の言う通り仇討ちは終わったよ。……でも、それに値する報いをわたしは受けなくてはならない」

「報い？」

「うん。新十郎、わたしを殺して。父を討った不孝の娘として、わたしを処罰して」

俺は義定の言っている意味がわからず、立ち竦む。その様子を見た義定はさらに続けた。

「新十郎の評判を落としたくないんだよ。邪魔だから父上を追い落とす。そんな風に諸国に伝わったら、新十郎は武力はあるけど人品は義治と同じだと思われちゃう。でも全ての悪事をわたしに載せて葬れば、それは避けられる」

義定が言っていることはわかる。この悪評が伝われば、外交でも家臣の掌握にも不利になる。……けれども、義定がこんなことを言い出したのはそれだけが理由じゃない気がした。

「……なあ、義定。お前はもしかして死にたいのか？」

ふと、思いついた可能性を口に出してみる。すると、義定はうなずき、力のない笑みを浮かべた。

「……やっぱり、新十郎はずるいや。こうも簡単に当てられるなんて。

……わたし、そこまでわかりやすい女だったかな？」

「まあ、過ぎた時間は長いからな。うっすらと血が繋がってる分、それこそ兄妹みたいなもんだし。それに、なんだかんだでお前の内心が傷つきやすいのも知ってる」

「……まできたら隠しても意味ないね。うん、わたしは結局のところ罪悪感で満たされてる。けれども、憎悪もまだ消えないんだ。わたし自身が死ぬことで、父上から続く穢れた血筋を断絶させたいっていう気持ちもあるんだよね。……だから」

わたしを殺して。

結局、こいつはそう言おうとしたのだろう。

それは、許さない。

俺は踏み出して距離を詰め、義定の両肩を掴んだ。

「新十郎……？」

驚いた義定が目を見開く。その目を見据えて、俺は語りかけた。

「言わせないぞ、絶対にだ……！ 評判とか知ったことか。京でお前が「新十郎がいなくなったら困る」と言ってくれたように、俺もお前がいなくなったら困るんだよ。だから、生きてくれ」

半ば祈りながら俺は義定に語りかけていた。語りかけ終わってもなお、この手は放してやらない。放したら最後、この夜闇の中に義定が消えていくような気がした。

俺は、もうあの新月の夜のような喪失感を経験したくはない。

「……ふう、わかったよ。新十郎がそこまで言うんなら、仕方ない。わかったら肩から手を外してよ、普通に痛いから」

「悪いな」

急に素に戻られて困惑する。

ただ、それができることは悪い兆候ではないのだろう。

「あーあ、頑張って覚悟を決めてただけど、これじゃ台無しだよ。

……責任取ってね、新十郎？」

そう義定はいたずらに笑って本丸から去る。

追いかけてようとしたが、その足取りの軽さを見て止めた。

きつと彼女はもう大丈夫だろう。根拠はなくともそう思えた。

「やれやれ……」

手持ち無沙汰になって空を見上げる。

月が綺麗な夜だった。

第4章 Eastern Strategy 第26話 巨星、墜つ

南近江で、六角家の主権争いが繰り広げられていた最中のことである。

河内国・飯盛山城にて病床の三好長慶は松永久秀と三好義継を自らの寝所に呼び寄せていた。

「親しいものを出来る限り呼んだつもりだけれど……、やはり少ないですね……」

自らの枕の脇に立つ久秀と義継を見たのち、長慶は嘆息した。

一族の重鎮である三好長逸や、義賢が没した後に本国の阿波を取りまとめている篠原長房も呼んだのだが「多忙だから」と両者に謝絶されている。

「それは致し方ありますまい。石山崩れ以降は畿内各所の豪族が揺らぎましたから。ただ今、丹波には我が弟を向かわせております。丹波に限らず、諸将が各地で奮闘しております。今に事態は好転するでしょう」

久秀がつとめて言う。

実際は松永長頼の旗色が悪い。他の諸将はまちまちだが、將軍の足利義輝が好機と見て離反した豪族の支援に回っているためにいささか長期化の兆候が見られ始めている。

けれども、その事実を衰弱した長慶に伝えるのは気が引けた。

「久秀の弟ならば、大丈夫ですね」

隣で三好義継が無邪気に笑う。未だ10歳にもなっていない姫武将だが、その美貌や理知的な眼差しはどこか長慶を想起させるようなところがあった。

「さて、単刀直入にいいいます。私はもう長くはない。おそらく数日のうちに地獄へと落ちるでしょう。ですから、その前にあなた方に伝えなくてはならないことがある」

二人を見据えて長慶は言うや否や、久秀と義継は背筋を正す。

これが、長慶の覇氣の最後の発露だった。

「義継。あなたにはわたし亡き後の三好家を託します。失われた畿内の秩序の回復ができれば最高ですが、叶わぬと見れば疾く阿波へ帰りなさい。畿内は魔窟。天の時を失ったものがのうのうと生きられるほど、生易しい土地ではありません」

「心得ました、あねうえ」

義継は静かに目を閉じる。

それは、童女が背負うにしてはあまりに重い代物だった。

「久秀。あなたには義継の補佐を頼みます。あなたにとつては不本意だとは思いますが、長逸や長房とも足並みを揃えるように。わたしは義継までも、義賢や冬康と同じ目に合わせたくはない」

「承知いたしました」

恭しく久秀は頷く。それを見て長慶は苦笑いを浮かべて言った。

「それがうわべだけでないことを願うばかりです。私はあなたが私に忠実に仕えてくれていたことは知っています。……しかし、それは私に向けられたものであり、三好家そのものに向けられているわけではない」

「……ええ、そうですね」

長慶の身も蓋もない台詞に久秀は微笑む。半ばこれは公然の秘密だった。

長慶と久秀ほど個人的な理由で主従を結んだもの達はいない。

彼女らの始まりは久秀が父の元長を失い、復讐心に侵されていた長慶に近づき「共に畿内の悪習を打ち払いましょう」と唆したことから始まる。

長慶は父を討った細川家と三好宗三を恨み、久秀は波斯の血を持つか弱い童女だった自分を虐げた畿内の旧態依然とした体制に憎しみを向けていた。

初めはただ目的のために戦う同士でしかなかった。しかし、次第に互いが互いを他に代えがたい存在だと認識するようになり、今に至る。

「義継も心配ですけれど、あなたの先行きも心配です。私亡き後はも

はや畿内にあなたを受け入れられるだけの器量を持った将はいない。またあなたはさまようことになる……」

久秀の情の深さを長慶は知っている。だからこそ、その行き先がなくなつた感情の行き先が恐ろしくて仕方がない。

自分と同じように義継を盛り立ててくれればいいのだが、きつとそうはならないだろう。憎しみのままに畿内を荒らして回る、そんな気がした。

(後は御仏のみぞ知ることなのかもしれないね……)

願わくば、義継と久秀の行末に幸あらんことを。

長慶は祈らずにはいられなかった。

「さて久秀、義継。今宵はもう遅いので、帰りなさい。……ここまで、付き添つてくれてありがとう」

そう言つて、長慶は久秀と義継を退室させた。

二人がいなくなった室内は伽藍として、静寂に満ちている。

(思えば、随分と遠くに来たものです。阿波の田舎娘が復讐の果てに天下に手をかけるところまで来た……。しかし、あまりに長く旅を過ぎましたね)

脳裏に過ぎるのは、走馬灯。

父を討たれて慟哭し、久秀と出会い、復讐を成し遂げた。

しかし、そこからは坂の上から転げ落ちるかのようだった。

落馬事故で妹の十河一存を失い、久米田では弟の義賢が討たれて、石山で義興と冬康までもが散った。

(ようやく、私もあなた方の元に行ける。そうしたら、また語り合える。話したいことはいくらでも。……ああ、長かった……)

その日の明朝。

三好長慶は現世を後にする。

いち早くその報を掴んだ久秀は長慶の遺骸に縋り付いて慟哭していた。

「ああッ、長慶様ッ！ どうして私を置いていかれるのですッ！ あなたのいない畿内など穢土でしかないではありませんかッ！」

熟れた身体の褐色の肌をもつ蠱惑的な美女。到底、幼きなどない容

色の松永久秀だが、泣き崩れるその姿はまるで親を失った童女にしか見えなかった。

*

三好長慶、没する。

その報は隣国の六角高村にも伝わっていた。山岡景隆から伝え聞いた高村はふう、と軽く息を吐いてから笑った。

「それは僥倖だな。石山で挫いても三好はなおも強大で扱いに困っていたが、これで心置きなく伊勢に取り組める。山岡殿、三好義継と三好三人衆に使者を出しといてくれ。「もし君側の奸を取り除きたい、と御所望なら及ばずながら力を貸す」ってな」「つまり、それは三好三人衆側に着く、と?」

山岡景隆が問いかける。

長慶死後、彼女が懸念していたように三好三人衆と松永久秀の間で軋轢が生じていた。

「半分はな。だが、心の底から味方はしない。つか、畿内の泥沼には絶対に入ってやらない。入るにしても、人柱を立ててからだ。……そうそう、三好の他に丹波の荻野直正にも使者を送っておいてくれ」「ああ、なるほど。得心いたしました。でしたら、そのように取り計らいますよう」

高村の回答と追加要求で山岡景隆は完全に高村の意図を察した。

丹波では松永久秀の弟の松永長頼が孤軍奮闘している。やや形勢は長頼に不利と聞いていた。

そこに畿内屈指の鬪将である高村が助力するとなれば、もはや丹波の大勢は決したようなものだろう。

(殿は、松永久秀を潰そうとしておられる……!)

孤立しがちな松永久秀の最大の支援者、それが実弟の長頼である。仮に彼らが討たれてしまえば、久秀派の勢威は大きく落ちることは避けられない。

「わかってくれたか。まあ、蠍さんには大人しくしてもらわないとな。じゃないと、おちおち背を向けることもできねえ」

カラツと笑って高村は杯をあおる。

畿内の情勢は新たな展開へと急速に突き進んでいた。

第27話 それぞれの初手

伊勢に織田軍が侵入した。

俺が中村一氏からその報を受け取ったのは、深夜のことだった。

「そうか、ありがとう一氏。いつもお前には苦勞をかけるな」

「いえ、お気になさらず。忍びを取りまとめるのも私の職分ですので。為すべきことを為した、それだけです」

山岡景隆と中村一氏。

今の六角家には忍びを取りまとめる家臣が二人いる。普通の大名家ならば、一人で足りるのだろうが、陰謀渦巻く畿内であることと甲賀と伊賀の二系統の忍びを用いていることがこの体制を作った。

具体的な棲み分けとしては、山岡殿に伊賀忍を使つて工作と畿内方面の諜報をしてもらい、一氏には暗殺などの武力を伴う仕事と東海方面の諜報を甲賀忍を使つてやつてもらっている。

「それで一氏。侵入してきた将と兵数は分かるか？」

「侵入した将は滝川一益。かつて甲賀の上忍だったものです。兵数はさほど多くなく三千」

「三千？ 思ったより少ないな」

「織田信奈の本命は美濃。おそらく此度の派兵は観音寺騒動の余波でこちらが援軍を出せないと見てのことでしょう」

「だろうな」

一氏の見解に俺も肯く。

観音寺騒動は主戦場になった近江への影響はもちろんだ大きかった。しかし、伊勢にも思ったよりも波及している。

近江から離れた遠隔地ということもあるのだろう。もともとは六角に手を貸していた北伊勢の国人が結構離反していた。

……それにしても、畿内方面に楔を打つといてよかつたと思う。あの手のおかげで三好は動けず、西方の脅威はないから援軍を出せる。もし出せなかつた場合は、このまま北伊勢は一斉に織田方に靡く恐れがあつた。

「とりあえず、触れを出す。兵数は六千でいいだろう。北伊勢に出向

いて、滝川一益を討つ」

俺は下知を出し、一氏を退室させた。

「滝川一益か……、相手したくねえな……」

一人になったのを見計らってぼやく。

滝川一益。

織田四天王の一人で『進むも滝川、退くも滝川』と呼ばれた名将で鉄砲の名手。

おそらく同じく鉄砲に優れた明智光秀や雑賀孫市、島津家と同様に俺の天敵とも言える存在である。

徹底的に野戦を避ける北条氏康よりは与し易いかもしいが、それでもまともによつたのでは苦戦は免れない。

「寡兵と言えど、勝ちが堅い相手ではない。やっぱ、考えとかないとな……」

適当に紙に北伊勢の地図を描いて思案を重ねる。

そうしているうちに夜は更けていく。

翌朝、俺は目の下にくまを作りながら軍評定を開いた。

(それにしても、観音寺騒動が過ぎてからかなり顔触れが変わったよな……)

参加している面々を見ながら思う。

上座は承禎様や義治から俺に変わり、一門最上位は義治から義定に変わった。

家老席は六宿老が没落したから本当に変わった。変わらずその座に居るのは蒲生定秀と義定に縁がある平井定武の二人だけ。とはいえ、その二人のパワーバランスは完全に蒲生優位に傾いていた。新たに座ったのは山岡景隆。この三人が今の六角の家老格である。

部将席は後藤高治と三雲定持の旧六宿老と蒲生氏郷、今回の評定には参加していないが、伊勢の関盛信が座ることを許されている。

多士濟々なのは侍大将席だろう。

いよいよ元服した大谷吉継や中村一氏といった承禎様や義治時代には俺の家臣で評定に出られなかった者たちに、定持の嫡男の三雲成持。経理に優れた長束正家、三河のにゃんこう一揆から流れてきた加

藤嘉明などがいた。

「ある程度は知らされていると思うが、昨夜に伊勢の亀山城主の関盛信が織田家臣の滝川一益の侵攻を知らせてきた。兵力は三千ほどで桑名に拠点を作り、東海道沿いに侵攻してきている」

俺が軽く状況説明をすると、家臣たちはざわめいた。

まあ、無理もない。承禎様の代から今に至るまで、東方から六角領に攻め込んできた者はいなかったからだ。承禎様の代には斎藤道三や織田信奈の父の信秀など東方に好戦的な大名はいたが、それぞれ国内や他国に矛先が向かっていた。

「美濃を攻めている間に北伊勢をも攻めるとは、がめつい女ですなあ、織田信奈は」

呆れたように笑うのは、平井定武。北近江への抑えを任せており、比較的軍事に造詣が深い方である。

「俺もそう思うよ、平井殿。……しかし、あまりに性急過ぎるな」

尾張と美濃の国力は近い。斎藤義龍も長良川の戦い以後は国内をまとめて一枚岩つてほどではないが。地盤は堅い。だから、わざわざ兵を分散させる意義はないと思うのだ。

「そのことですが、私に心当たりがあります」

首を傾げる俺にそう告げたのは、一氏だった。

「不確かな情報ですが、浅井長政が織田信奈に婚姻同盟を持ちかけたのことです」

「へえ、長政が……。それで、相手は？」

「織田信奈です」

「え。マジで？」

そう聞いて、俺は思わず義定と顔を見合わせてしまう。

義定も義定で珍しく目を丸くしていて驚いていた。というか、この反応を見た感じだとこいつ長政が本当は女だってことを知ってやがるな。

「むむむ……、中村殿の情報が事実ならば、六角はいささか厳しいですな。北の浅井と東の織田。両方に挟まれることになりますぞ」

平井殿は唸るが、俺は長政の婚姻同盟が衝撃的過ぎてあまり頭に

入って来ない。

ただまあ、なんとなく長政のやりたいことはわかった。あいつは尾張の国力をあてにして美濃を取ろうとしているのだ。

となると、織田信奈の動機も自ずと分かる。北近江と尾張も国力は近いから同盟を締結する前に少しでも所領を拡大して同盟後の主導権を握ろうとしているのだろう。

やれやれ、そんなしけた暗闘にこちらを巻き込まないで欲しいのだが、降りかかった火の粉は払うほかない。

「……いいや、気になるけど今は長政より滝川一益のことを考えよう」
やや脱線しかけた議論を戻す。

その後の評定は順調に進み、六千の派兵が決まった。

*

三好長慶の死は、やや遅れて浅井家にも届く。

その報を聞いて長政は「そうか、ようやく我らにも天の時が来たのかもしれない」とほくそ笑んだ。

(西の三好はもはや動けまい。南の高村も信奈どのの攻勢に晒され、美濃もまた信奈どのの主力が向かっている)

周囲の情勢を勘案しながら策を練る。そして、閃いた長政は高虎を呼んだ。

「朝倉殿に使者を出し、郡上郡への派兵を頼んできて欲しい」

長政の指示に高虎は頷き、そして笑った。

「いよいよ、美濃に総攻撃をかける覚悟を定められましたか」

「ああ、信奈どの美濃に主力を派遣している一方、伊勢にも別働隊も派遣した。どちらも勝算は十分にあり、多くの領土を得るだろう。座して眺めているだけでは、完全に主導権を握られる。ならば、我らも大きく動かねばなるまい」

勇ましく語るものの、内心では長政は織田信奈の勢いに恐れを抱いている。桶狭間の戦いで今川義元の上洛軍を撃退した戦歴は六角高村に重なるのだ。

彼女ならば、本当に美濃を一気呵成に攻め取れてしまうかもしれない。そう感じさせるほどの果断さがあった。

*

「美濃、か。浅井の力が増すのは望むところだが、余は行かぬぞ」

越前・一乗谷の館にて、その男はぼやいた。

年の頃は二十代か、紫の総髪に端正な顔立ち。体軀は細身ながら鍛え上げられており、それがなおのこと男の色気を際立たさせていた。

この美男子こそが越前の大大名、朝倉義景である。

「とはいえ、貴公には悪い話ではあるまい？　なあ、孫八郎？」

「そうね。私の所領からは近いし、価値はあるわ。……わかったわよ、行けばいいんでしょ？」

孫八郎と呼ばれた姫武将が、ため息をつく。

義景とはやや趣の異なる紫紺の髪。釣り上がった目尻は見る者に伶俐な印象を抱かせる。相当な美少女なのだが、どこか陰鬱な雰囲気がつきまとい、いささか近寄り難さがあった。

「たのんだぞ、景鏡。余の代わりに朝倉の武威を示せ」

朝倉景鏡。義景の従妹にして、一門の筆頭である。美濃との境にある大野郡を納める大野郡司でもあり、対美濃に充てがう人材としてはこれ以上ない存在ともいえた。

かくして、越前朝倉軍四千もまた美濃に侵攻を開始。

のちに洛東争乱とも呼ばれる戦役の火蓋が切られたのだった。

第28話 亀山合戦

滝川一益の進軍は順調だった。

はじめに木曾三川の川幅や長島のにゃんこう一揆の都合上、陸路を使えず津島から舟運で伊勢に上陸するというハプニングがあったものの、入国したのは北伊勢に蟠踞する豪族たちを順調に降している。

その結果、上陸時には三千だった兵力が五千にまで膨れ上がっていた。

「あとは関盛信の亀山城を落とすだけじゃな、ここさえ落とせば北伊勢の平定は成る。そこまでいったら、少しばかり休むのじゃ」

亀山城を包囲しながら、一益は呟く。

肩口で切り揃えられた艶やかな黒髪に、小柄な体躯。年はかなり幼く、本来の元服の年すら迎えていない。

しかし、そんな童女が北伊勢を切り従えていったのである。

北伊勢の諸将はその頭ひとつ抜け出た才幹に震えつつも、どこか信じられない思いでいた。

「我らほど関盛信は甘くはありませぬぞ、蒲生家を通じて近江の六角高村に通じております。かの者は畿内の勇将、尾張の弱兵では瞬く間に蹴散らされてしまうでしょうな」

北伊勢の諸将の一人が一益に注進する。

関盛信。

各々のめいめいに割拠するほとんどの北伊勢の諸将と異なり、父祖の代から六角側の豪族としての立場を鮮明にしている。

所領の亀山は伊賀と近江へと繋がる東海道を抑える位置にあり、北伊勢どころか伊勢の要といえた。

「高村は来ぬ。そうのぶなちゃんは言っておったのう。だから、高村が観音寺騒動の後処理をしているうちに北伊勢を亀山まで切り取るつもりだったのじゃ」

不安がる北伊勢の諸将に一益は言い聞かせる。

現状、自前の諜報網でも近江伊賀方面で軍が動いたという話は聞いてはいなかった。

「まあ、大丈夫じゃろう。とはいえ、備えは忘れてはならぬ。念のためじゃ、西方に柵と逆茂木を建てておくのじゃぞ」

そう言つて一益は諸將を帰らせ、昼寝の体勢に入る。

なんだかんだで北伊勢戦線は堅調だった。ただ、一益が午睡を楽しめるだけの暇はなかったのだが。

*

「なんじゃ、うるさいのう……」

一益が午睡から目覚めたのは、おやつ時だった。

耳を澄ませる。すると、馬蹄の音が西方から微かに聴こえてきているのがわかった、

「高村は思ったよりもきつちり防諜を徹底していたようじゃのう、これだから甲賀はあまり好きじゃないのじゃ、やりづらくて困るのう」
ひとりごちる一益。

尾張に来るまでは甲賀で生きていた一益には、その実力の高さを知悉している。

「甲賀の追い忍びはしつこかったのう……。今、思い出しても背筋が凍るのじゃ。まあ、備えはしてあるしなんとかなるじゃろうな。さて、六角高村とやらの手腕を見せてもらおうとするかの」

一益は北伊勢の諸將に使者を出し、西方を備えさせる。

甲賀を出たとはいえ、一益には忍びの技がしつかりと刻まれている。午睡をしてもなお、気はゆるんではいなかった。

逆に今回は高村の方が愕然とすることになる。

「げえつ、がつちり備えをしてあるじゃねえか。これじゃあ、迂闊には攻められねえな」

亀山城に着いた高村を出迎えたのは、城攻めの陣を守るようにずらりと配置された馬防柵と逆茂木。これでは、騎兵による駆け戦は到底望めそうにない。完全に一益は野戦築城を組み上げていたのである。

「とりあえず出来ることをやって、それから考えるか」

気を取り直して高村はひとまず亀山城にとりついていていた兵を蹴散

らし、亀山城南の平地に陣を構えることにした。

「さしもの高村も堅陣の前にはなす術もないといった形じやな」

案外な手応えに一益は首をひねる。一益自身は精強さを誇って攻めかけてくるものと考えていたが、違った。

こうなると考えられるのは被害を抑えた長期戦による兵糧切れを待つ作戦だろうか。

（仮にそれが目的であったとしてもじや。くつきーが後方から兵糧を送ってくれておるからの、制海権がない六角では糧道は断てぬから無駄じやな）

九鬼嘉隆には今回は桑名で補給に従事してもらっている。この水軍力は六角や浅井、斎藤にもない。洛東では織田が有する特技であった。

*

「さてさて、どうするかな……」

日が落ちて両軍が休息に入る中、俺は一益の陣容を観察していた。「馬防柵が三段構えで空堀も柵の前にちよつと浅いけど掘っている。鉄砲の数は分らんが、少なく見積もってみても百はあるだろうな。端的に言えば、すごいめんどくさいやつだぞこれ……」

空堀に水が引き入れられてないだけまだマシってところだろう。それでもやはり滝川一益。鉄砲の運用の理解については深いものがある。

（鉄砲に限らず、飛び道具つてのは一方的に相手を攻撃できるから強いんだ。つまりは敵に近づけさせないことが戦法の前提にある）

長篠の戦いが脳裏を過ぎる。

俺も知ってる鉄砲が強かった戦だ。あの戦いでは馬防柵で足を止め、三段撃ちで武田騎馬隊を退けている。

考えなしに攻めるところつちも武田と同じ轍を踏むだろう。

（野戦築城を妨害するのが最善だったが、そこまでは間に合わなかった。向こうの方が兵力が少なく、遠征してきてる身だから長期戦ならこちらが若干有利か？ いや、それも場合によりけりだな）

一見すると長期戦が良さそうだが、懸念事項もある。

中伊勢の長野工藤氏と南伊勢の北畠の動向だ。戦線が膠着している間に織田側に付くようなことがあれば、南北から挟み撃ちを受けてしまう。それだけは避けたい。

「となると、目の前の野戦築城をどうにかしないといけないわけか」魔法でも使えばメラ◯ーマとかで一撃なんだろうが、ここはあくまで現実。あれだけの陣を崩すには相当の労力がかかるに違いない。「よし決めた。焼こうか、あれ」

今回は巧遅より拙速を重んずることにする。

俺はすぐに義定と一氏を呼び出し、作戦の概要を説明し向かわせた。

「時間との勝負だよな、あと滝川がどう出るかか……」

本気でやりあう訳ではないにしろ、将二人を突出させる策ではある。危なかつたら退くようには伝えているが、それでもいささかりスクは残る。

「馬防柵と空堀を埋め立て、明日に総攻撃をかける。……殿の考えはこれで間違いないでしょうか？」

二人を見送ったあと、嘉明が声をかけてくる。

「ああ。とりあえず騎兵を縦横無尽に動けるようにするよ。鉄砲隊は制圧力は高いが、斉射運用するときには足を止めなくてはならず、脆い。だったら騎兵で弾幕外から攻撃して隊を乱せばいいだけだ」

「そうですね。殿の考えは正しい。しかし、相手もそのことは分かっています。必ずや阻止に動くはず」

「だろいな、滝川一益は正しく鉄砲を用いる将だ。そのことは知ってるはず。……ああ、なるほどな」

ここで嘉明の言わんとすることはなんとなく分かった。俺も考えはしたが、別にそこまではいいや、と採用しなかったことではある。「やるのはいいが、せいぜい助攻ぐらいにしておけ。二兎を追う者は一兎をも得ずって言葉があるからな。まあ、やる気のあるのはいいことか」

ついでに嘉明に千の兵を託し、見送る。

嘉明は三河でにやんこう一揆に属し、松平家と対立したのち近江に

流れてきたところを拾った。

その後は一揆に加わる前にやっていた馬屋で培った馬術で軍功を立て、今や侍大将扱いで馬奉行を務めるほどの出世を果たすまでに至る。

だから、あんまり嘉明のことは心配していない。しれつと軍功を挙げて帰ってくるような気がした。

*

織田陣営は浮かれていた。

かの六角高村の力量が前評判ほどではない。昼間に城攻めの陣を攻めずに避けたことから、口さがない者がそう言いふらしていたことと、北伊勢平定の終わりが見えて兵に里心が芽生え始めていたこと。この二つが軍紀をやや緩まさせていた。

だが、そんな緩んだ空気は長くは続かなかつた。

「なんてこった、柵が燃えてやがるっ！」

見張りの一人が一益に慌てて注進する。すると一益は口の端を吊り上げて笑った。

「そうか、そこから攻めるのかの。地味に手堅いのう、高村は」
すぐに隊を出し、消火にあたらせる。

今回の戦において柵は騎馬から鉄砲隊を守るにあたっての生命線である。座して見ている訳にはいかなかつた。

「じゃが、それだけではないじゃろうて。陣の守りも固めるのじゃ！」
抜け目なく夜襲も想定している辺り、一益は有能ではある。

だが、結果として攻勢に出た六角軍の動きが上回った。

「消火に向かわせた隊が、六角義定の伏兵に襲われております！」
「北側守備隊、加藤嘉明に乗り崩されました！」

劣勢の報告が次々と一益に伝えられていく。

一益はそれでも態勢を立て直そうとしたが中村一氏に弾薬庫を接収されたと知った時、抵抗を諦めた。

「こうなつてはどうにもならぬの。疾く逃げるのじゃ」

完全に大勢を見切った一益は尾張から連れてきた兵を優先的に集め、退却を開始する。

(亀山は、北伊勢の西端。尾張までとなるとかなり骨が折れるの)

姫にこんな長い軍旅をさせるべきではないのじゃ、そう口を尖らせつつ滝川一益は亀山を後にした。

残された北伊勢の諸将はこれより討たれるか、六角に恭順するかを迫られることになる。

明朝、中村一氏と加藤嘉明から報告を聞いた高村は「お前ら、えげつねえな……」と軽く引きながらも三人の功を賞したのだった。

第29話 河原田の戦い

行きは良い良い、帰りは怖い。

滝川一益の北伊勢攻略戦はおおよそ上記の通りだった。

行きはすすきの穂のように簡単に靡いた北伊勢諸将のおかげで亀山まであっさりたどり着いたが、帰りはそのことごとくが討たれた後か六角に靡いていた。

高村が『一益隊の兜首を二つ献じてくれたならば、所領を半分安堵。四つ献じてくれたならば全て安堵しよう』という趣旨の書状を北伊勢の諸将に送りつけていたことも作用した。

一益は長い北伊勢からの帰り道を、北伊勢の諸将に襲われながら退かなくてはならなかったのである。

「はあ、はあ……。まったくキリがないのう……。」

肩で息をしながら、一益は殿で種子島を敵軍に打ち込んでいた。

離反した北伊勢の諸将がめいめいに一益隊を襲い、それを退けて一益隊は後退。されど、その退いた先にもまた別の裏切った諸将が殺到する。

襲いかかってくる兵の数は多くても三百ぐらいで追い返すことは造作もない。だが、その頻度があまりに高く、すでに八回ほど襲撃を受けている。

「弾薬庫を奪われたせいで種子島もケチらねばならぬし、こんな戦はもう嫌なのじゃ……。」

倉亭の戦いで袁紹が味わった十面埋伏の計を簡易的に再現した高村の策で滝川軍には疲労と厭戦感が蔓延していた。

「この川を渡れば、赤堀はもうすぐじゃ……。」

その空気にも耐え、なんとか滝川隊は河原田にたどり着く。

「あと、もうすぐで尾張に帰れるみやあつ！」

敗走の終わりを感じた尾張兵の一人が意気揚々と川を渡ろうとする。

しかし、彼は対岸にたどり着くことはなかった。

ひゆるひゆると、北岸から鏑矢の鳴る音が辺りに響く。すると、矢の雨が渡河する滝川軍の頭上に降り注ぐ。

その惨状を見て、滝川一益はようやく理解した。

「伏せておったのじゃなっ……！ 六角高村っ！」

らしくなく、犬歯を剥き出しにして唸る。

うまくやったつもりだったが、どうやら自分は袋の鼠だったらしい。

そのことが一益にとっては口惜しくて仕方がなかった。

*

亀山合戦で滝川一益を退かせた後、俺は東進を指示した。滝川一益への追撃という意味合いもあるが、それ以上に北伊勢の諸将への示威行為が目的だ。

「嘉明、二手に分かれて北伊勢の諸将を攻めつつ、赤堀を直指すぞ」

赤堀はおおよそ現在の四日市にあたる。ここを治める赤堀氏が四日に市を開いたから四日市という地名になるのだが、今はまだ地名としては確立していなかった。

「承知しました。くれぐれもお気をつけを」

「そっちこそ、昨日の手柄に浮かれて軽挙妄動をするなよ？ 俺以外に騎兵を預けられるのは現状ではお前しかないからな」

軽口を叩きながら、嘉明と別れる。

本当は一軍のままに進みたかったのだが、いかんせん北伊勢は諸将が乱立し過ぎているため、丹念に潰しては最終的に赤堀を抑えて滝川軍の退路を塞ぐ目論見は潰えてしまうだろう。

「北勢四十八家、か。せめて十八家ぐらいには減らしたいな。あんまりにもまとまりがなさすぎるぞ」

だから、滝川一益の侵攻を機に俺は北伊勢の勢力を完全にこちら側に染め上げるつもりでいる。

織田の侵攻は迷惑極まりなかったが、不穏分子の炙り出しという意味ではありがたかった。

*

滝川軍は完全に死地の中にいた。

河原田はちょうど西から流れてきた二つの河川が合流する場所にある。

一益たちは北側の川を渡河して赤堀に向かおうとしたのだが、義定の弓隊に射竦められていた。

さりとて、西側に迂回して渡ろうにも亀山からずっと追いかけてきた北伊勢の諸将が陣取って動けない。

東南は河川に阻まれており、滝川軍は完全に包囲されていた。

「ここで織田軍を倒す！ 射て！」

義定が号令をかけ、再度渡河中の織田軍に矢の雨が降りかかる。それを滝川軍が阻止する術はない。川の中ではさしもの種子島も無用の長物だった。

種子島と弓。武具の違いはあれど一益と義定ほど洛東で飛び道具の扱いに優れた者はいない。

だから、一方的に射掛けられること、そのような状況に整えられることの恐ろしさを何より一益自身が理解していた。

(このままでは、ここで全滅は免れぬ。やはり、西の北伊勢諸将を強行突破して西のどこから渡るしかないのかの？ じゃが、それをやるには兵が足りぬ)

度重なる襲撃と離反で滝川軍の兵数は二千にまで減っていた。西の北伊勢諸将は烏合の衆といえど二千。北に陣取る六角は五千はいらぬだろう。

西が弱い、さりとて高村の書状で尻を叩かれているため戦闘意欲は高い。下手に攻めると滝川軍の戦力が枯渇し、北を突破するだけの余力がなくなる可能性があった。

(これは、無理じゃの……)

一益の目に諦めが宿り始める。最悪、軍を見捨てれば自分は助かるだろう。自身には単騎で逃げるだけの余力も技術もある。

(しかし、そこまでして生き延びてどうするというのじゃ？ また、惨めに逃げ暮らすのかの？ 東海にはもう居れぬし、次は関東か?)

逃げた先の未来を思い浮かべる。しかし、どこか心に響かなかつた。次いで浮かんだのは、いつぞやの津島の天王祭。

一益と信奈が初めて出会った時の思い出だった。そして、気付く。自分が思った以上に織田信奈を大事にしているのだと。

(ようやく得たのじゃ、姫は。のぶなちゃんという居場所を得たのじゃ。あの明るさを知ってしまった以上、もはや闇の中にはもどれぬ……！　ならば、姫がなすべきことは一つじゃ……！)

腹を括った一益は反転し、猛然と北の義定に突っ込んでいた。

種子島は西の北伊勢諸将に全弾撃ち切り、強引にその足を止めさせる。

「姫に続け！　死中に活を見出すのじゃッ！　姫に遠慮は要らぬ！」

姫の屍を踏み越えてでも、尾張に帰るのじゃ！」

降ってくる矢玉を顧みず、一益は進む。

少しでも多くの兵を尾張に帰す。少しでも、この敗戦の痛みを減らす。

一益は自らを鉄砲玉として、義定隊に風穴を開けることでその責任を果たそうとしていた。

普段の一益からは到底考えられないその破れかぶれな突撃は、尾張の兵にも伝染した。

「滝川様を死なせるなっ！　続くのみやあつ！」

天下屈指の弱兵が、いまや矢を恐れぬ死兵となっている。

この尾張兵の豹変ぶりには義定も目を見開いた。

「ありやりや、これは手強いね。……でも、行かせないよ！」

更に義定は斉射の間隔を狭めるように指示を出す。一益もまた死力を尽くして川を渡り切ろうとする。

戦意では一益側が圧倒的に優位だったが、いかんせん地勢が悪すぎた。

次々と尾張兵が力尽きて下流へと流されていく。

(結局、姫はのぶなちゃんのお助けにはなれぬのか、ただ徒らに兵を損なっただけなのかの……?)

一益の目に涙が浮かぶ。

しかし、天は一益を見捨ててはいなかった。

「九鬼嘉隆、見参！　姫さま！　今からあたしが助けに参ります！」

赤堀の港から上陸した九鬼水軍が六角軍に東から強襲したのである。

「ちつ、さすがに海は俺の管轄外だな。嘉明、九鬼水軍にあたれ！ 滝川軍と合流させるな！」

高村は嘉明にその抑えを命じたが、九鬼水軍は止まらない。なんと少しでも一益を救うべく突撃し、ついに一益と交戦する義定の陣にまで到達した。

「姫さま、よくぞご無事で！」

「くすくす、くつきーにはこれが無事に見えるのかの？」

再会した九鬼嘉隆の言葉に一益は苦笑いを浮かべる。

川の水と血と泥に塗れて一益の装束は見るも無残なほどぐちよぐちよになつていた。

「ああ、おいたわしや……姫さま……！」

「まあ、血に関しては八割は返り血じやがの。それより今はこの死地を切り抜けるのじゃー！」

九鬼嘉隆が連れてきた水軍は千人ほど。数を合わせても三千にしかならず、練度もそう高くはない。

しかし、それでも一益はもう恐れるものはなかった。

「あーあ、これは大勢を向こうに傾けられたかな。いつもはわたしたちがやってることだけど、流れを掴まれるのは本当に手強いよね」

義定は応戦したが、九鬼水軍の横槍にあつてついに一益たちの渡河を許した。

高村は嘉明と共に逃げる一益と嘉隆を追ったが、九鬼水軍と尾張兵の命がけの抵抗でやや速度を落としている。

「さあ、姫さま！ 赤堀の港へお急ぎを！ そこに船を用意させてます！」

「うむ、恩に着るぞくつきー！」

するすると嘉明の追撃を交わしながら二人は逃げる。

そして、赤堀の港に二人がたどり着いたと一氏に知らされた高村はこう呟いた。

「まあ亀山が出来過ぎだったから、どっかで帳尻を合わせてくるとは思ったよ」

「それで、どうなさいます?」

「義定と嘉明に伝えろ。織田軍への攻撃はやめろ、とな。ここで向こうが退くなら別にいい。北伊勢から織田軍を駆逐するという目的は十分に果たせているからな。以後は北上して桑名を目指せ」

この台詞に一氏は目を瞑る。

この時、高村は完全に滝川一益と九鬼嘉隆にしてやられたと認めただった。

*

その後、高村は完全に桑名までを制圧し、北伊勢の諸将に仕置きを行った。

この結果、北勢四十八家は二十七家が改易されることになり、高村は「目標の十八家には届かなかったが、まあいいや」とひとりごちることになる。

一方、一益と嘉隆は二千五百の兵を伴って尾張に帰国する。

結局のところ、伊勢に出した四千の兵はその三割強が帰って来なかったのである。

総括すれば、織田は徒らに兵を損耗し、逆に六角は北伊勢を完全に支配下に加えることに成功したのだった。

第30話 将軍の暗躍と今孔明の出慮

北伊勢で六角高村と滝川一益がしのぎを削る争いを繰り広げていた頃、京でも新たな動きがあった。

「うむ、重畳重畳。さすがは丹波の赤鬼といったところか」

二条御所にてその男は破顔した。

巖のような体躯に鷹のような鋭い目つき。豪華な着物を着ているもなおその鍛え上げられた身体が溢れんばかりの武威を放っている。

この男こそが、当代の室町幕府将軍・足利義輝であった。

「丹波にて松永久秀が弟・長頼は散った。かの者は十河一存なき三好では貴重な武人であった。三好・松永の落胆たるやいかほどばかりか」

「……喜びになる気持ちは分かります。かねて仰せの通り、ひとまずは丹波の赤井家へ守護の補任の手続きは致します。されど、三好に敵するものへの補任、三好三人衆は荒れるでしょうな」

義輝の横で、藤孝が言う。見目麗しい少女にしか見えないが、れっきとした竿が生えている男である。

名こそ細川藤孝と名乗っているが、実際は第12代将軍・義晴の私生児で義輝の異父弟である。彼は武勇を極めた兄とは異なり、知略と文化の方に冠絶した適正を示していた。

「うむ、三好か。三人衆が喚き散らすのは不快だが、捨ておけ」

三好三人衆と義輝の間には溝がある。三人衆側は阿波にいる十代将軍義植の孫娘である義栄を将軍とするべく、朝廷に掛け合っているからだ。

三好家は、というか阿波の武家は元来義植派を支援してきた家が多い。だというのに、長慶はなぜか義輝を将軍とし、関係を保とうとしてきた。

「なあ、藤孝。今になって思うのだが、長慶殿は畿内のことをしかと考えていたのではないか？ 結局のところ、我が座を追おうと思えばあの女はそれができる力はあった。しかし、ついぞ一度もなかった。手

元に義維と義栄、意のままになる將軍候補を抱えていながらな……。おそらく、そうすれば畿内は乱れてしまうと分かつていたのだろう」

義輝の呟きに藤孝は首肯する。そして苦笑しながら口を開いた。

「かの者のような人物を賢人というのでしょうか。……されど、多くの人間は力を与えられれば、それを使いたくて仕方がなくなるのです。ましてや、おのが一存で国が変わるとなれば、その誘惑に抗える者はどれほどいるでしょうか？」

言外に藤孝は三好三人衆とはもはや和解できないだろう、そう義輝に伝えていた。

「あの小物どもには無理であろうな。しかして、どうする？ 松永は手を結ぶにしては弱くなりすぎたぞ？ 赤井はこちらについてくれるだろうが、それだけでは三好には足りぬ」

「越後の上杉はこちらについてくれますが、遠い。西国の毛利と大友は互いに相争っている。となると尾張の織田信奈か、越前の朝倉義景か……」

「三好を討つならば、六角はどうだ？ 石山崩れを成した男ならば不足はあるまい。まあ、今は織田と睨み合っているがな」

「ともあれ、その辺りの大名に声を掛けてはいかがでしょうか？ 二家ついてくれれば、太刀打ちは出来ましょう」

藤孝の言に頷き、義輝は御内書を書き記し始める。

その一言一句が、乱世を回天させる一助になるだろう。

義輝はそう信じてやまなかった。

*

西濃・菩提山城に一人の武将が赴いていた。

「いよいよ、かの者に頼らねばならぬとはな……」

肩を抑えながら、武将は登場する。

安藤守就。

美濃三人衆の一人で、かつて斎藤道三の片腕だった男である。

（道三様がご健在ならば、このような国難など如何様にも出来たもの……）

悔しさに守就は齒噛みする。

現在、美濃は北は朝倉景鏡に、南は織田信奈に、西は浅井長政に攻められていた。

このうち北の情勢がもつともよく朝倉景鏡は郡上郡の小城を二つ奪っただけに留まっている。反面、もつとも芳しくないのは、守就ら美濃三人衆が防戦を務める西濃で浅井長政は美濃の赤坂まで進出してきていた。

「このまま大垣城まで落とされれば、稲葉山城は喉元に刃を突きつけられたも同然。なんとしてでも守り抜かねばならぬ」

国難の危機に守就は先日、ついに決断する。己が姪で軍師としての才覚を見せ始めている竹中半兵衛を戦場に連れ出すことを。

（すまぬな、半兵衛。しかし、こうでもしないと我らはもう保たぬのだ）

竹中半兵衛は、病弱で臆病で人見知り。

才覚を抜きにすれば、到底戦さ場で戦えるような少女ではない。

だから、守就は半兵衛を菩提山城に逃した。この乱世の荒波に巻き込まれぬようにと。長くその命を繋いでくれるように、と。

しかし、もはやそのような甘い夢を見ていられるような情勢ではなかった。

「伯父様、何か御用ですか？」

守就の求めに応じて、すぐ彼の元へ一人の姫武将が姿を現した。

栗鼠のような小柄な身体に憂いを帯びた瞳。短命の者特有の儂さを持ったその美貌は傾国と表現しても大袈裟にはならない。

「さつきに言っておく。すまぬ、半兵衛。もうわしらはそなたを守れぬ。……戦さ場に出て、わしらを導いてくれ」

半兵衛の姿を見た守就は、申し訳なくて頭を地に擦りつける。もはや、その姿を直視できなかった。

「伯父様、顔をあげてください。わたしはもう十分に守られました。たくさん義を伯父様から頂きました。なればこそ、今この時に報いずしてなんとするので。不肖、竹中半兵衛重虎。この身を以て、外敵と戦います」

凜とした声が守就の耳朵を打つ。

(かようなまでに、勇ましく育っておつたのだな、半兵衛……)

申し訳なさか、あるいは嬉しさか、はたまた安堵からか、守就の双眸から涙が流れ出でる。

半兵衛は静かに守就の頭を撫でていた。

*

半兵衛が加わってからの美濃三人衆は人が変わったように強くなっていた。赤坂まで進出していた長政に逆撃を食らわせ、関ヶ原の西に追いやると、十面埋伏の計で一度、石兵八陣と水計の合わせ技でもう一度、都合二度織田信奈を撃破した。

北の朝倉義鏡はこの報を受けて撤退。

美濃は平穏を取り戻したのだった。

「竹中半兵衛をなんとかしねえと、信奈が長政の野郎と結婚させられちまう……!」

ただ、その状況を座して見ることをよしとしない者もいた。

相良良晴。

織田信奈に仕えることになったもう一人の未来人である。

彼は配下の忍びである蜂須賀五右衛門から伝えられた報を使い、一つのアクションを起こすことにした。

「俺が、半兵衛を誘降する。そうすれば、美濃は信奈のものにできるはずだ!」

意気揚々と良晴は美濃へ旅立つ。

そこで様々な波乱や思惑が待ち受けていることなど、知る由もなかった。

第31話 奇遇

「やばいな、竹中半兵衛。さすがは天才軍師と呼ばれるだけのことはある」

竹中半兵衛の出慮による美濃包囲網の瓦解を知らされた俺は思わず笑ってしまっていた。

浅井、朝倉、そして織田。武田や飛騨の三木が加わっていないとはいえ、三方から攻められては美濃はまず保たない。そう思っていたら、まさかの美濃側の完勝である。

「まあ、これで織田の美濃攻略までには猶予ができたわけだ。それに、停戦の材料にもなる」

河原田の戦いで滝川一益を叩きのめし、桑名まで取つてもなお織田はこちらとの対決姿勢を崩してはいない。

今は小競り合いに終始しているが、いつ何かあるかわからず警戒のために俺は観音寺には帰らずに伊賀上野に留まる事態になっていた。(観音寺に比べるといささか退屈だが、伊賀上野にいることは別に悪いことじゃない。伊勢を獲れば、統治の比重は必然と南に傾いている。そうなる観音寺に本拠を置き続けるのはちとやりづらい。今のうちに少しでも慣らしておかないとな)

いずれは伊賀上野に本拠を移すつもりではあるが、まだ大々的な開発をやるだけの余裕はない。早くて洛東の情勢が収まったぐらいだろうか。

「先のことより、今のことだな。織田をなんとかしないと南伊勢には進めん。停戦するなり、押さえつけるなり手を打たなきゃな」

そう切り替えて俺は思案を重ねる。感覚で四、五十分考えたぐらいだろうか。一氏が訪ねてきた。

「お館様、よろしいでしょうか?」

「いいぞ、入ってこい」

俺が呼びかけると、静かに一氏が室内に入ってくる。

黒を基調とした装束とは対照的な腰まで伸びる橙色の髪と切れ長の赤い瞳。着物の裾と長足袋の間の白い太腿が生み出す絶対領域は

思春期真っ只中の我が身には目の毒だった。

(やつぱ、六角家の姫武将つて無駄にレベル高いよな……)

かの長谷川等伯が描いた障壁画でもっとも手がかったのは、『六角姫武将立姿像』だったという。

この障壁画には、侍大将以上だった義定、山岡殿、氏郷、吉継、一氏、長束正家の6人の姫武将が描かれており、描き切った後の等伯は俺の手を取り「良きものを見せていただきました。これ以上にならない眼福にござりまする」と一礼してきたことを覚えている。

……脱線した。今は一氏の話を聞くとしよう。

俺は居住まいを正して一氏を見据えた。

「美濃について調べました結果、竹中半兵衛が仕官面談を行なっているようです」

「半兵衛が仕官面談ね……。それが事実なら半兵衛と接触する好機ではある……」

竹中半兵衛の令名は美濃包圍網の瓦解を果たしたことで洛東に轟いた。美濃を本気で狙う織田や浅井にとっては、彼の存在は悩みの種に違いない。おそらく、織田も浅井も何かしらの形で接触を図るだろう。

「ならば、座して見ている訳にもいかないな。半兵衛をこちらに連れてくるのが最上だが、最低限、浅井と織田の様子を探ればいい」

浅井と織田は真偽が定かではないが、婚姻同盟を結ぼうとしているという風説がある。

あいつのことを少しは知っているつもり俺からしたら、わざわざ婚姻という手段をあいつが取るとは思えない。

政略的な利点は理解できる。しかし、その心のありようはまったくわからなかった。

「なあ、一氏。その仕官面談、俺が行ってもいいか？ 一国の主人がすべき行動じゃないのは分かってる。だが、このもやつきは座して待っているばかりでは増すばかりだろう。どうしても、俺の目で確かめたいことがある」

俺の問いかけに、一氏は思わず眼を見開いた。クールな彼女らしか

らぬその仕草はどこかおかしくて軽く吹き出しそうになってしまふ。
……まあ、普通はそうだよな。国主自らが他国に潜入するなんて
行中の蛮行だ。

「私の一存ではなんとも。……義定様にお聞きしては？」

「そうだな、早速行ってくる。伝えてくれてありがとな」

決めた以上は、早い方がいい。俺はすぐに部屋を出て、義定の元に向かうことにする。なんとなく難航しそうな気がするけど、気にしないことにした。

*

俺に美濃に行きたいと伝えられた義定はこめかみを押さえていた。

「まあ、わたしも織田と浅井の婚姻同盟の噂は気になるけどさ……」

「だろう？」

案の定、義定の反応は芳しくない。けれども、これぐらいで引くならわざわざ顔を見せるほどのことじゃない。

「事実だけなら一氏で充分だ。ただ、思惑となるとやはりあいつと学び舎で過ごした経験のある奴がいい。氏郷は伊勢との繋がりが強いから残しておきたいから除外。吉継はやや人見知りの気があるから、流石に他国に向いて動くのは辛いだろう。つまりは俺かお前かが行くのが適切だろうな」

「うーん、流石に国主の新十郎を行かすのは……。でも、わたしは猿夜叉丸にはちよつと避けられてたから辛いかも」

「意外だな。もうちよい仲が良いものだと思ってた」

「無駄に勘がいいからかな。結局のところ、わたしは自力で猿夜叉丸が女の子だって事実にとどり着いた訳だし。その可能性は多分向こうの頭にあつたと思う」

悩む義定。俺が行くというリスクに眼を瞑れば、案外理に適ってるのだろう。完全に長考の体勢に入っていた。

体感5分ぐらいだろうか。

義定は胸の前で組んでいた腕を解き、一息ついた。

「ふう、仕方ないね。お願い、新十郎。ただ護衛に一氏はつけておいてよ」

「すまないな。今回ばかりは完全に俺のわがままだ」

「後で埋め合わせをしてくれれば、別にいいよ。そっちが安心して無茶できるようにするのが、わたしの仕事だしね」

そう言つて、彼女は笑う。

埋め合わせをする時は盛大にしてやろう。そう誓つて俺は美濃行きの準備を始めるのだった。

*

桑名から北上して、美濃に入る。大垣まで来たら東進したら、稲葉山城とその城下町・井ノ口は近い。

「ここで、仕官面談をやつてるんだな」

長良川を望む井ノ口の中でも一等地に会場である鮎屋はある。

普段ならば落ち着いた雰囲気なんだろうが、今は半兵衛の下で一旗をあげようとする侍の熱気で満ちていた。

そこで、俺は思わぬ人物と遭遇することになる。

「え？ 長政？ なんで？」

「高村……」

江北の貴公子こと浅井長政。

俺と同じく国主であるはずのあいつが、美濃に居た。

ただ、それだけじゃない。

「お前が、六角高村なのか……？」

明らかに見覚えがある。しかし、その服装だけは、この時代ではあり得ないものだった。

遠い日の記憶が蘇る。俺がその服を着ていたのはもはや15年前だろう。まあ、前とはいえカレンダー上では遙か先の話なのだが。(学ランをまさか戦国で見ることになるとはな。懐かしい……。まあ、俺という転生者がいるんだ。だったら、漂流者がいても理屈上はおかしくはない。が、やつぱりびつくりはするよな……)

相良良晴。

織田に仕える未来人。長良川では斎藤道三を救い、桶狭間では今川への奇襲に必要な情報を提供し、義元を捕らえた東海屈指のスタンドプレーヤーまでもがここにいた。

(やれやれ、これに加えて竹中半兵衛だ。あまりに役者が揃い過ぎて
るな……)

俺は内心で深いため息をついた。

第32話 対面

話を聞いた限り、長政は半兵衛を調略しに来たらしい。本人が来た理由としては「竹中半兵衛は姫武将と聞いているからな、六角の家中と同じように誑かすつもりだ」とのことだった。

「それで天才軍師が堕ちるなら楽でいいわな。まあ、俺も来た理由としてはそんなとこだよ。能吏と猛将こそ六角にはいるが、全体を見れるやつが俺しかいない。義定は宰相や軍師というよりかは、副将として穴を埋める役割かな」

間違つてもお前らの様子を探りに来た、とは言えないのでそう答えておく。

「まあ、ここでは六角高村ではなく浪人の佐々木高広で通すよ。こっちもお前を近江商人の子息、猿夜叉丸として扱ってやる」

「そうしてくれるとありがたい」
ともかく、互い異国に不用意に踏み込んだ身だ。ここは手を組むのが適切だろう。

「で、相良良晴。お前は普通に半兵衛を取りに来た、と。そういう理解でいいよな」

「いや、違うね。俺はもう信奈の横暴には耐えかねたんだ！俺はサルじゃねえ、人間だ！」

俺が適当に話題を振ると、ぶんすかと相良良晴は怒ってみせる。しかし、いかんせん迫力がない。それがただの方便なのは明らかだった。

きつとその実は調略だろう。半兵衛を不干渉にするだけでも、織田には大きい。

「まあいいさ、動機がなんであれ目的が半兵衛にあることはわかった。とりあえず飯を食おうぜ。俺は腹が減ったんだ」

目の前の鮎料理を指差して言う。せっかく美濃に来たのだから少しぐらいはその土地の物を楽しまないともったいない。

(それにやってみてわかったが、戦ならばともかく顔を合わせての腹の探り合いはちよつと俺には向いてない。ボロを出さないようにしなくちゃな)

半ば自己防衛として俺は鮎の塩焼きを頬張る。

普通にうまいな、これ……。

俺が完全に食に集中したためか、長政と相良と前田犬千代の三人もまたその舌鋒を納めることとなった。

*

鮎を三皿くらい平らげた頃だろうか。

俺と相良に犬千代、長政はこの仕官面談を主催した安藤守就に連れられ、奥の個室に案内された。

「おのおの方、くれぐれも半兵衛を怒らせぬよう。我が一族ながら、あやつはキレると何をやらかすかわからぬゆえな」

忠告を残して安藤守就が去る。

その後、すぐに一陣の微風が頬を撫でた。

あまりにくすぐつたくて思わず目を閉じる。

そして、見開くと同時にそこに見慣れぬ青年がいた。

「いかにも、俺が竹中半兵衛重虎。以後お見知り置きを」

丁寧な口調とは裏腹に半兵衛は寝そべって俺たちを見ていた。あまりに無礼だが、それを咎める者はいない。

「よもや、気配がまるで感じ取れぬとはな……」

長政をはじめとして、俺たちは半兵衛が前触れもなく姿を見せたことに對する驚きでそれどころじゃなかった。

(きつと何らかの術者だろうな……)

信じがたい話だが、この世界にはまだ神秘が残っている。転生者の俺や漂流者の良晴は言わずもがな、他にも本当にごくわずかだが陰陽道や密教などの秘術を使う者がいる。

今回の半兵衛の登場の仕方はあまりに物理法則に反しているため、俺はその未知の法則を持つ者の一人として半兵衛を仮定した。

「自己紹介痛みいる。俺は近江浪人の佐々木高広と申す者。刀にはいささかの心得がございますれば、よしなに」

一応、自己紹介を返してみる。すると、半兵衛はそれを鼻で笑った。「近江六角の当主が俺に遜る必要などあるまい。残りの御三方も取り繕う必要はないぞ。すでにその正体を知っているゆえにな」
「そうか。ならば、少し砕けた言葉で話させてもらおう。あいにく、俺は少々生まれがいい。だから、あまり遜るのは得意ではないんだ」
バレた動揺はあまりない。むしろ、そんなものだろうと思っっている。名将にしろ名参謀にしろ、そういう人種は大概耳が早く目ざといものだから特段おかしいことではない。

過大評価でもなく、まさしく竹中半兵衛は名軍師である。

その確認はこの一点で果たされた。

(しかし、軍略に加えて何らかの術者ときたら相手取るのは容易ではない。半兵衛に絡め手で張り合えるのは松永久秀ぐらいしかいないかもな……)

冷静に考えてもチートだと思う。軍略に優れ、さらには陰陽道で無理やり戦況を変えるパワープレイもできる。

織田を撃退した時には半兵衛自ら霧を起こしたらしい。おそらく雨も降らせられるのだろう、そうなると鉄砲は無力になる。

(本当に織田にとっては天敵だな……。やれやれ、あくまで第三国の立場でよかつたぜ……)

思考を巡らせていると、半兵衛が「遠路はるばるよく来られた。少し小腹も減っていよう？ これでも食べて一服するのがよかろう」とみたらし団子と茶を振る舞ってくる。

良晴と犬千代はこれに素直に喜び、長政は団子に塗られた八丁味噌が苦手なため、まごついてる。

「すまないな、半兵衛殿。しかし、ここに来るまでに鮎を三皿平らげたせいか、腹に余裕がない」

俺は普通に断った。

というか、自分達の正体を看破している敵が勧めてきたものなど怖くて食えない。……まあ、俺は打算もクソもなく鮎を食い過ぎただけではあるのだが。

他が他なだけに若干居心地が悪かったが、結果的に俺の判断は正し

かつたらしい。

団子を口にした相良良晴はえずき、お茶を飲んだ前田犬千代は盛大に咽せていたからだ。

「ひっかかったな！ その団子に塗ってあるのは味噌ではなく、糞！

お茶はウマの小便よ！」

ケタケタと相貌を崩して半兵衛は笑う。

この相貌を崩しては比喻ではない。まさしく、竹中半兵衛だった青年は顔を妖狐のものに変化させて相良良晴たちを嘲っていた。

「ああ、つまりはそういうことか……」

竹中半兵衛は姫武将である。

長政はその風説を信じて美濃にやってきた。

だが、火のないところには煙が立たない。……そして、この世界では竹中半兵衛が本当に姫武将であったとて何も悪影響があるわけでもない。

ならば、やることは決めた。

腰から太刀を抜き、一息に半兵衛を斬り伏せる。半兵衛はろくに抵抗出来ずにそのまま崩れ落ちた。

「おい、六角高村！ 何をやってるんだよ！ 半兵衛を殺したら意味ないだろ！」

相良良晴は叫ぶが、気にも留めず俺は言い放つ。

「近くで見ているんだろう、竹中半兵衛！ 影武者相手じゃ埒が明かねえ！ さっさと姿を現せ！ さもなくば、手勢を呼んで力づくで引き摺り出すぞ！」

すると、物陰から一人の少女が慌てながら飛び出してくる。

年は中学生くらいか。銀髪をツインテール風に結び上げ、浅葱色の筒服を着ていた。

「一応、聞いたく。……お前が本物だな？」

問われた少女は頷く。その目は涙で潤み、身体はがたがたと震えていた。

「そうです。……わたしが、竹中半兵衛です。出てきましたから、殺さないでください。くすん、くすん」

少女が、本物の半兵衛が言おうと長政たちは驚いた後にじとりと俺に非難の目を向けてくる。

なに、俺が悪いの？

俺は目で抗議したが、数の差には如何ともし難く辺りには気まずい空気が流れるのであった。

第33話 思惑の稲葉山

仕官面談の翌日。

俺たちは半兵衛に伴われて稲葉山城への登城路を登っていた。

とりあえずは仮初めの家臣、ざつくり言えばサクラとしての勤めを果たしてから今後の動きを考える。

そう俺と長政と相良は取り決めた。

「井ノ口の町を王城と見立てればまさしく背山臨水。井ノ口の町と稲葉山城は、陰陽道の理にかなった王都と言えます。天下の望む蝮さまや織田信奈がこの城にこだわるのも分かりますね」

半兵衛の解説を交えながら、城を検分する。

それにしても、厄介な城だと思う。

井ノ口の町も市街戦ができるようになっており、木曾川や長良川が堀となる。稲葉山城の立つ金華山は独立峰のため、北の山々から尾根伝いに迫ることも難しい。ここまで規模が大きいと、水の手も城内に確保しているはずだろうから火攻めも有効ではないのだろう。

「どうだ？ 猿夜叉丸に相良、この城を落とす算段はつきそうか？」

気まぐれに問いかけてみると長政は苦笑いを浮かべ、相良は「いや、無理だな」とつぶやいた。

「そういうお前はどうかんだ、新十郎？」

「内応で城内を疑心暗鬼にさせることかな？ 義龍殿は未だ美濃の将の人心を完全に掴めてるわけじゃない。彼らはおそらく道三よりはマシと思っている程度だろうから、そこを突くかな」

俺の発言に、半兵衛は「くすくすん、新十郎さんは物騒です」と震えた。

半兵衛の影武者……式神の前鬼を斬り伏せた辺りから半兵衛は完全に俺を怖がるようになってしまっている。

(こりゃ嫌われたな……。まあいい、最悪は浅井と織田の情勢を探れたらいいさ)

しばしば長政と相良は互いにいがみ合っている。

おそらくは長政の仮想敵であろうこの俺の前であるにも関わらず

だ。

(直情的な相良の気質だろうな……。んで、長政も鼻っ柱が強い方だからつい言い返したくもなる)

こども相性が悪いと笑えてくる。長政は内心では舌打ちをしているだろうが俺には幸いだ。

(今回の政略結婚は両家は同盟の利は理解しているのだろう。ただ、織田側はあまり乗り気ではない。浅井はなんか無理やり強行しようとしてるな……。多分俺が伊勢を取り切る前には終わらせる腹だろう)

ただ、それでも婚姻を取る理由にはならない気がする。

(両家の間には付け入る隙はある。だがまあ長政についてはまだ調べの必要はあるか……)

俺は言い争う相良と長政を見ながら、静かに歩を進めていた。

*

城内に入った高村を迎えたのは、斎藤家臣団と武装した数百人の兵だった。

「竹中半兵衛重虎！ 謀反のかどでお前を投獄する！」

居並ぶ家臣団の最奥に座する義龍は号令をかけると同時に兵をけしかけてくる。

「何故ですか、義龍様?! わたしにそのような意志などございませんっ！ 誰かの流言飛語ではないでしょうか？」

「ええい、黙れ！ 決めたことだ！ それに誠にわしに忠心があるならば、何故織田と浅井を中途半端に追い返すに留めた？」

「戦勝を得たらば退き、転じて他を支える。美濃全体を見回したとき、あの時はそうすべきと考えたゆえにございます」

「甘い！ 敵ならばことごとく打ち果たすべきであろうが！」

半兵衛は弁明を図るが、義龍は聞き入れない。

だが、理は半兵衛にあると高村は思っている。

半兵衛の言う通り朝倉と浅井と織田の三家の包囲を凌ぎ切るには戦線を打開したならば、他の戦線を支えるといった臨機応変の動きが必要だった。

おそらく、浅井か織田を完膚なきまでに叩きのめすこともできたのだろう。しかし、そこに労力を割いているうちに一ヶ所でも戦線が破断していたら斎藤家は滅ぼされていたに違いない。

「御託はもういい、大人しくお縄につけ半兵衛！ ちなみに守就に助けを求めても無駄だぞ？ すでにわしの手勢を奴の屋敷に向かわせているからな！」

この言葉は決定的だった。

もう義龍は自分の答えを出しているらしい。

ハナから半兵衛を始末するつもりで呼び出したのだろう。

「囚われたら、犬千代たちの身分がばれる……。抗うしかない」
「だな」

前田犬千代に倣って高村もまた刀の柄に手をかける。それと同時にカツと密かに踵で床を叩いて一氏に変事を伝えた。

「これ以上の弁明は獄中で聞く！ 皆の者かかれ！」

義龍が号令をかける。

いよいよ、城中での斬り合いが始まった。

「謀反など致しません。ですから、何卒……」

高村や長政、犬千代が大立ち回りを演じる一方で半兵衛はこの後に及んでなお、赦しを乞うている。

それを見て良晴は彼女の肩を叩いて微笑みかけた。

「もういいんだ、半兵衛ちゃん。もう義龍に話は通じない。ここは俺たちに任せて逃げるんだ」

「しかし、良晴さんたちは本来わたしの家臣ではありません。わたしの破滅に巻き込むわけには……」

「確かに、俺たちは君の家臣ではない。だがな、泣いている女の子を見捨てたら俺が俺でなくなっちゃう。それが嫌だから俺は君を守るよ」

もつとも、高村や長政並みの武勇がない俺がどれだけ出来るかはわからないけどな。

そう言って、良晴は苦笑いを浮かべて締めた。

「話は終わったか、相良？ しんがり俺がやっておく！ 生き汚いことに定評のあるお前ならば、半兵衛を逃すことに専念すればなんと

かなるはずだ！」

「すまねえ、高村！ 生き残ったらお礼する！」

高村の叫びに従って良晴は半兵衛を引き連れて稲葉山城を下っていく。

後はまだ乱戦だった。

百の兵が高村に斬りかかるが、てきぱきと処理されていく。

「足りねえな、義龍！ 一騎当千とは言わないが、五百は持つてこないと俺を討ち取れないぞ！」

斬り、刺し、打撃。

持てる技術の全てを駆使して高村は敵を屠る。一氏もまた乱戦に参加し、数十人を再起不能にしていた。

「これだけの武勇となると、わしの心当たりは一人しかいない……。六角、高村か……！」

ついに義龍も高村の正体を看破する。それに高村は獯猛に口の端を吊り上げて応えた。

「御明察。さて、斎藤義龍。さつき五百持つてこいと言ったが、あれはやめだ。そろそろこの蹂躪も飽きてきたからお前の首を奪って終わらせるッ！」

啖呵を切る高村だが、虚勢にすぎない。内心ではそろそろ限界を感じていた。

(さすがに騎馬もなしで百人単位は身体が保たねえ。逃げようにも、惹きつけすぎてしまったからな。ここまでやった以上、降参もできねえしな……。まあ、半兵衛や長政を逃がせただけよしとするか。……さて)

再度、カツンと床を叩く。

ここは退け、という合図なのだが一氏は首を横に振った。

(ちっ、後はお前だけだというのにこの意地っ張りめ……。まったく義定にどう言い訳するかな……。いや、死人に口はないから考えても無駄か)

* いよいよ高村と一氏の進退が極まった。

時は少し遡る。

竹中半兵衛重虎は稲葉山城の山麓で身を潜めながら泣いていた。

「わたしのせいで、多くの方に迷惑をかけてしまった……っ！」

六角高村に浅井長政。相良良晴と前田犬千代。

彼らはいずれも美濃に縁のある人物ではない、むしろ高村を除けば自らの敵にあたる。

それなのに、彼らは自身の逃亡に手を貸してくれた。少なからず利用する魂胆は彼らにはあるだろう。

半兵衛はそのことを理解している。けれども、利用されてかまわなかった。

(主の義龍様以上の義をこの人達はわたしにくれた。だから、今度はわたしは返さなくてはならない)

義。

それは主体性が少ない半兵衛を唯一行動に移らせる理由になるものだった。そもそも病弱な身を押しして乱世に漕ぎ出したのも、今まで庇護してくれた安藤守就の義に報いるためだった。

「さて、半兵衛ちゃん。後はもう逃げてくれ。俺と犬千代は高村たちを助けに戻るよ」

半兵衛の内心をよそに良晴は反転を始めようとしていた。

それを、半兵衛は呼び止める。

「良晴さん。どうして死地を乗り切ったのにわざわざ戻るのですか？」

六角高村は伊勢で織田家を完膚なきまでに破った相手です。あなたにとっては敵なんですよ？」

高村を見捨てた方がいと半兵衛は進言する。それは言外に自分も見捨てた方がよかったのでは？ という問いも含まれていた。

「確かに半兵衛ちゃんの言う通りかもしれない。だが、俺はそれでも戻るよ。確かにあいつは織田家の敵だ。見殺しにした方がいいのかもしれない」

けど、と良晴は続ける。

「それでもあいつは、高村は俺たちを助けてくれた。そんなあいつを見捨てられるほど、俺は大人にはなれない」

その言葉を聞いたとき、半兵衛の心がトクンと跳ねた。

義心に燃えるのとは、違う熱い何か胸の奥底で蠢いている。

「良晴さんはおバカですね」

「そうかもな。でも、それで構わない。それで守りたい誰かを守れるなら、な」

そう言つて、良晴は屈託なく笑う。

その笑みを見て半兵衛はついに自らの心の所在を理解した。

「良晴さんはおバカです」

「まあな。つてそれ2回も言うことか？」

「おバカさんなら、誰かが見ないと心配ですよね」

「だろうな」

「だから、わたしも行きますよ。共に高村さんを救いに行きましょう」
毅然と半兵衛は言い放つ。

それと同時に懐からドーマンセーマンのお札を取出し、辺りに広げた。

「皆さん！ 敵は稲葉山城にあり！ 城を登り、高村さんを救い出すのです！」

半兵衛が号令をかけ、山麓から異形の式神たちが攻め上らせる。

そこからは早かった。

式神たちは城内の兵をことごとく蹂躪。それを見た義龍らは驚き惑つて稲葉山城から逃散した。

「いや、嘘だろ。ガチで落ちてんじゃん、稲葉山城」

かくして稲葉山城に残されたのは高村たちと式神たちと共に舞い戻ってきた半兵衛たちのみ。

結果的に、この場にいる七人だけで天下の臍たる稲葉山は陥ちた。

第34話 転換

「すまない、相良良晴、竹中半兵衛。お前たちのおかげで救われた」
騒動の後処理を終えてすぐ、高村は相良良晴と竹中半兵衛に前田犬千代、身を隠すことをやめた蜂須賀五右衛門の四人に頭を下げていた。

「気にしないでくれ、高村。あんたがしんがりをやってくれなかったら、俺たちはここにいなかった。だから、顔を上げてくれ」

武勇の誉れ高い高村がいなければ、おそらくは良晴達ではなす術もなく討たれていただろう。そのことは、良晴自身は理解していた。

「高村が身体を張った一方、お前ときたらちやつかり斎藤方に寝返ろうとしてたもんな……」

良晴と犬千代のじとりとした視線が長政に向けられる。

高村にはあずかり知らぬことだったが、長政は逃亡中に斎藤方に寝返ろうとして許されず、遁走したという一幕があった。

「一国の太守たるもの、なんとしてでも命を拾わなくてはならぬ時もある。子供のお前ではそれがわからないか？」

「流石、俺と何度も戦って命を拾っているやつ言葉はちがうな」

長政は抗弁を試みるも、高村の茶々ですぐに口を閉じざるを得なかった。

(むむ、どうにもやりづらい。やはり、高村がいる場で口八丁は通じないか……)

完全に高村と長政の縁が不利に働いている。

おそらく高村がいる間は半兵衛を籠絡することはできないだろう。

(それに半兵衛とサルの距離が近い。完全に差をつけられたか……)

焦る長政。それは無理もないことである。

江南・北勢・伊賀三ヶ国合わせて七十万石の六角。

尾張一国で五十七万石の織田。

美濃五十四万石の斎藤。

そして、江北のみで四十万石の浅井。

外交関係を加味しなければ、洛東の大名の中で単純な国力では北畠以外には劣るのだ。

ゆえに、長政は竹中半兵衛という強力な手札をこの中の誰よりも最も欲している。

（呉越同舟もここで終わり、か。楽しかったような、気まずかったようななんとも言えない気分だ）

敵国の中で高村と自分、それに良晴が舌を競わせて半兵衛がそれを見て苦笑いを浮かべる。美濃では終始そんな光景が繰り返されていた。

国同士の利害が関わっているものの、どこか穏やかな時間だった。おそらく国元に帰ったら、こんなことはないだろう。

自分の中に芽生えた妙な感慨に長政は苦笑いを浮かべた。

*

翌朝、稲葉山城の一室で目覚めた俺の元に凶報が入った。

なんと、安藤守就の行方が知れないという。

（安藤殿は半兵衛の泣き所だ。半兵衛の性格上、安藤殿を無下にはできない。彼を拐った奴の目的は半兵衛を封じることか）

一瞬で頭も覚める。

考えられるのは、斎藤義龍。あるいはもう一人。

「一氏。長政の動向を探ってくれ。俺の読みではあいつが怪しい」

「いえ、それには及びません。……こちらをどうぞ」

一氏の懐から、一通の書状が手渡される。

中身を見ずともその封書の筆跡で俺は下手人を察した。

「長政か。ということは、安藤殿は下手したら江北まで連れ出されている訳か」

今回の一手で、長政の半兵衛に対する手立てが明らかになったと言っている。

半兵衛と接触し、可能な限り誘降を試みる。

それが成らないと分かれば、江濃国境に待機させている手勢を使って安藤守就を拉致。半兵衛を誘い出して捕らえるか、あるいは始末してしまうつもりなのだろう。

(昨日の一件で分かった。半兵衛は余程こちら側が有利な状況でないと相手してはならない。それだけ戦況を覆す力がある。敵に渡すぐらいなら殺してしまった方が……って考えてもおかしくはない)

その実、半兵衛が消えても損する者はいない。戦況が美濃包囲網を敷く前に戻るだけのこと。強いて言えば美濃勢が損をするぐらいだが、生憎彼らは自分自身で彼女を切り捨ててしまった。

「とりあえず、相良良晴に伝えるか」

その後、一氏を通じて相良に事態を伝えた。

良晴側にも例の書状は届いていたらしく、対応に頭を抱えている。

なぜならば、書状の内容が「小谷城に竹中半兵衛を連れてくれば、安藤守就を返す」というものだったからだ。

「なにが『サルと高村、うるさい男二人がいるところでは愛を語らえませう』だ！ 信奈には愛なき政略結婚は世の習いって言つてたじゃねえか！」

良晴が書状の中でも殊更に気障ったらしい一節を読み上げて喚く。
うーん、愛はないのはともかく長政には種すらないからな……。どうやって家を残すつもりなんだろ、あいつは。

……いかん、ちよつと脱線した。

正直、これほど見え透いた罫もないが半兵衛の性格上、従わないわけにはいかない。彼女らしからぬ悪辣かつ強引な手立てだった。

「俺は半兵衛ちゃんの意味を尊重するよ。それに危ないと分かるなら初めから俺たちが守ればいい」

良晴は即決するが、俺は「やめとけ」と首を横に振った。

「流石に半兵衛一人のために、手ぐすね待っている長政の元に向かうのはおすすめでできない。命が惜しければ、やめとけ」

「だったら、どうすればいい!?!」

「隠密を使つて安藤殿の身柄は押さえておいた方がいい。長政の優位を崩さなければ、局面を変えることはできないだろうさ」

情に走るのはいい。それは、場合によっては徳になる。

俺は、左手で自分の頭を指差しながら続けた。

「相良。気持ちのままに走るのは結構だが、ここも使え。気持ちを実

現するための合理的な手立てを考えろ。さもなくば、振り回されて死ぬぞ。この戦乱の世はただのお人好しを生かすほど甘くはない」

相良は俺の話を静かに聞いていた。そして口を開く。

「意外だな、高村つてもっと突き放されるものだと思ってた」
「なんかこう、もつと突き放されるものか冷徹な印象があつてさ。」

「多分、それは滝川一益に聞いた話だろう。まあそんな面もあるのは否定しないよ。だが、それは公人としての顔に過ぎない。一応、俺も血の通った人間だからな。気まぐれに人助けをする時だつてある」

織田では俺は敵にあたる。しかも未来知識という前情報もなく畿内方面での戦果が伝え届いていると考えたと、相良にとって俺は最も警戒する対象と言つていい。

だから、俺の目的を果たすにはその警戒を解く必要がある。

「まあ、浅井に半兵衛が行かれるのが一番嫌だつて打算もあるけどな。ともあれ、此度の一件は相良に助力する形で動くよ。半兵衛もこの際諦める」

「すまねえ、ありがとう高村！」

素直に喜ぶ相良。必要なこととはいえ、妥協しまくつてただ働きをするだけでは流石に割に合わない。

「ただ、代わりつて訳じゃないけど稲葉山城の借りを返すと思つて一つ頼みたいことがあるんだが、いいか？」

だから、俺は相良に一つ要求を突きつけることにした。

「俺に出来ることなら、なんでも」

気を良くした相良は鷹揚に頷ぐが、その余裕はおそらく失われるだろう。俺は今、それだけの大きな手を打とうとしている。

「織田と六角の休戦。ひいては同盟。その取次をしてもらいたい。要するにあれだ。浅井とうまくいきそうにないなら、やめちまえ」

「なつ………」

あまりの驚きに相良は声を詰まらせる。

初めは半兵衛を狙っていたが、長政と相良の反目を見て考えが変わった。

一人の軍師の力量に頼るのもいいが、織田の五十七万石を味方につ

けて洛東のパワーバランスを変えることの方が确实だと。幸いなことにその機会は目の前に転がっていたも同然だった。

「……すまねえ。俺の一存で答えられることじゃねえ。信奈に聞いてみないと分からない」

急な話だったためか対応できなかつた相良が頭を下げる。だが、織田と浅井の間に楔を打ち込めたから別にいい。

ひとまず、これを一応の成果とする。

……流石にこれだけ国を空けといて何もありませんでしたじゃ、義定になんて言われるかわからんからな。これなら大丈夫だろ、多分。

「……盛り上がっているところ、悪いけどこれを見る」

内心安堵していたところに前田犬千代が俺と相良に紙を突きつけてきた。

そこにはあまり似てはいないが俺と相良、前田犬千代に似せた肖像画が描かれている。

「犬千代たち、お尋ね者になっている……。これでは美濃にいられない……」

肖像画に長政が含まれていないことから、おそらくこれは奴の策だろう。流石に舞台を取り上げられたら、何もできない。長政の作戦勝ちだ。

仕方ないので、一氏や相良の忍びである蜂須賀五右衛門を安藤殿の奪還に残して俺たちは帰ることとなった。

*

長政の策により、良晴たちが美濃を退去した後のこと。

稲葉山城の本丸屋敷にて二人の武将が対峙していた。

「よくぞ、半兵衛たちを退去させてくださいました。猿夜叉丸どの」
六尺五寸の巨体を縮こまらせて、義龍が長政に礼を述べる。本人には特段その意思はないのだが、道三に似ないらくがきみたいな顔のせいでひどく滑稽に見えてしまう。

「いえ、これはただの意趣返しに過ぎません。ここまで手間をかけさせられても、彼らを許すほど私の心は広くなかったのです」

あえて素っ気ない態度を取る長政。笑いをこらえるのと、その実は

恩を売ったのではなく失点を回避しただけという事実から視点を逸らすのに必死だった。

「ひとまずはこの恩、受け取っておこう。しかし、長政殿も命拾いされましたな。織田が美濃を呑むようになれば、同盟どころか浅井は織田に従属せざるを得ない。それでは、六角の下にいた時代とは何も変わりますまい?」

「つ……………」

事実を指摘され、あまつさえ痛いところを突かれた長政は閉口する。

(似てないのは、顔だけか。才覚はしかと受け継いだか……、厄介なことだ)

渋面になるが、長政はすぐにそれを引つ込める。

「だからこそ私は織田信奈を従え、高村を屈させて洛東の王になる。義龍どの、私と手を取るのならば今が好機ですよ?」

「よく言う。ならば、高村を一度でも倒してその器を証明することですな。それからならば、検討は致す所存」

はは、と鼻で義龍は笑って酒を呷る。

義龍は知らない。長政が半兵衛を未だ諦めておらず、誘い込むために安藤守就を確保していることを。

そして、長政は知らない。高村が半兵衛を見切つて織田との関係改善に舵を切ったことを。

水面下であらゆることが進んでいく。昨日の友は明日の敵。

そんな乱世に立ち、何者にも指図されない本当の意味での浅井の独立を勝ち取ると決めた時から長政は友情も情愛も切り捨てた。

(あの夜は私は自らをそういうものと定めた。そのはずだが……)

どういう訳だろうか、長政は無性に「天下を取り、かつ好いた男と結婚したい」という夢が破れた時の信奈の泣き顔が見てみたかった。(嫉妬か、私らしくもない……。ああ、でもそうか。高村に会ってしまっただけなら。ならば、致し方ないことなのかもしれない)

西南の方角を眺めながら、長政も酒を呷る。

忘れ得ぬ過去として、打ち砕くべき敵として、高村は悠然と長政の

前に立っていた。

第35話 江尾対談

美濃の首城・稲葉山城と織田信奈のいる小牧山城は近い。

これは織田信奈側が意図したもののだろうが、そもそも小牧山に本城を移転などせずとも美濃と尾張は近く、一種の経済圏を形成していた。

(東山道からもたらされる山の産物が集まる町と東海道の一大交差点。これだけの商都がわずか一日や二日で行き来できる。……なるほど、これは天下を取るに足る地力だよな)

俺、六角高村は相良良晴と前田犬千代の先導を受けながら、尾張路を通行していた。

早く伊勢に帰るべきと思わなくはなかったが、あいにく護衛の一氏は江北にやっている。ならば、単騎で伊勢に帰るよりかは稲葉山城での借しを盾に相良たちに身の安全を保障させるといふ択を取った。

「姫さまは短気で我慢が効かない……。一応、犬千代たちも守るつもりだけど、注意はしておいて……」

すでに道中では相良や犬千代から織田信奈の人となり聞いてある。いささかマイルドになってはいたが、その人物像はほぼ俺が知る織田信長に近い。

(女の子になったとはいえ、いよいよ乱世の魔王と顔を合わせる訳か。ちと緊張するな……)

第六天魔王、織田信長。

三英傑の一人にして、史実では六角を滅ぼした大名。

いよいよ、俺が転生してきた真価が問われている。

そう、感じずにはいられなかった。

*

小牧山城はまだ作りかけのためか、至る所に足場や幔幕が張り巡らされている。山の上にあるとはいえ、防御力はそこまでないのだろう。

ただ、織田信奈本人が住まう本丸屋敷は完成しており、俺たちはそ

こに通された。

「あんたたち……。よくもやってくれたわね……」

上座で胡座をかく姫武将がピキピキとこめかみに青筋を立てている。

長い茶髪は茶筌に結われ、着物は片肌脱ぎ。一応、ブラジャーや袴などで多少は露出を抑えているが、それでも当世の基準ではだいぶ派手にかぶいている方だ。

名乗られなくても、分かる。

これ、絶対織田信奈じゃん。

「あんたたちのせいで、美濃は大騒ぎよ！ おかげでわたしが放っていた間諜も尾張に帰さなきゃいけなくなっちゃったわ！ せっかく進んでた中濃の調略もペアよ、ペア！」

懐から美濃で出回っている手配書を取り出し、ぱんぱんと叩きつける。

しばし、怒りをぶつけたのち、ふうと荒い息を吐いて彼女は続けた。

「……それで、半兵衛はどうしたの？ まさか、そのいけすかない腐れ名門と遊んできただけ？」

「いや、心配には及ばんよ、信奈殿。相良たちはきっちり竹中半兵衛を調略している。まだ美濃でやることがあるから、彼女は来ていないが。ともあれ、俺が保証する」

「そう、それなら結構。……で、なんであんたはここに堂々と座ってるのよ。一応、敵でしょ？ 種子島で撃つわよ？」

言うのと、信奈は種子島を構える。まあ火は点いていないから脅しだけのつもりなんだろうが、引く訳にはいかない。

「あんたらに停戦を申し込みに来た。出来れば、同盟も組みたい」

俺が要件を言うのと、屋敷内の空気が変わった。向こうにとっては晴天の霹靂だろう。

「なんですって？」

「別に悪い話をしている訳ではないだろ。美濃をこれから本格的に攻めようって時に俺と遊んでいる暇はあるのか？ わかってないなら、一応教えてやる」

そう啖呵を切って俺は語り始める。

正直、今の織田家は手詰まりとはいかないが、やや厳しい状況にある。

竹中半兵衛の脅威こそ去ったが、西の俺たち……六角の脅威は健在だ。なまじ桑名をとって濃尾両方に国境を接しているため、斎藤と手を組まれるか斎藤を攻めている間に逆に尾張に攻め込まれる危険がある。

それに、尾張と美濃の国力は近しく義龍も割と有能。だから、少しでも戦況を有利にするために明らかに領国の北辺に位置する小牧山に本拠地を移す必要があった。そうなると領内の軍団編成が北に傾き、西南の俺が本気で攻めてきたら守るのも厳しい。

他にも楽市楽座と関所の削減を進めてるから流通が活発化し伊勢湾岸の経済が発展すること、六角領内を通ればスムーズに上洛が出来ることなどちよつとしたメリットも伝えたが、まあ軍事的な理由だけで停戦の意義は事足りるような気がする。

「見事なまでの案……。九十点です。姫さま、私としましては受けたい方がいいかと」

織田家の採点お姉さんこと、丹羽長秀が唸る。

おおよその他の家臣団の反応も同じようなものだった。

「別に同盟するからっていつて婚姻は要らねえ。互いにもたらされる経済的な利、保証としてはこれで十分だろう」

婚姻は求めない。そう明言したことも家臣団には大きかっただろう。場は賛成の空気に染まりつつある。

俺としては浅井より好条件で多くの見返りを用意したつもりだ。普通ならば、受けると即答するだろう。

しかし、織田信奈は違った。

「確かに悪くはないわよ、悪くは……。けれど、その先は？」
心臓を鷲掴みにされたような気がした。

やはり、バレていたか。意図的に隠していたことを。

「あんたの停戦案を飲めば、美濃は多分取れるわ。けれど、あんたはその間に伊勢を取る。伊勢は日ノ本屈指の難治の国、だからあんたは時

間を稼ごうとした。違う?」

「違わない」

「そうなれば、百万石の大国が二つ並び立つことになる。あんたが仮に協力の意思を見せたとしても、天下がそれを認めないでしょうね。畿内屈指の鬪将として名高いあんたを目に見える形で屈させずして、天下を取る方法はないわ!」

俺の目を見据えて織田信奈は言い放つ。

……どうやら、完全に宥和することはできないらしい、と俺はこの時理解した。

伊勢だけならともかく、俺を倒すことが天下人の証明になると言われてしまったら、流石に戦うしかない。

(これが、天命ってやつか……。どうやら六角と織田はかちあわなきやいけない定めらしい)

天命というよりかは地政学的に致し方ないところがある。織田に限らず、東から上洛を試みる大名は近江……。特に江南を押さえておくのは必須条件だ。京の後背地として持つておかないと、京が攻められた時かなり対応に難儀することになる。

まったく……。薄々わかっていたことだが、目の前が真っ暗になりそうだ。

けれど、まだだ。戦うことになったとしてもやっておかないといけないことがある。

「戦うつもりなら、それはそれで構わない。だが、いいのか? 本当に停戦しなくて。俺が攻め入れれば、十中八九は上洛すらままならない状況に陥るが?」

「くっ、ああ言えばこう言う……」

将来的には敵対するとはいえ、やはりいまの戦況において俺たちは織田にとつての泣き所らしい。再度その点を突いてやると、織田信奈は悔しそうに歯噛みした。

「将来への禍根を残すことにはなりますが、今は六角と和議を結ぶほかありませんまい。四十点」

とどめに丹羽長秀も援護射撃に回ってくれた。

これで大勢は決したようなものだろう。

証拠に織田信奈はため息を吐いて、苦々しげに口を開いた。

「仕方ないわね……。停戦は受けてあげるわよ。わかったら、早く帰りなさい。もたもたしていると殺すわよ」

「受け入れてくれて、ありがとう。まあ、そちらも美濃の攻略を頑張ってくれ」

そう言つて俺は織田信奈の屋敷を辞する。

あまり長く居たとて得るものは多くはないだろう。

(ひとまず現状の懸念はなんとかあったが、これは共存は難しいパターンかもしれない。やれやれ、信奈殿には俺が京への道を塞ぐ楯。洛東の楯にでも見えてるのかな)

伊勢への街道で馬を走らせながら考える。

未来知識を活かし、織田や徳川と共存を計れば安泰だと俺は無意識のうちに信じ込んでいた。

だが、向こうにはそのつもりはない。

となると、もはや未来知識はあまり役に立たないだろう。

自分の考えで、自分の意志で未知の歴史を作っていく。

これからはその覚悟を決めなくてはならないのかもしれない。

(まあ、伊勢の統一はその第一歩だ。どんな未来を辿るにしろ、国力はあつて困るものじゃない)

ひとまず、急いで伊勢に戻る。

あまりに国外が長引き過ぎた。その分、色々なことが遅滞しているはずだ。まずはそれを片付けなくてはならない。

少しでも早く、少しでも広く六角の力を増やしておく。

いつか来る決戦のために。

第36話 一つの策

「ねえ、新十郎。ちょっと遊び過ぎじゃない？」

伊勢に帰って来た俺を出迎えたのは、能面のような無表情で冷え冷えとした視線を向けてくる義定だった。

「すまん。けど、遊んで来たってのは心外だな……。はい、これ」

懐から一通の書状を取り出し、義定に渡す。

義定はそれを見ると目を丸くした。

「へー、織田が停戦を受け入れてくれたんだ」

「まあ、情勢を踏まえて無理やり押し通したって感じだから向こうは完全に本意じゃない。束の間の平和に過ぎないさ」

この停戦は俺の能力うんぬんよりもタイミングが良かったから出来たことだ。長く続いたとて織田が美濃を取るまでだろう。

だから、俺たちはそれまでに可能な限り中伊勢や南伊勢、志摩を切り取らなくてはならない。

「今までも負担はかけてきたが、悪い。埋め合わせはまだ先になりそうだ」

「うーん、状況が切迫してるんだったら仕方ないな……」

頭を下げる俺に義定は不承不承応じてくれた。

その後、話題は留守中に起きたことを移る。

幸いなことに三好がいる山城や大和方面では大したことはなかったらしい。しかし、北伊勢の後処理の段になった時、やや義定の表情が曇った。

「豪族たちはともかく、改易された二十七家の浪人たちが次々と南の方に流れていってるよ。わたしたちも頑張って取り締まってるけど、数が多いからどうしてもいくらかは逃がしちやってると思う」

元々北勢四十八家と呼ばれるほど、北伊勢に豪族が割拠していた。それを統治しやすくするために、減らしたのだがそれはそれで多くの不満分子を産んだらしい。

「まあ、散発的に一揆を起こされるよりかはマシか……」

だが、これは普通に南伊勢の豪族……特に北畠には有利に働く事象だろう。単独では二十数万石だが、その国司の権威を利用して伊勢国内の反六角派を糾合されたら流石に辛いものがある。

「義定。とりあえずは中伊勢の長野氏と木造氏、志摩の小浜景隆に帰順を促す使者を送ってくれ。最悪無理にこつちに就かせなくてもいい、北畠とこつちの間で日和見するぐらいでいいや」

「けっこう根回しするね。北畠ってそこまで警戒するような相手だったっけ？」

「国力的にはそこまでだが、北畠には南北朝が統一されてもなお幕府に逆らった歴史があるからな……。だから、まだ南伊勢には反骨の気風が残ってる。北勢は北勢で四十八家もあつた豪族で統一に欠けるからきつちりきれいに鎮めないとな後がつらいんだよ」

これが伊勢が難治の土地とされる所以である。

国司に伊勢神宮の権威に、南朝の余光。この国だけが、幕府を中心とする価値観に染まっていない。

それを無理やり他国のやり方で押し通したのだ。反発がないわけがない。北勢四十八家の削減を決めた時から、その覚悟は決めていた。

（だから、手間暇かけた大会戦で北畠を含めた旧勢力を丸ごと倒したかつたんだが、そうは言ってられない。少しでも時間を稼ぐために、浪人以外の北畠への結集を防いでいくしかない）

後日、書状を送った三つの勢力は六角に味方することを決めてくれた。

これでだいたい十萬石を得たことになる。特に小浜景隆が味方したことにより、志摩近海の水軍を動かせるようになったのは大きい。

後は北畠のみ。

六角による伊勢の掌握は着実に進んでいた。そう表現しても差し支えないだろう。

ただ、織田の動きだけが気がかりだった。

*

時は少々前後する。

高村を帰したのち、信奈は相良良晴を屋敷に留めていた。

「さて、そういう訳で高村とは矛を収めることになったけど、美濃を取る策を出しなさい。長政とのこともあるけれど、いよいよ時間がなくなつたわ。今はサルの手も借りたい状況なのよ」

分かりやすく信奈は焦っていた。

形だけとはいえ、戦線を作り牽制していた西の大敵を留められなくなつたからである。

東には武田がおり、北条と若干の対立を生じさせているものの、駿河を手にした。何かが噛み合つて北の上杉との和睦なり停戦がなれば、大挙して東海道を駆け上がってくるだろう。

今や織田の国力は増したが、武田軍団の強さはそれこそ今川の比ではない。松平が盾になるとはいえ、せいぜいその刃を少しこぼれさせる程度にしかならないことは理解していた。

「武田が来る前に、高村が伊勢を固め切る前に美濃を取らなくてはならないわ。それが出来なければ織田はもはや天の時を失う。わたしはそれだけは避けたいのよ」

信奈は言うが、そう容易いことではないのは良晴にもわかる。だが、ここで一つ閃いた。

「そうだ、墨俣だ！」

木下藤吉郎の墨俣一夜城。

太閤立志伝説の第一歩となる重大イベントを良晴は思い出ししていた。

「墨俣？ 確かにあそこは西美濃の要衝。抑えられたら美濃取りに目処は出てくるけど、あそこは稲葉山城のお膝元よ？ 拠点なんてそうそう作れる場所ではないわ」

「普通にやったら、そうだろうな。だが、俺には策がある！ 信奈、ここは俺に任せてくれ！」

「怪しいわね……。半兵衛と高村にかなり痛めつけられたから兵はあまり出せないわよ」

急に自信満々になった良晴を見て、訝しむ信奈。未来知識を持つているにしても、今の良晴は妙に胡散臭かった。

「兵は少なくていい！ むしろ、そっちの方が好都合だ。俺は墨俣に一夜で城を作る。だから守ることより、気づかれないことの方が大事だ。まさか、義龍も敵地で兵を使わずに城を建てるなんて思わないだろう。だから、いざ作られるとなれば、必ず飛び出してくる。そうしたら、信奈。お前は手薄になった稲葉山城を攻めてくれ」

「サル……、あんた……！」

良晴の策に信奈は絶句していた。

決してその策が格別に優れていた訳ではない。むしろ荒唐無稽ですらあった。

ただ、聡明な彼女は理解してしまった。

ここまで言うからには策を成す根拠があるのだと。

そして、この策が成った場合の効用とその末路すらも理解していた。

「兵も使わずに城を作って義龍を釣り出す……。それは成功できたとしても、あんた死ぬわよ？」

「かもな。けど、俺なりに考えた答えだ」

問いかける信奈、見つめ返す良晴。

基本的にお気楽な良晴だが、信奈と高村の会談を見て今回ばかりは思うところがあった。

（俺の知る歴史なら、墨俣に一夜城を築くだけで良かった。けど、この歴史には高村がいる。斎藤家よりもよっぽど強力な上洛を遮る相手だ。ここで一夜城だけじゃなく、美濃を獲れないと信奈の天下の道が閉ざされる。場合によっては高村を倒すために浅井と婚姻同盟を結ばなきゃいけないかも知れねえ……）

良晴は焦っていた。そして、本人は否定するだろうが自身の思う以上に信奈を案じていた。

だから、今回は覚悟を決めて歴史知識をさらに一歩進めた献策を行ったのである。

「とにかく俺は墨俣に城を建てる！ 兵は要らねえ！ 川並衆だけで城を作る。だが、信奈！ 木曾川の戦いの時に約束した『稲葉山城を獲った者は恩賞自由』って約束を忘れるなよ！」

「そこまで言うんならやりなさい！ 死んだら骨ぐらいは拾ってあげるわ！」

売り言葉に買い言葉。

半ば喧嘩別れのような形で信奈と良晴は別れたのだった。

第37話 一夜にして

「さて、坊主。この戦に勝てば、俺たちを侍にしてくれるんだろうな？」

「ああ、約束する。俺様が全員まとめて召し抱えてやらあ。木曾川の急流を降り、義龍の前で城を建てる。命がいくらあっても足りない仕事だが、受けてくれるか？」

「おうともよ。だが、坊主もしくじるなよ」

木曾川の中流。信濃と美濃の国境の渓谷にて相良良晴は川並衆と共に策の準備を進めていた。

(この山間で砦の部品を作っておき、川を降り墨俣で組み上げる。未だでいうツーバイフォー工法だ。義龍が来る前に城を建てるならば、このやり方しかない)

良晴の描いた大まかなスケジュールは山間に前もって入り、数日かけて部品を製造し、その後、夜に紛れて墨俣に下り突貫工事で城を作り上げるというものだ。

思案を巡らせながら、木挽きをしているとずっと五右衛門が後ろに回ってくる。

「うむむ、しかしながら実に忙しい行程でござるな」

「川を降り、城を作る。これを日没から夜明けまでに行えないと、百にも満たない俺たちはおじやんだ。だから今回はスピード、いや手際の良さが命だな」

「川下りに関しては心配無用にござる。拙者たちは川賊。この辺りはもはや庭じえごじやりゆよ」

「ばりばりに噛みまくる五右衛門を見て良晴は思わず吹き出してしまふ。」

「そういえば、守就のおじさんは見つかったのか？」

「中村殿が見つけたでござる。今は半兵衛殿の居城の菩提山城にいりゆでござるよ」

「そっか、なら安心だな」

「しかし、相良氏。良いのでござるか？　せつかく引き入れた半兵衛殿を墨俣に用いにゆなど」

問われた良晴は「良いんだよ」と笑いかける。

「あまり仲が良くなかったとはいえ、斎藤家は半兵衛ちゃんのお主だからな。顔見知り同士で戦わせるなんて真似はしたくなかったんだ」「そうでござったか……。ふふ、やはり相良氏はいい男でござるな」

軽口を叩きながら、良晴と川並衆は部品を作り上げていく。

これから先に死地が待っていると分かっていると、現場に悲壮な空気はない。

手際よく作業が進み、一日半で部品が整い、ついにその時が来た。

良晴が号令をかけ、百人余りの川並衆が木曾川を降り、墨俣にたどり着く。

「ここからが正念場だ！　ここで城を建てなきや、俺たちに未来はない！」

良晴はそう力強く叫ぶと同時に右手に持っていた櫓を地面に叩きつけてへし折った。

「城が建つまでは、俺さまは帰らねえ！　ここで戦い抜き、義龍の脚を止める！　そうすれば、必ず信奈は手薄になった稲葉山城を落としてくれるはずだ！」

「よく言った坊主！　俺たちもやってやるぜえええつ！」

ここぞという時に見せた良晴の不退転の決意は、川並衆を大いに魅せた。

それからは、良晴たちはせつせと夜の闇に紛れて築城を進めていく。

しかし、彼らは川賊であり大工ではない。人足たちも普段とは違う工法のためいまいち勝手が掴めない。

意気込みとは裏腹に作業は若干遅滞し、おおよそ八割ほど組み上げたところで、ついに陽が昇ってしまった。

「なんとということだつ！　墨俣に城ができかけているだつ？　至急義龍様に伝えねば！」

朝日と共に義龍側の斥候が稲葉山城へと走る。

すると、わずか一刻ばかりで義龍軍四千が墨俣に出現していた。

「あと少しで完成だつてのに……！ いや、俺は諦めねーぞ！」

義龍軍を見た良晴はすぐに川並衆達の配役を振り替えて義龍軍に応戦を始めた。

この対応こそは迅速だが、やはり守備兵をほぼ連れてきていないことが仇となる。

川並衆は精強だが、どうにも数十倍の数の差には抵抗し切ることができない。じりじりと義龍軍は城へと迫ってくる。

「まだだ！ 持ち堪えてれば、美濃は落ちるんだ！」

この段になると、良晴も自ら種子島を片手に義龍軍を迎撃しなければならぬ事態となっていた。未来人らしく人を殺めることに抵抗はあるのだが、最早そんなことを言つてられる状況ではない。が、そんな良晴の奮闘も空しく墨俣は落ちようとしている。

折悪く火矢が刺さり、櫓が燃える。炭になったそれはがらがらと焼け落ちようとしていた。

城門の目と鼻の先。すでに肉眼で捉えられる範囲に義龍軍が満ち満ちている。

だが、それでも良晴は頑張った。

声を枯らし、銃を取つて川並衆達を鼓舞した。

あと少しで倒しきれそうなのに、倒せない。この良晴の粘り腰は義龍を唸らせた。

「どうやらあの川賊どもの士気の源はあのサルらしい。ならば、話は速い。あのサルを討ち取つてしまえばよいのだ」

言つたのち、義龍は腕利きの種子島撃ちを二人招集して下知を与えた。

「あの珍妙な黒羽織を纏う少年を撃て。さすれば、大いに褒賞を与える」

下知に従つてまずは一人が撃つ。しかし、良晴は天性の逃げ上手。狙つた場所から意図せずに離れ、ことなきを得た。

だが、もう一人が撃つた方は完璧な射線で良晴に迫る。

(取つた！)

射手はそう確信した。

……蜂須賀五右衛門が身を挺して良晴を庇うまでは。

「……うにゆう、相良氏……」

「五右衛門ッ！」

咄嗟に五右衛門の元に良晴は駆け込む。

「……相良氏……ご無事でござるか……。やはり……すべての実を拾うのは、無理でござったな……」

「無理して喋らないでくれ、五右衛門……！ 身体に悪いだろう……！」

「……おのこは、いずれ……選ばねばなりません。……選ぶ勇氣を持たれよ、ちやがらうち……」

五右衛門の意識が保ったのはそこまでだった。

良晴は五右衛門を静かに寝かせてから、つぶやく。

「……これじゃ、話が違うじゃねえか……！」

墨俣に城を建てる方法を知っていながら、今や墨俣は落ちようとしている。

やはり、自分では豊臣秀吉の代わりなど無理があつたのだろうか？

思わず良晴は自問してしまう。

「だけど、それでも」

戦わなければ、少しでも長くこの場に踏み留まらなくては五右衛門をはじめ、この戦に命を懸けてくれた者たちの意味がなくなってしまう。

だから、良晴は再び種子島を取った。

その時だった。

墨俣の西岸から千の軍勢が城に向かって駆け出してきたのは。

「た、竹中半兵衛重虎ッ！ 義によって……いえっ、義より大切なもののために良晴さんに助太刀します……！」

「西美濃三人衆筆頭、安藤守就も仕方なく相良の坊主にお味方いたす……！」

半兵衛と救出された守就が戦場に割り込んで来る。

「なっ、今孔明が敵方につ！」

「西美濃三人衆の筆頭も敵方だぞ！」

半兵衛と守就が良晴についたことは義龍軍に強烈な衝撃を与えた。

「おうおう……！ あゝの半兵衛が、自ら戦場に参ずるとは……！」

「ついに仕えるべき主君を得たのだな、半兵衛……！」

西美濃三人衆の残りの二人、稲葉一鉄と氏家ト全もまたかねてより半兵衛の将来を囑望していた。ゆえに彼らは半兵衛が良晴の加勢するやいなや義龍側から良晴方に寝返ったのだった。

「ええい、この期に及んで裏切りおつて……」

マンガみたいな顔を歪めて義龍は歯噛みする。稲葉と氏家の離反は手痛かった。西美濃への影響力もそうだが、渡河中に隊列の統制が取れなくなったのも大きい。

そして、義龍への災難は続いた。

「駆けに駆けてようやく間に合ったわ！ 全軍、突撃よ！」

東方から織田信奈が六千の兵を率いて墨俣に急行してきたのである。

これには、戦場にいた誰もが度肝を抜かれた。

織田軍が来る可能性は義龍軍の誰しもが頭の片隅に入れていた。ただ、六千……織田家が招集をかけて即座に集まる最大人数を率いてくるなど、夢にも思わなかったのである。

「まごっついている義龍軍を討つわ！ 鉄砲隊撃て！」

到着した織田軍の行動は迅速だった。

すぐに渡河して墨俣に攻めかかる義龍軍を囲み、種子島や弓で集中砲火を浴びせたのである。

これにはたまらず、義龍軍は潰走。

逃げようとした義龍は柴田勝家に捕らえられ、長く続いた織田軍の美濃侵攻は一夜にして完了したのであった。

*

「……やられたな……っ！」

桑名城にて、織田軍の戦勝を耳にした俺は歯噛みしていた。

墨俣一夜城と竹中半兵衛の参戦。

この二つが美濃攻めを加速させるのは分かりきっていたことだ。

だが、稲葉山城を攻めることなく、美濃を取るとは。

「墨俣一夜城で義龍勢の数千を堅牢な稲葉山城から吊り出し、西美濃三人衆を離反させることで統制を乱す。それに加えて墨俣は川の中洲にあるから、必然義龍側は渡河の必要があり、無防備な状況が生まれる……」

「それを、急行させた本隊で囲んで袋叩きにする……。どこかの誰かがやりそうな戦術だよな?」

「揶揄う義定の台詞に俺は返す言葉はなかった。」

まさしく、俺が織田信奈の立場だったら取り得る戦術だからだ。

「それで、準備は足りてるの?」

「いや、あんまり。やりたかったことの七割しかできてない」

問いかけへの答えもいささか歯切れが悪くなる。思ったよりも若干織田側の動きが早い。

美濃取りが終わったならば、次は織田との全面戦争が待っているのは明白だ。それだけ六角領は織田にとって邪魔な位置にある。

だというのに未だ伊勢方面の準備しか終わらず、まだ完全に謀略の網を張り切れてはいない。

「まあ、いい。嘆く暇があるなら働こう。とりあえず嘉明を呼んでくれ。あいつには三河方面を任せるから。あと水軍のまとめ役もあいつかな? 小浜氏だけでは多分足らん。それに、山岡殿には悪いけどちよっと急いでくれと伝えてほしい」

「わたしが言えたことじゃないけど、忙しそうだね新十郎」

「相手は百万石を越える超大国。それに明確に敵視されてるんだ。いくら警戒してもしたりないさ。今のままではせいぜい勝率は二割かな?」

「二割って少ないね……」

「いやいや、これでもだいぶごつちびいきな数字だぞ? 浅井や松平まで含めれば、それだけ国力の差がある」

割と手は尽くしたはずなのだが、そもそも外交が死んでいる。結局、六角対他の洛東諸国みたいな構図になってしまった。

「はあ……。敵が尽きないのはいつものことだが、今回ばかりは

ちよつと、な」

書状を記す手を止め、ため息をつく。

六角の存亡をかけた綱渡りがまた始まろうとしていた。

第5章 Hot war is decided 第38話 熱い戦争

日ノ本を揺るがした応仁の乱から早百年。

麻のように乱れた戦国の世もそれほど月日が流れれば、ある程度は群雄も淘汰されてくる。

九州では西国の雄でかつて上洛まで果たした大内が滅んだ後は、大友宗麟が六か国の女王として君臨。南の薩摩・大隅・日向の三州では島津が台頭し始めた。

中国は大内の後は毛利がその遺領を奪い、ついに尼子を滅ぼして陰陽十か国の超大国へと躍進。四国は長慶ら主柱を失ったとはいえ、三好家が未だにしっかり讃岐と阿波を中心に影響力を持っている。

関東に目を向ければ、北条が南関東のほとんどを抑え、上杉は越後を拠点に各地に派兵を繰り返し、甲信の武田は駿河を手に入れていよいよ上洛への足がかりを得た。

このように多士済々の戦国乱世だが、その最前線は洛東にある。

今や『畿内最強』と称される六角高村と、桶狭間を皮切りに破竹の勢いで勢力を拡大した『尾張の風雲児』こと織田信奈。

この二大勢力の動向を諸国は固唾を飲んで見定めようとしていた……。

*

「……して、やられた……！」

東山道を騎馬の一団が西へと行軍していた。

先頭に立つのは、伶俐な美少年……江北の大名・浅井長政である。

彼はその端正な表情を歪ませて、後方……先程まで滞在していた稲葉山城を睨みつけている。

墨俣の会戦で義龍を降伏させ、稲葉山城を得た信奈は戦後処理の評定に長政を招いた。

その稲葉山城での評定で決まったのは、稲葉山城と井ノ口の町はそ

れぞれ岐阜に改名。斎藤義龍の国外追放。そして、浅井長政との婚姻は行わず、ごく普通の軍事同盟の方向に転換するというものであった。

(これで、父上の説得が難しくなった……！)

執拗に長政が婚姻同盟を織田信奈に求めた理由。

それはやたら織田への評価が低い父・久政を納得させるためだった。

いつときは長政によって幽閉された久政だが、短期間で復帰。大御所として影響力を持っていた。長政を推した家臣たちからすれば苦々しい状況だが、そも長政が立ち上がった理由が母を思う孝行心だったため、長政自身はこれを再度除くという手段を取り得ない。

とはいえ、織田と結びきれなかった浅井の立場は辛い。朝倉の後ろ盾こそあれど、洛東の二大勢力を相手にするのは流石に分が悪いのだ。

「この国力差を説明して、父上には否応なしに納得していただくしかないのだろうか……」

長政の胃はかすかに軋みを上げていた。

*

伊勢国、桑名。

濃尾との国境に当たるこの地に緊張が高まっていた。

当初は織田家が橋頭堡を築いたこの地は、織田家にとってはまさに喉元に突きつけられた匕首と言っている。ここを放置すれば、織田は上洛や武田に対する防戦を行う際、むぎむぎと背後を高村に刺されることになるのは明白だった。

「まあ、敵の狙いが明白なのは俺としてはありがたいんだけどな」

高村も当然このことを理解しており、周辺の防備を固めていた。

そんな中で北から二騎の関破りが現れたという報は諸将を動揺させる。半ば大袈裟に騒ぎ立てられて、手勢を差し向けられ彼はすぐにお縄となったのだが、その関破りの正体はさらに桑名を震撼させることとなった。

「なるほど、こっちにあんたらは来たわけか……」

関破りを引見した高村は親しげに声をかける。

何をかくそう、関破りの片割れをすでに高村は見知っていたからだ。

「次にあのうつけ姫とことを構えるのは、そなただろうか？　ならば、儂が足を運んでもおかしくはない」

「確かに道理だな、義龍殿。して、要件は？」

「来たるべき大戦で儂を軍陣の端に加えてもらいたい」

そう言つて義龍は高村を見据える。没落したとはいえど、未だにその迫力は衰えない。そんな義龍に対し、高村はぽりぽりと頭をかきながら答えた。

「それは俺としちゃ願つてもないことだ。ただ、いいのか？　俺は領地を守るつもりではいるが、現状は濃尾の方に拡大しようとする意志はない。それでは、義龍殿を美濃に帰すことはできないだろう」

高村の懸念はそこにある。義龍の参陣は手駒が増えるというメリットがあるが、それに対する適切なりターンを用意できないことを理解していた。

「別に構わん。まずはあのうつけ姫に一泡吹かせられれば良い」

その高村の気遣いを義龍はふん、と笑い飛ばす。

「すまないな、義龍殿。あんたの参戦は正直、本当に助かっている。これぞまさしく天祐といったところだ」

笑つて高村は陣営に義龍を迎え入れる。

連れてきた手勢はおらず、一人娘の龍興のみだが、美濃国内にはまだ多少は影響力が残っているだろう。使い方によってはかなり有用な駒だ。

その後も、高村は準備を進めていく。

だいたい義龍が参陣してから二週間ぐらい経った頃だろうか。

織田信奈が岐阜から三万の兵を率いて、伊勢への街道への行軍しているという知らせが高村の耳に入ったのは。

「ついに、来たか……。織田信奈……。！」

報を受けた高村は瞑目する。

いつか、この時が来ることはわかっていた。

未来知識や地政学的にもこの戦いは避けられるものではなかった。だから、高村は長く準備をしてきたつもりではある。

「……不思議だな。もつと心がざわつくかと思えば、案外そうではなかった」

やれることはやり切ったという自負だろうか、高村は慌てることはなかった。

（お市と歩む夢を切り捨て、俺は六角を選んだ。そして、目をかけてくれた定頼様の血筋を脇に追いやり、自らが当主の座を奪い取った。羅列したら割とろくでもない人間だな、俺）

自身の来歴を振り返り、高村は苦笑いを浮かべた。しかし、それは次第に好戦的なものへと変わっていく。

「だが、だからこそだよ。この戦をうまく処理して六角を残さねば、今までの全ての意味がない。まあ、覚悟しておくんだな、織田信奈」

洛東の王を、ひいては天下の次の局面を決める大戦の火蓋が、この時切られる。

熱い戦争が始まろうとしていた。

第39話 手荒い歓迎

時はやや遡る。

果断即決で美濃国内の仕置きを終えた信奈は、主な家臣を集めて評定を開いていた。

「さて、美濃のことは終わったことだしよいよ高村を攻めるわよー」

この信奈の宣言は、一気に諸将の気を引き締めさせた。

六角高村。その名は今や畿内近国で知らぬ者はいない。織田家中も例外ではなく、特に一度負かされた経験のある滝川一益はことさら過敏になっていた。

「左近には悪いけど、亀山と河原田で戦った時の所感を聞かせてもらいたいわね」

「姫としては思い出したくない戦じゃがのう……、まあ信奈ちゃんに話せと言われたら仕方がないの」

渋々、一益はかつての戦いの一部始終を語った。語り終えた時、奇妙な静寂が場を支配する。

「……やはり、手強い相手ですね。高村さんは」

その静寂を破ったのは美濃が誇る天才軍師、竹中半兵衛であった。

「半兵衛ちゃんから見てもそうなのか？」

「はい、良晴さん。美濃でお会いした時の人となりで薄々は感じていましたが、高村さんの本質は武人ではなく、戦術家です。亀山と河原田の戦いのお話を伺って確信しました」

私の所感ですが、と前置きして半兵衛は続ける。

「高村さんは自分の適した形に戦を作り替えていることが多いのです。亀山の戦いの際は本陣への強襲が目立ちますが、馬防柵を壊して騎馬が活きる状況に場を作り替えようとした痕跡があります。その後の北伊勢諸将への調略も一益さんをそれで葬るよりは、河原田に高村さんたちが先着するために行軍を遅滞させることが目的だったのではないかと」

半兵衛の考察に織田の諸将は「さすがは天才軍師」と唸った。

「半兵衛の言うことはわたしも尤もだと思うわ。武勇はなおのこと軍略にも通じる。正面から戦うのは、少し厳しそうね。まあ、いいわ。力押しで倒せるなら評定なんてする必要はないもの。万千代、地図をお願い」

信奈に言われて長秀は美濃・伊勢・尾張の三国が描かれた地図を広げる。

「まず、わたしたちが目標とするのは桑名よ。ここを獲らないと織田は絶えず高村の動きを警戒しなくてはならない。だから、この桑名を取ることは今回の最低限の目標ね」

そして、信奈の指がすーっと東海道沿いをたどり、亀山で止まる。「桑名の後は、赤堀の港。最終的には亀山まで攻め取るわ。ここまで来れば、鈴鹿の山々に遮られるけど、高村を追い込むことができる。少なくともあいつが伊勢に持っていた所領の全てを奪うことができるわね」

此度もまた構想としては亀山・河原田の戦いと変わらない。亀山まで攻め取ること、高村の国力を減らして織田に従わざるを得ない状況を作ることが目的だった。

「そういうえば、万千代。長島のにやんこう衆への交渉はうまくいった？」

「いえ、協力はおろか領内の通行も認められませんでした。交渉を任されておきながらこの体たらく、十点です」

申し訳なさそうに万千代がうなだれる。

彼女にあずかり知らぬことではあるが、長島のにやんこう一揆衆には高村がすでに手を回しており織田に対する敵対的不干渉を取り付けていた。

「敵対してこないだけマシね。……となると、美濃から南下するほかないわね」

「そうする他ないであろうな」

道三も信奈に同調し、以後の評定は流れるように続いた。

かくして、織田家は三万の派兵を決めたのである。

*

伊勢路をひた走る織田軍三万を最初に出迎えたのは、土塁と水濠であつた。

伊勢美濃の国境は絶えず木曾三川の水害に見舞われてきた。そのため、村々は独自に土塁や遊水池を設けて被害を避けようとしてきた歴史がある。これらの施策はのちに輪中へと発達するのだが、それは脇に置いておこう。

肝心なのは、高村がその土塁や遊水池に目をつけ、蒲生氏郷に命じて軍事的に利用できるように連結や増設を行ったことである。

その結果、国境に簡易的な水城を作り上げていた。

「土塁や水濠に阻まれて、敵は自由には動けない！ もたつく間に次々と射掛けるわ！」

治水主の蒲生氏郷自身が陣頭に立つて、織田軍を遠方から釣瓶撃ちにしていくな。

蒲生隊が率いる兵は六千。織田の五分の一でしかないのだが、完全に地の利を活かしたためか織田側に大きな被害を与えていた。

「矢玉に負けるな！ 姫さまのために死ねや、死ねや!!」

勝家あたりは弾幕に負けずに突き進むが、基本弱兵の尾張兵にそこまでの胆力はない。足をすくめては、そこを狙い撃ちにされていた。

「ちっ、このままではジリ貧よね……。サル、この前美濃でやったように土塁を壊すことはできない?」

不利の原因はこの高村の野戦築城にあることは明らか。だから、信奈は良晴に尋ねたのだが、良晴は首を横に振った。

「壊すことはできる。できるけど、元々この野戦築城は堤防を基にしたものだ！ むやみに壊してしまつたら鉄砲水に俺たちごと飲まれるぞ！」

この時、良晴には忍城の戦いの経緯が頭にあつた。

水攻めを試みた結果、策を逆用されて豊臣軍が水に飲まれたという失敗の歴史である。実際はどうあれ、その可能性があるというだけで首を縦に振ることはできない。

意図せずして未来知識が良晴をかえって躊躇させる結果となつていた。

「姫さま！ 至急お伝えしたいことが！」

「何よ、今忙しいのに！」

今度は後方にいた長秀の軍の伝令が信奈の元へ駆け寄っていた。

「西美濃の齋藤の残党が街道を封鎖しております！ その数二千のこと！」

「二千ぐらいなら帰りになんとでもなるわ！ 万千代には前線との合流を防ぐように伝えなさい！ 今はなんとしてもこの水城を突破するわよ！」

あえて信奈は齋藤残党を無視した。

街道が封鎖されたことによる兵の動揺はもちろんあったが、それ以上勢いづく蒲生隊に背を向けることの方を恐れたのである。氏郷の本質は攻めであるから、その判断は間違っではない。

その日、結局のところ織田軍は野戦築城を抜くことはできなかった。

齋藤残党は織田軍が後退するのを確認すると街道を明け渡し、南下。蒲生氏郷と合流することとなる。

*

「やはり、義龍は放逐するべきではなかったな……」

大垣城にて後詰めを務めていた齋藤道三は細作からもたらされた報を聞いてから不機嫌だった。

齋藤義龍の後ろ盾に六角がついたことは大きい。ただでさえ、義龍から信奈が変わって国内が動揺している中でこの義龍の蠢動は手痛かった。

「良きにつけ悪しきにつけ、物事が変わるといふことは人心を惑わせるものよ。善悪など関係ない、ただ変わったといふこと自体に抵抗を示すのだ。……おそらく、北伊勢の仕置きで高村もこのことは学んでいよう。そこを、信奈殿は突かれた」

ともあれ、これでまた高村方の陣容が厚くなることに疑いはない。道三の憂いは深まるばかりであった。

第40話 緋色の硝煙

「ひとまず、一番恐れていた事態は回避できそうだな」

亀山城の本丸屋敷で俺はつぶやいた。

桑名方面に織田軍が攻めてきて三日が経つ。後、四日ほど氏郷の陣が持ち堪えられれば、手配しておいた増援が到着し戦局は安定するだろう。

「さすがに織田と浅井、北畠に三方から同時に攻められたら処理落ちせざるを得ないからな……」

端的に現在の六角の軍団配置を評してしまえば、カツカツの一言に尽きる。

一番多くの兵を工面できたのは、織田軍が攻めてきている桑名付近。

ここには氏郷の六千と義龍どのがかき集めた二千、桑名城に詰めている大谷吉継の三千の計一万千人。

次に義定や平井定武殿らの浅井対策で五千。亀山城に詰めている俺の騎馬隊は四千で北畠に備え、小浜景隆らの水軍は二千を確保した。

総勢二万二千人の大動員である。これでコケたら後が怖いが、ここまで無理をしても数が足りなく思えるのが、織田の恐ろしさだった。

今、なんとか成り立ってるのは氏郷の陣が堅固極まりないこと、にやんこう一揆衆と協力関係を築いて東を塞ぎ、織田の兵を全て氏郷の陣に押し付けることができているのが大きい。

「とりあえず、長政が一万を率いてくるぐらいならまだ戦線はどうかなる。ただ、北畠がなあ……」

織田は氏郷の陣。長政は観音寺城。尾張と江北方面はそれに対応する要害がある。ただ、北畠の方には用意ができず、動員をかけたなかつた長野工藤氏や神戸氏に任せるとしかない。

（それでも心配だから、俺が亀山まで出張っているわけだが……どうしたもんかね……）

一応、領地全体に伊賀と甲賀で構築した諜報網を張っているから変事はすぐに伝わってはくる。騎馬隊で速度も最重視した。

ただ、それでも戦域が広くなりすぎる。ついぞ、どことも同盟を結ばなかったのがポディブローのように効いてきていた。

*

高村の期待通り、氏郷は七日間に渡って陣を固守することに成功した。いくら、地勢が氏郷側にあつたとて元々八千で三万を凌ぎ切るといふのは、いささか難題である。

氏郷隊とそれに与する義龍隊は疲労困憊だった。

「さすがに敵に疲れが見えるわ！ この機に一気に攻め潰す！」

織田信奈はそれを見過ごさなかった。否、むしろこの時のために初日以外の六日間を流して被害を抑え、緩慢に進めていたのである。

「疲労の分散ができるのも大軍の利点ね。ただ、相手は全兵で戦わなくてはならない。そこが、命取りになったわね」

織田軍の進撃は激しいものだった。

柴田勝家や前田犬千代といった武辺ものを先団に押したてて攻めてくる。長秀や佐久間信盛は巧みに勝家らを弓の射線から逸らしていた。

「俺たちも行くぜ、野郎ども！」

墨俣の武功で部将に昇格したばかりの相良良晴も川並衆を率いて攻め手に加わっている。

（これだけの堅城だ！ 勝家たちを守って何とかして糸口を作ってもらわないと、やりようがねえ！）

一番突破力のある勝家に全てを賭けた護送船団方式で突破を図るのが、信奈の策だった。

「さすがは織田信奈。高村さまとためを張る勢力を築くだけのことはあるわね」

氏郷は舌打ちしながら、勝家に斎藤義龍を当てる。弓で有効打を与える策が成らない以上こうする他はない。

「まずは鬼柴田！ うぬを倒す！」

馴染んだ槍を振るい、義龍が勝家目掛けて突貫する。

六尺五寸の巨体の豪勇は凄まじく、並の足軽では立ちはだかつてもただただ葦のようにその命を刈り取られるしかなかった。

「これ以上はやらせはしない！ 勝負だ義龍！」

この惨状に見かねた勝家は突撃の手を止め、義龍に襲いかかる。

はせ違う両者。甲高い金属音が辺りに響く。

「ほう？ 尾張の兵は弱兵とは聞いたが、さすがは鬼柴田。うつけ姫には過ぎたるものよな」

「国を失った身の上で、よくそんな偉そうな口を利けるな！ 姫さまほどあたしは慈悲深くはない！ 泥の中に沈んで死にたくなければ、逃げることだな！」

互いに互いを煽りながら、義龍と勝家は一騎討ちを始める。

一方、前立ての片割れの犬千代は「……やはり勝家は脳筋。犬千代は手を止めない」と進撃を続行。

しかし、彼女の前に一人の姫武将が強引に乗馬を割り込ませて、その指揮は妨げられた。

「そう易々と進ませはしないわ。此度の最激戦地を任された以上は、その信頼に報いなくては蒲生の名折れよ」

年は犬千代と同じぐらいだろうか。

しなやかでほっそりとした身体つきに、人形のように整った顔立ち。

さながら深窓の姫君を思わせるが、使い古された燕尾前立兜がそれを否定する。

歴戦の猛者であることには違いないが、戦塵の中にあつてなおいちいちその所作は上品で犬千代は（これが上方の姫武将……。なんかすごく女の子らしい……。悔しい）と謎の敗北感に苛まれていた。

「私こそが、この多度表の総大将・蒲生氏郷！ 覚悟しなさい前田犬千代！」

腰から南蛮渡りのレイピアを抜き、蒲生氏郷が疾風の突きを繰り出す。犬千代はすんでのところで見切つて交わしたが、（太刀筋が読めない。……これは厄介）と内心で冷や汗をかいていた。

*

以後は、四将が二通りの大立ち回りを繰り広げる。

斎藤義龍と柴田勝家は純然たる力と力のぶつかり合いという側面が強く、互いの武具が軋みを上げるほど激しく撃ち合っていた。

対して、蒲生氏郷と前田犬千代の一騎打ちは追う犬千代に逃げる氏郷という様相を呈していた。これは両者の武勇の差というよりかは、レイピアと朱槍のリーチの差だろうか。やや、リーチに劣る氏郷が劣勢だった。

(前田犬千代。豪勇一本槍かと思えば、案外隙がないわね……)

蝶のように氏郷はひらりと身を翻して、朱槍の穂先を避ける。その後は動作の硬直を狙って突きを繰り出そうとしていたのだが、犬千代の離脱は彼女の思うよりも早く、その機会を得られないでいた。

(とはいえ、時間は私に有利に働いているわ。疲れれば、隙も生じる。極端な話、私は時間を保たせれば勝てるのよね)

(……義龍と蒲生氏郷のせいで軍の勢いが止められた……。早く討つて勢いを取り戻さなきゃ、陣を破ることはできない……)

あくまで悠長に構える氏郷に、焦る犬千代。

二人の打ち合いが二十合を超えた辺りだろうか。

突如、氏郷が飛び退いて犬千代から距離をとり始める。

「皆の者、下がちなさい！ 義龍の軍勢もよ！ そろそろ潮時だわ！」
氏郷をはじめ、その麾下の兵も熱心に勝家との打ち合いに興じていた義龍も織田軍から距離を取り始めた。

「待て、義龍！ 逃げるのか！」

完全に一騎打ちで昂ってしまった勝家は、引く義龍に激発して軍勢を前進させる。犬千代は「……あまりに不可解、ここは退くべき」と軍勢を後退させた。後になってわかることだが、それがそれぞれの部隊の運命の分かれ目であった。

氏郷と義龍の後退が完了したのち、青空に一条の赤い狼煙が上がる。

それと同時に水城に轟音が響き渡った。

「突出した部隊に向かって、撃て！」

一人の姫武将が号令をかけると同時に、千丁の種子島によって柴田

隊に銃弾の雨が浴びせられた。

「なつ、これは、逃げなきゃだめだ！」

これにはさすがの柴田勝家も逃げの体勢に入るが、あまりに彼女たちは突出し過ぎていた。

×字砲火による蹂躪。これまでに経験したことがない弾幕の嵐に見舞われて、織田家の最精鋭・柴田隊の核をなす勇者が次々と討たれていく。

「原長頼殿、討ち死に！」

「柴田勝定殿、討ち死に！」

柴田隊の二人の侍大将は銃弾の的になり、勝家自身も肩を撃ち抜かれて負傷。四千人はいた柴田隊は壊乱し、もはや軍勢の体をなしてはいなかった。

「すまん、犬。助けられた」

「ん、勝家は不器用でそそっかしい。今回はそこを狙われた……」

散り散りになった柴田隊は犬千代たち前田隊に收容され、勝家自身も犬千代の肩を借りて撤退。

「なんや、尾張最強も種子島の前では借りてきた猫と同じか。高村はんに頼まれて来たのはええんが、これじゃ張り合いがのうてしらけるわ」

そんな這々の体で敗走する柴田隊を見て、一人の姫武将がぼやく。

肩には異形の大鉄砲、艶やかな緋色の装束。

この一方的な銃撃戦を指揮した彼女の背後には八咫鳥の旗が翻っていた。

第41話 再考と器

桑名戦線、三万の兵をもつてしてなお不拔。

この事実を織田家を動揺させた。

「戦略の練り直しよ。大垣城まで後退するわ！」

信奈は前線に後退の指示を出す。これを好機と見た蒲生氏郷や齋藤義龍は追撃を仕掛けて被害を出し、大垣城に無事にたどり着けたのは二万六千ほどだった。

「高村のことだから何かしらの準備をしているのだろうとは思っていたけれど、あれだけの要害と鉄砲隊は予想外だったわ。特になによ、あの謎の鉄砲隊は？ 千丁も種子島を隠してたなんて……」

「信奈、多分あれは高村の兵じゃない。旗印からして雑賀衆だ。あれだけの要害に最強の鉄砲隊に詰められたんじや鬼に金棒だぜ。少なくとも、美濃から攻めるのは難しい」

愚痴る信奈に、頭を抱える良晴。

勝家は自前の兵の大半を失ったことから冷静さを欠き、長秀もまた明るい展望を見出せないでいた。

帰城早々に軍議が行ったものの、中々高村の要塞を抜く案は出てこない。さりとて、長島を強行突破して桑名を攻めるのにもやんこう一揆衆を完全に敵に回すリスクを考えると躊躇われた。

（堅牢な城に雑賀衆。……確か石山本願寺の戦いがそうだ。その時はどうやって勝ったんだっけな……。そうだ！）

良晴は未来知識を引っ張り出して考える。

（石山本願寺は長い間織田軍を凌いできたが、最後は鉄甲船で村上水軍を倒して補給線を切れたから勝ったんだ！ そしてこの戦でもそれはできる！）

戦前に見せられた地図に、九鬼水軍の存在。未来知識とその二つが電撃的につながり、良晴にひらめきを与えていた。

「信奈、いくら考えても高村の要塞は無理だ。だが、桑名と高村の要塞は六角の領土の東端にある。だったら船で伊勢湾を渡り赤堀の辺り

を抑えれば、桑名の補給を断てるんじゃないか？」

良晴が言うと同時に、諸将はどよめく。

敵国の領内に潜り込むこの策は、いささか無鉄砲だと諸将に受け止められた。

ともあれ、この良晴の提案は停滞した軍議のブレイクスルーにはなった。

提案の是非を巡って諸将はまた議論を始める。

「状況が分からぬ敵国に気取られぬように侵入し、要衝を取る。相良どのの策は荒唐無稽ですが、他に手はありますまい。四十点ですね」

長秀は一応、良晴の提案には賛成らしい。

「だが、それだけ器用な動きができる将が家中におるのか？ その任を果たすには、己が身を守る武勇と気取られずに事を成す手際の良さ、それになによりも度胸がなくてはならぬぞ？」

斎藤道三はその実現性に懐疑的だった。他の諸将も概ね道三の論調に近い。……いや、正確には多くの将が良晴の策が強行されるのを恐れ、道三に乗っかっていった。何かが間違つて自分が実行者となった場合、生きて帰れるとは思えなかったのである。

諸将が顔を見合わせる中、一人高々と手を挙げた者がいた。

「爺さん。その点なら問題はねえ。俺が行く！ 桶狭間でも長良川でも墨俣でも、俺は生き残ってきた。球よけのヨシの名は伊達じゃねえぜ！」

何を隠そう、立案者の良晴自身だった。

「確かに小僧ならば、適役かも知れぬ。……どうじゃ、信奈ちゃんは？ こやつを伊勢に向かわせてよいか？」

道三に水を向けられた信奈は、少し考えたのち口を開いた。

「螻の言う通り、サルは適役ね。ただ、まだ将としての経験はまだ浅いわ。だから、半介……佐久間信盛の与力として向かいなさい」

佐久間信盛……退き佐久間と渾名される織田家の宿将の一人だった。

勝家や長秀といった姫武将が主導権を握る織田家の中では異質な存在だが、その実力は確か。良晴と組ませるには悪くない将である。

この信奈の判断は概ね諸將たちに好意的に受け止められた。

「ほつほつほ、これで決まりのようですな。相良どの、此度もどうにか命を拾いましょうぞ」

あごひげをしごきながら選ばれた信盛は良晴に笑いかける。

その泰然とした佇まいは、いかにも織田の宿老といった風情で思わず良晴は背筋をこわばらせてしまう。

すると信盛はとん、とんと良晴の背を優しく叩いた。

「ゆるくやりましょうぞ。常に心は身軽であること。これが退きの極意なれば。なに、わしのごときはそこら辺で昼寝しているジジイだと思えばよい」

言い聞かせられているうちに良晴の力みは解けていく。

地味だが、織田の宿老の面目躍如であった。

*

「よくやってくれた、皆のもの。おかげでしばらくは防戦にゆとりが持てそうだ」

織田軍が退いた氏郷の陣にて、高村は彼らの働きを賞して宴を開いていた。

高村自身もその武威でもって北畠の抑えに当たらなければならぬのだが、桑名戦線が織田軍三万を追い返したと伝えられてから、居ても立っても居られず、この宴のためだけに僅かな手勢で急行していた。

（今回の最激戦地は桑名だからな。その苦勞に少しでも報いてやりたかったんだ）

桑名戦線は今回の最激戦地でありながら、高村の手配が遅れて当初は氏郷の六千で持ち堪えなくてはならなかった。

その後、幸運にも義龍が現れて二千が増え、一週間後に本来手配していた雑賀衆の四千が到着したという経緯がある。俺の失態を氏郷や周りがカバーしてくれた格好だった。

「柴田隊を壊滅させたのは雑賀衆の手柄だが、彼女たちが来るまで耐えてくれなければ、この大戦は早々に俺たちの敗北に終わっていただろう。ありがとうな、氏郷」

そうやって俺は氏郷の頭を撫でる。いや、撫でようとして、止めた。「すまない。まだ年下に対して頭を撫でる癖が治らなくてな。お前は特にそれがダメなやつだったというのに」

過去の出来事から氏郷は極端な潔癖症になっていたことを俺は知っている。

特に男に身体を触られることは彼女にとっては耐え難いことで、家族以外は主君の俺でさえも気持ち悪くなる体質だった。

「……悪いわね、めんどくさい女で」

「いい、いい。お前に何が起きたか知ってるからどうってことはない。むしろ、胸を張れ。軍功一等のお前がそんなんじゃ他が喜べないだら？」

俯く氏郷を励ましていると「へえ、案外優しいところがあるやないの」と隣で雑賀孫市が茶化してきた。

「氏郷とは付き合いが長いからな……、つい面倒を見てしまう。まあそうでなくてもこいつにはそうさせる力があるわけだが。それに俺も貴女には驚かされたよ。傭兵を四千頼んだのは確かだが、まさか頭領の貴女が来るなんてな」

逆に雑賀孫市を揶揄うと、彼女は愉快そうに笑った。

「織田信奈と六角高村。次代の天下人が決まる大戦やぞ？　これだけけつたいな戦はそうあらへん。こんなおもしろそうなもん、誘われたらとびつくしかないやろ」

「敵わねえな。俺にとっては最悪の大戦もあなたにとっては暇つぶしでしかないというわけか」

「せや。とはいえ、織田は今ので死に体やろ。これで、天下人はあなたに決まった」

孫市はそう言うも、俺は首を横に振る。そんな楽観的に捉えられれば、どれだけ良かったらうか。

「いや、この程度では織田信奈は諦めんど。少し引っ込んだだけでまた手を替え品を替え攻めてくるはずだ。だからまだ油断はしないで欲しい」

「へえ、なかなか高評価やんか」

「そりゃあ、俺と違って織田信奈は天下を取れる器だからな」

この評に孫市は目を見開くが、事実として俺と織田信奈は違う。

仮に俺が天下人の器ならば、あの夜にお市についていくなり、根拠もなしに「必ず守る」と啖呵を切って去りゆく彼女の手を引き戻すな
りできたはずだ。氏郷だって男性恐怖症を起こさずに守れたかもし
れない。

ただ、現実として俺は去りゆくお市を見送ることしか出来ず、氏郷
は不完全な形でしか守れなかった。

(一番守りたかった人を救えない奴が、天下を背負うなど出来るわけ
もない。それに上洛して分かった。……もう六角は天下に求められ
てはいない。あまりに畿内を乱し過ぎた)

ならば、俺が天下を狙う必要などない。ただ乱世の荒波を最後まで
渡り切る。それでいいのだ。

第42話 狩場

伊勢国・赤堀よりやや南に外れた海岸に三引両の旗が翻る。

ちようど夜に上陸できるように出港した佐久間軍三千五百は無事に伊勢湾の渡海に成功していた。

「もう少し気を配っているかと思えば、案外ザルでしたね」

一同を連れてきた九鬼嘉隆がからりと笑っている。かつて自分達を志摩から追い出した小浜景隆が高村方に加わったと聞いて気を張り詰めさせていたが、実のところは杞憂に終わった。

「まあな、陸海両方に通じる大名なんて東海以东では安房の里見ぐらいしか知らねえ。……後は、俺たちの働き次第だな」

「ほっほっほ、相良どのの申す通りよ。六角の騎馬隊は早いと聞く。居所が知れば、たちどころに追い立てられる。うむ、今晚が勝負か。急げよ皆の衆」

歓談もそこそこにして、信盛は進軍の下知を発する。

目的地は赤堀。北伊勢随一の湊を擁する地で桑名と亀山に並ぶ要衝。

一夜にして信盛と良晴はこの赤堀を落として占領することで六角の補給を断つ腹積りだった。

上陸して一刻ほどで、佐久間軍は赤堀の間近に迫る。

退き佐久間とあだ名されることが多い信盛だが、このあだ名の本質は殿を務められる精強さと時勢を読む力、何より部隊の統率力にある。

殿ばかりが目立つが、速戦においても限定的ながらその才幹は発揮されていた。

「五右衛門、赤堀の様子はどうか？」

「守備兵はそこまではいないでござるな」

先行させた五右衛門の情報を聞いて良晴は安堵する。どうにかうまくいきそうだ。

「半兵衛ちゃんも船酔いでダウンした時はどうなることかと思った

が、流れは俺たちにある。このまま行こう」

かくして悠然と佐久間軍は赤堀へ進軍する。

突然現れた三千を超える軍勢にわずかな守備兵はどうすることもできない。

あつけなく赤堀は佐久間軍の手中に落ちたのだった。

「……警戒していたけど、あつさりだな」

「そうであるな。被害が少なかつただけよしとしよう」

「そうだな。後はここから転戦して高村の糧道を断とうぜ！」

その後は、良晴の具申の通りに街道に小隊を派遣して補給線を断つ方向に移る。……ところが、これがうまくいかなかった。

向かう先々で高村の騎馬隊に先回りされ、小隊が潰されていくのである。

「むむむ、甲賀と伊賀。二つの忍軍に結界を張られては何もじえきにゆでごじやる」

五右衛門がなんとか高村の騎馬隊の動向を掴もうとしたが、ことごとく予想が外れ、小隊は高村に刈り取られていく。

（赤堀は高村にとつては重要拠点だったはずだ……。後方とはいえもう少し軍の人間がいてもよかった。……それを早々に明け渡すとは……。もしや）

ことここに至って信盛もまたこの異変に気づき始める。

高村の騎馬隊が早いのはそうだが、あまりに索敵が正確過ぎるのだ。

「相良どの。……仕切り直さぬか？ 赤堀を出よう」

「何を言ってるんだ、信盛のおっさん。せつかくの重要拠点なんだぜ？ 勿体無いって」

良晴は信盛の意見に反対する。史実が頭にあるせいか、良晴には信盛が臆病風に吹かれたようにしか見えなかった。

「我々は高村に先んじておると誤認しているように思う。絶えず赤堀は監視されているように思うのだ。近くに騎兵を分けて伏せておき、動きを見せれば、即座に叩く。そうやって兵を着実に減らしていくことで、まとめて我々を葬る機会を待っている。……そんな気がするの

だ」

「なら、五右衛門に見てもらおう。おっさんの言うことは分かるけど、もう少し待ってほしい」

ひとまず良晴は信盛の意見を飲み込んで、五右衛門を周囲の散策に回させた。

果たして、この行動は間違っていないなかった。……いかなかったのだが、遅きに失した感がある。

五右衛門を向かわせてすぐ、赤堀の街の片隅で火の手が上がったのだった。

*

「もうそろそろだな……」

河原田の辺りに軍勢を伏せていた高村がつぶやいた。

赤堀の街を佐久間軍に取られて四日ほどが過ぎている。それからというもの高村は赤堀の近くにある小城に潜伏し、赤堀の近くに潜む一氏と連絡を取りながら佐久間軍の小隊を丁寧に潰していた。

その甲斐あつてか、佐久間軍もう二千五百を切っていた。

「向こうの動きを制限するためとはいえ、赤堀を渡すのは流石に物流的には厳しいんでね。そろそろこちらから仕掛けさせてもらおう」

高村としては佐久間軍に伊勢国内をちよこまか動かれるのが嫌だった。

だから、わざと赤堀という生簀を用意し、腰を据えさせたのである。赤堀に入った時点で佐久間軍の生殺与奪は高村に握られていた。

「なつ、いつの間に敵勢が？ 数千はいる！ 火の手を上げた敵も中におる。もう赤堀は安全ではないではないか!？」

一氏の工作により、赤堀の佐久間軍はやや混乱している。

その隙を高村は突いた。混乱が収まらない佐久間軍は押し出されたように赤堀から飛び出し、上陸地に戻ろうとする。

「わざわざ、こちらまで出向いてくれてご苦労。その無防備な背中を遠慮なく刺させてもらうぜ」

畿内を震撼させた四千の騎兵が容赦なく、佐久間軍を襲う。その有り様はあまりに一方的で、もはや戦ではなく狩りでしかなかった。

「……すまねえ、信盛のおっさん。俺がおっさんの言うことを聞いていれば」

「悔やむことはないぞ、相良どの。おそらくは赤堀に入った時点でこうなる定めであったはずだ。わしも赤堀には飛びついた。若い相良どのならば、なおさらよ。若気の至りというやつよな、ほっほっほ」
気落ちする良晴を信盛は笑って励ます。

「おっさん。俺が殿をやるからおっさんは逃げてくれ。俺は未来からきた身寄りのない風来坊だが、織田家の宿老のおっさんは違う。もしもの時の影響が段違い過ぎる」

「いや、それには及ばぬよ」

責任を感じた良晴は殿を申し出るが、これには信盛はきっぱり拒絶した。

「今の相良どのでは、間違いなく命を落とす。弾をいくら避けられるといっても限度はあろう？ 死ぬと分かっている者を殿にする趣味はわしにはない」

「けど、おっさん！」

「……今の相良どのは気がはやり過ぎている。短気は短命。若い者があたら命を擲つてないわ」

厳然とした事実を信盛は告げるが、良晴はなおも渋り顔。

それを見て、困った信盛は「仕方ないのう」と気の抜けた笑みを浮かべた。

「まあ。港の半兵衛どのとゆるりと見ておれ。この退き佐久間の戦ぶりを。家中で誰よりも人を死なせぬ指揮ぶりをな」

言うところ、信盛は近習に命じて引き剥がすように良晴を撤退部隊に放り込む。そしてフーツと息を吐いた。

「さて、啖呵を切ったのはよいが、この騎兵は今まで戦ってきた中で一番強い。……生き残れるかな？ わし」

信盛の前に広がるのは、整然とした騎兵が突撃で尾張兵をこともなげに薙ぎ払う姿。六角高村は武勇自体も畿内最強格。

敵領に孤立した絶望的な状況から、退き佐久間の戦いが始まったの

であった。

第43話 退き佐久間

突然、軍の勢いが落ちた。いや、違う。

すかさされたのだ。その分、俺たちはつんのめって足が止まる。それを勢いが落ちたと錯覚したのだろう。

(こっちの問題ではないとしたら、向こうか)

赤堀に入っていた佐久間軍をつつき出し、混乱の收拾をつけさせずに野戦でひと息に葬る。これが今回の構想だ。

まあ、間違つてはいないのだろう。だが、少し過程は変わりそうだ。

佐久間信盛が本格的に指揮に入ってから、織田軍の意思が統一され始めた。

いや、それだけならまだいい。織田軍の動きが変わった。

頑強に抵抗するわけでもない、やけになって突っ込んでくるのではない。

冷静にこちらの攻勢をずらしてくる。直撃を避け、かすり傷で済むように絶えず佐久間信盛は兵の配置を入れ換えていた。

(これが、退き佐久間か……！)

決して佐久間信盛はこちらの力を集中させてはくれないだろう。さりとして頑強に立ち止まって守ることもしないから、囲むこともできない。ただ逃げると割り切って無駄なくするするとこちらの追手をまいている。

「将一人で、ここまで軍の質が変わるとはな……。だが、おかげでやるべきことは分かった。ここは任せたぞ、伊右衛門」

俺はひとまず指揮を配下の山内一豊に任せて、千騎で佐久間信盛に襲いかかることに決めた。

*

突いては退き、退いては突く。

騎馬隊こそ精強だが、六角高村の呼吸さえ掴めてしまえば、その力を逸らすことは不可能ではなかった。

(それにしても、手のかかる相手よな……)

騎馬隊で攪乱しつつの一撃離脱戦法。

一度の突撃が致死級かつ動きを止めづらい成熟した戦法であることは信盛とて認めざるをえなかった。

驚嘆すべきはこれだけの戦法を仕上げたのが、自分と同じ老将ではなく家督を継いだばかりの若武者が成しているということだ。

ともかく、この戦法を対策するためにわざわざ信盛は前線に出て高村を観察していた。

だが、それが今回は仇となった。

「佐久間信盛ッ！ その首はもらうぞッ！」

突いてなお、退かずに高村が猛追してくる。完全にリズムから外した突撃は十分な奇襲になった。

普段通り、軍勢の後方について指揮を取っていたならば、この遮二無二仕掛けてきた突撃をいなす猶予はあったのかもしれない。

が、今回は無理だった。

「ぬおっ！」

馬上でぐらつく信盛。しかし、その身体には何も当たってはいない。ただ、そう錯覚させるほどに高村の突撃は強力だったのだ。

ただ一当てされただけで、信盛の軍の隊列は抉り取られていた。

(これは、まずいのう)

信盛は努めて態勢を立て直そうとしたが、高村が獲物を狩る鷹のように執拗に追ってくるため時間が作れない。何度も突撃を受けて隊が乱されていく。

そして、いよいよ本陣を高村に突かれてしまう。

「ずいぶんと焦らしてくれたものだ……、佐久間信盛イ……！」

対峙した高村の姿を見て、信盛は思わず声を詰まらせる。

赤備えという訳ではないのにその身体には血がこびりついて紅く、覇気が溢れるあまりその笑みはひどく獰猛だった。

どれほどの戦陣に塗られれば、これほどに修羅に至るのか……。

佐久間信盛の背筋は凍りついていた。そして、同時に思う。

すぐさま逃げねば、この鬼に取り殺される、と。

「ほっほう、逃げるが勝ちよ。焦らすも何もその方の相手をするつも

りは毛頭ないからのう」

すぐさま信盛は馬首を翻し脱兎のように駆けた。

本陣にまで至られた以上、最早統一的な軍事行動は不可能。ならば、選択に迷いはなかった。

「もう軍としては無理じゃ！ あとは己が一存で逃げよ！」

将失格だと内心で自嘲しながらも、なおも信盛は命を繋ぐ方向へと動く。彼に従うように兵たちも好き勝手に逃げる。

「ちっ潔いな。やや面倒くさくなつたか」

だが、これは高村の追撃を攪乱することになる。

このまま雑兵の中に紛れて逃げようとする信盛であったが、そうは問屋は卸さなかつた。

「伊右衛門、弓をくれ」

「はっ」

高村は馬上で投げ渡された三人張の弓を構える。狙いは佐久間信盛。

「義定ほどではないがね。俺も並の達人ぐらいは弓の腕がある。乱戦の中の撃ち分けぐらい容易いもんさ」

ブレることなく、矢が放たれる。

三人でなければ、引くことすらできない強弓から放たれたその矢の威力は凄まじい。

「ぐはっ……い！」

そんな代物を背に受けた信盛はただじや済まなかつた。

馬上から吹っ飛ばされて地面に叩きつけられる。即死ではないが、打ちつけられた痛みでしばらく動けそうにない。

高村の軍勢がこちらに向かってくるのが見える。

信盛を庇おうと佐久間軍の将兵が信盛の周りを囲んだ。

「殿、なんと少しでも逃げ延びてください！」

佐久間軍の兵が叫ぶが、信盛の意識は朦朧としていてうつすらしか聞こえない。

「そうよな、わしは退き佐久間。この状況でもまだやれることはあるはずだ……」

遠ざかる意識の中、信盛は眩く。だが、折れない心に反して身体は少ししか動かない。

この日、高村勢の猛攻により佐久間軍の二千は半壊する。逃げ延びた兵は竹中半兵衛と九鬼嘉隆に保護されたが、その中に信盛の姿はなかった。

*

六角高村と織田信奈が矛を交える中、東国の方でも動きがあった。甲斐の武田信玄と相模の北条氏康。今川滅亡後の駿河の取り扱いで揉めていた両者が和睦したのだ。

「一時はどうなることかと思ったが、天祐というべきか」

躑躅ヶ崎館にて安堵の息をつく信玄。

その右手には三つの書状が握られ、そのうちの二つはすでに封を切られてある。

一つ目の書状は、北条氏康から送られた同盟の再締結に関するもの。

二つ目の書状は、この和睦の決定打となった將軍・足利義輝の御教書。

「足利將軍は今が好機と見ているらしい。あたしと北条と長尾。毛利と大友。地方の大名に恩を売りつけ、上洛させる腹積りだろうが、律儀に応じるのは長尾だけだろうな」

信玄は足利將軍にもはや昔日の勢いはない、と透徹していた。ただ、残光をありがたがる連中に対する道具として使えればいいという認識だ。

「ただ、気にかかるのはこの書状だな……」

足利義輝の御教書の添え状として来た3通目。この1通だけは未だ封を切られていない。

差し出し人の名は『六角式部少輔高村』と記されている。言わずもがな、現在織田と熾烈な戦いを繰り広げる畿内の驍将だった。

「今をときめく畿内の驍将が山中のあたしに何の用があるんだろうな……」

眩きながら、書状の封を切る。

初めはお手並み拝見とばかりに書状を流し見していた信玄だったが、次第に目を引きつけられていく。

そして、読み終えた時には思わず立ち上がっていた。

「勘助を呼べー！ 図りたいことがあるッ！」

小姓に命じ、軍師の山本勘助を呼びつける。

この時の信玄はあまりにも覇気が満ち過ぎていて、命を受けた武藤喜兵衛は（これから、ただならぬことが始まるのであろうな。それも武田の運命を賭けた大博打が）と身震いした。

*

「ほっほっほ……。いや生き残るためとはいえ、これは老骨にはこたえるわい……」

佐久間軍と高村が合戦した平野は死屍累々だった。

高村の精鋭騎馬による強襲。それはあまりに一方的で合戦と呼べるものではなかったかもしれない。

むくり、とその屍の山から一人の老将が這い出してくる。

肩の矢傷が痛むが、それを気にしては始まらなかった。

「とはいえ、わしにはやらねばならぬことがある」

その高村の軍勢の強さを痛感した信盛は戦いの最中、常に何か足を網にかけているような感覚を感じていた。

いや、正確に言うなれば、織田家そのものが高村の仕掛けた網に絡め取られているような気がしてならない。

「なればこそ、その網を破らねばならぬ。破らねば、織田は滅ぶじやろうて」

網を破るにしても、伊賀と甲賀の防諜は完璧で織田側から探るのはほぼ不可能だろう。

だから、信盛はわざと自分を殺すことにした。

自分を高村の思考の埒外から外すことで、外側から高村の仕掛けた網を見極め破る。

そのために一人、信盛は伊勢に残る決断をしたのだった。

それが、自身も家主も生き残らせる最良の選択だと信じて。

この信盛の決断は誰も知らない。

高村は軍勢が壊乱したからと捨て置き、相良良晴と佐久間軍は死んだものと判断して咽び泣いているだろう。事前に誰かに伝えることもしなかった。

自分一人だけで何ができるのか。

知られざるひとりぼっちの戦いがここに幕を開けたのだった。

第44話 雲の上まで

河内・芥川山城。

三好の本拠地であるこの城には一万の兵が集っていた。

「敵は京にあり！ 今、この手で足利義輝を討つッ！」

先頭に立つのは、三好義継。

十にならぬかならないかぐらいの幼女で、本来ならばわざわざ自身が出馬する必要はない。

しかし、今回ばかりは義継自身が出馬すると言い張り、今の状況に至る。

「姫様。戦は何が起こるか分かりませぬ。行軍中はともかく、矛を交えている間は後方にてくださいませ」

「それはわかっているよ、久秀。けど、それでもこの戦いでわたしが居合わせないことに納得できなかつた。わたしはこの戦いで畿内に新しい秩序を作る。姉上や久秀が夢見た新しい畿内を！」

義継や久秀のほかに三好三人衆と本拠地の阿波讃岐を預かる篠原長房もまた参陣している。

ついこの前まで三好家中は義継が信任する松永久秀、それを排斥しようとする三好三人衆、畿内重視の宗家が気に食わない篠原長房ら阿波の家臣団の三つの派閥に分かれて諍いを繰り返していた。

しかし、その情勢は久秀が『足利義輝が六角高村を通じて武田信玄を上洛させ、三好を滅ぼそうとしている』という情報を持って帰ってきたことよって変わる。

これには流石の三好家中も動揺した。争っているとはいえ、同じ三好家臣の中であり、所詮は箱の中でのいがみあっているだけに過ぎない。義輝と高村はその箱を丸ごと叩き潰そうとしていたのである。

こうなってしまうっては家中で争っている暇はない。利害が一致した三好家は元凶の足利義輝を討つことに決めたのだった。

*

三好軍一万が御所に向かって進軍している。

そう、報せを受けた義輝は動揺していた。

「何故だ！ 何故武田の上洛が漏れている!? これでは幕府再興は……っ！」

「おそらくは奉行衆の誰かが漏らしたのでありましょう。分裂していても三好はなおも強大。その力に屈する者がいてもおかしくはありません」

「それでどうするんですか、公方様。奉公衆の数はかき集めても二千。三好軍一万には到底足りません。迎え撃ちますか、それとも逃げますか」

努めて冷静に答える藤孝に、そろばんをぱちぱち弾いては顔を青くする明智光秀。他の奉公衆もまた不安げに義輝を見つめていた。

「六角高村は助けには来られまい。近衛に頼ることももう出来ぬであろうな……。逃げるのが賢明だろう」

「ならば、そのように……」

「だが、あいすまぬ。余は愚かでな、立ち向かうことを選ぼう」

義輝は決断した。だが、それは死に行くようなものだ。奉公衆の何人かは翻意を迫ったが、義輝は首を横に振った。

「武田信玄と六角高村が来たとして、彼らが三好に取って代わるだけに過ぎない。余が直接権力を握れるとは思えぬ。ならば、今ここで果てるのも父のようにつたびれ切つて洛外で果てるのもそう変わらぬ気がするのだ」

どうせ死ぬならば、せめて武家の棟梁らしく勇ましく死にたい。

……それが余の願いだ。

そう義輝は締めくくると、もはや誰も何も言えなかつた。

「余に付き従いたい者はこの場に残るといい。強制はせぬ。命を惜しむものは十兵衛と共に近江に向かえ。山岡景隆どのならば、その方らを匿つてくれるであろう。藤孝、お前は義昭を頼む。いささかわがまだが、あれでも余の妹だ。父や余のように將軍の争いに巻き込またくはない」

最後に下知を出して、義輝は具足に着替えるべくひとり歌を口ずさみながら別室に向かう。

五月雨は 露か涙か 不如帰
わが名を上げよ 雲の上まで

*

この日が来るとは思わなかった。

この報せを聞いた誰もが身分を問わず、そう思わされた。

第十三代室町幕府將軍・足利義輝、凶刃に斃れる。

その最期は三好軍一万に御所を囲まれ、手勢三百で奮戦。足利家の重宝たる名刀を畳に突き刺し、惜しげもなく振るつたが衆寡敵せず三百人を屠つたところで力尽きたという古今類を見ない壮烈なものであつたという。

この訃報は全国を駆け回つた。

「なんと、これではますます畿内の情勢が読めなくなつたではないか……！」

江北では浅井長政が頭を抱えていた。

最近になつてようやく父の久政を説得し、織田側に参陣すると決めた途端にこれである。

「長政よ、説得してもらつたはいいがすまぬな。朝倉がどう出るか、それを判断しなくてはならぬ。もし朝倉が三好の不義を詰り、上洛するとなれば我らもそれに参加しなくてはならないからな」

「しかし、父上。朝倉は腰が重い。動かぬのでは？」

「それはわかつておる。だが、朝倉を悩ませてきた加賀にやんこう衆は今上杉謙信と戦つておるからな、自由に動ける状況ではあるのだ」

久政の言うことにも一理はある。変に先走つて朝倉の勘気を蒙つては浅井は生きていけない。六角を攻めるには絶好の機会ではあるのだが、今しばし動くことはできなかつた。

「將軍が討たれたか、どうする勘助？」

「わざわざそれがしに下問されなくとも、お館様の御心は決まつていましように」

「バレたか。……ああ、將軍が討たれたからといって計画を変えるつ

もりはないぞ」

そう言つて、信玄は寧猛な笑みを浮かべる。浅井が様子見に回つたが、武田の方針は変わらなかつた。

「むしろ、此度の暗殺は武田にとつては僥倖だ。將軍亡き後の混乱を鎮め、そのまま朝廷に將軍宣下を乞へばいい。討幕の汚名を避けられる上に何より手間がない」

道中の六角はすでに信玄に協力すると表明している。となると、上洛の障害になるのは松平、織田、浅井の三家になる。

このうち、警戒に値するのは百万石を有し国力だけなら武田に肉薄する織田のみ。松平は小国でありながらにやんこう一揆で国が二つに割れており、浅井は濃尾を抜ければ戦わずとも降伏してくるだろう。

「あたしと武田四天王は東海道を行軍する。途中で諸城を落としていつて遠州を切り取るつもりだ。勘助、お前は東山道から入り遠山氏の攻略を頼む」

「ははっ、承知致してございまする」

平伏しながら、勘助は思う。

（よもや、これだけの好機が訪れるとは思わなんだ。川中島で恥ずかしながらも命を拾い、無様に生き永らえてきたそれがしであつたが、どうやらまだ宿星は尽きてはいないらしい）

自然と口角が吊り上がる。彼の隻眼にはすでに瀬田に翻る武田菱の旗が写っていた。

第45話 目覚め

西上を開始した武田軍は駿府を発つと東海道沿いを進軍し、遠州の拠点を次々と落としていた。

松平軍はこれに対応しようと先遣隊を掛川城に入れたが、鎧袖一触に蹴散らされて前線を浜松城まで後退させられている。

織田は高村討伐のために伊勢方面に兵を貼り付けており、松平に援軍を送る余裕はなく、肝心の高村討伐も遅滞していた。

「もう、どうなってるのよ！　なんで武田が大々的に来るわけ？　上杉謙信は何遊んでんのよーッ！」

大垣城の庭園で地団駄を踏む信奈。

織田家の状況は端的に言って最悪なものになっていた。

武田軍二万五千が遠州を爆進し、高村は伊勢桑名で一万少々で織田の三万を撃退。正面から攻めるのを控え、糧道を絶とうと試みたら宿老の佐久間信盛が討ち死に。

手や足は出るが、それがことごとく弾かれているような有様だった。

「元康殿を救援しようにも、六角高村に後背を突かれてしまいます。このままでは織田も松平も共倒れ。零点です」

何度も軍議をしても、妙案は出てこない。

六角に和議を乞う話もあったが、武田が上洛を始めた今となっては、戦後は武田の風下に立たされることになる。そうなっては天下布武は叶わぬ夢となってしまうのは明らかだった。

「被害を覚悟で六角か武田。どちらかを倒して和議に持ち込む。さすがの信玄も高村なしで上洛できるとは考えていないはずだわ。そこに賭けるしかない」

軍議の結果、信奈が出した結論ではある。

しかし、言うには容易いが行うのは難しい。

武田は言わずもがな、六角にすら織田軍は連敗を喫している。どちらも織田にとっては強大な相手だった。

「二応、一つだけ策はあるのよ。万を超える軍勢で、伊勢湾を越えて陸路から桑名を攻めるといふ策が。あまりに危険だから今までやらなかったけど、やるしかない」

佐久間軍が無事上陸出来たことから、信奈は六角の水軍力は弱いと判断していた。河原田の戦いの時も水軍が最後の帰趨を決めたところがある。

陸路からは不可能。補給を断つ程度の兵力では容易く刈り取られてしまう。

ならば、大軍を送るしかない。

半ば信奈の肚は決まっていた。

「それはおやめください。信奈様」

そんな信奈に意見した姫武将がいる。

竹中半兵衛だった。

「どうして、半兵衛?」

「高村さんの水軍が待ち構えているからです。高村さんは水軍の整備を怠っていたわけではありません。佐久間軍はあえて見逃していたのです」

「見逃した? 補給を断たれたら困るのは高村でしょ?」

「はい。しかし、高村さん的には狙いのうちでしょう。良晴さん、伊勢の地図を出してください」

半兵衛に言われて良晴は伊勢の地図を広げる。

「桑名は伊勢の東端にあります。そして桑名の東の長島はにゃんこう一揆衆への配慮で通過できません。必然桑名を攻めるのは北か西に限られます」

「けれど、北には高村が要塞を築いてこれを防いでいる。だから、西側は手薄……。あ、なるほど、わかったわ」

「ここですよやく、信奈は高村の意図していることがわかったような気がした。」

「高村はわたしが北から攻めるのを嫌って、攻め手を西に集中させることを狙っているのね。そうして西に呼んで孤立した軍勢を騎馬隊や水軍で倒し、こちらの兵力を削る」

「信奈様のおっしやる通りです。その後は打つ手がなくなった信奈様を信玄さんに討たせて、武田政権の下で家の存続を図るつもりだと思います」

信奈と半兵衛が予想した高村のシナリオに諸将は戦慄する。

あと少して滅亡に追い込まれるところだったのだから無理もない。「そうなる」と攻め口は北側だけ。……またあの要害を攻めなくてはならないのね。半兵衛、他に道はないの？ あの手は一応あんなの地元でしょ？」

「石津を越える西伊勢街道がございしますが、険道ゆえ大軍は入れません。入れたとしても各個撃破の恐れがあります」

桑名を落とすには北の要塞を抜くしかない。結局のところ、ここに行き着く。しかし、三万の兵でも抜けなかった事実は信奈たちの心に重くのしかかってきていた。

「北の要塞に關しましては、今一度三万の兵を用意して攻める他ありません。それに加えて長政さんも動かしません。六角軍は精強ではありませんが、二か国の全力を受け切るには兵が足りません。今も高村さんは必死にやりくりしている状況です」

「半兵衛。もう一度三万を、というけれど容易ではないわよ。竹千代や東濃の遠山を見捨てなければ、それだけの数は揃えられないわ」

「それは重々承知です。しかし、成せねば攻め手を欠いて天下の夢は破れます。お決断を」

半兵衛が押し、信奈がやや尻込む。

織田家中の者にとっては珍しい光景が目の前に広がっていた。

（竹千代を助ければ、六角が来て織田は大打撃を受ける。武田と天下を取ることに決めた高村はもう穴熊を決める必要はない。国益ならば、半兵衛の策に乗るのが正しいわ。……けれど）

信奈の脳裏に竹千代と過ごした日々が脳裏をよぎる。

信勝……今になっては津田信澄を推す家中と愛を感じられない母の土田御前。理解はあるが、多忙な父。

息苦しかった幼い日々の中で竹千代や犬千代といった気心の知れたお供たちと過ごした時間はどれだけ救いになったかはわからない。

そんな美しい思い出に裏切りで返すことはできなかった。
全軍、三万の兵で松平に加勢する。

そう、信奈が号令をかけようとしたその時だった。

「姫様。元康殿から文が届いております」

軍議の席に伝令が分け入ってくる。無礼極まりないが、緊急時ゆえ少し見咎められる程度で済んでいた。

「それがし、鳥居強右衛門と申す者にござる。姫さまからの伝書を伝えに参った」

「デアルカ。よろしなさい」

撫然とした面持ちで信奈は書状をひつたくり、広げる。

読み終えた、信奈は決めた。

「半兵衛。あんたの策に乗るわ。六角を、高村をこの手で屈服させる。竹千代の意志を無下にはしないわ」

それで、いいでしょ？ と信奈は強右衛門に目配せする。

強右衛門は、力強く頷いた。

*

武田軍の劫掠は続いた。

掛川を抜いた武田軍は高天神城と曳馬城を制圧。これで遠州の要衝は武田が手に落ちた。

元康は三ヶ日で再び抵抗を試みたものの、井伊谷三人衆が玉砕するなど多大な被害を出す結果となる。

「はわわ、武田軍の勢いは凄まじいです。半蔵、どうにかならぬですか？」

「ならないでしょうな。しかし、音に聞こえし武田軍。拾うように遠州を奪うとは……」

「敵を褒めても何にもならないです。なんとかせねば、当方は滅亡ですよ！」

岡崎城にて、元康は悲痛な叫びをあげる。

あまりにも力が違いすぎた。

兵力も、その質も。

戦国最強の武田軍の力をまざまざと見せつけられて、元康の心は折

れかけていた。

「姫様、やはり織田からの援軍をもらった方がいいのではありませぬか？」

重臣の石川数正が、元康に促す。

しかし、元康は首を横に振った。

「不利は承知です。しかし、それだけはありません。今、吉姉様は天下を取るべく六角と戦っています。わたしがそれを邪魔しては、桶狭間で義元様を破っていただいた恩を返せません。それに、三河はわたしの国です。自分の手で国を守れずして、それは果たして独立と言えるのでしょうか？」

信奈に援軍は出させない。

それだけは元康には譲れなかった。

そして、元康自身に一つ負い目がある。

自分は本当の意味で三河の領主と言えるのか。桶狭間の余録で元康の手に三河は帰ってきたが、自らの力で成したものではない。

元康は武田を自らの手で食い止めることで元康はこの負い目を払拭し、自立した松平を信奈に示そうとしていた。

「浜松を抜かれた以上、さして障害がない三河の吉田城も落ちるでしょう。こうなれば、次に武田軍は岡崎まで押し寄せてきます。岡崎を囲まれることだけは避けなくてはなりません」

側近に三河の地図を広げさせ、そして元康は一点を指差す。

その地は赤坂。松平の本拠である岡崎城と東三河の要の吉田城との間に位置する東海道の一宿場町である。

三河を走る東海道の中でも山が迫り狭隘なこの地を元康は最後の決戦の場を選んだ。

「半蔵、数正！ 集められる家臣の全てを赤坂に集めて下さい！ 今こそ三河武士の真価を武田軍に示す時です！」

力強く宣言する元康。普段の彼女らしからぬその姿に思わず半蔵は目を瞬かせた。

(どうやら姫は武田軍の来襲という国難を契機に目覚め始めているのやもしれぬ。この戦、あるいは……)

未だにやんこう一揆は止まず、織田の援軍は出さぬように釘を刺してきた。

松平の命運は風前の灯であることには変わらない。

ただ、それでも。

家臣団が奇跡を期待してしまうようなナニカが今の元康にあった。

第46話 水の城

嫌な予感はしていた。

佐久間軍を追い払った後、俺は当初の予定通りに嘉明に命じて大湊に水軍の三千を用意し、雑賀衆の一部も水軍に回らせた。

鉄砲隊のイメージが強いが、雑賀衆は元は紀淡海峡の海賊である。むしろそもそも海賊をしていたからこそ大航海時代の変動に触れて、先んじて鉄砲を入手することができたのだ。

この二つの船団で決戦し、織田との戦いを終わらせる。

それが俺の目論見だったが、この青写真は早々に役に立たなくなっ
たらしい。

「織田軍が桑名戦線に再度三万を投入してきております」

「そうか、わかった。ならばまた防備を固めろ。それと嘉明たちには北上して赤堀から桑名を目指すように伝えてくれ」

伝令に指示を出した後、俺は頭を抱えた。

「この後に及んでまだそれだけの兵力を出すのか……」

桑名や佐久間軍の撃退で織田の兵はかなり削ったはずだ。本来ならこれほどまでの動員はかけられない。多分、武田の備えからも兵を引つ張ってきたのだろう。

「自殺行為ではあるが、全軍で武田をやるよりかはまだ俺の方が与しやすいんだろな。……まあ、間違っちゃいけないけどさ」

「殿、長きに渡る戦いで玉薬が尽きかけております。雑賀衆に供与した分が思ったより多かつたようです」

「追い討ちをかけないでくれるかな、正家。実際のところ、そうなんだけどさあ」

我が六角の経理担当の長束正家が現実を突きつけてくる。

職掌ゆえか見た目はお団子ヘアのゆるふわ美少女なのに、指摘が鋭くて俺はよく泣かされていた。特に今回の戦は金を使う。どれだけ彼女にいじめられたかわからない。

「この戦はやればやるほど赤字になる。だから長く戦ってはならな

い。そう言ったのは殿です。ですから、いちいち落ち込まないでください」

「ええ、言いましたとも。だから武田を使って耐えればいい期限も削りました！　ただ、やっぱり硝石が高いのが悪いんですうー！」

思わず敬語をつけて受け答えしてしまうほど、状況はひどい。

ごく一部の例外こそあれど、基本的に日本では火薬の原料の硝石は取れず南蛮からの輸入に頼らざるを得ず、価格が高くなる。

そして、さらに悪いことに三好が將軍を暗殺したために畿内では早くも三好と反三好の小競り合いが頻発し、火薬の需要が高まってしまった。こうなると堺からやや離れている伊勢に入る硝石は減る上に高いという最悪の事態になってしまっているのだ。

「まあいいや、最悪はあの仕掛けを使えば多少は弾薬の消費を抑えられるか……。はあ、アレって諸刃の剣だからやりたくないんだけどな……」

「ケチらないで使ってくださいよ。そのために、それなりの予算をあの陣に投じたのでしょう？」

「まあな。……いいか、アレの使用許可を氏郷に伝えとくよ。そのかわりに正家は硝石の調達を頼む。この際、価格に糸目をつけなくていいや。水軍が空かされた以上、使う硝石は増える。なんとしても数を揃えてくれ」

正家にそう伝えて俺は再び軍陣に戻った。

武田を動かしたのはいいが、三好が將軍を暗殺するとは思わなかった。いや、史實的にやるのは知っていたが、タイミングがあまりにも悪い。

（色々あったとはいえ、ここまで事が進むと挺入れも難しい。ウチも織田も出せるもんは出した、後はどっちが上回るか。成り行きを見守るほかない）

酒を呷り、腹を括る。

洛東の戦いはいよいよ最終局面を迎えようとしていた。

*

「今度こそあの陣を抜いて桑名を落とすのよ！　全軍進めーツ！」

信奈の号令に従って、織田軍三万が氏郷が守る水濠陣に再び襲い掛かる。

松平や東濃を切り捨ててまでかき集めただけあって、今回の戦は負けられない。

水濠陣を抜くのに時間がかかり過ぎれば、松平は武田に蹴散らされて戦国最強の騎馬隊が尾張に侵入するのだから。

「今度こそ、負けない！ お前ら、臆さず攻めろ！ あたしも続くー！」
「さすがにこの状況じゃサボれぬか。この際じゃ、姫の全力を見せてやるとするか」

先の桑名攻めで失態を演じた柴田勝家や滝川一益が果敢に攻めかかる。

尾張兵は弱兵ではあるのだが、幸か不幸か窮鼠猫を噛むと言うべきかあまりに追い詰められた状況は彼らに火事場の馬鹿力を発揮させた。

一度目に比べれば、確実に兵が強いのである。

氏郷はこれを外連味なく捌いていくが、どうにも疲労は蓄積されていた。

こうなると、一つ脳裏にちらつくことがある。

(この陣の奥の手を使うべきかしら……)

二度に渡り織田軍三万を相手にしてその堅牢さを見せつけているが、この水濠陣はまだその全ての機能を使っているわけではない。

まだ、最後の切り札として堰を切って放水するという択が残されている。うまく引きつけて放水すれば、織田軍をまたも半壊させることは可能だろう。とはいえ、自軍の兵を退避させるのに手間取るし、それを見た相手側が気づいて逃げようとする可能性があるためやや使いづらくもある。

(雑賀衆に火薬を優先的に回しているけれど、それも長くはない。そして、なにより水計の後にこそ、彼女たちの鉄砲隊が必要だわ……) 少し逡巡したのち、氏郷は決めた。

「決めたわ。この機に賭ける。全軍、二の丸までじりじりと後退なさい。雑賀衆は打ち方を緩めて。出来る限り織田軍を引きつけるのよ」

氏郷の下知が飛び、再度軍勢が下がり始める。

織田軍はこれ幸いと前へ飛び込む将兵が多かったが、何度もしてやられたことから踏み込まない軍勢もある。

「勝家、今回は退く……」

「ああ、そうだな、犬。さすがのあたしもそこまで馬鹿じゃない」

前田犬千代と柴田勝家は留まり、警戒にあたる。

「どうせ高村のことだ。絶対なにか仕掛けてやがる！ 出るなよ、信奈！」

「あんたに言われなくてもそれぐらい分かるわよ、サル」

良晴と信奈もまた陣の後方で様子見していた。

そんな思ったよりも動かない織田軍を見て、氏郷は微かに口の端を吊り上げた。

「釣られないのは賢明ね。……けれど、前に行かないことがそのまま命の補償になるわけじゃない。一氏殿、頼んだわよ」

氏郷が一氏に何事かを伝えた後、織田軍に混乱が広がっていく。その原因は一目瞭然だった。

退路が、それぞれの土塁を繋いでいた木の橋が落とされたからである。

戸惑う織田軍は水濠を泳いで逃げようとしたが、それをするだけの時間を氏郷は与えなかった。

「今よ！ 堰を切りなさい！」

氏郷の号令と同時に狼煙が上がり、濁流が織田方に流れ込んでくる。その勢いは凄まじく、孤立した土塁の上にいた兵たちをも根こそぎ飲み込んでいった。

「……そんな、わたしの兵たちがッ……！」

今の水計でどれだけの兵を失ったか、わかったものではない。間違はなく三千は失っただろう。

あまりの衝撃に思わず信奈は膝から崩れ落ちてしまう。

「……ごめんなさい、わたしのせいで何人もの兵があたら命を散らしてしまつて……。竹千代を見捨ててもなお、こんな状況だなんて……」

うわごとのようにつぶやく信奈。

桑名で失った兵は累計でそろそろ一万に届く。しかし、それは自分が江尾対談の時に高村との協調路線を選べば防げた話だ。

自分の犯した失敗と罪悪感で信奈は心が折れそうになっていた。

「……諦めるなよっ！ 信奈っ！ らしくねえじゃねえか！」

「サル？」

「信奈！ 仮にお前が諦めても俺は諦めねえぞ！ 高村を倒して信玄を止めて、織田だって竹千代だって守ってみせる！」

「でも、高村にはいいようにしてやられたけれど、策でもあるの？」

「いや、ねえ！」

信奈の問いかけに良晴は首をぶんぶんと振る。信奈は呆れた表情をするが、良晴は構わず続けた。

「だが、俺は全部の実を救うと決めたんだ！ だから、諦めることだけは絶対しねえ！」

「ぶは、なにそれ。あんた馬鹿じゃないの？」

勢いだけで言い切る良晴を見て、信奈は破顔する。

（そうね、サルはまだ諦めてないもの。なら、まだわたしが諦めるのはいささか早計ね）

やや瞳に力が戻りだす。

おかげでまだ戦うことが出来そうだ。

言えば、つけ上がるから感謝の言葉を口にすることはないけれど。

*

「そうか、ついに水計を使ったんだな」

北東の方角で青い煙が上がる。それが合図だった。

「嘉明たちは赤堀に着いたから、そのまま桑名に向かわせたらいい……、さて」

視線を北東から南に戻す。

その視界に広がるのは様々な家紋の旗指物が翻る軍勢。数で言うなら八千ほどか。

「思ったより溜め込んでたな！ 北畠具教イツ！」

南の備えにしていたのは、長野工藤家と神戸家の二家だ。

だが、長野工藤家は当主とその嫡男を北畠具教によって暗殺され、そのまま北畠が併合した。神戸家は頑張って抵抗したが彼我の戦力差は七倍あり、俺が到着した頃には虫の息となっている。

「水計を使ったということは、氏郷の陣も前ほどは長く保たないってことだ。だから、俺もすぐに援軍に行かなくてはならないのだが……」

自軍が三千五百と弱りきった神戸軍の数百。

相手側が北畠を盟主とした伊勢の国人連合八千。その中には俺が以前に改易した北伊勢の国人たちも多分に含まれている。烏合の衆ではあるが、それぞれ失地回復やお家の再興が目的のため、戦意は高い。

「因果応報ってやつかな。まあいいさ。どちらにせよ、倒さねえと始まらねえ……！」

家を失ったお前たちの無念は察して余りある。

ただ、今回の俺はそうさせないために戦っているんだ。

だから、今回も容赦なく踏み潰す。

俺は馬腹を蹴って敵軍へと駆け出した。

第47話 三河赤坂の戦い

一つは前の世代のことだ。

かつて西国より上洛を試みた大名が二人いた。

大内義興と浦上村宗の二人である。

このうち浦上村宗は領国の備前・播磨から京に向かう途上の摂津の大物で自らがかつて討った旧主の子・赤松晴政に後背を刺されて失敗し、打ち取られてしまう。

一方の大内義興は尼子経久や毛利元就の兄の興元ら西国の諸将をまとめ上げ、流浪していた第十代將軍・足利義植を担いで上洛。無事に足利義植を復位させ、船岡山の戦いで反対勢力の義澄派を叩き畿内周辺をある程度安定させることに成功した。

だが、京と義興の領国の周防長門一帯はあまりに遠く、ついに尼子経久を初めとする諸将が離反し、義興はこれを抑えるために領国に帰ることになる。

西国の巨人たる義興を失った義植派にはもはや反対勢力を抑える力はない。数年で義植は京を失陥し、義澄の子の義晴が第十二代將軍となるのであった。

「思うにだ、勘助。三好はともかくとして先人たちが上洛を目指しながら果たせず、あるいは志半ばに終わってしまったのは自らの足元を固めていなかったからだと思うのだ」

床几に腰掛けながら、信玄は先人たちの事績を振り返る。

「左様にございまする」

「だから、あたしはその過ちを繰り返すつもりはない。甲信は元より駿河も一応不穏分子は抑えたつもりだ。勘助、お前に東濃を攻めさせたのもこういう理由だ」

「僭越ながらお館様の意図、この勘助にはわかっておりました。すでに東濃の遠山家は我が武田に降参しておりまする」

「そうか、ならいい」

ふん、とハナで笑って信玄は前方を見遣る。

東濃を任せていた勘助ら別働隊が帰ってきて、武田本隊の兵力は二万五千になった。

赤坂に陣取る松平軍の数は八千といったところか。旗印には一部『進むは猫極楽、退くは無間地獄』と書かれたものまである。

「にやんこう衆の旗まであるのか。今は一揆の渦中のはず、どうやって手を組んだ？ 勘助、知らぬか？」

「恐れながら、三河中に『武田信玄は捕虜にした三河の民を連れ帰り、奴隸として使い潰す』と流言飛語が流れておりました。元より一揆は生活の不満を訴えるもの、流言を聞いて松平の方がまだマシだと思っただけでしょう」

「なるほど、あながち嘘ではないから困るな……」

苦笑いを浮かべる信玄。

実際のところ、三河と遠江にその様な苛政を敷くつもりは彼女にはない。

だが、かつて佐久で捕らえた山内上杉家の兵たちを容赦なく金山で働かせた過去があるため、今更説いて回ったところで信用が回復するとは思えなかった。

「滅びかけでありながらも、よくどこここまで兵を集めた。褒めてやろう、松平元康。……なればこそ、武田軍の精粹をもって叩き潰してやるでしょうか！」

信玄が軍配を振るい、先駆けとばかりに四千の騎馬隊が松平軍に襲い掛かる。

「騎馬隊が来るのは、想定済みです。者ども、構えなさい！」

元康の号令と共に、兵が逆茂木の影に隠れて弓を構える。

赤坂の坂上に陣を張っておき、上り坂でやや速度が落ちる武田軍を石や弓といった飛び道具で狙い撃つ。

これこそが、地の利を加味して考案した元康の決戦戦術だった。「なるほど、考えたな。騎馬隊の速さを殺し、飛び道具の利を活かす。用兵の理に叶った作戦だ。だが、これしきで武田軍を止められると思うなよ？」

元康を誉める一方、信玄は攻勢を強めさせる。

元々対策されているのは、想定済みだ。赤坂に布陣した時点で元康の狙いもある程度は看破している。

その上で信玄は重ねて命じた。

「松平の弱卒」とき、策を使う意義もない。踏み潰せ」

半ば傲慢に思える指示だったが、武田騎馬隊の力はそれに足るものだった。

元々は甲信の険阻な山道を主戦場としてきた武田軍である。多少の坂道なら慣れている。

「怯むなッ！ もう一度進めッ！ 長尾景虎に比べれば何するものぞ！」

気を取り直して、もう一度武田騎馬隊が襲いかかる。松平軍は再度迎え撃とうとしたが、勢いが強く敵わない。

あっけなく柵を破壊され、武田騎馬隊の侵入を許した。

「はわわッ！ まさか乾坤一擲の策を力づくで破られるなんて！！」

タヌ耳を震わせ、ガチガチと歯を鳴らす元康。

昔、話を聞いてからずっと憧れていた。

廃嫡寸前から立ち上がり、今や天下に手が届くところまできた古今無双の名将・武田信玄。

敵対した相手ではあったが、尊敬の念は絶えなかった。

掛川、三が日、赤坂。

あらゆる手を尽くして防ごうとしたが、一矢報いることすら出来なかった。

（これが、私と信玄公の差、ですか……。 わかっていたとはいえ、これはあまりにも……）

項垂れる元康。

しかし、そんな暇があるほど状況は穏やかではない。

馬印が引き倒され、本陣は恐慌状態。本多忠勝やにゃんこう一揆衆など戦意をまだ残しているものは必死に武田軍に食らいついて、元康を守ろうとしていた。

「松平元康は、いるか」

乱戦中の軍勢から、黒鹿毛の巨馬に乗った姫武将がゆらりとその姿を現す。

最激戦地だというのに、彼女は泰然と元康の元に馬を進めながら不敵な笑みを浮かべていた。

「敵将だ！ 出会え！ 出会え——ッ！」

元康の馬廻や小姓がその姫武将に果敢に立ち向かうが、放った矢は当たらない。それどころか、こともなげに制圧されていた。

「あ、あ、あなたが……！」

「そうとも、あたしが武田信玄だ」

傲然と信玄は名を告げる。

「手短かに用件を伝えておこう。松平元康、降伏しろ。織田信奈から援軍がないまま、お前はあたしを三度阻んでみせた。これだけやれば、もう満足だろう？」

「いえ、まだ私は吉姉さまと戦い続けるつもりです！ まだ諦めませんッ！」

元康の頭に降伏の二文字はない。今のところ、松平をちゃんと大名として立ててくれているのは、信奈しかいない。かつての様な大勢力の走狗に戻りたくはなかった。

「そうか。ならば、最後に忠告しておこう。織田にそのまま従い続けるにしろ、あたしに降伏するにしろ、もはや松平は独立した勢力としては生きてはいけぬ。程度の差こそあれ、今川に臣従していた頃に戻るぞ。大勢力に守られることと独立し誇りを保つことは同時にはできぬ。元康、お前には覚悟があるのか？ あたしのように甲斐一国に甘んじることを否定し、外に打ってでる覚悟か。はたまた六角高村のように己が命運を他に託す覚悟か。どちらかでもあるのか？ 今一度、考えてみるといい」

「私は……」

「答えられないか、つまるところお前はその程度の将ということだ。はあ、毒にも薬にもならんな。すまない、無為な話をした」

ため息混じりに信玄は元康の前を去る。

元康にはそれを追うことができなかった。

菌を食いしぼる。

わかつていた。自分がまだかつての友情にまだ甘えているだけに過ぎないことを。

しかし、信奈が天下人になってしまえば、その特別な関係は崩れるだろう。友情だけで今の比較的対等な地位が確保できるほど、武家社会は生易しいものではない。

かくして、三河赤坂の戦いは攻勢を完全に整えた武田軍が松平軍を押し切り突破。

ついに松平の本拠である岡崎城を包囲する段階に至った。

*

「まったく、嫌な話を聞いてしまったものだ……」

小谷城で私はその端正な顔を顰めていた。

浅井家の方針は未だ定まらない。当初、動きの参考にしようとしていた朝倉家は三好派である若狭武田家の攻略に動いたが、なおも父の久政は動かないつもりでいるらしい。

そんな中、南から一人の男が来訪してきたのであった。

「ほっほっほ、浅井長政殿。ただちに六角に兵を出さねば、その方らが六角高村に勝つことなど生涯叶わぬでしょうな」

佐久間信盛。

織田の宿老。赫赫たる武勇伝こそない男だったが、老獪さは健在で私の心の一番嫌なところを突いてきた。

(佐久間殿の申す様にすれば、高村を倒せるやもしれぬ……。だが、それは必然的に織田の天下が決まるということでもある)

高村を倒したい、という誘惑はある。しかし、国益的には織田と六角を共倒れにさせ、武田が引くまで待つてから朝倉と合力して上杉謙信を上洛させ、畿内の政権を握るという択もある。

ふう、まったく悩ましい話を持ってきてくれたものだと思う。

嘆息して琵琶湖の湖面に目を向ける。

何も映さない湖面はまるで私の心模様のようにだった。

第48話 自分の仕事

水計から二日が過ぎてようやく織田軍も平穩を取り戻す。
三千を超える兵を失ったが、未だ数の上では有利だった。

「万千代、数はともかく士気はどう？ あれだけの水計だもの、士気がくじかれていてもおかしくはないわ」

「幸いなことに士気はそれほど下がってはおりません、七十点です」
「そう、なら良かったわ」

考えうる最悪の事態になっていないことを確認し、信奈は安堵の息を漏らした。

「あの水計は二の丸より手前の陣や隊を根こそぎ葬った……。確かに私たちにとつては痛手でもあったわ。……けれど、翻つて考えてみればそれは相手もその区画の守りを放棄したということ。戦線自体は上がっている。皆の者、もう少しで陣を抜けるわよ！」

信奈の言うことは間違っていない。

氏郷の陣の奥の手だった水計は、兵や物資に抛らずして大きな損害を与えることができる。その一方で、二の丸より手前の防御陣を完全に破壊してしまうこと、流路を遡ると本丸の近くまでたどり着けてしまうという致命的な弱点がある。

（今はまだ流路がぬかるんでいるから多少は保つ。けれど、好天が続いて地面が乾いたら別。雑賀衆を動員しないと防げないわね……）

氏郷もそれを知悉しており、守りの配置を変えた。加藤嘉明ら援軍の将を根こそぎ投入して数で防ぐ方針に変えたのである。

（とはいえ、少し長く保つ程度。本当に終わらせるなら、まだ相手を削つて高村さまの到着と同時に決戦をしかけるほかないわ）

ただ、氏郷は待つのみ。

けれども、少しだけ彼女は予感していた。

この戦いはもう長くは続かない、と。

*

北畠八千はなんとか退けた。

当主の北畠具教と前線の北伊勢諸将の間に戦意の差があったのが幸いした。

あつさり前後で分断し、各個で叩くという普段の手口を使うことができた。

「とはいえ、北畠は長野を潰して中伊勢に進出することに成功した。今はまだこれ以上を求めてなさそうだし……。戦後、また気をつけなきゃいかんか」

北畠の狙いは空き巣だろう。それも長野を乗っ取ったことで達成した。俺に会敵したのは、多分ガス抜きでしかない。織田との連携は多分こいつら考えてない。

「まあ、いいさ。さつさと桑名まで上がらなくちゃいけん。いよいよ、決戦だろうからな」

ぼやきながら、伊勢路を北上する。

だが、河原田を過ぎた辺りだろうか。

西方に軍勢がいるという報告を受けた。

「旗は三盛亀甲ッ！ 浅井家の旗です」

「そうか、わかった」

報告を受けた俺がどんな顔をしたのか、あんまり覚えていない。

「来たか、長政」と宿敵の到来に笑ったのか、あるいは意表を突かれたまま阿呆面を晒していたのか。

多分、どちらかだろう。

だが、ぶつちやけどうでも良かった。

「この大事な時期に、長政を遊ばせておく暇はねえ。さつさと追い返すしかないな」

ただ、倒すべき相手が向こうからやってきた。

それで十分なのだから。

「……それにしても、一番嫌な時に来やがったな。ちくしょう」

*

「結局のところ、私は一人の負けず嫌いの女でしかなかった、ということか」

伊勢の山中を愛馬に駆けさせながら、私は自嘲した。

家臣に聞かれてはことだが、どうにもこの感慨を抑えることはできない。

私は、高村に負け続けてきた。

古くは学び舎での立ち会いから、日野西の戦いまで。半兵衛の調略は互いの痛み分けといったところか。

だが、今回は違う。

私は佐久間信盛の策に乗った。

一万の兵で近江を攻め、義定を足止めさせると共に北畠を討った高村を五千の兵の山越えで奇襲し、その軍を機能不全にする。あわよくば、高村を討ち取ることだ。

「今回の大戦での高村は見事だった。しかし、弱点はある」

織田にはサルや半兵衛。我が浅井には高虎、あるいは父上など当主以外に戦略を考えられる人材がいる。

だが、六角にはそれがない。

副将としては義定がいるが、彼女自身の能力はともかくとして、自らが舵を取ろうという性格ではないのは知っている。

「私が高村を引きつける。それだけで、六角の頭は止まるのだ」

高村が優れているからこそ、誰も代わりができない。

そして、誰も代わりができないからこそ高村は一人で戦局を差配しなくてはならなかったのだ。

「卑怯だと、お前は私を指差すんだろうな……」

もう一度、自嘲する。

だが、それでも構わなかった。

それで、あいつの瞳に私が映るのなら。

かすかに遠く、あいつの旗指物が見える。

数は三千ほどか、こちらが五千だから数としては有利だった。

*

関ヶ原から西伊勢街道を駆けてきた長政の五千と中伊勢から急行してきた俺の軍三千は激しく衝突。

犠牲を払いながら俺は長政を追い返したが、その表情に笑みはなかった。

「やられたな、こりゃあ……」

むしろ、頭を抱えている。逆に笑ったのは、長政だ。

長政はひたすらにこちらの軍を刈り取りに来ていた。一部、山中を駆け回ってこちらを引き摺り回した局面もある。

去りに際「私の勝ちだ」と笑っていたが、まあ間違いではない。

（浅井が観音寺表に兵を出したことで、近江の兵をこちらに持つてくることはできない。伊賀はいるが出せて二千。嘉明らは桑名にやっしたが、兵力差的に長くは保たない。そして、今の長政との戦いで俺の持ち時間と手勢は払底した……）

浅井の参戦。

この一事がいよいよ俺の首を回らなくさせている。

まあ、元々が無茶苦茶な話ではあるのだ。外交で既に敗北しているところをなんとか戦術で継戦してきただけではない。本来、戦術とは外交に勝るものではないのだから。

「殿、多度の水陣が落ちました」

「そうか。ついに落ちたか……」

一氏の報告を聞いて思わず俺は空を仰ぐ。

水陣が抜かれれば桑名城だが、流石に二万越えの軍勢に耐えられる様な作りはしていない。それは北伊勢の全てに言えることで、戦線は亀山まで後退するだろう。

（まあ、亀山までの道は長いから手段としてはロシアの必殺技の焦土戦術も使えるっちゃ使えるんだが、なんだろうな。そこまでやる気が起きねえんだよな……）

多分、そこまで必死に抵抗すれば、武田が織田を突くところまではいく。

いくが、何かが違う気がした。

「ついでに聞くが、武田は今どの辺りにいる？」

「岡崎城の攻略に手間取っています。小国とはいえ、岡崎城は正真正銘最後の砦。さしもの武田でも一息に落とせるものではありませんま
い」

状況を聞いて嘆息する。どうやらいよいよ決まりらしい。

「そうか。ならば、一氏。織田信奈に和議、いや降伏の使者を送つてくれ」

「お言葉ながら、殿。多度の水陣は防衛の最要衝とはいえ、領地の東端。抜かれたからとはいえ、敗北を認めるにはまだ早いのでは？」

一氏が再考を迫ってくるが、それでも俺の考えは変わらない。

「いい。まだ負けてはないかもしれない。……だが、これから先はするべきではない戦だ。勝ちたい、それだけの理由で守るべき国を不必要に焼かせる戦だ。まあ、それで六角の誇りは守れるかもしれない。けれどな、その誇りでお前の家族はメシを食えるのか？」

「誇りを捨てる、と？」

「誇りを捨てる……というか、そもそもの仕事が違うんだ。戦って武勇を誇りたい奴は誇ればいい、それが武士の仕事だ。止めはしないが、ケツは持たねえ。一方で俺は武士ではあるが、それ以上に国主で家主なんだよ。国と家に属する人間を守り、メシを食わせること。それが、俺のなすべき仕事だ。俺は自分の仕事をするまでだ」

俺は言うが、家臣団はまだ納得し切れてはいないらしい。まあ、ぶつちやけ余力はあるからわからなくてもない。

だが、俺はこの余力を戦うためではなく、守るべきものを守るために使いたい。

幸い、まだ交渉はやりようがある。

一番高く六角を織田に売りつけて、さっさと領国を平時に戻す。当座の仕事はこれ一本になるだろう。

第6章 A l i t t l e p e a c e

第49話 新秩序

「もう一度、こんな形でこの城に来ることになるとはな……」

数十の護衛を率いて、高村は金華山を見上げた。

織田の侵攻から数ヶ月に渡って続いた桑名の戦いは、高村の降伏により織田軍に軍配に上がった。今、彼はその身を処される側に回っている。

「よく来たわね、歓迎するわ」

高村らを信奈自身が迎える。

その笑みは極めて勝ち誇ったものであり、高村は内心で軽くカチンと来ていたがお首に出さず続けた。

「こちとら、敗軍の将だ。札など軽くていい。早く交渉に入ろうぜ」

「そうね、まだ全体では桑名表が終わっただけに過ぎない。松平を救援しないと、終わりとは言えないわ」

挨拶もそこそこに、両者の会談が始まる。

とはいえ、話すことはあまりない。

一応、争点は北伊勢の帰属問題なのだが、高村はこれをほとんど織田家に渡すことに承諾した。また、志摩に織田家臣の九鬼嘉隆が入部することに關しても承諾している。

話し合うことが簡単に片付いた上に、変に高村の気を損ねて本格的な抗戦をされたら困る。その辺りの事情もあつて、織田は六角に配慮せざるを得ない。

かくして、高村は自分の代で切り取った領土は放棄せざるを得なかったものの、家督相続以来の領地に関しては安堵を勝ち取ったのである。

敗戦処理としては悪くない成果であった。

ただ、会談は終わらなかった。

むしろ、高村の敗戦処理はこの日の行程の前座でしかない。

この日の本番は高村ではなく、彼が連れてきた一人の姫武将の話にある。

足利義輝の横死後、六角家に保護されていたその姫武将の名は明智光秀と言った。

*

「これで、畿内に麒麟が来ればいいんだがな……」

会談が終わった後、俺は岐阜城に設けられた月見櫓に座り、夜空を見上げていた。

一日を振り返る。

幸いなことに六角の領地はかなりの部分を確保することができた。俺も当主を続投していいらしい。まあ、ある程度の成果が見込めるからこそあのタイミングで降伏した訳だが、どうやら間違っていないかったようだ。

「どうやら命拾いしたようだな、高村」

のんびりしていると、長政に話しかけられる。

こいつもまた戦後処理で岐阜に来ていた。

「最後の最後にお前に参陣されたのが、運の尽きだったな。お前がいるだけで近江の兵は動けなくなる。伊勢で戦った五千も手強かった」
結局のところ、最後に俺を詰ませたのは長政の外交勘だろう。

俺を倒すのに決定的な役割を果たし、戦後に松平と共に織田の藩屏として政権に参画する。その道をこいつは選んだのだ。

ちなみに俺は武田の下でこれをやりたかったんだが、松平の奮戦で計画は破綻して今に至る。

まあ、あの大戦の話は会談の辺りで散々した。それとは別に聞きたかったことがあるから、一旦話を切り上げる。

「それで、長政。お前はと思う？　うちの居候が持ってきた話は」「あの話か。私としてはなんとも言えないな、適切な足利将軍がいな以上悪くはないと思うが……」

長政もやや口を濁す。まあ、正直なところ正当性には俺もしつくりきていない。

御所が絶えれば、吉良が継ぎ、吉良が絶えれば今川が継ぐ。

そうまことしやかに伝えられてきた口伝だが、実際のところは御所が絶えたわけではない。

なにせ、三好によって立てられた第14代将軍・足利義栄がいるのだから。

ただ、三好を打倒するにあたって武田や織田がその正当性を認めていないだけだ。

不義を働いた三好を除き、今川新将軍を担ぎ上げることで新しい畿内の秩序を作る。その構図を今回、明智光秀は描いたのである。

「将軍を討つのに将軍を以ってする。この構図こそが畿内の戦乱を長引かせてきた……。だから、俺としてはこの構図は嫌いだ」

古くは足利義植派と足利義澄派。二つの将軍の血統の相克が畿内の戦乱の核となっている。六角もこの手の戦いにどれだけ巻き込まれたかわからない。

ただ、長い間巻き込まれてきたからこそ、この構図の利点も一応は知っていた。

「とはいえ、俺たちは名目上だが将軍の与力になる。俺たちみたいな利害が対立する大名でも、将軍の旗の下で一応一つにまとめることができるわけだ。連合政権の叩き台としては悪くないんじゃないか？」
今のところ、それぐらいしか評価は下せない。

鍵はこの中からどうやって織田を権威づけすればいいのか、と言ったところだが、すぐに考えるべきことではないな。

所領の安堵がなされた以上、考えることは一つだけ。

「とかく、畿内を安定させること。今の俺の目標はそれだな。俺に麒麟は呼べねえが、織田信奈ならそれが出来るやもしれん」

だから、俺は武田から織田信奈に賭け変えた。

あの大戦で見せた彼女の執念に、俺は敗北したのだ。

*

六角の敗北。

この報は武田にも伝わった。

「そうか、未だ瀬田に武田の旗は立たぬのか……！」

報を真田忍軍から聞いた信玄は思わず天を仰ぐ。

岡崎城は未だ落ちない。野戦では散々松平を蹴散らしてきたが、守城戦では粘り腰を見せた。

尾張や美濃の織田の諸城に備えてこちらの被害を温存したというのも原因にはある。しかし、それを引いてもなお松平の三河武士は不退転の覚悟で武田に食らいついてきていた。

(今は亡き)将軍を使い、六角高村と手を組んで上洛する態勢を整えた。松平は何度も撃破し、遠州は切り取っている。この岡崎とて攻め方はそう間違っているとは思えぬのだ。……感嘆すべきは織田・松平、両者の執念か)

織田は六角に幾度も敗北を喫しながら、なおも攻めの体勢を崩さなかつた。

松平は三度に渡り、大敗を喫しながらも立ち上がり、戦意を落とさずに武田に立ち向かってきた。

その結果、六角は桑名を失陥し、武田はついで松平を滅ぼすには至らなかつた。

この異様なまでの執念は信玄が今まで相手した武將たちにはなかつた。正義に固執する謙信もいるにはいるが、どこかカラツとしたところがあるため、違う。

「織田に松平。ひよつとしたら長尾ではなく、この両者こそがあたしの最大の宿敵になるかもしれない」

床几を片付けさせ、信玄は岡崎を後にする。

改めて認めれた大敵たちともう一度体勢を整えて万全な状況で戦うために。

かくして、武田軍は撤兵する。

元康はその後、織田から四千の兵を借りて三河の奪回に奔走。吉田城を奪還して、ひとまず三河を再統一した。

しかし、遠州は未だ武田の手の中にある。

当座の目標を浜松城の奪還に絞り、元康はしばらく苦闘を余儀なくされることとなった。

*

織田信奈の上洛はあつという間に終わった。

足利義輝を討った後の三好は再度分裂していたというのもあるが、松永久秀が真っ先に降伏したのが大きい。

抵抗しようとしていた三好三人衆はすぐに足利義榮を伴って摂津に退いたため、遮る者がいないまま、織田信奈は上洛を果たした。

(俺にとっては二回目の上洛だが、どうやら今回は違うらしいな)

俺もまた上洛軍の一員として、洛中を練り歩く。

初めて上洛した時は、民の誰もが門扉を固く締めてこちらの様子を伺っていたことを覚えている。

あの時は少し拗ねていたが、今なら分かる。かつて六角軍が天文法華の乱で応仁の乱以上の面積で京を焼いたこと、そしてありし日の承禎様の女癖の悪さが鳴り響いていたことを考えれば、歓迎されるはずもなかった。

しかし、今回はどうだ。

信奈公は上洛早々に乱取り禁止のお触れを出し、民は手を振って俺たちを迎えている。

畿内で長く戦い続けてきた六角の諸将。特に譜代の家臣ほどその光景は信じ難いものらしく平井殿辺りは目を丸くしていた。

「よもや、民にここまで歓迎されるとは思いませなんだ」

「俺もびつくりしてるよ。ただ、理由は分かる。今まで既得権益を否定してきて、畿内へのしがらみもない。そんな彼女ならば、畿内に新しい秩序を作ってくれるのではないか。そんな期待が街に満ちているんだと思う」

そして、俺もそんな期待をした一人である。

とかくこの日、ようやく京は応仁の乱以前の活気を取り戻した。

これが泡沫のものでないことを切に願わずにはいられない。

第50話 清水寺の戦い

上洛した織田軍は摂津近辺を周り、ある程度平定した後、美濃に帰っていった。ちょうど年の瀬ということもあり、信奈公的に正月休みのもりだろう。

今回の上洛軍は三万。

今の京にこれだけの兵を入れられるところはないから、用件を果たしたら帰るのは間違っていない。

「ふう、ようやく一息つけるな……」

俺もまた久しぶりに近江に帰っている。

近江に帰ってからしたことは、内政の立て直しだ。

今回で北伊勢の分の収入が減ったから、それに合わせて予算などを再編したのだ。

石高が十三万石減り、備蓄は払底した。今の財布はだいぶ軽いが、これからは軍拡を緩めて外交費もかなり減らすことができる。

織田との経済協力をさらに強めれば、長期的には財政はかなり改善されるだろう。

「まあ、とりあえず運命は超えたというわけ、か」

本来ならば、六角は織田の上洛の際に減んでいる。

今、このだらついでいられる状況をどうにかして掴み取ったわけだ。

「そういうえば、長政から新年の祝いの品が来ていたな」

浅井とも関係改善がある程度図られ、一応お歳暮が来るぐらいには進展があった。

吉継に命じてそのお歳暮の包みを持ってこさせる。封を開けると、香ばしい匂いが辺りに広がった。

「鯖の干物、か……。俺がこれ好きなのを覚えてたんだな……」

そんな些細なことでも、今となっては嬉しい。

かつて俺とお市は一緒にいた。が、六角と浅井の遺恨がそれを引き裂いたのだ。

しかし、その両家も今となっては今川幕府の下で対等になっていく。浅井側からしてみれば、ようやく六角と対等な格を持つと天下に示された訳だ。

自身が天下を差配するわけではないが、あれだけ熱望していた浅井の独立はもう叶ったと見ていい。

ここまでできて、ようやく両家の間に雪解けがやってきたのである。「吉継、義定と氏郷を呼んできてくれ。久々に四人で食卓を囲もうか」かつて望んだ夢は、形を変えながらもまだ途切れずに続いている。いつまでもこの平穏が続けばいいとは思うのだが、一つだけ懸念があった。

（浅井長政は織田信長を裏切るんだ。金ヶ崎でな）

この世界では長政に嫁はいない。つまるところ、お市の方に相当する人物がいない。だから婚姻同盟ではなく、ただの同盟というつながりしか織田家にはないのだ。

となると、いよいよ史実以上に織田にこだわる理由がなく、裏切りの可能性が増しているように思う。

俺は織田信奈に賭けたが、長政も必ずそうとは限らない。その日が訪れた時、俺はどう動くべきだろうか。

その答えはおそらく早いうちに出さなくてはならない、そんな気がする。

*

年明けだからといって京の町は、正確には権力への意志は休みにならなかった。

義元が詰める清水寺を守る明智光秀に一騎の早馬が入った。

早馬がもたらしたのは『大和の松永久秀がにわかには翻心。今川義元の首を狙い、一斉に京へ進軍を開始した』という凶報である。

「まずいです。京に大して兵がないことがバレてやがりますッ！」

呻く明智光秀。

三好の数は約一万。対して動員できる幕府奉公衆と在京織田軍の数は二千ぐらいか。普通の城ならば、少しは持ち堪えられそうな戦力

差だが、あいにくと今回はただの寺である。守るにしてはあまりに分が悪かった。

「美濃の信奈様にこの報を伝えたとて、間に合いません！ 高村殿に至急早馬を出すのですッ！ それまでは私になんとかします！」

使者にそう伝え、明智光秀は覚悟を決める。

（麒麟を呼べるのは、信奈様ただひとり。今ここでお飾り公方を失えば、織田政権は京での基盤を失います。そうなれば、もはや畿内に新しい秩序が根付くことはない……！）

未だ自分が織田の家中に馴染んでいるとは、到底言えない。

ただ、織田信奈には誰よりも夢を賭けていると自負している。力だけなら六角高村でも武田信玄でも構わない。

しかし、正徳寺で聞いた織田信奈の夢は天下の誰よりも自由に広くて、魅力的だった。

「京を守るは明智光秀。ここが、天下布武が泡沫の夢となるか否か最初の試練。皆の衆、私に力を貸して欲しいです」

光秀が懇願して頭を下げると同時に奉公衆たちが鬨をあげる。どうやら戦意は充分らしい。

「高村殿ならば、一晩で駆けつけられるはず。一夜、持たせられれば勝機はあるです」

はじめに光秀は集めた兵を清水寺の周囲に割り振った。

清水寺の中は防備には向かないが、寺内町はやや入り組んでおり物陰に足軽を潜ませれば、多少の時間稼ぎにはなるだろう。

事実、その目論みは当たり、市街戦で光秀は三好勢を食い止めることに成功する。

「うふ、寺で戦わないとは考えましたわね。とはいえ、市街戦なら市街戦でやりようはございますのよ？」

だが、ここは松永久秀の方が上手だった。

進撃が芳しくないと見た久秀は家臣に命じて容赦なく寺内町を焼いた。

織田が上洛する前には敵将が籠ったという理由だけで、東大寺の大仏殿を焼いた女である。

市街地を焼き払うことなど、なんの躊躇いもなかった。

「さて、小細工は終わりましたわね。皆の衆、清水寺に攻めかかりなさい」

久秀の号令と共に、三好軍が清水寺に攻め上がってくる。

光秀は自ら太刀を抜き、立ち向かう。寺に守りの備えがない以上、自らの軍勢が肉の盾になるしかなかったのだ。

「ああ、もう！ どうして私が大樹の真似事をしなくちやならないんですか、うら若い姫武将が畳に押し包まれて殺されるなんて絵面的にも酷すぎますです〜ッ！」

半ば悲鳴を上げつつ、光秀は三好兵を斬り伏せていく。さすがに亡き足利義輝には及ばないものの、光秀も一端の剣豪。数十人は息をきるように斬り捨てていた。

また、光秀は鉄砲にも優れている。隙を見ては、物陰から敵の指揮官級を見抜いてはその額に鉛玉を叩きつけていた。

こと単騎の戦闘力ならば光秀は高村にも比肩するものがある。その武者ぶりは前線の心の支えとなり、士気の柱になっていった。

「うふ。乱世とは面白いものですね。畿内の人傑は出尽くしたと思えば、まだ野にかような人材がいたとは……」

この光秀の奮戦に看過できぬものを感じたのか、松永久秀自身が彼女の前に姿を現していた。

「出ましたね、松永久秀！ なぜ信奈様を裏切ったのですか!？」

「うふ、畿内で生きる以上変わり身の早さは身につけて損はないですわよ？ 強いて言えば、正月だからと軍を美濃に帰す愚かさや六角高村をそのまま抱え込んでしまう脇の甘さでしょうか。いけませんね、これではあまりに野心が刺激されてしまいます……」

妖艶に久秀は笑う。あからさまに挑発して光秀の様子を楽しんでいるのだろう。生真面目な光秀は知ってか知らずか顔を赤くして叫んでいた。

「そんな変わり身の早さはいらねえです！ 掌さえもくるくると変えて、その身勝手さこそが畿内を乱し、ついには幕府も滅ぼしたんです。私はそんな恥知らずになるつもりは毛頭ないです!」

「うふふ、ならばその身勝手さを超えて足利亡き後の新秩序を担えるか、否かわたくしが見極めて差し上げますわっ！」

口論が終わり、後は剣戟の音だけが響く。

光秀は久秀にとつて強敵だった。

六角高村やかつて戯れで相手にした十河一存にも引けを取らない。

だが、彼らとは違いあまりに純真すぎたのかもしれない。

「そういえば、六角高村のことですけれど、援軍は来ませんよ。何せあの者もわたくしと同じく偽りで降伏した男。ここで今川將軍を見殺しにし、織田を内部から崩壊させた上で武田と再起を図る。その絵図を描いている、と聞いていますわ」

その久秀の囁きは、あまりに効果が絶大だった。

嘘かもしれないが、巨大な潜在敵に関することである。到底看過することは出来なかった。

「あつ、しまったですう……！」

動揺する光秀の脇に思いつき長柄が叩き付けられる。

吹っ飛ばされて、身体を強かに打ちしばらく動けそうにはなかった。

「さて、これで障害は取り払われました。今川義元の首、いただくとうましようか」

光秀を撃退した久秀は朝日を背に悠々と歩を進める。光秀は「おのれ」と悔しげに手を伸ばすも、ただ虚空を掴むばかり。

（どうやら、織田家でも畿内に新しい秩序をもたらすことは出来なさそうですわね）

久秀は落胆していた。どうやら、まだ己の夢は叶わないらしい。

長慶と共に見ていた夢の続きを見ることができる相手。それを彼女は探していたのだが、長慶は志半ばで倒れ、後を継いだ義継は政治的に三好三人衆に屈した。結局のところ、久秀は一人になったのだ。

このまま、義元を討てば終わる。終わるのだが、久秀はすぐに向かうことはなかった。

東側に目を凝らせば隅立四つ目の旗印が翻るのが見えたからだ。

「うふ、もう少し速ければ明智殿も虚言に惑わされることもなかった

というのに、間の悪いこと。とはいえ、これで目的は果たせなくなり
ましたわね……」

妖艶に笑いながらも、久秀は手勢の下に急ぐ。

軍勢の主は六角高村。

畿内最強格の武将にして、三好を決定的に凋落させた張本人。

久秀にとっては決して見過ごすことができない相手だった。

第51話 待ち人

京に入った俺たちは手始めに清水寺の救援に当たった。守将の明智光秀はぼろぼろになっていたが、今川義元は無事らしい。

三好三人衆は俺たちが入ると同時に退却することを決めたらしく、摂津方面に逃げていく。

「清水寺はなんとかあったけどさ。三好を阿波に逃すと面倒だよ？ 追撃した方がいいと思うんだけど」

「まあ、それは思うわ。じゃあ、追撃するか」

義定の献策に従い、俺たちは追撃を仕掛けることにした。

駆けることしばし、洛西の桂川の辺りで三好軍に追いつく。三好軍は現在進行形で渡河しており、惜しげもなく隙を晒していた。

「敵勢が見えた。吉継、敵の将についての情報はるか？」

「三好三人衆に松永久秀。阿波衆をまとめるのは篠原長房の弟・自遁と伝わっております。こちら側に関して付け加えるならば、丹波の荻野直正殿が援軍を承諾しました」

「そうか、丹波の赤鬼がこちらについたのは大きいな」

当主の三好義継は幼少のため、戦力としては数えない。ただ、それでも阿波衆をまとめる篠原長房がないことを除けば、現存している三好軍のオールスターとも言える。

ここで打撃を与えることができれば、もはや三好は畿内のキャスティングボードを握ることは難しいだろう。

「五千でどれだけやれるかは分からん。だが、三好を叩くにはいい好機である、か……」

こうなれば、迷う余地はない。

荻野直正の到着を待つのが一番いいだろうが、多分それじゃ逃げられる。雌雄を決するかはともかく、足を止める必要があるだろう。

「六角軍！ このまま三好を追い立てよ。畿内の秩序をより磐石なものにするのだ！」

号令をかけて三好軍を襲わせる。

兵数差は二倍はあるのだが、実のところそれはあんまり感じられない。

兵の練度はこちらが上ではあるが、長政によって虎の子の部隊が半壊したためピークに比べれば劣る。

だが、それ以上に渡河中とはいえ三好軍が脆弱だった。それこそ石山崩れで戦った時の方が手強いかもしれない。

(強さの差の理由は士気、か？ かつての三好は長慶の下で天下を統べるという気概があった。しかし、今は三好三人衆と松永久秀、篠原長房の三極に分かれている。心の分断が、軍としての結合を緩めたか……)

疑問に思いながら、俺は敵を屠っていく。

そして、斬り進めていくうちにほのかに花の香りがした。

「うふ、やはり六角高村は侮れませんわね、あれだけの戦をしてなお、まだそれだけの力を残している」

ふらり、と見知った顔が姿を現す。

松永久秀。

観音寺騒動を煽り、將軍を討ち、東大寺を焼いた畿内の魔境ぶりを体現したような姫武将であった。

彼女が率いる軍は桂川を渡ろうとする俺たちに横撃を仕掛け、無理やりその足を止めさせる。兵数は三千ぐらいだが、その統率ぶりは今の三好軍の中では頭抜けており、やりづらい相手だ。

「まったく不本意ではございますが、このわたくしが殿を務めさせていただきますわ」

そう嫺やかに笑って松永久秀は得物の十文字槍を構える。

本質的には格下なんだろうが、久秀の感性は確かはこちらの目線や息遣いだけで動きを見切り、ひらりひらりと攻撃を交わしていく。

「うふ、相変わらずの刀の冴え。されど、軍勢はそうではありませんわね」

「長慶を失って弱体化した三好家には言われたくねえよ。もう完全に落ち目じゃねえか」

「そうですね、義継様はもはや三好三人衆や篠原長房の意に逆らうことはできない。とはいえ、わたくしが戦う理由には変わりはありません」

言ったのち、久秀が槍を振るう。俺はそれを受けたが、思ったより勢いがあつたためかややのけぞってしまふ。

「変わらない畿内への怒り。心が荒み、不寛容になった天下。ええ、わたくしは打ち砕きたいのです。今も昔も」

継いだ出た久秀の言葉に思わず俺は気圧されてしまふ、それだけ言葉に力がある以上、きつとこれは彼女の本心なのだろう。

そして、なんとなく分かった。求め方の過激さに違いはあれど、久秀と俺の夢は同じ方向を向いている、と。

（とはいえ、彼女では畿内に新秩序は作れない。秩序を壊して混沌が生まれるだけだ。それでは、畿内の戦は終わらない）

しがらみだとか、怨讐だとか畿内に渦巻く呪いを軒並壊して更地にする。そして、その更地に新しい世を築いていく。

そうして初めて俺の、いや俺たちの夢は叶うのだ。

その新しい世を築く者こそが、織田信奈であり徳川家康である。あ

るいは在りし日の三好長慶もそうだったかもしれない。

「気持ちは同じ畿内の将として分かる。分かるが、天下が待っているのはお前たちじゃない。だから、ここで討ち滅ぼすまでだ」

「うふ、やれるものならばお好きにどうぞ。まあ、ただでやられるつもりはないですけど」

再度、馳せ違ふ。

松永久秀はまたもしつかりとした手応えで受け止めてくる。

なんとしても松永軍を抜き、三好の本軍を捕捉しなくてはならないという状況でこの事態はあまりよろしくはない。

畿内を早期に盤石にしなければ、遠州の統治を終えた武田が再び攻め上ってきた時にいよいよ織田は窮地に陥るのは明らか。だから、戦略的には松永久秀がらしくもなく殿をする価値はある。

（ただ、いかんせん久秀が何がしたいかが分からん。三好に従ったとしても、家中の主流から外れる。領国の大和に関しては信奈公から安

堵をもらっているから、久秀個人としては織田に残ったままの方がよかつたのではないか?)

言動、行動からして松永久秀は忠臣って柄ではない。三好長慶には大人しく従ってはいるが、三好三人衆と阿波の方針に賛同しているとは思えないのだ。

それに清水寺をあつさりとはり投げたのも気になる。俺の追撃を恐れたのもあるだろうが、あの守備隊の疲弊ぶりからして今川義元にかなり迫っていたはずだ。

疑問に思いながら、俺は刀を振るい続ける。対して久秀はただただ微笑んでいた。

*

「うふ、やはり手強いですね。ここでお暇するとしましょう」

「だいたい朝から昼ぐらいまでやり合っていたらどうか。」

久秀が踵を返すと同時に松永軍は桂川を渡っていく。俺たちは追撃を仕掛けてその兵を減らしたが、三好の本軍は山崎の辺りまで逃げてしまっている。こうなってしまうと追いつくのは難しい。

「ちつ、やられたか……。いや、せめて久秀だけでもここで仕留める」

松永軍には数百の被害を与えたが、久秀はすっかり逃げている。

三好の本軍が健在である限りは西の脅威が絶えることはないが、畿内では屈指の実力者を葬れば少しはマシになるはずだ。

「義定、荻野直正はどうしている?」

「桂川から三好が退いたと聞いて山城から摂津に軍を転進させてるよ。けれど、やっぱりまだ時間がかかるみたい」

「なら仕方ない。このまま進んで、久秀を追いかつ摂津で離反した連中を叩く。三好がいる以上、摂津に不穏な奴を残しておくわけにはいかないからな」

「幸いなことにこちらの損害はあまりない。このまま摂津再平定に目標を変えて進むことにした。」

だが、摂津に入ってしまった。高槻の辺りで俺たちは逃したと思った三好軍を捕捉していた。

「高槻を素通りさせるわけにはいかぬなあ。逆臣どもよ、覚悟すると

良いわ」

「三好を逃してはならぬ！　それがどうす様の御為となる！」

「これが立身の好機ぞ！　かかれ！」

高槻城主で足利義輝の側近だった和田惟政。それに加えてキリシタン武将の高山友照。摂津池田家から派遣された武勇に優れる中川清秀。

この三将が摂津の織田方の国人を糾合して、三好軍の足止めを図っていた。

（幕府旧臣に、キリシタン、摂津の大勢力。いずれも利害が対立する者ばかり。それがこぞつて織田に味方するとは……）

思わぬ織田信奈の求心力に舌を巻く久秀。

特にキリシタンが多く加勢していることが久秀には衝撃的だった。彼女にはあざかり知らぬことだが、今回のキリシタンの集結には宣教師のルイズフロイスが囁んでいる。

堺で相良良晴と交流を深めた彼女は今川幕府にキリスト教の布教を許可してもらおうべく、自主的に織田家の危機に立ち上がる事を決めていた。

（このキリシタンの数は異常。おそらく宣教師が声を掛けねば集まらない。今まで国内の世情に関わろうとはしなかった彼らを動かすとは、どうやら織田信奈は今までの畿内の覇者とは違うようですわね）
波斯と西欧という違いこそあれど、自身と同様に外国にルーツを持つキリシタンに久秀は親近感を覚えている。奇しくも両者とも畿内の旧勢力からは迫害を受けていた。

『久秀、ありがとう。貴女のおかげで私は父の無念を晴らすことができました。だから、お礼代わりに誓います。これからの私は貴女のよくな人を爪弾きにしない新しい畿内を作る、と』

必死に戦うキリシタンの姿を見て、ふと久秀の脳裏によぎった記憶がある。

かつて江口の戦いで細川晴元と三好宗三を打ち砕いた後に長慶が口にした誓いの言葉。今はもう遠い、夢の始まりの言葉だった。

（長慶様。どうやら、待ち人はすでに来ていたようです。わたくした

ちが夢見た新しい畿内を引き継ぐ者は、尾張にいましたわ)

目の前で戦うキリシタンがかつての自分に重なる。こうなつてしまつては戦意など湧いてこようもなかった。

この時、久秀は自分の敗北を認めた。

戦ではなく、心が完全に織田信奈に屈したのである。

ある程度戦い、自軍から敵兵を引き離すと久秀は戦場から離脱する。この無断行動は三好本軍を大いに動揺させた。

「これは僥倖。畳み掛けるぞ！」

そこに、六角高村が颯爽と攻めかかる。

戦いの最中に荻野直正も到着し、徹底的に三好本軍は痛めつけられた。

結果として三好三人衆の内、岩成友通が義定に頭蓋を撃ち抜かれて討ち死に。阿波衆を率いていた篠原自遁も荻野直正に討ち取られる事態で、三好本軍は這々の体で阿波に逃げ帰ることとなった。

この一連の戦いは桂川高槻合戦と呼ばれ、織田政権が畿内の地盤を固めたものだと後世の歴史家に評されることになる。

第52話 夢の続き

桂川高槻合戦から三日。

俺は降伏を打診してきた松永久秀を引き連れて京に来ていた。

六角が出兵した二日後に織田軍は出陣し、洛南の方で三好側の掃討にあたっていたらしい。

「高村。さきの合戦のことは聞いたわよ。大活躍だったそうね」

信奈公は言うが、今回に関しては特に何かやったわけではない。高槻まで来たらなぜか久秀が離脱して三好本軍が崩れていたのだから。

だから、6割ぐらいは久秀の戦意を挫かせるきつかけとなった宣教師と懇意になった俺の左隣に座る相良良晴の手柄だろう。

「まあ、三好本軍の将を討ち取ったのは俺たちや荻野直正殿か。その分の褒賞はもらう。だが、他の手柄は相良と明智に分配してやってくれ」

「それはわかってるわよ。あげられる土地はないからひとまずあんたには名物を渡しておくわ。今井宗久に聞いたところ、それは八千貫ぐらいの価値はあるそうよ」

言うのと、信奈公はぽいつとその名物を投げ渡してくる。

俺があっさりキャッチしたからいいが、その様子を見て、茶の湯に造詣の深い光秀は慌てていた。まあ、形のない権威に対してあまり価値を見出さないのは、信奈公らしい気がする。

……というか、これ曜変天目じゃねえか。前世の茶道部の女子たちに見せたらあいつら発狂するぞ。だって現存してるやつ確か全部国宝だもん。

「ありがたく使わせてもらう。俺はあんまり得意じゃねえが、畿内の諸将との付き合いには必要だからな」

実際のところ、畿内の諸将は教養を重んじる傾向がある。茶の湯しかり歌しかりだ。最近では信仰するとまではいかないものの、キリスト教や南蛮の文化もはやり始めている。とかく、政治以外の共有する世界観を持つことが交流には欠かせない。

俺の後は良晴と光秀の論功行賞を行い、軍議は遂に本題にたどり着く。

「大和の領主を務めさせていたただいております松永久秀。罷り越ししましたわ」

花のように美しく笑う久秀。一応降将だというのに、どこかふてぶてしさすらあった。

「そう、あんたが。よくもまあ謀反してくれたわね。でも、降伏してくれた以上、命は取らない。それは保証するわ」

「感謝いたしますわ、信奈様。そうそう、渡したい物がございましたの」

言うと、久秀は傍らに置いていた木箱を持って信奈の前に進み出る。

「これは？」

「わたくしが所有する大名物の一つ、九十九髪茄子ですわ。これを信奈様に差し上げようかと」

久秀が言うと、諸将が特に畿内在地の将が一斉にざわめいた。

「なんですと……！」

明智光秀に至っては清楚美少女がしちやいけないうんぐり顔をしていた。

だがまあ、こういった反応になるのも致し方ない。

九十九髪茄子と平蜘蛛の茶釜。

この二つの大名物が松永久秀を畿内屈指の教養人としての名声を確かな物にしていたのである。それを差し出すとなるといよいよ久秀は本気らしかった。

「あなたの象徴とも言える大名物、高槻の寝返りによる功績。ここまですやられたらしようがないわね。弾正、大和一国は安堵してあげるわ！」

このパフォーマンスが効いたのだろう、信奈公も久秀に対して強い処置は取れなかった。

無論、討たれかけた光秀は反論したが、信奈公は取り合わなかった。ただ無警戒というわけではなく、一つだけ久秀に下問している。

「ねえ、あんた。三好長慶を暗殺したというのは本当？」

畿内に根強く残る風聞である。いわく、松永久秀は六角高村と凶り三好家に乗っ取ろうとしているというものだ。確か石山崩れの後くらいから出回っていたのではないだろうか。

「ありえませんか！ あのお方はわたくしの半生を捧げた方にして共に夢を見た同士。わたくしはあの方を守り、天下を治めるために戦っていたというのに！」

強く抗議する久秀。彼女が言うようにこれは完全に事実無根であり、むしろ俺は久秀と手を組むどころかなんとか追い落とそうとしていたわけだが。というか、その一環で俺も久秀に関する悪評や陰謀論をばら撒いていた側である。

「俺としては少々久秀は過激なところがあるってところだな。明確な敵対をした義輝公や三好家中の反久秀派以外にはそこまで人道にもとることはしてないと思う。こいつに関する悪い噂は三割ぐらいこちらが流したものだしな」

「そう、高村の裏付けがあるならいいわ。それで弾正、あんたの望みは？ 大和一国は安堵してあげたわ。けれど、あんたはそれで満足する人間じゃないでしょ？ その欲するところを理解できなければ、私はあんたを使うことはできないわ」

「長慶様と見た夢の続きを再び見ることに。わたくしや南蛮人のようなあぶれ者を排斥することのない秩序。信奈様とならそれが叶うとわたくしは思っていますわ」

信奈の問いかけに久秀は笑顔で答える。

それを見て、信奈公は微笑んだ。

「リアルカ！ 久秀、歓迎するわ。これからは私と共に夢を見ましよう。私の目は天下だけじゃなくて海の向こうにも向いている。波斯も南蛮も私にとっては分けるものでも追い立てるものでもないわ！」

そう言って、信奈公は久秀に右手を差し出す。

「ありがたき幸せ。よもや、再びわたくしの夢を理解してくれる方に出会えるなんて……。長く生きてみるものですわね……」

久秀はそれを感慨深げに掴み、頷いた。

*

戦後処理が終わって少しした頃に、ついに朝廷から正式に今川義元への將軍宣下の綸旨が伝えられた。足利義榮に与えられていた將軍位は取り上げられたため、これで正統性では今川幕府が優位に立つことになる。

ある意味、節目の時ではある。

だから、俺はずっと温めていた案を建白書にして信奈公に提出していた。

「京の再建ね……。確かに天下人がやらなきゃいけないことではあるわね」

「かなり金と時間がかかるが、これを果たせば織田の声望は抜きん出る。今までの天下人が出来なかつたことだからな」

京の町は長きにわたる戦乱で荒れ果てていた。応仁の乱と天文法華の乱で焼き払われたダメージが未だに抜けていない。今は上京と下京に分かれているが、それだって平安時代や応仁の乱以前の市域に比べれば狭い。

一応、三好長慶をはじめとした京を掌握した勢力が再建を試みた形跡はあるものの、ことごとく完遂には至らなかった。

『わしは六角や義晴さまの為に尽くしてきたが、京には悪いことをした。叶うならば、今一度京に上り、焼いてしまった街を再建したい』
度々、晩年の定頼様が漏らしていた後悔。

六角の最盛期を築いた英主がただ一つ残した瑕疵、それが衰退しきつた京の姿だった。

当主となったからにはいつか定頼様の代わりに果たしたいと思っていた。

「そうね、あんたの案を採るわ。ただ、六角からも資金は出しなさい。ただでさえ焼けた範囲が莫大なもの。織田の財布だけじゃ足りないわ」

「いい。もともとそのつもりだ。だからまあ後は宜しく頼む」

また正家にどやされるだろうなあ、と頭をかきつつ信奈公の前を去る。

財政的にはよくない。が、織田と六角の権威づけにはなるだろう。さらに言えば、これで一定の支出をすることで織田側からの警戒を緩めることができるはずだ。

(結局、織田政権は一枚岩ではないからな。畿内を抜きにしても、織田松平、六角、浅井で三つの利害が存在する。今はうまいこと噛み合つて鼎立しているだけに過ぎないのだから)

外敵ならともかく、自分達の落ち度で畿内を乱したくはない。そのためにはやはりある程度の政治的配慮は必要だった。

第53話 穏やかな時の終わり

思わずあくびが出てしまうような日々だった。

湖北を一望する小谷城の京極丸。竹生島から帰ってきたのちに与えられた屋敷で浅井久政は琵琶湖を眺めていた。

「今日も湖面も穏やかか。のどかなものよのう……」

琵琶湖の湖面は長らく近江を見舞った動乱が嘘であるかのように静かだった。

だからこそ、久政は問わずにはいられない。

果たしてこれでいいのか、と。

久政の父・浅井亮政が江北の国人をまとめて決起してから幾星霜。浅井も三代目の長政まで続いてきた。

だが、ここに至るまでの道のりは遠かった。

浅井亮政は一代で大名の座にまで上り詰めたものの、畿内の秩序が乱れることを嫌った六角定頼の手によって一時的に小谷城を落とされるという屈辱を味わい、江北完全掌握に必要な時間を奪われた。

自分の代では定頼と承禎の手によってさらに追い詰められ、妻と娘……いや、息子を人質に差し出さざるを得ないほど追い込まれる。

(今、思い出しても腹立たしいわい。おのれ、おのれ……！)

まだ幼かった妻は承禎に何度も犯され、生まれたばかりの長政は本来の在り方を歪めなくてはならなかった。わざわざ自分の目の前で妻を犯してみせた承禎の勝ち誇った笑みは忘れられない、忘れてはならないものだ。

(だが、わしはそれでも耐えた。いつか六角に捲土重来を期すために。長政にかかる屈辱を味わせたくはなかった)

妻と娘の幸せを代価に稼いだ時間。その時間を使って久政は辛うじて江北国内を抑え切り、内政を整えた。幸いなことに次の代の長政は久政とは比較にならないほど優秀だった。それこそ英雄だった父の面影を長政に幻視するぐらいには。

(父は定頼に阻まれ、わしの代はどうにもならぬ。しかし長政ならば、

浅井を揺るぎなき江北の覇者にできる。六角だって滅ぼせるやも知れぬ。そのためならば、わしは如何様にでもこの命を使ってやろうぞ)

ようやく見出した長政という希望。久政の半生は彼女が雄飛するための下地を作ることに費やした。

そして、迎えた野良田の戦い。

浅井の未来を決める大戦で、長政は六角を撃破。

ついに浅井は六角のくびきから逃れたのだった。

「あの時は、なんでもできると思っておったのだが……、あやつが現れるまでは」

思わず口からため息が漏れる。

亮政に定頼がいたように、長政にも宿敵が現れてしまった。

「六角高村。あやつさえいなければ、今頃は近江は浅井の物であったであろうに」

それは畿内最強の将の名前。

僅かな時間で六角を急拡大させた英傑の名前だった。

神仏がいるというならいかなる巡り合わせか問いただしてやりた。なにゆえ、浅井にこのような苦難を与えるのか、と。

結果として高村の拡大の結果、長政の勢いは完全に抑え込まれた。そして東方で覇権を得た織田に膝を屈せざるを得ない状況となる。

確かに今は織田の傘の下で平和なのだろう。

だが、それはただ生かされているだけに過ぎない。結局のところ、昔とは変わらないのだ。

(……それでわしが半生を費やした意味に、妻の屈辱と無念に見合うのか?)

忸怩たる思いが久政の胸を這う。

そんな時だった。

越前の朝倉義景から密書が届いたのは。

*

「織田軍が、若狭武田の後瀬山城を制圧か。よくやってるよ、ほんと」
「若狭武田は幕府の主力としてこき使われてたからねー、今更大軍を

凌ぐ余力は残ってなかった感じかな」

京・八条の六角屋敷。

現代でいうなら京都駅の近くに建てられた屋敷で俺と義定はのんきに茶を飲んでいる。

今回の織田の若狭征討に六角は参加していない。過日の摂津戦役を戦った代休という名目だが、それ以上に六角の勢力伸長を抑える目的の方が強いのは明らかだった。

「浅井も出てないから信奈は畿内で直轄地を広げたいんだろ。高村たちが味方してくれているけど、家単位だと織田は畿内に基盤を持ってないからな」

同じく若狭征討に参加していない良晴が言う。

今の織田政権の勢力図は濃尾北勢の織田、江北の浅井、江南伊賀の六角、丹波の赤井、大和の松永と広大だが、いかんせん織田家自身の石高となると東海の領地に山城と摂津の一部を加えても百五十万石に満たない。この数値だと浅井と六角、荻野辺りが手を組んだだけでかなり肉薄されてしまう。

「織田が畿内で一強体制を築くにはまだ足りない。若狭と河内和泉辺りを完全に直轄にしなきゃな」

「だろうな。しかし、俺としては意外だったな。若狭だけで済ませて越前までは攻めないなんて」

史実では、京を安定させた後の織田は越前の朝倉征伐にあたってはたはずだ。そしてそれが金ヶ崎に繋がり、かの有名な信長包囲網に絡め取られることとなる。

「いや、攻めるよ？ 越前。若狭はついででその後に東進。一気に駆けて一乗谷まで攻めるってさ」

「え、それ俺知らないんだけど」

「わたしも十兵衛が漏らすまでは知らなかったんだけどね。なんでも浅井が動きを見せる前に潰して外交的に浅井を孤立させるのが目的らしいから。あ、これ結構機密だから内緒にしといてね」

団子を頬張りながらなんでもないことのように義定は言うが、内容はかなりイカれてる。事実上の北近江の併合宣言であるし、何より

金ヶ崎に繋がってしまう。

事態のヤバさは相良にも分かったらしい。頭を抱えて「若狭征討つて言ってたから油断したッ！」と呻いている。

「とりあえず相良。お前は五右衛門辺りを使って浅井に釈明の使者を出せ。これで最低限こちらの評判は落とさずに済む」

「わたしはどうしたらいい？」

「俺たちは領国に帰るぞ。おそらく北畠が敵に回る。備えをしておかなきゃならん」

場の雰囲気はすぐさま緊迫したものに変わる。わかつてはいたが、ついに潮時らしい。

晩秋の昼下がり。

木枯らしと共に穏やかな時は終わりを告げた。

第7章 Snow fairy

第54話 発火点

越前国一乗谷。

谷戸の中に歴代の朝倉当主が作り上げてきた城下町は今や『北の京』と呼ばれるまでに発展していた。京や堺からは多くの文化人が集い、今は長谷川等伯もまた一乗谷に許を構えている。

その一乗谷の中心、朝倉館に三人の武将が集っていた。

「今、やらねばならぬようだな。やれやれ、余にとつては迷惑極まりない。都の争いに介入せねばならぬとは」

「ええ、義兄さまには興味ないだろうけれど、現状で朝倉が安寧を手に入れる方法は畿内の影響力を強める、これしかないわ」

朝倉義景と朝倉景鏡。越前を差配する紫髪一族が薄暮の中で笑う。一方、来客の浅井久政は固唾を飲んで二人の挙動を見守っていた。

浅井と六角三代の確執。朝倉の石高の百万石。そして、織田と六角を主敵にする周辺の大名達。そして、浅井長政の未来。

全てを秤にかけて末に久政が導き出した答え。

「それにしてもよく考えたものだ。浅井と朝倉、それに北畠と六角、斎藤の残党。全ての歩調を合わせて織田と六角にあたるなど、と」

「愚鈍な貴方らしくないじゃない、久政殿。誰の入れ知恵かしら？」

「言えぬ。無用な混乱を招くゆえな。ただ、大元を考えたのはわしよ。あやつはわしの素案に少しばかり修正と加筆をしただけにすぎぬ」

周りの大名全てを敵にまわして勝ち切れる武将はそこまで多くない。六角高村ですら織田と浅井と北畠の三家を敵に回してしまつては最終的には及ばなかった。

ただ、そこまでの勢力を外交で束ねられる存在は稀有だ。前回は北畠を除けば、織田と外交的に通じている勢力だったからまだ難易度が低かった。しかし、久政の構想では武田に三好などさらに多くの大名

を巻き込もうとしている。

「答えて下され、義景殿。包圍網を作るか否か。やらねばならぬことが多いゆえ手早くお頼み申す。織田信奈の軍勢も今や敦賀を抜いていよう、後手を踏んでもわしは知りませぬぞ」

「まあ、急くな久政殿。参加は致そう。この一乗谷に織田の軍勢を入れるわけには行かぬからな」

詰め寄る久政に義景は悠然と笑う。

ここに信奈包圍網は成立し、久政らの外交努力で浅井朝倉の秘密同盟の枠を超えてさらに拡大していく。

*

一乗谷からの帰路。刀根坂の辺りで久政は待たせていた一人の男と落ち合う。男は老いてはいるものの、肉体は頑健で眼光是まるで虎のように鋭かった。

「待たせて申し訳ない。して無人斎殿、これでよいか?」

「ああ、愚鈍なうぬらしからぬ手際よ。どうやらうぬも己の心のうちに獣を飼っていたらしいな」

「獣の方がまだ可愛げがありましような。わしの腹に巢食うは情念の鬼。ままならぬ荒れ狂う心よ」

「鬼にしる獣にしる、腹に一物がある者は侮れぬ。儂がかつて学んだことよ」

そういつて無人斎は傲岸不遜に笑う。それをしらけた様子で眺めた後、久政は告げた。

「ひとまず手勢を集めてくれ、無人斎殿。敵は小谷城にあり。長政に悪いが、これよりはわしの戦じゃ。しばらく引つ込んでいてもらう」
「承知した。しかし、儂が親が子を逐う手助けをするなど、皮肉なものよな」

久政と無人斎は二千の手勢を率いて小谷城に押し寄せた。

長政の近臣が異変を感じて押し留めようとしたものの、時すでに遅し。長政の元にたどり着かせてしまう。

「父上ッ! これはどういうことですかッ!」

裏切った近臣に拘束されながら、長政は実父に言い募る。

「長政。これが答えよ。いかなる理由があつたとしても、浅井と六角は共に天を戴けぬ。わしについた家臣の多さがその裏付けよ。ましてや織田は浅井と朝倉を引き離すことで北近江を乗っ取ろうとしておる。こうなつては最早、戦う他ないのだ」

言い聞かせたのち、久政は指示を出して長政を竹生島に護送させる。

「許せ、長政。お主のためぞ。わしは三代に渡る因縁を終わらせてくる。それまでは黙って見ているのじゃな」

「黙って見てなどいられませぬ！ いがみあつてはまとまるものもまとまらず、終わるものも終わらない！ 父上は両細川の乱や京極騒乱をお忘れか！」

「無論覚えておる。されど、わしはそこまで忍耐できるほどできた人間ではないのだ」

なおも言い募る長政を一瞥して久政は小谷城の本丸を後にする。

語るべき相手を失つた長政はただ項垂れるばかりであつた。

*

久政が家督を奪取した後の浅井の動きは滑らかだつた。

湖西では新庄直頼を大将に、宮部継潤を副将に据えた八千の兵を今津に向かわせ、越前から京に至る最短経路を閉鎖。湖東には無人齋経由で連絡を取り合つていた六角義治を蜂起させて鎌刃城に入れ、京と美濃も閉鎖。

残つた近江と伊勢を繋ぐ鈴鹿峠も北畠を北上させたことで安全圏ではなくなつた。

「わかつていたとは手際がいいな。そして、的確に嫌なところを抑えてくる」

俺の耳にも北畠の北上の報は届いていた。敵の数は九千。今までの北畠では最大の動員数である。いよいよ本気で亀山城を抜いて伊勢を統一しようと思ひ込んでいるのが、ありありとわかつた。

「山岡殿。織田軍の動きはどうだ？」

「相良良晴殿を殿にして西近江を南下しております」

「西近江？ あつちに浅井軍が向かつていたのでは？」

「どうやら会敵する前にすり抜けたようです。敵がない事を察した浅井軍はさらに南下。坂本と堅田を抑えに回りました」

「そうか。なら織田軍が壊滅することはないな。ただ、坂本と堅田になると瀬田は近い。山岡殿は居城に戻って織田の在京組と連絡を取って警戒をしてくれ」

報告を聞き終えた俺は息をふう、と吐く。

流石は織田信奈というところか、引き際は心得ている。もしも少しでも浅井の寝返りの報に動揺して軍が止まったのなら今津の辺りで浅井軍に阻まれていたに違いない。

「だが、問題は湖東だな……」

六角義治が復活し、鎌刃城から日野方面に向かって三千ぐらいで軍を進めている。これだけなら問題はないが、亀山に早急に万近くの兵を入れなくてはならず、一応瀬田方面にも多少の兵力を残しておくてはならない。

（やはり、この前の損害が戻ってないな。こちらが最大で出せるのは一万四千ぐらい。とはいえ、無邪気に全部をぶち込めねえから若干兵が足りない）。

だが、今回は前とは違って味方がいる。自分だけで抱え込む事もないのだ。

「二氏。斎藤道三殿に鎌刃城に出てきてもらうように頼んでくれ」

これでひとまず湖東における処置は終わった。とはいえ、これは対症療法でしかなく、第一歩に過ぎない。

（おそらく包囲網の大本命は武田だろう。武田が再び上洛軍を興す前に可能な限り、戦線を潰しておかなくてはならない）

松平元康がこっそり浜松城を再奪取したとはいえ、遠州の過半は武田の手の中にある。東濃もまだ武田領だ。その時が来れば、瞬く間に松平は蹴散らされて美濃も岐阜を残して切り取られる。

そうなってしまうえば、武田を追い返したとしても織田は数年は内政の回復で足を止めざるを得ない。天下を取るにしても厳しくなる。

幸いな事は久政が突貫的に作り上げたからか、未だに連携にタイムラグがあることか。このラグがあるからこそ、まだこちらは手を打つ

ことができる。

「やれやれ、これから忙しくなるぞ……」

これからの仕事量と締め切りを考えると憂鬱になる。

けれども、やるしかなかった。

第55話 苦い記憶

……………

曇り空の下、六角軍は中伊勢を駆けていく。

その軍旅の中に俺はいた。

今回の戦は中伊勢の神戸氏の家督が具盛に変わって具盛が地理的な近さから六角についたことから始まる。今まで伊勢では関氏ぐらいいしか影響力を持たなかった六角はこれを快く受け入れた。

ただ、元々の主人である北畠家がそれを許すはずもなく、すぐに神戸氏に軍を差し向けた。これを聞いた神戸具盛は早速六角に救援を要請。せっかく新たに得た伊勢への足掛かりを失いたくない六角もまた軍を差し向けたという次第だ。

「北畠かー。大した武将もない紀勢の辺りで暴れ散らしているだけだろ？ 大して強くないんじゃないのか？」

「かもなー。当主も晴具から具教に変わったばかりだし。この戦は勝てるでしょ」

軽口を叩きながら俺たちは南進していく。すでに神戸氏を攻めていた軍は撃退し、今は少しでも北畠の領土を切り取ろうとしていた。

「新十郎もそう思うだろ、な？」

「まあな」

馬上で笑う俺。この時の俺は初陣ながら兜首を三つ取っており、正直言って浮かれていた。今はあまり感じないがこの当時は『中身が現代人の俺が果たして戦国時代に通じるのか？』という不安に苛まれていた。兜首三つという戦果はそれを慰めるに足るものだったのだ。

軍が雲出川に差し掛かる。おおよそこの川を境に神戸氏と北畠の領土が分かれており、これからは敵地である。

意気揚々と川を渡ろうとしたところ、六角軍は側面から強襲を受けた。

どうやら川縁の茂みや林に伏せていたらしい。数は千はいかないようだが、かなりの精兵だった。

「目賀田掃部様、討ち死に！」

「平井備前様も同じく！」

次々と六角の大名が討ち取られていく。こっちの軍は五千を超えているにもかかわらず、この千にも足りない軍勢にひたすら後手後手に回っていた。

「なんだよっ！ こっちは五千だぞ？ なのに、なんで……！」

仲間の一人が問いかける、その声音はどこか悲鳴に似ていた。

得体の知れない恐怖に俺たちは震えている。無理もない、多少は腕に覚えもあり、僅かばかりの戦果を得ていたとしても、俺たちは所詮は初陣の若者に過ぎないのだから。

とはいえ、ここで怖がつてばかりではただ命を落とすばかりのよう
な気がして、俺は一つ口にしていった。

「……立ち向かうしかない。怖くとも挑めば、何かが変わるはずだ
……」

俺の言葉に周りは怯えて抗議の声を出す。しかし、俺は聞く耳を持た
なかつた。

「死にたくない奴はついてこい！ 怯えた奴は知らん！ 勝手に死ね
！」

俺が一喝すると、周りの奴らは渋々ついてくる。彼ら自身に腹案が
あるわけでもない。良くも悪くも俺の選択に乗るか、一人で命を運に
任せるかしか選択肢はなかつたのだ。

俺たちは意を決して蒲生定秀殿を襲っている敵軍に側面から襲い
掛かる。

やぶれかぶれの突撃。意思の統一が薄い軍勢。力はあるけど、心が伴
わない若造たち。

これでは、側面という有利を取ってもさして意味はなかつた。

「助けてくれ、新十郎！ ……ぐわあッ！」

「だから、僕は逃げようって言ったんだ！ うわあ！」

「やめ……、やめて、助けて……」

目の前には惨憺たる光景が広がっていた。

ある者は斬り倒され、ある者は怯えて逃げようとしたところを容赦

なく矢で射抜かれ、ある者は姫武将の宿業が捕らえられて攫われていく。

俺はその一つ一つを止めようとし、刀を振るったが九割は届かない。

「……くそ、届かねえ」

最早、兜首を三つ取ったことなどどうでもよかった。

今の俺では、皆を助けられない。伸ばせる腕はそこまで長くはない。そのことを、痛いほど突きつけられた。自分が生還することすらももう覚束ない。

ならば、せめて一人でも敵を討つ。そうしないでは、気が晴れなかった。

覚悟を決めたというか、やけになった俺はひたすらに敵を斬り続ける。累計で六十は斬り捨てていたと思う。

ここまで来ると、流石に北畠側も看過できないのか包囲を強めてくる。

そして、ついに俺は失血と疲労で倒れた。

(不甲斐ねえし、申し訳ない。俺は恐怖を紛らわせるために、皆を駆り立ててそして殺したのか……！)

悔いても悔やみ切れない。身体ももう動きはしない。

ああ、なんとという無駄な転生なのだろうか。

俺はただ、自分の愚かさを呪っていた。

視界の端に白刃が見える。

どうやらここまではらしい。

しかし、その白刃が振り下ろされることはなかった。

「……いえ。このような狂犬を斬るまでもありません。せっかくの名刀を汚したくないですから。このまま放って野犬にでも食わせておきましょう」

北畠側の部隊長が吐き捨てる。

処女雪のように白い長髪は血に塗れ、元は艶やかだったであろう装束は返り血で赤く染まっている。顔もまた返り血を浴びているが、それでも整っているのは分かる。

雪の妖精のような絵になる美少女。義賢様なら迷わず鼻の下を伸ばしただろう。俺にはもうそんな余裕などなかったが。

「さてと……。生かしたのはいいですが、助かるんですかね、これ」
兵を引かせたのち、少女が俺の方に歩み寄りつんつんと頭を鞘で小突いてくる。

俺はどうしようもなく腹を立て、あらんかぎりの眼力で彼女を睨んだ。

「わお、その身体でその眼ができるなら心配は無用でしたね」

「……俺を、助けてどうするつもりだ……訳がわからん……」

息も絶え絶えに問いかけると、彼女は雪あかりのような淡い笑みを浮かべて言った。

「待ちます。わたしを脅かしうる武勇の芽が育つまで。そして、戦場で再度雌雄を決する。そうなれば、とても楽しいと思うのです」

「……そうかよ。なら、好きにしろ」

自分の道楽のためにどうやら俺は生かされたいらしい。呆れて乾いた笑いしか出てこない。ただまあ、命を拾えるならそれはそれで御の字だ。

その後、彼女は最低限の応急処置だけして去っていった。

美しくもどこか残酷で、なおかつ超常的な振る舞い。

まさしく雪の妖精のような少女だった。

……………。

「いつ見てもいい気分はしねえな、これ……」

背中がべたつく不快さで俺は目を覚ました。

夢を見た。俺が武将としてはまだ幼かった時代の頃を。

この後、俺は生存者を探していた定秀様の隊が見つけてくれたため、命を拾った。ただ、友のほとんどは帰ってきていない。

俺はこの戦で自分一人が強くてもどうにもならないことと、軍の力を束ねることの意味を知った。意思なき軍は弱く、謀少なきは負けるのだ。

この日を境に俺はまた軍略を学び直し、隊の訓練も見直した。一人だけが強くならずに皆の力を引き出せるようにする。そうすれば

きつと仲間を失うことは減っていくと信じて。

学び舎での友をほとんど失うという手痛い代価を払って、俺はようやく武将という生き物になれたのだ。

「北畠具教か……」

あれから月日は流れ、何度か彼女の軍を撃退し戦績ならばとうに俺が勝ち越している。

しかしそれでもさっきの夢を見るたびに、まだ俺は本当の意味では彼女に勝ってはいない。

そう、思わされるのだ。

*

最大の敵は時間で、敵の落ち度こそが最良の味方。

今の戦況をざつくりと表すならば、これが適当だろうか。

浅井の離反を受けてから高村がしたことは、まず北畠の牽制だった。亀山城外の野戦で軽く戦い、籠ると見せかけて夜襲。退くほどではないが、これで北畠は警戒して手が止まった。

その時間を使って次に六角義治の討伐。北畠方面軍から二千を抽出し、足りない分は織田から斎藤道三を呼び込んで補った。

予期しない挟撃の前に義治は何もできない。義治はあっさり逃げ、主戦力となっていた旧六宿老の目賀田氏は根絶やしにした。

「聞きしに勝る快速ぶり。これが、江南の天馬と呼ばれた者の力量か……」

合流した先で高村の一連の軍事行動を聞かされた道三は震撼する。

時間差を作り出しての各個撃破。近江と伊勢の間を疾く駆け抜ける行軍速度。織田とはまた一味違った率先即決の手法で高村の巧みさを如実に示していた。

「急げるなら急ぐ。今回はそういう戦だからな。幸いな事に義治の馬鹿が南下してくれたから敵の狙いが北畠方面軍の挟撃だとわかった。なら、後はそれを逆算して行動すればいい」

こともなげに高村は言うが、「口にするには容易いが、行動するとなると別」という真理を道三とて知らないわけではない。

「さて、道三殿。俺は亀山城に戻り、本格的に北畠を押し返してきま

す。このまま湖東に留まり、浅井への警戒をお願いしたい」

「承知した。北畠具教は剣豪將軍亡き後の畿内に於いては高村殿に並ぶ武勇を持つと噂されておる。気をつけることじゃな」

「そのことはとうに知っています。なにせ、かつて俺を完膚なきまでに負かした相手なので」

高村の言葉に道三は目を丸くする。口にした本人はそれを意にも介さず、南に目を向けていた。

第56話 偶発

「織田・六角包囲網ですか……。この機を逃せば、北畠が北伊勢に手が届く機会はないのでしょうかね」

亀山城を囲みながら、少女がひとりごちる。

年の頃は織田信奈より二つ三つ上だろうか。腰まで伸ばされた雪のような長髪に、均整の取れたプロポーションは家臣たちの目を惹きつけてやまない。

彼女こそが北畠具教。鹿島新当流の高弟にして南勢の国司を務める剣客姫であった。

「六角義治隊が打ち破られました。高村方の被害はほとんどなく、高村隊二千に加え斎藤道三の援軍二千が合流するとのこと」

「そうですか。まあもとより当てにはしておりません。この戦は私たちと六角高村のもの。端武者がしゃしゃり出てもいいことはありませんから」

こともなげに伝令に告げると、具教は床几から立ち上がり鞘から刀を抜く。

すると、ひやりとした空気が陣内に立ち込めた。いや、正確には居並ぶ諸将がそのように錯覚したのだが。

「ともあれ、向こう方に朗報が届いた今こそ好機です。ええ、大人しくしているのは性に合いませんから」

そう言うやいなや、ふらりと具教は本陣を飛び出して単騎で高村方に斬りかからんと駆けていく。家臣たちは流星にその無謀を許す訳にはいかないので、得物を片手についてくる。訳も分からない足軽たちはとりあえず上役を見て倅い、これに続く。

すると、不思議なことに指示をせずとも指向性を持たせて軍隊が動くのだ。

唐突な進撃。

高村がこれを見ていたならば「意味がわからん。これで統制が取れるのか？」とぼやくのだろうが、あいにく北畠の将はこの具教の凶行

に慣れている。追いながらしつかり陣形を組み上げていた。

「なっ、狼煙も合図もなく急に……！」

動揺したのは、六角側だった。陣形を組む時間すらも与えられず、散兵のまま次々と北畠軍の手にかげられていく。高村が帰ってくるのが近いと知らされ、わずかながらも安堵で気の緩みが出ていたのも辛かった。

「北畠家自体はそこまで強くはない。北伊勢の残党どもはややしつこい程度。しかし、北畠具教の旗本たちは違う。常日頃、北畠具教の剣術修行に付き合っているゆえ連携はともかく個々人の武勇では畿内で右に出る者はそうはおらぬのだ……！」

齒噛みするのは、亀山城主の関盛信。

どうにか前線の混乱を食い止めようと出張ったが、焼け石に水だった。

「さすがは姫。この機に亀山城を攻めますか？」

「いい……。まずは、敵軍の士気を下げること。桑名まで攻め切るにはさすがに兵力を温存しなくてはならないことぐらいはわたしにもわかります。……それに」

言うど、具教は西方の山々を見つめる。

格別に視力が良いものが見れば、すでに隅立て四つ目の幟が見えていた。

「すでに来ているのはわかっています。こちらの軍勢が更に前進したらば背後を断ち、囲み討つ。そういった腹積りでしょう。あなたのようにそんなことです」

すぐに北畠軍が引き返す。来る時は唐突だったが、帰る時は整然としている実になんとも言えない按配だった。

しかし、その身勝手な行軍に待ったをかけるものがある。

「さすがは具教公。引き際も鮮やかだ。だがな、囲めなかつたとはいえ突出している今の状況はこちらにはおあつらえ向きだ！ 皆の者、かかれ！」

馬上で刀を抜きつつ高村が号令をかけ、電撃的な速度で高村騎兵が具教の剣客軍団の後ろ背に襲いかかる。

だが、北畠側もそれは分かっており、すぐさま防戦体制に入った。「決して馬から落ちるなよ？」落ちたら最後、死んだと思え。俺の知る限り、足軽の練度では奴らの方が上だからな。騎乗しているからとて安心するな。手近な味方と力を合わせて着実に仕留めろ！」

敵味方入り乱れた乱戦の中で高村は指示を飛ばす。とはいえ、どこまで家臣たちが聞き取れているかは怪しい。伝馬を飛ばしたとて範囲は限られる。

後は祈るしかない。

(あの日から軍を鍛え上げて、戦術も学んだ。……ああ、そうだ。悔しいが、あの日があるからこそ今の俺がある。こいつらも強いが、お前たちも強い。信じてるぞ、お前ら)

心の中で念じたのち、意識を完全に敵兵に集中させる。

高村の武威が天下に響き渡っているためか、敵兵のマークは分厚い。高村の騎馬の周りには近習の山内一豊の他に、常に七、八人の北畠兵がつけられていた。

「行くぞ、伊右衛門。遅れはするな、死ぬから」

「ちよつ、待って下さいいお館様くツ！」

高村が騎乗馬に加速の意を伝え、一気にマークを引き離す。一豊もまた涙目になりながら愛馬の鏡栗毛を必死に追って食らいつく。並の乗り手なら東国一の名馬と称された鏡栗毛をもつてしても置いて行かれていただろう。この騎馬に対する造詣の深さは一豊の立身と命の助くとなった。

「いい加減、鬱陶しいなお前ら！ 伊右衛門、矢を寄越せ！ ありつたけだ！」

苛立ち紛れに高村は振り返って弓を乱射。三人張の強弓から放たれる矢は強烈で追ってきた敵はもれなく倒れ伏す。

自由になつた高村は再度敵を討ちつつ進撃し、ついに出会った。

「久しぶりですね。あの日の若武者がかような荒武者になつていたとは……。『男子三日会わざれば、刮目して見よ』とはこのことですか」

玲瓏とした声が戦場に響く。その声を聞いただけでいささか身体が冷えた心地がした。

透明感のある美貌はかつてよりもいつそう磨かれて美しく、そしてその異質感もまた際立っている。

そんな彼女の後ろに聳え立つのは、六角軍の兵の亡骸。数としては四十は超えているか。その右手に握られている刀はすでに赤に染められていた。

「あの日の俺とはもう違う。ただ、お前をここで逃す訳にはいかん。雪辱を果たし、なおかつ包囲網を崩さなくてはならんからな」

「そうですね。なら、やってみてください……と言いたいところですが、今はダメです。一応、兵士たちを無事に帰さなくてはならないので」

「そうはさせるかよー」

退こうとする具教に高村が矢を放つが軽く身をそらすだけでかわされる。

高村は乱射するが、具教の近習に当たりはしても本人には掠る程度で終わった。

「無駄ですよ、至近距離で私を射抜こうなどと。普通に手の動きとかで読めるので。まだ太刀の方が可能性はあります。……もしかして、新十郎くんは未だに私を恐れているのですか？」

わざと通称の方で高村を呼ぶ具教。刀の鯉口もチャキチャキと鳴らしていて、完全に挑発していた。

「やりましょう、お館様。こんなコケにされて悔しくないんですか？」
一豊は怒って高村に進めるが、当の高村は首を横に振った。

「いい。感情に身を任せて弓の有利を捨てるつもりはない。むぎむぎ北畠具教の得意な舞台に持ち込まれて討たれるぐらいなら、まだ逃げられた方がマシだ。それに一度敗れた相手を恐れることに何か問題でもあるか？」

「それは……」

思ったよりも理路整然とした理由で断られて、一豊は口籠る。
対して具教は得心したように笑っていた。

「そうですね。貴方はそういうつもりなのですね。思っていたのとはまた違うけれど、それはそれで楽しそうなので別にいいです」

ならば、まず私は逃げなくてはなりませんね。

そう言い残すと具教は乱戦の中を縫うようにすると抜けていく。

追おうにも俊敏性が違いすぎて届かず、弓で狙うにしても遮蔽物がありすぎる。

神秘的かつ強大にして奔放。人の手には余る雪の妖精を高村はただ睨みつけることしか出来なかった。

第57話 雲出川の戦い

亀山城外の戦いは北畠が退いたことで、一応はこちら側の勝利になった。とはいえ向こうは目的を果たせず、兵の数はこちらの方が減らしたから限りなく痛み分けに近いからなんともいえないが。

その後は、六角も北畠も自ら動こうとはせず戦線は膠着することになる。

「お館様。今は大丈夫でしょうか？」

亀山城で物資の帳簿整理をしていると伊右衛門から話しかけられる。字に触れるのもそろそろ飽きて来たので「別にいいぞ」と返事をし、腰を下ろした。

「で、何が聞きたい？」

「何故あの時、お館様は刀を抜かなかったのですか？ あれだけ誘って来ていたのです。お館様が抜けば具教は応じたはず。むぎむぎむぎ逃げられることもなく、具教の旗本も減らせた。あわよくば、彼女を討ち取ることさえも叶ったでしょうに……」

「また、その話か……」

思わずぽりぽりと頭をかいてしまう。

まあ、彼女にとつてはあの時の俺はひどく臆病に見えていたのだろう。そして、その見立てはまあ間違っではない。が、真意は言わなきゃ多分分からないだろう。自分から言うのは言い訳してるみたいであまり格好はつかないのだが致し方ない。

「確かに戦術的にもあの一騎討ちには価値があつた。だが、戦略や経済をも含めると全てが正しいわけじゃあない。……そうだな、これを見てください」

手近な所にあつた書棚から一冊の帳簿を手に取り、伊右衛門に渡す。すると彼女の表情は曇った。

「……これは……」

「ああ、主だった将兵や旗本の名簿だ。だが、先の大戦から黒塗りの数が増えた。この意味がわかるか？」

「人材がいなくなっているのですよね？」

「ああそうだ。そしてそれは国力の低下に直結する。何せ軍事にしろ内政にしろ、そいつが将来挙げたかも知れない利益や手柄がなくなっただ。まあ、それだけならどこの家も同じだが、うちだとより深刻になる。あくまで織田政権の構成員でしかないからな」

言うのと、伊右衛門は「あつ」と声を詰まらせる。うむ、物分かりがよくて助かる。

「織田政権の中で六角は確かな地位を今のところは得ている。石高も六十万石はあるから日ノ本全部の大名と比べると十分大国の範囲には入るだろう。しかし、武田や上杉は相手を倒せば、いくらでも拡大できるのに対し六角は倒したとしても織田側が力を持たれるのを嫌って加増は抑えられるはずだ」

俺らに拡大の余地はない。上限は多分百万石。だが、それは最終的な話であって例えば北畠を倒してもその所領を丸々貰えるとは限らない。前は倒して奪えばよかった。しかし、これからはそれだけじゃ回らない低成長期に移行したといえる。

「遠回り過ぎたがあれだ。あの戦狂いの妖精さんにそこまでの資源を投入する訳にはいかないのさ。世知辛い動機だが、これからは孫子の『戦わずして勝つ』を目指していかなきゃならない」

そのためにまずは北畠具教を否定する。

刀と刀で打ち合う一騎討ちではなく、戦略と知略を巡らして手を血に濡らさずに絡み取ることで彼女を否定する。何がなんでも彼女の有利な舞台で戦ってやるわけにはいかないのだ。

「しかし、それでは戦は長引きます。この度は時間が勝負。それはお館様もわかっていることでは」

「なに、心配することはない。刀を振らずとも敵を倒す手段はいくらでもある。……噂をすればだな、一氏」

ちらっと右に視線を向けると一氏が侍っていた。左手には書状が握られている。どうやら多少の進展はあったらしい。

「これもまた戦の形だな。ほら、戦わずして好転しただろ」

一氏から書状を受け取って伊右衛門に見せびらかす。すると、彼女

は呆氣に取られたような表情を浮かべていた。

*

北畠具教の一族、木造具政の寝返り。

これは北畠家にとつては致命傷になった。神戸具盛と手を組み二将は南伊勢への道を遮断するように布陣。

これには流石の具教も亀山からの北上は諦めて二将の征討に向かわなくてはならなかった。

ただ、それを見逃すほど俺は甘くない。

逃げる北畠軍の後背を突き、千人ばかりを無力化して、着実に北畠軍を削った。

「この流れを止めるつもりはない。このまま向こうの本拠地の霧山御所まで攻めるぞ」

俺たちは北畠軍をさらに追討しながら南下し、ついに雲出川にたどり着く。

川縁に立つ木造城には神戸具盛が布陣して渡河しようとする北畠軍に横から圧をかけ、木造具政は手勢を率いて北畠軍を食い止めていた。

(計らずもこの地にたどり着く……か。だが、都合がいい。種はとつくのとうに割れているんだからな。まずはここで勝負だ具教公)

境目の地ということもあるが、雲出川は因縁の地。

ここから反攻を始めることになるのは奇縁だろうか。

まずは先んじて兵を伏せられそうな箇所細作を放ち、伏兵を炙り出す。

木造具政がどこまで持ち堪えられるかは不安だが、これで北畠軍は南に雲出川、西に神戸具盛、東に木造具政、北に俺たち六角本軍と四方を固められたことになる。

「皆の者、攻め立てよ。雲出川を奴らの三途の川とする！」

采配を振るい、進撃を開始する。俺はまだ出るつもりはない。

数の力で徹底的にねじ伏せる。個の傑出を極めて端的に象徴している北畠具教に対してそれを成すことで、俺は武将としての『六角高村』を示そうとしていた。

*

「はあ、随分と狡猾になりましたね。まずは四方を塞いだ包囲網ですか。趣向としては悪くはありませんが、私以外には少々辛いものがあります」

戦さ場を跳ね回り、六角兵を屠りながら具教はひとりごちる。

木造具政……一門の中でも重鎮だった男の寝返りは仕方ないとうに割り切っている。もとより家中でそりが合わないというのもあるが、損得や家の存続を考えれば、賢いとすら思えたからだ。

（ええ、わかっておりますとも。この戦国の世においてただ生まれ持った力を振るいたい。それだけの理由で命を懸けることができる者はそう多くはない。大半の人たちは守りたいもののために戦っている……）

やまと朝廷が南北に分かたれた御代の頃。

北畠家には燦然と輝く英雄がいた。

北畠顕家。

奥州から二度にわたって畿内に進撃し、一度は足利尊氏を九州に追い落とした不世出の名将であった。

（時は戦国。私自身にもいくばくかの才覚がある。ならば、顕家公のように戦さ場を駆けて強敵と鎬を削りたい。私はそう思っていた。けれども、現実は違いましたね）

だが、そんな具教の願いとは裏腹に伊勢は戦国の世でも比較的穏やかだった。

北伊勢の豪族が小競り合いをしていたものの、それは別に応仁の乱以前もしばしばあったことで特筆に値せず、畿内の動乱も先代の晴具が細川高国に手を貸したことを除けば、鈴鹿山脈に遮られて巻き込まれることもない。

そんな情勢から、聡い具教は幼いながらに「自らの生涯は雄敵に出会うこともなく、伊勢の中の小競り合いに終始して終わるのだろう」と悲観視していた。

しかし、天の配剤か。

雲出川で具教はついにその雄敵の雛を見つけ、そして雛は見事に育

ち今や畿内全てを覆わんとする鳳になっている。

(六角高村。あなたと出会えて良かった。国益はともかく、あなたさえいれば、私の夢は叶うのだから……！)

歡喜に打ち震えながら、具教は刀を振るう。軍は東の木造隊に向かわせた。

東方から包囲網を抜き、離脱を狙う。ただ単に逃げるだけに済ませるつもりなど具教にはない。

「くっ、やはり具教様は強い……！」

齒がみする具政。息子の友足の進言に従って六角に乗り換えたまではよかった。だが、その旨みはここを生きて乗り切らなくては得られないため少ししよっぱい。

狙われた木造隊は果敢に交戦するも、流星に兵が足らずおおよそ2時間ぐらいで突破を許すことになる。

「包囲網は抜けました！ 追いつかれる前に川を越えるのです！」

先頭で具教が下知を出し、旗本達が沸き立つ。

しかし、その盛り上がりは長くは続かなかった。

「……ッ!？」

遠くから一本の矢が飛来して具教の銀髪を擦り、散らす。

唐突な狙撃。それも具教が感知できない距離から、軍勢の中の一人を正確に狙える精度。

「手薄な木造隊を抜こうとするのはわかっていたよ。だから待ってたんだ」

木造隊を抜けた先に弓隊が控えていることを、突破に夢中になっていた具教には気づけなかった。

栗色の髪の少女が鏑矢を放つと同時に矢の雨が具教とその旗本に降り注ぐ。嵌められたと気づいた時にはもう遅かった。

「新十郎を……所望なんだろうけど、わたしがいることを忘れてない？」

ごめんね、わたしは貴女を新十郎に会わせるつもりはないんだ」
可愛らしく義定は笑うが、他の諸将は恐ろしくて笑えない。

包囲網はただの目眩しでしかなく、本当の目的は北畠の最精銳を安全な距離から飛び道具でなぶり殺すこと。

用意周到に具教を刈り取らんとする高村の軍略に彼らは戦慄して
いたのだった。

*

結局のところ、この雲出川の戦いで北畠家は二千を超える被害を叩
き出す。戦役全体では三千を超え、完全に北畠の大敗と言いつても
いい。

しかし、六角側にも少なくはない犠牲は出しており、それが影響し
たのか高村は雲出川を越えた後、軍勢を二つに分けて大河内城と白米
城を包囲。持久戦の構えを取ったのだった。

第58話 装い

戦況は日に日に悪くなっていく。

大河内城と白米城を包囲した高村は、まず白米城を調略で開城。領土の北の要で平野部の抑えになっていたこの城の失陥は大きく、その後の支城攻略によって北畠家の勢力を平野部から駆逐し山間部に追いやっていた。

かつての本拠地の霧山御所はまだ健在だが、平野部と山間部をつなぐ大河内城こそが北畠の大名としての生命線。落とさせるわけにはいかない城だった。

「無人斎殿、援軍は来ないのか？ 家中の者ども皆が不安に思うておる。包囲網に加わったものの、これでは体のいい当て馬ではないか」大河内城内にて、筆頭家老の鳥屋尾石見守が包囲網の発起人たる無人斎をなじる。

今回の包囲網は北畠の領土拡大に絶好の機会ではあった。が、蓋を開けてみれば、北畠は今や風前の灯にまで追い込まれている。憤懣やる方なくなるのも致し方ない部分があった。

「済まぬのう。流石に今は浅井も朝倉も援軍を出す余裕はない。三好は畿内上陸に手こずっておるから間に合わぬ。武田はまだ松平すら抜けておらぬのでな」

詰められた無人斎は形こそ謝るが、本意ではないことは明らかだった。家臣ではないのもあるが、生来の気質からその傲岸不遜さは抜けない。

「とはいえ、包囲網の決壊は儂として困るゆえ手は打とう。それでよいか、石見守」

「性格はともあれ、その方の手腕は信じておる。具教様への説明はわしでしておこう」

軽く取り決めて、両者は別れて歩き出す。

（包囲網を食い破らんとするか、六角高村。勝千代よ、もたもたしておらんで早くせい。さもなくば、二度までも瀬田に武田菱を翻す機をあ

やつにくじかれることになるぞ)

心の中で毒づく無人斎。

その凜猛な視線は伊勢湾を超えた遙か東に向けられていた。

*

大河内城を包囲すること二か月。

そろそろ北畠側の動きに精彩が欠けてきたように思える。

具教公を徹底的に避け、あるいはいなしてきた伊勢統一戦もそろそろ終わるだろう。

(だが、致し方ないとはいえあまりに時をかけ過ぎたな……)

二か月という時間は案外長い。

その間に中央では信奈公が銃撃されて昏睡するという大事件が起き、戦況が悪化した。

今現在は織田信奈を欠いた織田軍と浅井・朝倉が叡山で対峙し、三好は淡路島に到着。三好はこのまま畿内に上陸して摂津を奪回し、果ては再上洛を目指すつもりだろう。赤井直正殿が備えに当たるとはいいが、流石に単独では厳しい物がある。

(こちらはかけられて、一か月かな。信奈公が快復すれば別だが、これ以上は中央が危うい。転進して俺が三好を防ぎにいかねばならないかもしれないから……)

結局のところ、伊勢を切り取れば勝ちというわけではない。本当の勝ちちは、武田と三好の両者の攻勢限界を超えてなお、織田と六角がそれぞれの所領を死守すること、これに尽きる。

もはや互いが滅びればもう片方も滅びる。それが周りに敵を作りまくってしまった織田政権の末路だ。

うーむ、選んだ道とはいえいささか悩ましいところがあるな……。そんな具合に頭を抱えていると一豊が幔幕に入ってくる。

「お館様。北畠側から使者が参りました」

「何が言いたいかわらんが、ひとまず通せ。警戒は怠るなよ」
口にしてから待つこと数分。

幔幕の中に老人と少女が入ってくる。

老人の方は年は六十近くはくだらない。けれども、枯れた雰囲気な

どなくまるで射殺さんばかりにこちらを睨みつけており、明らかに只者ではなかった。

一方で少女の方は見覚えがある、斎藤龍興だ。どうやら先の大戦以後は史実通り反信奈側として北畠側に渡ったのだろう。

「お久しぶりですね、高村殿」

「ああ、龍興殿か。先の大戦以来だな、義龍殿は壮健か？」

「ええ。父上は朝倉に与し、親子で南北から今川幕府を挟み撃っている最中ですけど」

くつくつと龍興が笑う。まだ幼いながらもその笑みはどこかお市に似ていて、俺は少し戸惑ってしまう。

（確か、龍興の母は久政の姉妹だったか。従姉妹なら似るのも道理か。やはり血は争えないらしい）

感慨にそのまま耽っていたいところだが、そういう訳にもいかない。

目を離していけないのは、ただならぬ気配を放つ爺の方。なんとうかあまりに血生臭すぎるのだ。

「そろそろ本題に入っていよいよか龍興殿。その方の名と何用でいらしたのか教えていただきたい」

意を決して爺の方に話題を振ると、爺は答えようとする龍興を制して告げる。

「儂の名は無入齋という。此度は高村殿に北畠との停戦を申し入れに来た」

北畠との停戦。まあ、それができれば東側の包囲網は即座に瓦解するだろう。

ただ、今の戦況はかなりこちらに優位な状況にある。それに織田が包囲されている今だからこそ、六角が大々的に伊勢の経略を握れているという事情がある。二つ返事で頷くほどの魅力はなかった。

「悪いな、無人齋殿。その方の提案にはいまいち乗り気になれない。もう少しこちらの利を教えてはくれないか」

腹は一応蹴るつもりではいるが、せっかくの機会だ。もう少しの情報を抜き出したい。そう思って問いかけてみる。すると、無人齋は皮

肉げに口角を吊り上げた。

「これは高村殿がお人が悪い。実に自分を弁えておられる。確かに北畠と停戦するだけでは利は薄い。しかし、これを奇貨に武田と再度結ぶるとなると話は違うのではないか？」

「武田と、か……」

ここで武田とくるか。となると、無人齋は北畠側の人物という訳ではないらしい。多分、もう少し外側の人物。それこそ包囲網を敷いた張本人に近いところにいるのだろう。

考え込むふりをして、ちらりと無人齋を盗み見る。すると、彼の刀の柄に四つ割菱があるのに気がついた。

(……ああ、なるほど。この包囲網の目的が見えた。そして、無人齋が何者であるかもな)

今回の接触は北畠との停戦を装って、俺を寝返らせることが目的なのだろう。

浅井は寝返り、三河の松平は吹けば飛ぶような有様。丹波の赤井は織田というよりかは六角側。松永久秀は今回は裏切らなさそうだが、織田家中からの信用は薄い。事実上、六角だけが織田の同盟者とも言える。正直なところ俺が寝返れば、もう織田は滅ぶしかないだろう。(目先の安泰だけを求めるなら、武田か。ただ、この前に足抜けをしたから必然的に締め付けは強くなる。この寝返りは武田優勢を確定させるだけではなく、向こうの畿内の地盤固めにもなる訳だ)

ここまで読み切れたなら、もう無人齋殿……いや、この老虎は用済みだ。

「申し訳ない。やはり、その方の提案は悪手だ。聞き入れる訳にはいかない。すまないな、陸奥守殿」

わざと官位で呼んでみると奴は目を瞬かせた後、こちらを睨んでくる。実にわかりやすい。どうやら俺の読みは合っていたらしい。

「やはり、乗らぬか。六角高村。いつか後悔するといい。『あの時、話に乗れば良かった』とな。瀬田に武田菱を立てられてから泣きついてももう遅い」

捨て台詞を吐きながら、老虎が去っていく。龍興殿もまたそれに続

いた。それを見送った後、俺は一氏を呼び出す。

「二氏。包囲網の黒幕が割れた。京の公家と在京している名門大名の一門衆。それと堺近辺に注意して探ってくれ。多分その辺りから織田政権は内通者を出してるはずだ」

「それは暗殺でよろしいので?」

「そこは義定と謀りながら進めてくれ、泳がせていた方がいいならそれはそれでいいから」

ある程度、一氏に自由な裁量を与えて送り出す。

裏でいいようにやられてばかりつてのもそろそろ飽きた。いい加減、畿内の暗闘を終わらせなくてはならない。そうでなくては、天下を統一させることは夢のまた夢でしかないのだから。

*

「どうやら、陸奥守は不首尾に終わったようです」

「そうか。まあ、わかっていたことではある。六角高村はそう容易く動く男ではない。なにせ織田が握っているように見えて、内実は彼に命運を握られているのだから。自覚しているだけたちが悪い男だよ、まったく」

「ははっ」

平伏する堺の会合衆・津田宗及の耳朶を打つのは玲瓏とした声。

平伏しながら彼はその姿をちらりと仰ぎ見る。すると、宗及は目を離せなくなった。

長い黒髪に眩いばかりの金色の瞳。顔立ちが整っていることは言うまでもなく、ただただその高貴さに圧倒されていた。

(これが、代々受け継がれた血の成せる技ですか……。なんという美しさか)

津田宗及もまた豪商という顔以外に当代屈指の数寄者という顔を持っている。その彼が屈服するほどの存在となれば、いよいよ尋常ではなかった。

「やはり、真に屈服させるべきは六角高村か。引き続き、奴には高村の動向を注視させるように。わかつたな、宗及」

そう呟きつつ、彼女は宗及を下がらせる。

凶猛な老虎も、堺屈指の豪商もまた彼女にとっては手駒でしかない。

「認めない……。私は取り戻すんだ、天下を。だから、織田信奈に六角高村。君たちには沈んでもらうよ」

小さな拳を握りしめながら、少女は改めて決意する。

彼女もまた織田包囲網の黒幕の一人であった。

第59話 白刃

無人齋が来てからさらに二週間ほどが過ぎた。

大河内城の包囲は揺るぎなく、向こうの兵糧は心許無くなっている。北伊勢から流れてきた浪人たちを中心に降伏してくる者も増えてきた。

（具教公。確かに貴女は強い。けれども、誰もがその強さについてこられる訳ではないんだ。……もうそろそろわかるだろう？）

神戸具盛に、木造具政。中伊勢の長野氏に北伊勢の浪人たち。

調略をこちら側が重視してきたとはいえ、重鎮から末端に至るまで多くの武将が北畠から離れている。これははつきりと言って異常だ。（まあ、裏切る側の気持ちはわからなくてもない。彼女の奔放な戦ぶりは俺たちにとって恐ろしいが、彼らにとっても訳が分からないという意味で恐ろしく思えるからな）

基本的に人は理解できないものに心を許すことはない。恐れ、遠ざけようとする。

彼女はその人の性というべきものを武威で繋ぎ止めていたのだが、さらにそれを上回りかつ理解しやすい存在……つまり俺が現れたがために紐帯が崩れたように思う。

「これも一つの勝利の形かな？　あまり実感しにくいものではあるけれども」

とかく、以後も手を抜かず囲むのみ。懸念はただ一つ。

北畠具教が全てを懸けて突貫してくることしかない。

「とはいえ、今の彼女にどれだけの数が付き従ってくれるのかはわからないがな」

*

「姫、何をなされようとしているのです。早くお戻りください」

「おや、見つかりましたか。流石は爺やですね」

満月の夜。

北畠具教は宿老の鳥屋尾石見守に見咎められていた。

場所は大河内城の虎口のほど近く。あと少しで城外に向かえるところだった。

「常々申しましているよう、姫は御身を大事になされませい。いかに劍の腕があろうとも、大軍の前には塵芥の如し。先の大樹の一件をお忘れか？」

「忘れてなどおりません。それに、私が一人だけこっそり逃げようとしているのかもしれませんが？　幸いにも霧山御所はまだ落ちていないですし」

「それならば、わしが止める道理はござらぬ。されど、違うのでありませんか？　そうでなくば、わざわざ今この場で刀を抜く必要はありませんだ」

「まあ、バレますよね。戦意を隠してないですから」

言い逃れを図る具教だったが、すぐに石見守に見破られて呆れたように笑った。

「……まあ、命を繋ぐだけならば一族や主だった家臣を連れて霧山御所に潜ればいいのはわかってます。現に六角義治や斎藤義龍だつてそうしていますから。……けれど、私の本意ではない」

「ならば、最後に堂々と向かい斬り死する、と？　こんな明るくて見つけやすい満月の夜にですか？　高村を討つて戦況を打開するにしてもあまりに無謀で愚かにございます」

「爺やの言い分は間違いではありません。ですが、逆に問います。次の新月まで大河内城は保つのですか？　保っていたとしても戦うに足る余力は残っているのですか？　兵糧がどれぐらいしか残っていないのか、知らぬ爺やではありませんよね」

今度は石見守が閉口する番だった。具教の言う通り、兵糧はほぼほぼ残っていない。かき集めて千人の一日分でしかない。明日明後日より先は本格的に餓えに苦しむことになるだろう。

「……それでも、わしは姫が良きおのこと祝言をあげる姿を見ようございます。そのためには今をなんとしてでも、生きていただかねば」
絞り出すように石見守が呟く。

しかし、具教は悲しげに首を横に振った。

「それは妹に任せてください。私はとうに捨てた夢ですから」

剣に生き、北畠顕家のようになりたいと決めた時点で聡い具教はそれが叶うことはない夢だと決めつけた。

だから、もう話すことはない。爺やと自分は交わらないのだと理解した具教は石見守に背を向けて告げる。

「ですから爺や、貴方には私の妹を託します。此度ばかりはいつものように私について行くことを禁じます」

言うど、具教は大手門を開けて飛び出していく。

石見守は膝から崩れ落ちて、しばらく動くことが出来なかった。

*

月に照らされて白刃が煌々と光る。

舞う血飛沫に逃げ惑う六角兵。

それを一切構わずに具教は進んでいく。

具教に付き従うのは旗本の二百のみ。もはや家臣団のほとんどが具教を裏切るか、ついていくだけの活力を失っていた。

それでも、白兵戦における強さは衰えない。むしろ全員がもれなく死兵と化し、鋭さが増している。

具教らは容易く包囲網の前備えを貫く。そして見えたのは、鶴翼の陣を敷いた高村の本陣。

「やはり、備えはしていましたか。奇襲は失敗ですね。……しかし、かといって退くつもりありませんが」

臆せず具教は鶴翼の要、中央に座する高村に向かって突撃を仕掛ける。とはいえ、それを坐して見ている高村側ではない。

義定の弓隊で牽制をかけながら、両翼を閉じて挟撃にあたらせる。「貴女が突っ込んでくるのはとうにわかっていた。が、今回は縦深でもって御相手しよう。俺と斬り結びたければ、どうにか突破すること

だな」

床几にふんぞりかえりながら言う高村。二千の本陣の兵で二百の敵を挟む。やり過ぎかと思われるが、ある種の具教への畏敬がそれをさせていた。

十倍の兵力差には流石に具教の旗本たちもじりじりと討たれてい

くが、高村は喜色を見せることはない。

(雑兵はこれで止まるか。だが、その程度で止まる相手なら俺はこうも苛まれてはいない)

策を練り絡め取ってなお、実のところ高村は内心で予感しているのだ。具教ならば必ず到達する、と。

「最後まで穴熊を決め込むつもりですか！ ならば、私が引き摺り出して差し上げましょう！ いい加減貴方のやり口には飽き飽きしてきたところです！」

激昂した具教の刃が振るわれて包囲が僅かに崩れる。

その隙間を見逃す彼女ではなかった。

身一つで飛び込み、ついに高村の姿を視界に収めると彼女はそのまま駆け出していく。

「六角、高村……ッ！」

目にも止まらぬ神速の駆け。

その速さたるや義定が構えていた弓を放つのを諦めて下げるほど。その速さと渾身の力がまとめられた一太刀が高村に向けられる。

「ぐっ……！」

呻きながら高村は受け止めると、すかさず弾いて二刀目を抜き具教に斬りかかる。後の先を取った一撃ではあったが、具教はこれに峰を合わせて弾いてみせた。

「流石は剣豪として名高い具教公だ。簡単には取れないか」

「簡単にいかなくて私も嬉しい限りです。ええ、この時をどれほど待ったことか……。さあ、続けますよ。一世一代の立ち合いを」

「……参ったなあ、ほんと。やる気があるのは、そちらだけなんだが……」

高揚する具教に呆れて溜息ばかりの高村。

戦意の差はあれど、実力は近い。

具教が速さで高村を翻弄すれば、高村は二刀の利である手数が多さでこれを捌く。

散発的に数合ずつ打ち合っては離れ、離れては打ち合う。

互いがひたすらに駆けつぱなしの速い展開に義定ら本陣にいる将

たちはただ見ていることしかできない。

（流石は鹿島新当流の免許皆伝。崩れがねえ。こりや本当に泥試合になるぞ）

（剣は我流でしょうか。読みづらく、器用で重い。これこそ私が求めていた相手ですね。とはいえ、長く戦える相手ではない……）

打ち合いながら互いに実力を讃え合う。

とはいえ、お互いが千日手に嵌るであろうことは理解していた。

凶らずも両者はある程度距離を取る。

「そろそろ朝日も近いことですし、決着をつけましょうか」

言うのと、具教は刀を正眼に構え直して高村を見やる。

これより具教が繰り出そうとしているのは、鹿島新当流の秘剣「一の太刀」。

特定の形があるわけでもなく、ただ相手の挙措の全てを見切り、必殺の一太刀をお見舞いする奥義だ。

確かな眼力とそれで見つけた機に合わせられる技術の二つが噛み合わないとの太刀は成らないため、習得者は限られる。上方では、今は亡き足利義輝と明智光秀、そして北畠具教しかいない。

目を凝らして膨大な高村の挙措に関する情報を取り入れ、識別し、決断する。その間は十分の一秒にも満たなかった。

（見えましたッ！）

答えを見つけた具教が渾身の力で刀を振るう。

此度の一の太刀は逆袈裟斬り。

渾身の力で左下から右上へと斬りあげる。

刃を経て伝わる肉の感触に具教は痛撃を与えたことを確信した。

しかし、その達成感は長くは保たなかった。

腹を貫く冷たい何か。血反吐を吐きながらもギラついた高村の瞳。

裂かれるような激しい痛み。

頭がクラクラするのを堪えながら、己が腹を具教が見遣るとそこには白刃が深々と刺さっていた。

「……ようやく、捕まえたぞ……！」

息も絶え絶えに高村は呟く。

この時、具教は高村がしたことを理解した。

高村は初めから一の太刀を防ごうとも、避けようともしなかった。おそらくは一の太刀がどうにもならないことを瞬時に理解して受け切り、後の先を取りに行くことに賭けたのだろう。

果たしてその賭けに高村は勝利し、自分に致命的な一撃を食らわせた。

「なんという、胆力ですか……」

負けた、と具教は思った。

武将としてではなく、武人としても自分は六角高村に敗北したのだ。

「……おかげでこっちは何ヶ月も動けないがな。まったく見切るのがやつとの必殺剣なんて卑怯だろうが……」

忌々しげにぼやく高村。失血がかなり激しく顔色が悪い。義定の肩を借りてやつと立てているようなものだった。

「……どちらにせよ、私の負けです。私が倒れた以上は北畠はもう戦えないでしょう。いささか厚かましいですが、妹を頼みます。あの娘は私に似ずおとなしい娘ですから、生かしていてもさほど害にはならないので……」

「わかった。一応は貴女に命を救ってもらった恩がある。貴女の妹を生かすことでそれを返せるのだから、構わない」

具教の願いに高村は頷く。それを見て、具教はふっと力が抜けていくのを感じていた。

「……安心しました。私の意地のためにあの娘が犠牲になる必要はない。我欲に走った愚かな姉でしたが、少なくとも義務を果たすことはできたようです」

視界が暗転していく。どうやらもう時間らしかった。

「具教公。思ったより、あんたは人間だったんだな」

最後に宿敵のぼやきを聴きながら、具教は永い眠りについた。

*

彼女を貫いた時の腕の感触が未だに離れない。

あの時、確かに俺は彼女を超えた。

……それだけならば、まだ良かった。

ただ、ひたすらに残される妹……家族を案じていた彼女の姿がどこかの誰かにオーバーラップしてしまう。

まったく、人殺しなどこれまでの渡世で嫌になるほどしてきたというのに。どうして今になってこんなに胸が痛むのか。

「……震えているの？ 新十郎」

心配した義定が顔を覗き込んでくる。肩を借してもらっている状況だからなにかあればすぐにわかる。仕方ない、白状するか。

「……いずれは浅井に対しても同じことを、久政殿を、場合によっては猿夜叉丸を手にかけることになるのだろう。その時のことを考える
と、な」

「けど、浅井はもう……」

「わかってる。討たなきやならない敵だったのは、わかっているんだ。だが、それでも痛いものは痛い……!」

俺の慟哭に義定は言葉を失う。

北畠戦が終わったということは、確実にその時が近づいた証左に他ならない。史実では金ヶ崎、叡山の次は姉川の戦いが待っている。残された時間はそう多くはない。俺はそのことを痛いほど理解させられていた。

第8章 Pain

第60話 ふっかけ

北畠具教、戦死。

この報は北畠家の戦意を完全に砕いた。

戦が終わってから一日も立たぬうちに鳥屋尾石見守をはじめとした北畠の家臣団は降伏を打診。

俺はこれを受け入れて、大河内城に入城して戦後処理を行った。

主な内容としては、具教の妹……北畠具房の助命。具房は尼刈りをしたのち、室生寺に幽閉。家老たちも助命され、田丸城に幽閉。

幽閉された者たちの監督は氏郷に任せられた。他の家臣団は所領を削減され、あるいは召し上げさせたが、処刑は誰一人行ってはいない。

少しでも早く療養に回りたかったから大急ぎで色々取り決めたが、ただ一つ決まらなかったものがある。

それは伊勢の帰属だ。暫定的に俺たちが統治に当たっているが、信奈公からの許可は得ていない。送った質問状が未だ返ってきていないのだ。

（まあ、返って来ない理由は察しがつく。伊勢よりも叡山を焼くか焼かないか。そっちで揉めてるのだろう）

山岡景隆からの情報によると、織田信奈は目覚めたはいいものの相良良晴と明智光秀が未帰還と知らされたショックで半ば錯乱状態にあるという。

松永久秀が使噓して叡山を焼かせようとし、丹羽長秀をはじめとする織田の重臣は反対している。俺もまた反対側だ。

（内実はどうあれ、叡山は京の鬼門を守る要で文化的な象徴だ。それを焼いたとあれば、畿内の人心は織田信奈について来なくなる。それこそ、定頼様が天文法華の乱で京を焼いた時と変わらない）

少し時代を遡るが、第6代の室町幕府将軍・足利義教も叡山を焼いている。彼は強権的に力を振るったが、最後は赤松満祐に暗殺されて

戦国時代の遠因となった。そして、同じく叡山を焼いた織田信長もまた明智光秀に暗殺されている……。

（天下を焼く魔王になるか、はたまた麒麟を呼べる為政者になれるか。ここが運命の分かれ目だぞ、信奈公。選択を違えた時は、こちらも覚悟を決めよう）

織田信奈だからこそ、俺は麒麟を呼べると思ったからこそ膝を屈した。だが、織田信長はそうではない。魔王とは同じ天を戴くつもりはないのだ。

（相良良晴、この重要な時になぜいない。ここで彼女を支えられなければ、お前がこの戦国に来た意味はないだろうに）

苛立ち紛れに文机をコンコンと叩く。

そして戯れに試算してみる。

幸い今の織田なら三好辺りと手を組めば、討てるだろう。

一度手を切ったから武田信玄との宥和が厳しいが、最悪は国力差で凌ぐしかない。その場合、上に戴くのは毛利輝元になるのだろうか。うん、ピンとこない。

「やはり、今更切るのはやはり悪手か……。だが、魔王になった織田の下につくのは覚束ない。俺が明智光秀の立場になりかねんし……。ふと、めまいがする。

気力で戦後処理をしてきたが、いいかげんキツイ。

失った血は戻らず、絶えず頭が痛む。

……なんとか義定への引き継ぎを終わらせておかないと……。

「頼むぞ、信奈公……。俺を過労死させんでくれ……。国力はともかく体力が保たんぞ……」

パタリと文机に倒れ込む。

デコが痛い、もう動く元気がない。

いいや、とりあえず寝よ。寝てる間のことは起きたら考えればいい。

完全に投げやりになって俺は意識を手放した。

*

「……朝か。それにしてもはやけに長く寝た気がするが……」

寝ぼけ眼で辺りを見回す。

義定、山岡殿、京極高次、そして竹中半兵衛。

俺の布団の周りを四人の姫武将が取り囲んでいた。

え、なんで？

思わず頭の中が疑問符に支配される。眠気は秒で覚めた。

義定はわかる。部屋が隣だから、たまに起こしにくくことがある。

高次も今は旗本に取り立てるから割といつも近しい立場にいる。

山岡殿。基本的に彼女は自領にいるが、家臣だからここにいてもおかしくはない。

竹中半兵衛。いや、なんで？

なんで織田家臣が俺の寝所におるん？

「やつと起きたね、新十郎。まったくいいご身分だよ。天下の一大事だというのに、三日間まるまる寝てるなんてさ」

ニコニコと嫌味たつぷりに義定が言う。

山岡殿に竹中半兵衛。……ああ、なるほど。なんとなく叡山方面で何かあったのは分かった。山岡殿の所領は琵琶湖を挟んで叡山の対岸にある。その影響は計り知れない。

「信奈公は叡山を焼いたか？」

俺が問いかけると、半兵衛はふるふると首を横に振る。

「柴田様と前田様をお願いして信奈様は京の妙覚寺に押し込めました。直ちに焼き討ちが行われることはありませんが、お考えは変わっていません」

「そうか。……で、何の用で来た？ 叡山が女人禁制で入れないから俺に代わりに交渉に行つて欲しいってことか？」

「それだけならば、京都所司代をなさってる村井様に出ただければ、事足ります。しかし、それだけでは浅井と朝倉の勢いを落とすところまでには行きません。佐和山表への派兵を何卒お願いします」

「確かに俺らが浅井領に入れば、浅井は帰らざるを得ない。叡山籠城の意味がなくなるな」

浅井朝倉の叡山籠城はそれぞれの本国の安全が担保されているのが前提だ。自分たちは安全なところで待ち、三好か武田が織田を攻め

るのを待つ。それこそ大戦の時の俺の戦略と近しいからわかる。

「条件次第なら考えよう。ただ、こちとら東の包囲網を崩したばかりで余力がねえ。俺だつてまともに動けんぞ」

正直キツいが、織田から利益を引き出す好機ではある。

浅井を叡山から下ろすだけなら別に本気で浅井を攻めつぶすような真似をしなくてもいい、大軍で小さい城を二つ三つ落として脅かせば足りるだろう。

「どうする？ 半兵衛？ そっちの口ぶりからして時間はそこまでないんだろう？ こっちもキツいからな。確約がないと動きたくないんだ」

揺さぶりをかけてみる。どうせ半兵衛のことだ。俺が北畠の遺領の加増を狙っているのは知っているだろう。

織田家的には避けたい事態なんだろうが、さりとして俺が動かねば織田は交渉に時間を食い、叡山を焼いて天下の声望を失う可能性が高まる。

知力ではさすがに半兵衛には勝てない。けれども、彼女の人見知りという面を突いた小細工でデバフをかけることはできる。

これはそこそこ効いたようで、半兵衛は長考していた。

感覚的に4、5分といったところか。半兵衛は毅然とした面持ちになつて口を開いた。

「北畠遺領の加増など、私の権限では出来ないので即答は致しかねます。しかし……」

「しかし？」

「……それで、高村さんはいいんですか。一番叡山を焼かせたくないのは、高村さんなんじゃないんですか？ そうでなければ、定頼様が焼いてしまった京の再建などなさらないはずです」

思わず口に詰まる。

痛いところを突かれた自覚はある。

定頼様は畿内の安定を目指していたが、天文法華の乱でその資格を失った。

俺は六角を生きながらえさせつつ、定頼様の目標を継ぐつもりでい

る。そのために叡山を鎮めこそすれども、焼き払うなんて真似はしたくもないし、させたくもないのだ。

「私からもお願いします。叡山が焼かれ、坂本の町が打ち壊されると私の領内の統治が立ち行かなくなります。何卒、宜しくお願いします」

最後に山岡殿から締めの一撃を撃ち込まれる。家臣の中で一番不利益を被る人物から言われてしまえば、どうにもならない。当主である以上は可能な限り家臣は守らなくてはならないのだから。

「はあ、致し方ない。とりあえず攻める。ただ、北畠遺領の加増に関しては考えといてくれ」

やはり、半兵衛の洞察力には勝てない。

早々に俺は観念し、俺は彼女の要求を飲むことにしたのだった。

第61話 牢中

底冷えするような寒さで、私は目を覚ました。

冬の竹生島は寒い。越前に雪を降らせる雲の残滓が湖面を渡って吹き込んでくるからだ。

それにしても、かつて父上を押し込めた地下牢に此度は私が入られることになるうとは。あの日、家督を奪った時の私に聞かせたらどうという反応をしただろうか。

「皮肉なものだな。父上のために設えた調度が、此度は私の身の助けになっていくわけか」

存外に地下牢の居心地はよくて苦笑いしてしまう。押し込めという形ではあるが、牢番に言えば書物や菓子差し入れてくれるし、牢は清潔に保たれている。私が父上にそうしたように、此度は父上も私を丁重に遇することにしたらしい。

ただ、やはりというか外界の情報は断片的にしか入って来ないのが、私を焦らせる。

織田信奈が狙撃されて昏倒。相良良晴と明智光秀が行方不明。

浅井と朝倉が叡山に籠り、打つ手が無い織田はやぶれかぶれで敵もろとも全山を焼き討ちしようとしているらしい。また、六角が北畠を降して伊勢を統一したとも聞いた。

(信奈殿も、新十郎も死にもぐるいで戦っている。その一方で、私はこんな孤島の地下で何をしているのか。ただ、父が織田六角を討つまで穴熊を決めているだけではないのか)

やるせない気持ちに襲われる。

此度の金ヶ崎で、私が今まで採ってきた協調路線を浅井はもう取ることはできない。どこかで決定的な幕切れが訪れない限り戦いは続く。父上を選んだ道はそういう道だ。

(抗いながら膝を屈さずに大名として生きていく。それを畿内でやるのは茨の道だ。勝ち続けてもなお、日ノ本の中心が故に内側からあるいは外側から敵が押し寄せてくる。それこそ天下人にでもならない

限りは終わらないのだろう)

きつと高村は最初から分かっていたのだ。

天下人にならなければ、畿内で誇り高く大名として生きることなどできないのだと。

そして、私も途中で気づかされた。私では天下人になれない、と。美濃で高村と織田信奈、相良良晴に突きつけられた。

(新十郎への対抗心もある。けれども、私には力が足りないことを自覚していた。だから、あの時の佐久間信盛の誘いに乗った。そうすれば浅井を戦から遠ざけられると、家族や家臣団を守っていけると信じていたのだ……)

しかし、それもどうやら私の独りよがりでしかなかったらしい。父上と対話したが、結局は届かなかった。家臣団もあらかた父上の側だ。

こうなってしまうとはどうしようもない。胸の内に諦観が渦巻き始めていることを感じた。

「どうしてこうなってしまったのだろうか……」

ぼんやりと顔を上げて、牢から微かに見える入り口の方を見やる。

外界のことが何一つ分からない。

守りたかった人たちが今どうなっているか分からない。

何も知らないでいるのは、嫌だ。

*

翻る隅立で四つ目が近江の地を塗り替えていく。

そんなゲーム的な光景を思わず幻視してしまうほど、戦況は圧倒的だった。

「なあ、こんな弱かったっけ浅井軍？」

「はて、それがしの記憶にはございませぬなあ」

「だよなあ、田吾作」

輿の担ぎ手とたわいもない話をしながら戦況を見やる。

動けない俺を形ばかりの総大将にした六角軍八千は国境を越える

やいなや紙を水につけたような速さで浅井領を侵食していった。

「留守居役で面倒な藤堂高虎を嘉明で抑えてるからか？ 平井殿と伊

右衛門が奮戦しているからか？ いや、それにしてもこれはな……」
六角軍はもはやほぼ坂田郡を手中に収めていた。今の長浜にあたる今浜の部分は浅井側も取られたくないからか必死に抵抗しているが、ほかの失陥は免れないだろう。

軽く頭を抱えてしまう。

俺個人としてはここまで大規模な侵攻にするつもりはなかった。ただ、浅井を叡山から降ろし、なおかつ秘密裏に進めている工作が成るまでの時間稼ぎでしかない。

目的のうち、前者は既に達成された。

浅井久政はさすがに叡山から降りることを決断。朝倉も独力で叡山に籠るまでのやる気はなく、越前に帰っていった。叡山との和睦も成り、これより織田軍は尼崎で奮闘している荻野直正の救援に向かう手筈になっていた。

（上方が収まったのはいいが、織田と浅井朝倉と叡山の和睦であつて六角と戦うのは規制されていないんだよなあ）

多分松永久秀か丹羽長秀、明智光秀の差し金だろう。聞いた限りでは和睦の条文が浅井と六角を噛み合わせるようになっていた。まあ空き巣を働かれた浅井側が取られたのをそのままにして六角と休戦なんて条件を飲むとは思えないから仕方がないんだろうけど。

（ともあれ、このままだと浅井久政の一万近くが援軍でやってくる。それが到着する前に上手いこと理由をつけて帰りてえ。そうでなければ、不用意なまま全面戦争になる）

ちらつと西の方を見やる。

一氏は果たしてどうしているのだろうか。

*

ぎぎつと、木材が軋む音で目が覚めた。

「ちようどよく起きてしまいましたか。これは面倒な事態ですね……」

眠気眼に写るのは炯々と輝く赤い瞳に橙色の髪。

顔立ちは整っているが、この窟の中で見るべき者ではない。

中村一氏。

高村の腹心の忍びがここにいた。

彼女の右手には鍵の束。後ろには呻く番兵。それだけで私は状況を理解する。

「浅井長政。我が主がお呼びです。貴方の内心がどうあれ連行させていただきます」

一切感情を含まない声で刀を突きつけられる。対して私は丸腰だ。

「あいつのお呼びなら、仕方ない」

両手を上げ、降参する。

理由はともあれようやく外に出られるのだ。

この機に乗る他なかった。

第62話 216分の1

「おのれ、六角高村……。本隊がいない間によくもやってくれたものだ。者共、進めえ！」

怒気に任せて浅井久政が采配を振るう。

叡山籠城を終えた浅井軍九千が今浜城を囲む六角軍に攻めかかる。

それを高村が真剣な面持ちで眺めていた。

（今浜城を囲む六角軍の数は七千余り。道中の被害はあまりなかったが、予定外の長期戦でいささか疲弊しているのがなんともいえん）

小谷城を南側から守る要衝に今浜と横山城がある。

今浜は湖北の最重要港、横山城は関ヶ原から抜けてくる北国脇往還を抑える位置にある。

大将不在でもさすがにそのあたりの防備は甘くはなく、ついぞ高村は今浜を抜けずに久政を到着させてしまっていた。

「とはいえ、やってやれない戦力差ではない。嘉明、前回と同様に藤堂高虎の抑えを頼む。平井殿は主攻。伊右衛門は助攻を頼む」

率いてきた三将に下知を与えて送り出したのち、どかっと高村は床几に座り込む。

「……ちっ。痛えな」

その衝撃で斬られた傷が痛む。なら大人しく座ればいいと思われらるだろうが、高村自身すでに下知を与えている間で立ちくらみがひどくて仕方がなかったのだ。

このようななんとも噛み合わない状況のまま合戦が始まる。

手始めにまず加藤嘉明の騎馬隊が藤堂高虎隊に絡みつくようにして動きを封じる。

高村の騎馬隊の副長を務める彼の動きにそつはない。黙々と私語を挟まず為すべきを成す。その働きぶりからか、いつしか嘉明は沈勇の士と呼ばれるようになっていた。

「……また、あなたですか……！　ねちねちといつもしつこい男です

ね……！」

「……致し方無かるう。それが俺の仕事だ。黙って討たれろ」

「ああもう、この無愛想ぶりが気に食わないんですよ！ そのくせねちねちと攻め立てて……。あの時もそうでしたよね！ 貴方のおかげであの後ひどい目にあわされかけたんですから」

「過ぎたことを。それにあれば其の方が引き際を弁えなかったからであらう。己が過失の責を他人に求めるものではない」

朴訥と仕方なく喋りに応じる嘉明に、怒りを隠さない高虎。

野良田の戦いで嘉明が冷徹に十人で高虎を袋叩きにして捕らえてからというもの、高虎は嘉明を激しく嫌っていた。

（腹が立つ奴だが、実力はある……。心してかからねば……）

浅井久政は暗愚、三家老は良将止まり。自分が効果的に動かねば、兵力が多少有利であつても高村と嘉明相手には勝てない。

それを理解している高虎は必死に嘉明隊を振り払おうとするが、嘉明は離れない。

大鎧の着用や槍や薙刀の携行を禁止するほどに極限までに軽さと速さを追求した高村騎馬隊の使い方を知悉している嘉明の前では高虎がいかにもがこうとも無駄だった。

「本隊の左方より山内一豊が強襲！ 本隊が挟撃を受けました！」

「そうか、間に合わなかったか……」

伝令の報告に高虎はその美麗な眉を曇らせた。

浅井久政は戦に弱い。それも悲しいほどに戦に弱い。なればこそ、挟撃を受けてから持ち直す力はなく、このままずるずる劣勢に落ちていくのは明らかだった。

補佐についている浅井三家老はそれぞれ優秀だが、個々の隊は守れども盤面を統一的に動かすほどの指揮力はない。本来、全軍を有機的に動かすべきなのは浅井長政の参謀であつた高虎なのだ。

「戦は数ではないとはいえ、こうも大将の采配で差が出るものなのか……！」

崩れゆく浅井軍をみて嘆く高虎。

高村が自分を封じてくる以外に特段策を使つた形跡はない。

ただ総大将の地力が問われた形となった戦だった。夜になって退却の陣太鼓が鳴り浅井軍は前線から引き上げる。その晩、軍奉行を務めていた赤尾清綱が被害を数えた結果、浅井軍は1500人を失っていたことが明らかになった。

*

本陣に待ち人が来たのは、野戦が終わって少しした頃だった。

「お館様。浅井長政を連れてきました」

一氏に引き連れられて来たのは、長政。

竹生島に囚われていたところを一氏に頼んで連れてきてもらっていた。

「やつれたな、長政」

「それはお前もだろう高村。どうした、その包帯は」

「南の妖精に手痛くやられただけだ。まだ痛い、死ぬほどじゃない」

手始めに互いをいじる。

実際問題として俺は連日の過労から、長政は獄中の生活からか疲れを隠せないでいた。

今は敵ではないこともあってそのまま話し込みたくなるが、そこはぐつと我慢する。

ただ駄弁るだけに長政を解放してきたわけではない。あくまでこれは政略の一環。畿内を固めるのに必要な手だからだ。

「さて、長政。お前をただで解放したわけじゃない。それは分かるな？」

「だろうとは思った」

「ならば、話が早い。長政、お前には織田方の使者として久政の陣に赴いて降伏勧告をして欲しい」

「……小谷城はまだ落ちてはいない。降伏させるにはまだ早いのではないか？」

聞かされた長政は訝しむが、実のところ此度の野戦で久政をこつてり負かした時点で目処は立っている。

「確かに少しばかり早いかな……。とはいえ、此度の戦いで今浜は抑

えた。そして美濃側の入り口の横山城には斎藤道三殿に攻めてもらう手筈になっている。朝倉は雪でしばらく動けず、武田はまだ動きそうにない。三好も早晚撃退されるだろう。道三殿が横山城を抜き次第、織田の本隊を小谷城に呼べば、浅井は終わりだ」

正直、浅井はもう詰んでいる。

だからせめて長政を織田側で使って、裏切りの責任を久政に負わせて終わりにしたい。まあ大減封はされるだろうが、それで浅井家も長政も生き残れるはずだ。

「包囲網の打破もあるが、一応俺自身は浅井を存続させる方で動いている。気が進まないだろうが、お前の決断で家の命脈が決まるんだ。だから、頼む」

静かに目を閉じ、半ば祈るように頭を下げる。

隣にいた一氏が目を丸くするが、かまわない。

これは政略でもある。だが、それ以上に俺からの懇願だった。

(俺に、お前を殺させないでくれ)

浅井の家として残す。

六角の生き残りに必要な量を越えてまで、織田家中への影響力を強めて来たのは、この無理難題を信奈公に押し通すためだ。

幸い、今の長政は久政の被害者で通じる。まだ、取り返しがつく段階ではあるのだ。

「……そうか、浅井はお前の目から見てもならないのか……」

長く長政は息を吐く。

長政とて俺の話は受け入れ難いはずだ。なにせ俺は『お前が浅井に引導を渡せ』と言っているのだから。

「高村、お前の話は分かった。確かに浅井が生き残るにはそうした方が賢いのだろうか……」

「なら、やってくれるか」

「いや、確かに浅井は生き残るのだろう。……ただ、父上はどうなる？」

この長政の問いに俺は答えを持ち合わせていなかった。

いや、用意しても無駄だったというべきか。

浅井久政の罪が贖えないものであること、なにより浅井長政は、猿夜叉丸は家族のために戦ってきたということを知っている。

実のところ、俺は悲観した長政が自分の意志を曲げることを願うことしかできなかつたのだ。

「……沈黙か。ならば、好きなように取るぞ。……死ぬしかないんだろう？ 父上だけは、浅井の罪そのものを背負って消えていくしかないのだろうか？」

「……ああ、そうだ」

俺が告げると同時に長政の表情がより一層険しくなる。

賽を振り直したところで、出目が変わるとは限らない。同じ出目を出すことだって充分ありうる。

どうやら俺はその6分の1を引いてしまったらしい。

だが、だからといって諦めはしない。

もう一度振り直す。いや、無理矢理にでも出目を変えてやる。

「ならば、話はこれまでだ。私は浅井に帰る。私が戦に勝ち、武田を待つ。そうすれば、父上が生き残る目があるというもの」

「そうか、ならやってみるがいい。……ただ、俺がお前を逃がすと思うか？」

視線が激しく交錯するや否や、長政は振り返って駆け出した。

それが合図だった。

即応した一氏が長政に迫るが、長政は彼女をうまいこと柔術で投げ飛ばした。俺もまた弓を射り、止めようとするが長政はうまいこと旗本の中に紛れていた。

「本陣に曲者あり！ 皆の者、追い立てよ！ 田吾作！ 輿では届かねえから馬を出せ！」

下知を飛ばして旗本達を動かし、痛みを押して俺自ら騎乗して長政を追いかける。

一人相手に卑怯だなんて思っちゃいられない。むしろそれでも構わない。

たとえ、この一件で長政に永久に憎まれたとしても構わない。

あの新月の夜の後悔をもう一度するよりも、何も出来ずに失うより

もずっといい。

もしも、こんな機会がまた来たら俺は今度こそ手放さないと決めていた。

ただ、長政側も死にもぐるいで駆けていく。

そうした結果、ついに自陣を越えて敵陣の近く……姉川の辺りまで追いかけてつこは続いていた。

もう、視界に敵陣が見える。けれども、長政は相当上手く逃げたからかなりのリードを稼がれていた。

陣に飛び込まれる前になんとしてでも長政を捕らえなくてはならない。無我夢中で俺は叫んだ。

「田吾作、弓！」

近習から弓を投げ渡され、長政の騎馬に照準を合わせる。

陣までの距離はそこまでない。あと一矢撃てればいいぐらいか。

「止まれ、長政ア——ッ!!」

裂帛の気合いを込めて射放つ。

矢は馬に当たり、思いつきり前につんのめる。

馬上から放り出される長政を見た。

よし、間に合う。届く。

拍手をかけて馬を追わせ、長政の元へ駆けて手を伸ばす。

よくよく見れば、男とは到底思えない白魚のような指。それを目指して手を伸ばす。

しかし、伸ばした手は届くことはなかった。

腕の中ほど辺りに激痛が走る。

憎々しげに前を見れば、藤堂高虎が采配を振るっているのが見えた。

「敵襲！・撃て！」

号令と共に矢の雨が降りそそぐ。

ああ、どうやら俺は三度までも6分の1を引いてしまったらしい。

最早、腕の痛みなどどうでもよかった。最早、開いた古傷などどうでもよかった。

ただただ現実を突きつけられた。

どうであれ長政と殺し合う運命は避けられないのだと。
それがひたすら痛かった。

第63話 果てを見る

「うう、痛えよ……」

「嫌だ、騎馬隊が追ってくる。助けてくれえ……」

「久政様じゃダメだ。やっぱり高村には勝てねえ……」

藤堂高虎に引き連れられた長政が見たのは、完全に意気消沈し切った浅井軍の姿だった。

(なんと、無惨な……)

これには長政も落胆を禁じえない。この士気の落ち方ではもう守れるものも守れないだろう。

彼らが見せつけられたのは、六角軍の圧倒的な武威と稚拙な久政の戦ぶりとの乖離である。

一部の頭の回る将はすでに六角への寝返りや降伏を視野に入れていた。三家老もまた深手を追っている。

そして、長政が対面した父・久政もまた右肩に深手を追って遠藤直経の介護を受けていた。

「よく、帰ってきたな、長政。島流しの件に関しては申し訳なかった。いや、お主に謝らなければならぬことは山ほどあるか……」

久しぶりに会った久政の気持は欠けていた。

一世一代の賭けに出て全てを擲ち、ようやく掴みかけた信奈の首は手元から離れ、さらに高村に兇戯のように蹴散らされた。

それは久政のこれまでの全てを否定するには十分な結果である。

久政自身、此度の戦が終われば家督を返上し、自分が全ての咎を負って自刃するつもりだった。

「もう少しわしに戦の腕があれば違ったのだろうが済まぬ。家督はお前に戻そう。そして然るのちにわしを織田信奈のもとに突き出せ。そうすれば浅井家は救われる」

奇しくも久政が高村と同じ提案をする。長政はそれに笑って応えた。

「先ほど高村に同じようなことを言われました。しかし、断りました。

私がここにいるのは、最後まで戦い抜くため。父上を死なせないようにするためですから」

「……そうか」

固く決意する長政を前に、久政はもう言葉が出なかった。

よりにもよってこの娘は自分の命などのために、安全な道から降りたのだ。

それも、友情もあるいは恋慕すら捨てて。

嬉しきは少しだけある。ただ、それ以上に罪悪感に駆られていた。

(まったく、良き娘に育ったものよ。なればこそ生きて欲しかった……！)

声にならない慟哭。

久政はただ項垂れて嗚咽するしかなかった。

*

長政帰還。

この一事が浅井家にもたらした影響は大きい。

まず、浅井の士気が上がって今浜の戦線を押し上げ始めた。

六角軍は粘ったが高村が出血多量で再度昏倒したため戦意に欠けており、一定の被害を超えた時点ですぐに退却する。

その後、長政は横山城方面に転進して行軍中の斎藤道三を気取られる前に強襲。そのまま敗走させた。

「なんとということじゃ、よもや浅井長政がこれほどまでに強いとは……」

関ヶ原まで逃げてきた道三がつぶやく。

実のところ、織田家中には浅井長政を侮る空気が流れていた。高村が何度か打ち負かしていたこともあるだろう。それでも引かずに高村と戦い続けてきた武将である。冷静に考えて弱い相手ではない。

「やはり江北の貴公子と二つ名されるだけのことはあるか。しかし、不味いことになった」

老いてなお明晰な頭脳で道三は試算する。

今浜の街を六角が、横山城を織田が抑えれば浅井はもう死に体。

朝倉は降雪の問題があるために長期の出陣は叶わない。三好は四

国に追い返した以上、織田家は一丸となって武田信玄に当たれるはずだった。

しかし、この死に物狂いの驍将が帰って来たとなれば話は別だ。余勢を駆ってなんとしてでも戦線を南に押し下げようとするだろう。

畢竟、織田家は二正面作戦を避けることができなくなった。

「……こほ、こほ。……まったくワシの余命ももう長くはないというのに、御仏も御無体をなさる」

最近やたらと咳が出る。

果たしてあと自分はどれだけ信奈ちゃんのために動けるのか。

……せめてこの大戦の終わりまでは。

道三は祈らずにはいられなかった。

*

目が覚めると知らない天井が見えた。というか鳴き竜があるから知らない寺だなこれ。

身体が痛んで、思わず顔を顰めてしまう。

記憶は長政が高虎の陣に收容されたところまでだ。その後、矢を受けて失血で倒れたのだろう。

「……届かなかったか……」

ぼんやりと腕を伸ばしてみる。腕を矢が貫通したのが一番の深手か。

筋肉が削られたからか、神経をやられたかは知らんが力の入りが僅かに鈍い気がする。

「起きなされましたか。ではまずお茶をどうぞ」

俺が目覚めたのに気づいたのか、女の子がお茶を点ててくれている。

顔を見たことがないから、この寺の子だろう。ただまあ点ててくれている間やることがないから、この子と世間話をして時間を潰す。

聞くべきことは、戦の状況と浅井領内の人口動態。つまりはどれだけ浅井に国力が残っているかだ。

こう言うと硬く聞こえるが「畑の様子はどう?」と聞けば、だいたいは察せられる。織田のように兵農分離を進めていない限りは農業

に従事できる人数がそれすなわち残りの残存兵力と推定できるからだ。

彼女は俺の問いに「最近は少し捗っていない」と答えた。つまりは、そこそこ向こうに打撃が行っているらしい。

(なら、ちよつとばかり頑張つて押し込んだのも無駄ではないように思う)

話しているうちに女の子が点ててくれたお茶が出来る。湯気はあまり出てないぬるめのお茶だ。

長く寝ていたこともあつて喉が渴いていた俺はこれを一気に飲み干した。

「美味しいな……これ」

「ありがとうございます。けれど、ぬるいので風味がいまいちです。もう一度点てますね」

そう言つて今度はやや熱めでお茶を点ててくる。これもまた美味かった。

「ありがとうございます。おかげで喉が潤った。で、すまないが俺をここに運んできた人と呼んでくれてはくれないか？ その人に聞きたいことがある」

寺の子に頼んでしばし待つ。

すると彼女が連れて来たのは平井定武殿だった。ただ、彼もまた腕に包帯を巻いている。どうやらかなりうちは手痛くやられたらしい。

「平井どの。戦の状況はどうだ？」

「あの捕物の翌日に浅井長政が六千をもつて強襲して参りました。その結果掴みかけた今浜は失い、坂田郡の半分は取り返されてござる。それがしが退却の指揮を取り申したが、今やこの傷で采配を振るうこともまかりませなんだ」

悔しきで平井殿が顔を歪める。とはいえ俺が倒れた間、指揮を継げるのはさすが旧六宿老の武勇担当ゆえか。

「それで平井殿の次は誰が指揮を取っているんだ。嘉明か？ 一豊か？」

問いかけてみると、平井殿から帰つて来たのは意外な名だった。

「いえ、姫様にございます。それがしの負傷を伝えたところ「総大将を代わるからそこで待っていて。猪武者かつ怪我人は大人しくしてなさい」とおっしゃられましたな……」

濁いた笑みを浮かべる平井どの。わりと今回の突出を文面越して糾弾されたらしい。

「殿にも「覚悟してろ」とおっしゃられましたな、そういえば」

「おう、そうか……」

彼女らしくもない短い文章。

それが彼女の激発ぶりを暗示していて背筋が凍った。

起きてから2日後、俺は口頭でも義定にこつてりしぼられて療養という名目で領地の栗東に2週間缶詰にさせられることとなった。

*

新十郎が帰ったのを確認して、わたしは一息つく。

まったく手間がかかる人だと思ふ。

あれだけ現実を突きつけられていても、現実を受け入れたふりをして本当はまだ猿夜叉丸を諦めることに納得がいていない。

隠していてもわかるよ。付き合いは長いから。

「ほんとに、妬けるなあ……。あんなに大事に思われて」

わたしにとっては猿夜叉丸は強大な恋敵。それは変わらない。

けれども、新十郎はわたしの復讐の果てを何も言わずに見届けてくれた。

だからこそ、わたしも新十郎の初恋の果てを見届けなくてはならない。

それがたとえわたしにとって不本意な結末だったとしてもだ。

「だから、今は休んで新十郎。決着をつける場所はここではないでしょ?」

今しばらくはわたしが代わりに立とう。幸い任される期間が長かったから当主のいろはは分かりかけてきてる。

嘉明や一豊も一端の武将になった。伊勢は鶴千代に任せれば問題はない。

覚悟を決める時間。それが今の新十郎には必要だと思ふから。わ

たしたちがそれを稼いであげる。
だから、新十郎。
後悔だけはしないで欲しいな。

【一周年記念】 人物特集 六角高村

六角高村

統率 9 4 武勇 9 8 知略 8 9 政治 7 1 イメージ CV 島崎信長

本作の主人公。前世では歴史趣味の高校生だったが、六角義秀の息子として転生。通称は新十郎。

父から軍略などを学ぶが、8歳の頃に父が没すると、大叔父の六角定頼に育てられる。定頼にはかなり恩を感じていたようで、当主になってからは定頼の目指した畿内鎮定を意識した戦略を取っている。また、この頃に学び舎で人質として六角家に預けられていた猿夜叉丸（のちの浅井長政）と親友になり、やがて異性として意識するようになった。

猿夜叉丸が浅井に帰ると恋心を抑え、共存を望みながらも倒すべきライバルとして近江の覇権を争った。

初陣では北畠具教の奇襲に敗れ、武勇を振るって救おうとするが及ばず、学び舎での友をほとんど失う。残ったのは義定と氏郷、吉継含め両手で数えられるほど。この経験は人格形成と武将としての方向性にかなり強く影響を与えており、軍略と訓練に力を入れて精銳騎馬隊を作り上げる一方、自覚は薄いですが総力戦や人に去られることを厭うようになった。

以後の活躍は本編を参照。

特殊な技能としては未来知識と大坪流馬術とそれに合わせて最適化された二刀流を持つ。得物は六角定頼から継いだ太刀と数打ちの扱いやすい太刀の二本。

軍略の傾向としては機動力を最重視しており、馬の行動を阻害するからという理由で騎馬隊の長物の装備を禁止するほど。挟撃や調略など色々手段を講ずるが、結局のところ敵の力点を散らし、崩すことに重点を置いている。

政略面では、合理を重んじるタイプで「理屈が合ってるから相手も

従うだろうな」と信用し過ぎる悪癖が本人の自覚はないがある。要するに軽度のロジハラ体質。内政面では公正だが、豪族たちに対しては厳しめ。特に伊勢では顕著で北伊勢の豪族たちを改易しまくり中央集権を進めた。

プライベートでも馬が好きで遠駆けはもちろんのこと、休みの時にはたまに自分で競馬を開催している。後で繁殖にも手を染めたためか、現代では日本競馬の祖として扱われるようになった。当時、高村杯と呼ばれた重賞は今でも名が残り、中山ダート2400mの古馬G1として親しまれている。

○史実で実在した場合のざっくり生涯

信奈世界ではなく、こっちの現実にはいた場合のシミュレーションです。

現実補正で本編よりややマイルドに。一部違うところもあります。

1、本能寺の変まで

1544年生。六角家中では一門として列せられ、各地の戦いで功を挙げるも疎まれ観音寺騒動で排斥の危機に遭うも一門の義定と山岡景隆の助力を得て軍勢を調べて近江石山で三好軍二万を撃退。浅井長政の介入をくぐり抜けて六角義治を討ち取り、家督を奪った。

その後は領内を再建するも、その間に織田が侵攻。愛知川で一定程度戦い勝つも国力的に継戦不能になり降伏。領地はほとんど召し上げられ、伊賀十万石と南近江粟東二万石しか残らなかった。

織田軍に降伏してからは畿内方面の有力な将として重用され、武勇を活かして柴田勝家とはよく先陣を争った。

信長包囲網崩壊後は信長の妹の雛月院を娶り、伊賀伊勢十八万石を所領として与えられる。また、この時に京の都市改造を開始。のちの越後転封まで秀吉政権下でも京都所司代を務めることになる。

以後は大合戦に呼び出されつつも織田信忠の与力として動き、対武田上杉で活躍。甲州征伐では滝川一益と共に副将を務めた。

織田家臣時代の主な戦績は大河内城の戦い、姉川の戦い、小谷城攻略、対武田の東美濃攻略戦、月岡野の戦い、紀州征伐、甲州征伐。紀州征伐では大砲と騎馬隊を駆使して雑賀衆を撃破し雑賀庄まで制圧。

これが石山本願寺を降伏させる最大の要因になった。

2、本能寺の変々小田原征伐

本能寺の変では近江に在国。本能寺の変を知るや否や、山岡景隆に命じて瀬田の唐橋を崩落させ、明智軍の近江進撃の勢いを削いだ。それでも安土まで押し込まれるが、秀吉が大坂に到着すると反転。京まで取り返した。この功から伊賀伊勢十八万石から安土日野四十万石に加増される。清洲会議後は領国経営に専念するため羽柴と柴田の勢力争いは静観に努め、賤ヶ岳の戦い後に長島の滝川一益を攻め、秀吉側に帰属した。四国征伐では羽柴秀長に次ぐ副将として渡海。白地城の戦いで抜群の戦果を得て、秀吉から功を称された。

九州征伐は自分で開催した競馬で落馬骨折して不参加。小田原征伐では加藤嘉明の水軍で補給を締め上げる役割を担った。

3、桃山時代の転封

小田原征伐後は会津に転封した上杉の故地・越後七十五万石に転封させられる。また、家臣だった藤堂高虎と大谷吉継、山内一豊、京極高次がそれぞれ秀吉から所領をもらい独立した。

越後に着いた高村はまず春日山城から長岡城に本城を変更し、街道の整備や信濃川下流の干拓に従事した。開発の結果、次代の高信（嫡子。母は雛月院）が継いだ時点で実高は百万石に達していたという。これが現在の新潟県が米どころと言われる下地になった。

秀次事件後は六大老に列せられ、伏見城にて国政に参与する。六大老の中では石高は徳川上杉毛利前田に次ぐ5番手だったが、かつて家臣だった四大名に強い影響力を持っていたため政権内の発言力は高かった。

朝鮮出兵の際は高信に四千をつけて送るに留めた。

4、秀吉没後々晩年

秀吉死後、豊臣家では武断派と文治派が対立。当初は中立派に属していたが、前越後国主の上杉景勝が遺民一揆を仕掛けてきたのを機に武断派と家康派に転身。家康に調略のことを伝え、会津征伐の引き金を作る。

この時、吉継は高村に従うつもりでいたが、途中の佐和山城で親友

の三成から拳兵の話を聞かされるとこれに加わった。

関ヶ原の戦いでは東軍として参戦。越後遺民一揆平定後に米沢に向かい最上義光と共に上杉景勝を攻めて降伏させる。戦後に最上は庄内、六角は仙道筋十五万石の割譲を受けるが、会津は家康に召し上げられて榊原康政の管轄となった。仙道筋は分家の義定が知行し支藩として存続した。

なお、西軍に属した大谷吉継は本戦に参戦した山内一豊隊によって討ち取られ、それを知った一豊は悲嘆の涙を流した。

1611年死去。後は嫡子の高信が継いだ。この高村の死を聞いた家康は惜しみながらも喜び「これで、ようやくわし一人の天下となった」と呟いたという。後世の作り話とされるが、当時の家康が高村をどれほど恐れていたか分かる好例である。

以後の六角家は高村の嫡流こそは途絶え、義定の流れが本流となる。また寛政の改革の際に六代藩主の高増が後述する六角馬騒動を起こして滅封され、最終的には豊後府内四十三万石で明治維新を迎えた。

5、逸話

・浅井長政とは人質時代から親交があったものの、信長包囲網の際にこれを断ち切り浅井家を滅ぼした。長政は自刃したものの妻子や遺臣を保護し、その手段は次女の初を養女と同じ佐々木源氏の京極高次と縁組させる、藤堂高虎を登用、画家として大成した海北綱親の子の友松のパトロンを務めるなど多岐に渡る。

・嫡子の高信には定頼に倣い徹底した教育を施したが、若い頃に比べて無自覚なロジハラ気質が上がっていたため、高信からかなり怖がられていた。実際のところ、高信は高村より軽妙洒脱な義定の方に懐いていたという。

・馬を好み、競馬を開催しそれに合わせて馬の品種改良を進めた。越後入国後は浦佐に競馬場を作り体系だった開催を行ったことから高村が日本競馬の祖として認識されることになる。

・この競馬開催は寛政の改革の際に松平定信に厳しく取り締まられ、「馬は我が六角の誇りであり、文化である。縮めはしても絶やすこ

とはできぬ」と抵抗した時の藩主である高増が叱責され、六角馬騒動が勃発。高増は隠居謹慎させられ、豊後府内四十三万石に減封された。なお競馬開催そのものは高増の孫の高遠が再興し明治維新まで続くことになる。なお、現代に於いては高村杯が中央開催中山2400mの3歳ダートG1、高増記念が中央開催新潟芝3200mの古馬長距離G1、高遠賞が中央開催小倉の芝1800mのG1として名が残り顕彰されている。

・李衛公問対と三国志演義を愛読。晩年には所領に明人建築家の楊惠尚を招き、中国庭園の盛楽園を築かせたこともある。

第64話 仮託と移ろい

「案外やるではないか、三河の子狸めが」

真田忍びから届けられた書状を見て信玄は目を瞬かせた。

書状の内容は、遠州高天神城が松平の手に落ちたというものである。

畿内で織田信奈と六角高村が政権を定着させようと悪戦苦闘していたのと同時期、遠州では武田と松平の争覇が繰り返されていた。

一度は本拠地の岡崎にまで武田信玄の侵攻を許した松平元康だったが、伊勢大戦以後に信奈の援軍を得て三河を回復。その後は（武田の勢力を完全に遠州に定着させてはなりません。たとえば、手に余るとしても信玄公の手を煩わせ、吉姉様の畿内統治を助けねば〜）と攻勢に転じ、しきりに遠州を攻め立てていた。

「勘助、この元康の動きをどう思う。忌憚なく言ってくれ」

「あいや、武田は今や百二十万石の超大国。松平も六十万石はありますが、それでも不足は否めませぬ。この国力の差を加味してもなお松平が攻めの姿勢を崩さないのは、自分たちが身体を張って武田の動きを邪魔しておけば、遠からず盟友の織田が畿内を統一してその莫大な国力で援軍を寄越してくれると信じているからでありましょうな」

「盟友……織田信奈への信頼か。あたしには到底理解し難いがな。あなたが織田信奈ならもう一度武田への肉盾として使い、疲弊させて織田による頸木を再びはめる。たとえば人質時代に友誼があったとしてもな」

盟友と聞いて思わず信玄は苦笑いしてしまう。なにせ彼女の盟友は北条氏康。関東にしか夢を見ず、調略を厭わない透徹した現実主義者。友誼や縁で武田に援軍を出すなんてまったく想像がつかない姫武将なのだから。

「六角高村にも逃げられてしまったしな。自領の保全と繁栄のために権勢を持つとうとする辺り、氏康に通ずるものがあるな」

「あれは口惜しき仕儀にございました。申し訳ありません、あの時、岡

崎を抜ければ、高村は寝返らず今頃は瀬田に武田の旗が翻っていたというのに……」

「いい、勘助。先の大戦はただただ織田信奈と松平元康、浅井長政に上回られただけだ。さて、今は松平元康の対処をしよう。少々脱線したな」

軽く咳払いをして信玄を話に戻す。

今の遠州は松平が優勢になりつつある。

普通なら国力が足りないながらも攻める松平が潰れ役になるだけなのだが、いよいよ元康の戦の才が開花し始めたか、あるいは先の大戦で自信を深めたか駿府に置いている山県昌景だけでは追い払うにも苦労するだけの力を身につけている。削った領地こそ少ないが、今の時こそが武将・松平元康の成長期と言えた。

「思うにまずは松平を潰しておくことが肝要だろう。これ以上遠州に狸をのさばらせるわけにはいかぬ」

「しかし、松平は今や当たたらざる勢い。赤坂の戦いとは違えまする」

「そこはあたしとて理解している。だが、当たたらざる勢いであっても戦わなくてはならないからこそ策がいる。違うか、勘助？」

「尤もにございます。どうやら、それがしの腹案も無駄にならないようですな」

「ほう？　流石は我が軍師。すでに考えを巡らせていたか。聞かせてみよう」

勘助の言葉に信玄が声色を変える。

促された勘助は捲し立てるようにその腹案を語り、信玄はそれに相槌を打つ。

全てを聴き終えた信玄は満足気に頷き、高らかに告げた。

「良かろう、勘助。思うがままやってみせよ。今度こそ、武田菱を瀬田にはためかせようではないか」

勘助はただ喜悦混じりに平伏する。

もう一度、虎が天下へと駆け出した瞬間であった。

*

「なあ、いつから俺の領地は野戦病院になったんだ？」

冬晴れの昼下がり。ふとひとりごちた。

南近江は栗東。父から相続した先祖伝来の地で俺は療養生生活を送っていた。

放牧地を奔放に走るとねっこに癒されながら、葉物や魚を中心とした健康的極まりない質素な食事。

義定や信奈公あたりは地味だって文句を言いそうだが、俺にとっては十分満ち足りている。

戦乱渦巻く畿内から切り離されたようなこの小世界で悠々自適に身体を労わりつつ自分と向き合おうとしていたのだが、残念ながらその目論みは一人の闖入者によって潰えた。

「なあ、相良。教えてくれよ。なんで俺はお前と屋敷の縁側で茶を飲んでるんだ？」

「知らねーよ。信奈に聞いてくれ。俺はただこの地で休めって言われただけなんだ」

「まあ、どうせ信奈公にこの際だから俺の身边を調べさせるつもりだろうな、……いいさ、来ちまったもんは仕方ねえ。ご丁重にもてなしてやるよ」

割り切って茶を点てて相良に渡す。未来人だから格式とか関係なく、味と飲みやすさだけを追求すればいいからやりやすい。

相良は俺から受け取った大茶碗を受け取ると一気に飲み干した。まったく、いい飲みっぷりである。

「それにしてもその傷を見た限り、金ヶ崎では大変だったようだな」

「ああ、本当にダメかと思つたよ。前鬼や半蔵、十兵衛ちゃんに金ヶ崎の殿野郎共のおかげで生きれてる」

何気なしに相良を観察してみると身体中の至る所に包帯が巻かれていた。

金ヶ崎の退き口で相良は殿を務め、途中で軍勢が壊滅して消息不明になったがなんとか生還してきている。

これは武人としては普通に尊敬できる事績だ。かの豊臣秀吉とて金ヶ崎の退き口は人生で一番死が間近に迫っていた出来事に違いはない。秀吉の跡をなぞるにしても、ここを越えるのは決して簡単なこと

ではない。

「たいしたやつだよ、お前は」

美濃で見た時よりも一回り大きく相良が見える。なればこそ、好を繋いでおかなくてはならない。

なにせ、信長の次は秀吉なのだから。

その後はたわいもない話が続く。

相良の尾張での暮らしだとか、未来人の価値観とか色んな話をした。

姫武将ばかりの織田家中にいた相良には気兼ねして話せる同性がおらず、相手が六角高村だと分かってもなお話をするのが楽しくて仕方ないみたいだった。

俺も未来のことを久々に話せるのは楽しかった（ただし、俺も未来人だと悟られないようにする手間はあったが）

ただ、一つだけ重大なエラーをしてしまったのが気にかかる。

それは茶に飽きて酒に切り替えた時のこと。その時、相良はもうベロベロに酔っていて、だからこそ俺は好奇心を抑えられなかったのだろう。

いや、好奇心だけではない。もしかすると俺はこの問いかけに自身を仮託していたのかもしれない。

「相良。もしお前の親しい人間が信奈公を狙う謀反人になったらどうする？ それで、相良自身がその謀反人に刃を突き立てねばならないとしたら、どうする？」

織田信奈の宿命を暗示してからかうと同時に、相良に問いかけたのだ。

自分の大事な物を守るために親しき友を斬らねばならないとしたらお前にはできるのか、と。

その時の相良は酔っているというのに、背筋をピンと立てて俺の目を見てきた。

「俺は諦めねえ。刃もいらねえよ。俺は信奈もその人も救ってみせる。言葉を尽くして説得する。そう、決めてるんだ」

「だろいな。お前ならそうする。……だが、説得に耳を傾けなかった

場合はどうするんだ？」

もう一步踏み込む。すると、さすがの相良も答えづらいようである。きつと山崎の戦いのことが脳裏をよぎっているのだろう。

ただ、考え込む時間を与えたのはまずかった。なにせ相手は泥酔中だ。

「その時は……どうするかな……ぐう……」

結局のところ、相良は一番聞きかたかったところだけ話さずに寝落ちしてしまっただのだ。

「やれやれ、これは横着せずに自分で考えろということか。つくづく手厳しい運命だこって」

ひとりごちて酒を煽る。

……本当は決めている。ただ、何らかの形で否定してほしかった。そうすれば、俺はそれを言い訳に出来たのだから。

俺は恐ろしい。

考えるにつれて、時間が経つにつれて、猿夜叉丸を……お市をこの手で討つことを肯じようとする自分がいる。

なにもしなければ、合理に傾いていく己が心の移ろいがただただ恐ろしくて仕方がなかった。

第65話 三方ヶ原

山が動いた。

武田の大軍勢はそう形容して差し支えなかった。

「皆の者ッ！ これより武田は西上作戦を再開するッ！ 御旗楯無も御照覧あれッ！ 今度こそ、瀬田に武田の旗を立てるぞッ！！」

「「応ッ！！」」

諏訪法性の兜を被り、赤い長髪を風に靡かせて武田信玄は大音声を居並ぶ軍団に向けて響かせる。

古今無双の大將の勇姿に武田諸將は酔いしれ、野太い歓声をあげた。

躑躅ヶ崎館から諏訪、高遠、飯田を経由して青崩峠を越える。そうしてたどり着くのは遠州水窪。浜松の北にある山間部である。

手始めに狙うは遠州北部から。二万五千の武田軍が現代においても酷道と称される難路を勇壮と駆け抜けていく。

踏み鳴らされる馬蹄の音。

それはまるで地震のようで、領地を通り過ぎられる国人たちはもはや怯えてその通過を待つことしかできなかつた。

ある人は武田軍の行軍を見て感嘆する。

「まるで天が波打っているかのようだ」と。

はたして、その人は慧眼であった。

武田軍の西上作戦再開の知らせは実際に天下を揺らしたのだから。

まず六角領の南伊勢において、旧領回復の好機と見た北伊勢の浪人と北畠の残党が蜂起した。その数は六千ほどで、六角義定は伊勢全体への波及を防ぐために早急に八千の兵を率いて領国の最南端である三瀬谷にむかわなくてはならなかつた。

次に、朝倉軍が再び南下して小谷城の浅井長政と合流。さらに勢力圏を南に広げんとする動きを見せたため、信奈もまた抑えとして姉川に兵を集める必要が出てきたのである。

「天下が慌ただしいな勘助。その脳髓で天下を周章狼狽させるとは、

さすがは我が軍師よ」

「あいや。比喩でなしにお館様が動けば、天下も動く。正直に申さば、策とは到底呼ばませぬ。それがしは、日和見していた者どもの尻を叩いたまでにございます」

織田も六角も急激な中央集権や新経済政策を進めてきた。

確かに時代に適応するために変化は必要だ。

だが、誰しもが馬が駆けるような速度で変えられるわけではない。ついていけないものも当然いる。

叡山しかり北伊勢の浪人しかり時代という名の荒馬に振り落とされた騎手たちは畿内にはいくらでもいるのだ。

塵芥のような彼らでも結集させれば、脚を挫かせる程度の土塊にはなる。

勘助はそのことを知っていた。

「要するにだ勘助。畿内が反動勢力に揺れている間に元康を叩けばよいのだろうか？ あれはいよいよ厄介な存在となりつつある。それこそ我ら武田を挫かせる石になりかねん」

「いかにも。松平元康はよくやっておりますが、まだ未熟。お館様がもう一突きすれば、砕けます」

勘助がほくそ笑む。

またしても松平元康には苦難が訪れようとしていた。

*

その松平軍ではまたしても恐慌が訪れていた。

先の大戦で遠州や三河赤坂で松平軍を鎧袖一触したのは記憶に新しい。

「また、信玄さんが来たんですか？ 吉姉様の援軍は？」

「浅井と朝倉の大軍が小谷城に集結しているため、その警戒を割かねばなりません。来れても五千には届かぬかと」

「なら、ろろろ六角さんはどうですか？」

「高村公は負傷療養中。代理の義定は伊勢南端の三瀬谷に八千ほどの兵で進軍。領内に一万ほど残しておりますが、これも浅井朝倉への備えでしょうな。仮に援軍が来たとして、その頃には全て終わっており

まする」

「そそそんな」

ぴしゃりと石川数正が言い放ち、元康は頷れる。

「うええ、また松平だけで戦わなくちゃならないんですか……」

「姫様を孤立させること。それが信玄公の目的でありましようなあ。遠州では散々暴れ、岡崎では必死で粘り申した。自信を持ちなされ、姫様。かの信玄公とて、我らを警戒せざるを得ないのです。割り切つて守りを固めねばなりませんだ」

「そそそうですねっ。すぐに取り掛かりましょう！」

慌てながらも元康は遠州の防衛線を再構築する。

しかし、相手は武田信玄。急拵えの陣立てではまるで相手にはならない。またしても遠州の半分以上を武田菱に塗り替えられていく。

織田から相良良晴と滝川一益の三千の援軍をもらつてはいるものの、戦況を変えるほどの力はなく、一縷の望みを懸けた信玄の弱みを探るための偵察も無為無為どころか良晴が信玄に未来を教えて暗殺を回避させるに終わった。

二俣城も落ち、松平方の重要拠点は元康自身がいる浜松城のみ。このまま武田軍は遠州制圧を締め括るために浜松城に迫るかと思われた。

「なんで、そんなことを……！」

浜松城北の市野の地で武田軍が西へと進軍の方向を変えた、と聞かされるまでは。

伝令から知らせを受けた元康は頭が真っ白になっていた。

あと一步で松平は滅び、遠州が手に入るといふのに。

それなのに、自分を置き捨てて西に向かうなど。

自覚せず、わなわなと元康は身体を震わせる。

見逃された。

取るに足りないものと見做された。

知らず、怒りに打ち震えていた。

「……今すぐ、全軍で進撃です……！」

「姫？」

「聞こえなかったのですか！ 忠次、数正！ 私は全軍で進撃と言ったのです！ 武田軍が三方ヶ原の台地を下り始めた時に強襲を仕掛けるのです！」

怒りのままに元康は命じる。

良晴は「信玄の罠だ！」と諫めに回ったが、聞く耳を持たない。

そのまま三方ヶ原に進軍して武田軍の後背をその目に捉えると元康は力強く采配をおろした。

「者ども、突撃です！」

剽悍な三河武士が背を晒した武田軍に突っ込んでいき、じりじりと押していく。元康自身も「策成れり」と手応えを感じていた。

しかし、その感触は長くは続かない。武田軍の左翼と右翼が台地の上から姿を表し、左右から逆落としをかけてくる。

そこでようやく元康は自分が信玄の術中に嵌ってしまったことを悟った。

「しまったです……。背を晒していた武田軍はただの囷っ……。読まれていたっ……」

悔やんでももう遅い。

武田の左右に挟撃され、囷の中央も反攻に回りひたすらに松平軍を叩く。退こうにも前線の混乱ぶりを知らない松平家臣団がひたすら前に進んできて前線を詰まらせ進退不能。

見事なまでに松平軍は信玄が敷いた半包囲網に引っ掛けられていた。

「撤退です！ 皆さん退いて下さーい！」

采配を振るって必死に元康は撤退を指揮する。だが、恐慌しているため妙々しいとは言えない。その最中、またしても彼女の元に訪れた者がいる。

「また会ったな、松平元康」

「信玄さんですか……！」

武田信玄その人である。

彼女は柔らかな微笑みを浮かべながら、元康を眺めていた。

「強くなったな、松平元康。誇るがいい、格下相手にあたしにここまで

手を焼かされたのはお前が初めてだ。守勢に入ったお前は手強いからな、だからあえて怒らせて釣り出すことにしたのだ」

自らを認めるような言葉に元康は目を見開く。あの武田信玄に認められた喜びが身体を満たすが、なお死線は過ぎていないことに気づいて身を引き締めた。

「それで、何の用ですか？」

「元康、あたしに降伏しろ。あたしなら織田信奈よりもっとお前を上手く扱える。畿内制覇が成った暁には、お前に百万石を与えたと構わない。自軍の損害に構わず、ひたすらに遠州をかき乱してあたしの進軍を遅らせることで畿内の織田六角に叡山と北畠を対処させる時間を作ったその大局観と献身ぶりが欲しいのだ」

これは武田信玄の最大級の賛辞だった。

六角は強いが、本当の意味では同盟者たりえない。朝倉は六角の縮小版でしかなく、浅井は信用できるものの長政の武勇ぐらいしか見るところがない。

武田が畿内を制覇しても、それでは安定した統治が出来ないことはわかりきっている。だから、信玄は強力な藩屏候補として元康を欲した。

ここで元康が降り、武田につけば織田は濃尾を守るのに精一杯でもはや天下どころではない。そんな織田に見切りをつけて六角は武田に再度寝返るだろう。そうなれば、天下は過半が武田の掌中に転がり込む。そんな武田で厚遇されるのだ。単純に損得で考えれば、元康にとって悪い話ではない。

「評価してくれるのは嬉しいですが、お断りです！ 私、松平元康は吉姉様を守る東の盾。吉姉様でなくては、日ノ本は世界に踏み出せません。なればこそ、私は吉姉様のために尽くすと決めたのですっ！」

しかし、元康は毅然とした面持ちで断った。

返答を聞いた信玄はその柔和な笑みを引っ込めて、別の笑みを浮かべる。

それはまさしく虎のように獯猛なものだった。

「残念だ、元康。お前ほどの大器を満たされる前に叩き割らねばなら

ないとは。だが、叩き割らねば武田の夢は頓挫する。二度までもお前に阻まれたくはないからな」

そう、信玄が言い残して去ると同時に武田軍の攻撃が激しくなる。松平軍のほとんどは潰走。援軍に来ていた相良良晴と滝川一益も諦めて尾張方面に撤退。

元康の本陣に至ってはすぐさま土屋昌恒の強襲隊によって打ち崩され、元康は何人かの旗本を率いて逃げるしかなかった。

なお、その際に元康が極度の緊張のあまりう〇こを漏らしたのとこののだが、真相は定かではない。

*

ともあれ、松平軍は継戦不能となり浜松城に撤退する。

武田軍は一度は浜松城に押し寄せたが、松平側の士気が高いことを知ると三河方面に転進。そのまま、山本勘助率いる別働隊との合流を目指す。

「なるほど、信玄公はそう動くのか。ならば、こちらも少し動くとしてよう。片方の戦況が急進されるのはさすがに少し困る」

栗東の自領で高村は細作から逐一情報を集めていた。

小谷城の浅井朝倉、三瀬の伊勢遺民一揆。そして東海道の武田。

三瀬の遺民一揆に関しては義定がすでに内通者を使って首謀者をまとめて謀殺したため戦後処理を残すだけだが、他二つに関しては予断を許さない状況にある。

「高次。嘉明と一氏を呼んでくれ。こちらも騎馬隊を出す」

「御意。それにしても武田に当たられるのならば初めから松平に援軍として送ってあげればよかったですか？」

「松平に悪いが、遠州はちと遠い。ハナから武田が遠州を抜いたら騎馬隊を出すつもりだったんだ。尾張ぐらいなら射程範囲だからな」

武田の遠州侵攻から始まった信奈包囲網の第二幕。

それは高村を含め、多くの人物を巻き込んで時代のうねりを作り出すことになるのだった。

第66話 長蛇を逸する

舞台は変わって美濃の中部。

東濃の遠山領を経てこの地にやってきた山本勘助率いる別働隊の任務はいずれ来たる武田本隊のために橋頭堡を作ることだった。

「堂洞城、落ちましてござる。城に詰めていた斎藤利治は稲葉山城に退いたとのこと」

「うむ、ならばこれで中濃三城はすべて掌中に入ったか。して、お館様の動向は？」

「遠州の三方ヶ原にて、松平元康を撃破。今現在は三河を通過して当方との合流を目指しております」

真田忍びの報告を受けて勘助は「実に重畳よ」と奇怪な容貌に笑みを浮かべた。

（浅井朝倉、北畠の残党を通じて織田と六角の動きを止め、先の西上作戦を妨げた松平元康を除く。その後は一転して尾三を駆け抜け、合力して岐阜城を落として織田の国力を再起不能になるまで削る。我が戦略に狂いはなかったか）

現状、勘助が思い描いた策は上手くいっている。

信濃方面から濃尾を取るにあたっては欠くべからざる土地である堂洞城をはじめとする中濃三城を落としたことよって武田別働隊は飛驒、岐阜、尾張の三方自在に軍を進退出来るようになっていた。反対に織田側の斎藤道三と利治親子は守る範囲が増えて苦しむことになる。

「次は犬山城を落とすことに致そう。かの地は尾張北東部の最要衝。お館様と合流するには適している。少々兵を休ませたのち、軍を南に向かわせると諸将に知らせよ」

「御意にござる」

真田忍びを送り出し、勘助もまた一息つく。

不意に思うのは、主君……武田信玄のことだ。

勘助と信玄が出会ったのは甲斐山中の隠れ湯。今や天下に隠れな

き武田信玄もその時はただの勝千代でしかなく、山本勘助はただの怪しげな浪人でしかなかった。

本来ならば勘助は武田の姫君の裸を見たことで無礼討ちにされてもおかしくはない。しかし、勝千代は勘助を討たず、それどころか勘助の話に耳を傾ける。そして、話し合いに至り父の信虎を追放する素案を作り上げてしまっていた。

ここまで来たらもはや勝千代と勘助は一連托生。以後の勘助は武田勝千代を己が夢見る古今無双の名将・武田信玄に仕立て上げること
に全力を捧げた。

それは、これまでの数十年が薄い粥のようにしか思えないほど濃く、満たされた日々。一人で諸国をさすらっていた男が、才を試す機会を与えられた上に主君や娘ほどの姫武将たちに師と慕われ囲まれるまでになったのだ。

(それがしはお館様に多くのものをいただいた。されど、それがしがそれに値する何かを為せたとは未だに思えぬ。川中島ではどう考えとも命を落としていたが、なぜか生きながらえた。宿曜道に頼らなくともわかる。それがしの役目はとうに終えているのであろう。今の生はそれこそ余録に過ぎない。なればこそ、この一戦でどうにか瀬田への道筋をつけておかねばならぬ)

この度の西上作戦が自分の最期の戦いになる、と勘助は予感していた。だからこそ、躊躇いも出し惜しみもしない。

一世一代最後の大勝負である、とそう強く思い定めていた。

*

夜の闇の中を隅立って四つ目の旗が駆け抜けていく。

「皆、急げ！ この遠駆けが成らなければ、それこそ六角騎兵の名折れだッ！」

高村自身が櫓を飛ばして伊勢から尾張へと駆け抜けていく。

家臣たちは目的地を知らされていない。

ただ高村から「桑名を超え次第、全力で俺について来い」としか言われていなかった。

桑名を出て一昼夜。ひたすらに尾張の野を駆け抜けていくとじき

に木曾川が見えて来る。風景も山並みが目立つようになってきた。

この辺りで察しのいい家臣は気づいた。高村は犬山城を目指している、と。

「殿は犬山城を目指している。だが、何の目的が……？」

「私にも分からないよ。けれど、軍神と呼んで差し支えない殿のことだから、知らない何かを掴んでいるのかもしれない」

高村騎兵の両翼である加藤嘉明と山内一豊は首を傾げるが、考えてもわからない。

だが、一刻後に木曾川を渡河している最中の武田軍五千を見た時に全ては氷塊した。

「計算通りだな。日にちは武田本隊が三河に入っておおよそ三日後。軍勢を直前まで隠すために、時刻はおそらく払暁のあたり。その頃を目安に武田の別働隊が犬山城に攻めかかるだろうと思っていたが、まさしくその通りになったな」

高村は、渡河中の武田の別働隊に容赦なく襲いかかる。

これに驚いたのは山本勘助だった。なにせ、想定外の軍が想定外の速度で突っ込んできたのだから。六角高村の動向は注視していたが、よもや一日で桑名から現れるとは思っていなかったのだ。

（長物や大鎧を着た者が誰もおらず、馬自体の脚が速い。……なるほど、これで東海の平原をゆくならば、どこへでも駆けられよう。一口に騎兵と言っても、こうも違うものか……）

武田騎馬隊は重騎馬による突進の破壊力を追求したのに対し、六角騎馬隊は極限まで速さを追求し、攪乱と長駆を得意とする。

この六角騎馬隊の特性が勘助の警戒網の外からの長駆奇襲を可能にした。だが、勘助が恐懼したのはそこだけではない。

「それがしが犬山城に狙いを定めたこと、何故看破された……！」

いかに神速の騎馬隊を有していても、狙いを定められなければ意味はない。だが、高村はそれを可能にした。

勘助は戦線を補修しながらも、脳髓を回して理由を求めた。

そして、気づく。

（よもや、お館様に三河を通過させたのはそれがしを呼応させるため

か……！ となると、高村の目的はそれがし。ひいては、武田の別働隊が築いた橋頭堡を打ち崩すことか……！）」

こうなってしまうては、犬山城は諦めるほかない。内通者も用意していたが、この戦を見られてはもう武田側に寝返ることはないだろう。

勘助は川の流れに逆らって馬首を翻そうとする。

その時だった。

「山本勘助殿とお見受けする。その首を置いて行ってもらおうか」

馬群の中でも一際目立つ栃栗毛の巨馬に乗った少年が悠然と立っている。

年の頃は十六、七ぐらいか。だが、その威風はそれこそ天を衝くほどだ。

対峙した時、ここまでの威風を放った者を勘助は他に二人しか知らない。

（六角、高村……ッ！）

其の者は畿内で最強と言われる者。

其の者はかつて武田の手を引き、天下を変えようとした者。

そして、武田にとって最後の敵になる者。

「皆の者、それがしのことはいいッ！ 六角高村をなんとしてでも討ち取れ！ 其の者は必ずや武田の後難となる者ぞ、必ずや討ち取らなくてはならぬッ！」

声を荒げて真田忍びに下知を飛ばす勘助。

意を受けた真田忍びが四人がかりで高村に飛びかかったが、ただ二振で四人全て斬り落とされた。

「……前に梯子を外したからか、えらく憎まれてるな……。まあ、わかっていたことではあるが」

苦笑しながら高村は兜越しに頭をかく。勘助はそれを罰が悪そうに眺めていた。

「……それだけではござらん。……六角高村、其の方はあまりに危険過ぎる。武力や声望だけではない、人の弱みにつけ込み己がいろいろに操る力がある。まさしく奸雄よ」

「奸雄、か。……俺は自分の大切な者を守りたかつただけだと言うのに、ひどい言われようだ。まあいい、いずれにせよ討つのみ」

高村が勘助に刃を突き立てるべく、刀を高々と上げたその刹那。南方から新しく軍勢が迫って来るのを高村の目は捉えた。

旗印は赤地に金の四つ菱に風林火山の旗。

それを意味するところを理解した高村は思わず口を開いていた。対して勘助の口角は上がる。

「……まさか」

「そのまさか、よ。それがしはあらかじめお館様を犬山城にお招きしていた。本隊から軽騎兵三千を抽出していただいて、な。戦は想定しておらんのだが、お館様は臨機応変に動いて下さったらしい」

「……どちらにせよ、お前の死に時は変わらん」

「いいや、死ねぬッ！ お館様の前で死ぬるなどそれがしは認めぬぞッ！」

血相を変えて勘助は懐から暗器をひたすら投げて高村の刃を拒む。時間ばかりが経って武田騎馬隊の馬蹄の音も大きくなっていく。気づけば、高村が襲われる側に回りつつあった。

ちらりと横目で高村は戦況を確認すると、武田の別働隊は六角騎馬隊に散々に食い散らかされていた。討つべき相手が減ったためか、一豊辺りは手持ち無沙汰にしている。

（此度は武田の別働隊を無力化するのが目的だ。それは十分に果たした。武田信玄を討つチャンスだが、ダメだな。今は優勢だが、展開の手綱は信玄公に握られている）

正直言つて、動きを止めた騎馬隊ほど狩りやすいものはいない。ましてや、速さを追求した軽騎兵ならなおのこと。

「……流星光底長蛇を逸するってやつだな、これは。勘助殿、命を拾ったな」

ついに、高村は勘助を討つことを諦めた。

すぐさま全体に早馬を飛ばして撤退を伝えさせる。

信玄はこれを追うこともなく、勘助ら別働隊を収容することを優先した。

「手酷くやられたな、勘助」

「申し訳ござらん。この科は甘んじて受け入れます。犬山にまんまと釣り出され、このような仕儀と相成りました」

「いい、おかげで六角高村の騎馬隊の速さを知れた。後は本隊で何とかする。今は休め」

「ははあッ」

勘助を下がらせて、信玄は戦場となった木曾川の河畔を眺める。視界には倒れ伏した武田兵ばかりが写っていた。

高村騎兵隊が勘助ら別働隊を襲っていると聞いた際、信玄は退かずにあえて三千のままで向かい、高村を釣り出そうとしたが失敗した。

「やはり、引き際を心得ているな。手強い相手だ」

六角騎馬隊はその制圧力も去ることながら、今回発覚した行軍の速さが持ち味と言える。可能ならば、ここで吊り出してその騎馬隊を削っておきたかった。

「長蛇を逸したのは、あたしの方だ。六角騎馬隊が自由に濃尾を駆け回る以上、どうしてもあたしたちは警戒せざるを得なくなる。そうなれば、いささか脚が鈍るだろう」

高村が無言の圧力を武田軍に加えてくる。織田が浅井朝倉に対応している間に岐阜を抜くという当初の目論見もやや難しくなっていた。

*

その後、高村は美濃に転戦して勘助が攻略した中濃三城を奪回。道三に防衛線の再構築を促したのち、桑名に戻った。

「やれやれ、怪我明けに武田軍の相手をするのはキツイ。まあこれだけやれるならまた戦に戻っても差し支えないか」

栗東に戻った高村が息をつく。

緊迫した今の状況では一息つく時間さえ貴重だ。武田の戦線をややまき直したならば、今度は北が騒がしい。

織田側の使者から書状を受け取った高村はひとりごちる。

「いよいよ、か。決めたのはいい。が、果たして俺は成し遂げられるのだろうか」

高村の顔に陰が差して居合わせた氏郷にはその表情を窺い知ることとはできない。ただ微かに震える肩だけが推量の手助けになるだけだった。

第67話 開戦

……………

今は昔。私が猿夜叉丸であり、お市でいられた頃のことだ。元服してすぐの私はひたすらに人質として観音寺城に留め置かれる一方で、新十郎は六角の一門として戦っていた。

蒲生家主導の対北畠戦線に新十郎は駆り出され、そしてこの日帰ってきた。

奴に言えば揶揄われるから嫌なのだが、どうにも寂しかった私はすぐに伊勢への街道へ迎えに行ったのだ。

しかし、そこで私が見たのはやつれ切った新十郎だった。

「……ああ、猿夜叉丸か。悪い、無様を見せた」

田吾作に肩を支えられながら、新十郎は気まずそうに苦笑いを浮かべる。

その身体はぼろぼろだった。あの強い新十郎がこんなになるなんて、どれだけの死線だったのだろうか。

「身体はまだいい……！　が、俺は、俺たちは友を失った……！　申し訳ない、猿夜叉丸……！」

言われてみて、気づく。

新十郎の隊は確か学び舎の面子で構成されていた。が、しかしもうそのほとんどが戦列の中にはいなかった。それこそ田吾作と左平次ぐらいしか見当たらない。

「みんな救えなかった……。いや、俺が殺したようなものだ……！」

新十郎の瞳から涙が落ちる。

激しい後悔に深い慟哭。……後になって思い知ることだが、この挫折こそが畿内の闘将・六角高村を生む。

それからの新十郎は過酷なまでに己を鍛えた。私も何度か付き合ったがついていくだけで精一杯であいつを満足させられたかはわからない。

「……この世では、恐ろしいぐらい簡単に人は死ぬ。そのことを嫌と

「いうほど理解した。だから、俺は力をつける」

「もう二度と、伸ばした手が届かずに仲間を失う姿は見たくない」

過酷な鍛錬の最中に時折うわごとのように呟かれる新十郎の台詞を私はまともにも聞くことができないでいた。

義定のように呟く彼の隣に佇んで慰めることなんてできはしない。そうできたならどれほどよかったことか。……私はいずれ浅井を背負って立つことになる。新十郎が強くなればなるほど、浅井にとつては災いになるのだ。

だから、これ以上新十郎に深入りしてはならない。それは頭でわかっている。だというのに、私は新十郎から目を離せなかった。

守りたいものを守ろうと足掻く新十郎に惹かれていた。

……

……

……

砂嵐がちらつき、時は流れる。

あの日、高虎の陣に飛び込んだ私は後ろめたさからか高村の方を振り返っていた。

その瞬間、私は後悔した。

私に向かつて伸ばされた腕に刺さる矢に、顔を顰める高村。

そして、私の姿を認めた際にうわごとのように口にした言葉。

「行かないでくれ、お市……」

あいつは、道を違えた私を憎んでなどいなかった。

ただ、穏やかなあの頃に帰りたいと夢を見ていた。

戦乱の世にはあまりに甘く、叶い難い夢。

それを、私はあまりに手酷い形で否定したのだ。

……

「夢か……」

ひとりごちて目を覚ます。

実に寢覚が悪い夢だった。

「……夢であれば、どれほどよかったことか。愛憎ひっくり返って来ていれば、私の心はこうもさざめくことはなかった」

こんな夢を見た理由は分かっている。

昨晚に高虎が美濃から高村が横山城方面に転戦し、六角義定が伊勢から米原へ大返ししてきたと知らせてきたからだ。

高村たちの目的は横山城近辺を封鎖している織田本隊と合流することだろう。総兵力としては織田が二万、六角が六千で二万六千ほどか。

「お目覚めですか、長政様」

状況を整理しながら寝ぼけ眼を擦っていると、直経に声をかけられる。

「すまない、直経。当主たるものが示しが見つからないな」

「いいのです。夢であっても、長政様が高村殿に会えたのなら」

「まったく、敵わないな……」

思わず苦笑いを浮かべてしまう。

直経とはずっと一緒にいた。

それこそ観音寺で人質生活をしていた頃からずっといる。つまりところ、彼がもつとも私の心を知っていた。無論、私の高村への想いもだ。そう思うと少し気恥ずかしいものがあつた。

「さて、長政様。疾く身なりを整えなさいませ。今日は朝から朝倉家との軍議が控えておりますれば」

「そうだな、直経。なればしばし待つてくれ」

促されて私は男装の準備を整えていく。

艶やかな黒髪はきつちりと鬘に結び上げ、女特有の甘い芳香は香木でごまかす。

最も女性らしさを露わにしているたゆんと弾む乳房はやや痛いからさらに二重三重で力づくで抑えつけ、上から鎖帷子でさらに分らないくさせる。

かなり手間暇がいる工程だが、とうに慣れてしまったから半刻もかかることはない。

それは、私がお市から遠く離れてしまっていることの証左でもあつた。

*

「疋田を越えたなら少しは寒さも和らぐかと思えば、さして変わらぬか。儘ならぬものよな……。なれど、織田信奈を得るためならば、我慢もできよう」

気怠げに朝倉義景が白い息を吐く。

十二月も上旬になると、江北には冷たい寒気がやって来る。越前からの風に伴うようにして朝倉軍二万もまた姉川に詰めていた。

本来、冬の朝倉軍は雪に閉ざされるため軍事を行うことは少ない。同じ北陸かつ平地で繋がっている加賀ならまだしも、疋田の峠越えを要する畿内方面に展開するなどほとんど聞いたこともなかった。

ただ、それは裏を返せば朝倉義景がそれだけの意欲をこの戦に見せているということに他ならない。

「孫八郎、長政はまだか？」

「今、前波が出迎えているわ。じきに来るはずよ」

朝倉景鏡の言葉通り長政は来た。

涼やかな眼差しに巧みに着こなされた袴の出立ちは清風颯爽としていて瘦身瘦躯で瞳ばかりは炯々と光る前波吉継と比べるとその男ぶりが際立つ。

(なるほど、確かにこれは江北の貴公子というべきね。これならば、織田に勝てるかもしれない)

その長政の風采にはさすがの景鏡も内心で喝采を上げた。

前波を雑に手を振って下げさせると、三者は軍議に入る。

長政は因縁に決着をつけるためにははじめは六角家に、朝倉義景は織田信奈を自らの手で捉えることにこだわり織田家に当たれることを希望したが、景鏡は彼らの提案を退けた。

「私の構想としては朝倉が六角に当たり、浅井が織田に当たってもらうわ。尾張兵は脆弱な一方、六角軍は強い。特に高村が指揮を取るなら尚更ね。此度の戦の目的は織田信奈の打倒よ。義兄様が織田信奈をどうしようがかまわないけれど、織田を倒さねば畿内の政権交代は望めないわ」

「確かに理には叶っているな。高村は自ら表に立とうとはしない。強いが、捨て置いても政局には影響はないが、それでいいのか？ 二万

いるとはいえ、朝倉軍が精強な高村と当たることになるぞ」

「あまり朝倉を舐めないでもらえる、長政殿？ 義兄様を見れば弱そうに見えるけど、六十年間にゃんこう一揆と戦ってきた精兵が揃っているわ。義兄様や私も宗滴様から血が滲むような修練を課されてきた。悪鬼無くして一乗谷の楽土は守れないのよ。高村を抑え込むぐらいなら訳もないわ」

あくまで高村を相手にするつもりで長政に対して景鏡は引くことはない。

むしろ「これだけ貴方の突破力を見込んでいるというのに、弱い織田の相手が出来ないの？」と煽り返す始末だった。

これには思わず、長政は閉口してしまう。

高村よりは織田信奈の方が組しやすい。それは違いない。しかし、織田家の持つ種子島の数を思えば、被害はかなりのものになるのは疑いなかった。

(……ああ、これはなんと孤独な戦いなのだろうか……)

朝倉義景は風流にしか夢を見ず、朝倉景鏡は浅井家を使い潰す気でいて、織田六角に今更帰属することも叶わない。武田信玄が上洛を果たしたとて、これまでの大戦での浅井の去就を見れば信用されるとは思えなかった。

「異論はもうないようね。ならば、後は頼むわ長政殿。貴方の働きが天下を変える。ゆめゆめ忘れないようにね」

沈黙を肯定と見做した景鏡が、長政に念押しして軍議は終わる。

長政は何も答えなかった。

*

横山城の北西。姉川の河原で織田六角と浅井朝倉の軍勢が対峙していた。

姉川南岸でこんもりと盛り上がっている勝山の西に六角軍の六千がおり、東に織田の二万。

六角隊の川向こうには朝倉軍が二万。織田軍とは浅井軍一万が睨み合っている。

「どうやら俺の相手は朝倉軍か。数はともかく、義景殿自ら出て来る

とは思わなかったな……」

俺と朝倉義景は幼い頃に面識がある。浅井久政が六角に従属するまでは朝倉と六角はかつて英雄・浅井亮政と共に戦った同志として仲が良く、たびたび交流があった。

正直、朝倉の二万は百万石の大国の本気と考えれば別に驚くことではない。だが、あの戦嫌いで和歌ばかり詠んでいた長夜叉殿が熱意を持って戦いに臨んでくるとは思わなかった。

「聞いた話によると長夜叉殿は信奈ちゃんに懸想しているらしいよ。等伯を叡山に呼びつけて信奈ちゃんの障壁画を書かせていたみたいだし」

「それはいいよ本物だな。しかし、源氏物語に出て来るような姫君と信奈公はあまりにかけ離れてるぞ？ 何が琴線に触れたのかわからんな」

「さあ？ あの人の考えることはわたしも分からないね。まあ女の子としては信奈ちゃんに同情するよ。あの人、顔は良いけどすごい幻想を押しつけてきそうだし」

「……義定さん、なんかそれ俺にも刺さらない？」

「気のせいだよ。それに新十郎、あそこまで美形じゃないし。ほら、雑談は終わらせて前を見よ？」

最後に辛辣な一撃を喰らわさせて義定は前を向く。

よくよく見てみるとちやうど朝倉軍が喊声を上げて姉川を渡河してきているところだった。東の方でも聞こえることから、長政とタイミングを合わせたのだろう。

（いよいよ、姉川の戦いが始まる。運命が音を立てて回りだす。そんな錯覚すら覚える。ああ、ついに止められなんだか）

心の中で嘆きつつ、義定や氏郷に手筈を伝える。

幸い、相手は長政ではない。だから、俺は躊躇いなく采配を振り下ろすことができた。

「敵を引きつけよ！ 渡りたいなら渡らせてやれ！ しかし、無事に向こうに帰らせるなよ！」

姉川を渡り切った朝倉の先鋒に義定隊の矢の雨が振りかかる。

それが姉川の戦いの嚆矢となった。

第68話 十二段

伊吹山の後ろから日が昇る。

いつもと同じ風景。変わらぬ一日の始まり。

けれども、私は今日こそが運命を変える日だと否応なしに理解していた。

「どうやら、朝倉軍が出たようだな。ならば、私たちも往くとしよう」
夜明けと共に姉川を渡り、織田と六角のそれぞれに攻めかかる。そう示し合わせていた。

（六角軍の主将は高村。されど騎馬隊は二千しか連れてきていない。ゆえに、朝倉景鏡は樂觀視しているようだが、甘い。残りの四千は剽悍で鳴らした蒲生氏郷の軍勢が主体だ。それこそ容赦のない殴り合いになるだろう。朝倉兵たちはともかく、その苛烈な戦いに貴族的な義景たちがついていけないのだろうか）

朝倉の国力は頼りにしている。しかし、朝倉景鏡は信頼できない。そして朝倉義景は、理解ができない。能力はともかく高村流に言えば世界観が隔たりすぎていた。

（ああ、戦前に景鏡が言っていた通りだ。私の働きがこの戦を左右する。この槍で切り開く他ないのだ）

今一度、念じて姉川を駆ける。

織田方の陣は十一段にも渡る長大な陣を構えていた。敵の狙いは明白。突進力のある私を絡めとることで、決め手を奪うつもりだろう。

「ここが唯一の勝機！　なんとしてでも姉川を渡り切り、織田の本陣のみを目指す！　雑兵は捨て置け！　浅井の興廃はこの一戦にかかっているぞ！」

織田の意図を理解してもなお、退くつもりはない。負けるつもりもない。

対抗するために私自ら先頭に立ち、兵たちを鼓舞する。

「浅井家の御為にツ……！」

「ああ、長政様。なんと勇ましい……」

「やるぞ、俺はやるぞ！ 長政様と一緒になら二万の兵だつて怖くねえッ！」

兵の目の色が変わる。

我ながら、やりすぎたか。まるでにやんこう一揆を引き連れているかのような。だが、悪くない。

後は丹念に鋭さを磨き上げて、食い破るのみ。

なにせ、私に残された道はそれしかないのだから。

*

長政の鬼気迫る突撃を前にして、織田軍は揺れていた。

第一陣は話にならなかった。

第二陣は追い継る兵たちを長政たちはあつさりとしぎり捨てる。

第三陣。相良良晴の軍勢だが、本人が美濃から帰ってくるのが間に合わないため竹中半兵衛が指揮を取る。天才軍師の名に恥じず確かに彼女は縦横無尽に采配を振り回した。が、それでも長政の裂帛の気合には及ばない。

「なんて気の強大さ……！ けほ、けほ。いけません、このままでは、織田軍全体は長政さんの気迫に吞まれてしまいます……」

かつて織田と朝倉と浅井が美濃を三方から攻め立ててきた時に半兵衛は長政と対峙し追い払ったことがある。その時は抜け目ない相手という印象でしかなかった。

「よもや、長政さんがここまでの覚醒を果たすなんて、予想外でした」
項垂れる半兵衛。

三つの陣を突破した浅井軍に衰えは見られない。それどころかさうに鋭さを増している。

こうまで長政に流れに乗られてしまつては、さしもの半兵衛とて打つ手はない。ただ自軍の保全に凶るしかなかった。

「三つの陣を抜いたとて、気を緩ませるな！ まだ半分も終わっていないんだぞ！」

半兵衛を抜いた後も長政は櫓を飛ばしながら進む。

朝倉軍が高村を止めていられる時間はそう長くはない。不思議と

長政はそう確信していた。そして、おそらく浅井軍がわずかでも息を入れてしまえば、織田の大軍に二倍の数の差で踏み潰されてしまうであろうことも。

破滅覚悟の電撃戦。歩みを止めれば即ち死が待っている。

だから、長政は狂わせ続けた。

四つめ、五つめの陣を守るのは丹羽長秀。しかし、手堅い彼女ではもはや完全に流れに乗った長政を防ぐことは叶わない。六つ目と七つ目を守る松永久秀は長政の勢いに抗すことは不可能とみなして流し、わざと通過させた。

これには、後に長政の退路を断ち包囲する意図があつたが、ある姫武将によって阻止されることになる。

「貴女が高村殿の戦術を真似るとは。焼きが回りましたね、弾正殿。確かに流して背後に回らせる策は有効ですが、長政様には効きませんよ」

血風に靡く、黒混じりの金髪。大きな体躯でありながら女性らしい豊かさとしなやかさを損なわない美貌は、異相の美女である久秀すらも目を見開かせる。

「浅井軍の若き大都督、それが貴女でしたか。そんな貴女が残兵狩りなどらしくはありませんこと」

「ええ、いかにも。私が藤堂高虎です。残兵狩り？ 結構です。それで、我々が勝てるのならば」

久秀の皮肉に高虎は動じない。それどころか切長の瞳から放たれる眼光が久秀を刺す。対して久秀は艶かしく舌なめずりをした。光秀同様に揶揄うと面白そうな手合いに高虎を捉えている。こうなつた久秀はしばらくの間は高虎に執着するため、件の策が行われることはない。

（背後は私が守つてみせます。ですから、長政様。どうか織田信奈の元まで辿り着いて見せてください）

祈りながら高虎は久秀と槍で打ち合いを始める。

高虎は信じていた。自分の才を見出してくれた主の器を。

艱難辛苦を乗り越えたその槍の鋭さは、あるいは天にも通じると。

*

「まずい、遅れたっ！……ッ！」

姉川一帯を見下ろせる坂の上で思わず良晴は乗馬の脚を止めさせていた。

夜を徹して美濃から姉川へと駆けてきた相良良晴が見たのは、あまりに一方的な戦だった。

長大な十一段の陣は過半がビリビリに引き裂かれ、浅井の旗印が杭のように深く食い込んでいる。

頼みの六角高村は朝倉軍一万六千を相手に六千で対峙しており、おそらく援軍を出す余裕はない。残存兵を本陣に呼び寄せようとしても、松永久秀を軽くあしらってかわした藤堂高虎が数百の騎馬隊で各個撃破を繰り返している。

朝倉軍の残った四千は未だに姉川北岸に留まり、怪しげな圧力を織田六角両軍に加えている。おそらくは最後のダメ押しを喰らわせるために待機しているのだろう。

いよいよ、織田軍は追い詰められていた。

「良晴さん！ 信奈様の本陣へ向かってください。朝倉義景さんが来ます！」

かろうじて原型を留めていた第三陣に良晴は合流すると半兵衛に促されるまま本陣を目指す。道中で丹羽長秀と松永久秀を拾いつつ進むが、藤堂高虎が邪魔をする。

「くそ、こんな時に万能のチート武将か！ だが、俺は諦めねえぞ！」
久秀を再度高虎にぶつけて、良晴は進む。

叡山で朝倉義景と出くわした時、良晴は激しい悪寒を覚えた。彼らからぬどうしようもない嫌悪感を感じたのだ。

(どうにも、朝倉義景だけは信奈に近づけちゃいけない気がするんだ)
野放しにしていれば、良晴の大事なものを義景は穢しかねない。

不思議と、良晴は本能でそれを感じ取っていた。

*

丹羽長秀と松永久秀を突破した後、長政は第八陣と第九陣をあつさりと抜いた。この両陣を守っていたのは柴田勝家。

織田家最強の猛将をストッパーとしてあてにしていた信奈だったが、これも海北綱親、赤尾清綱、雨森清貞の三将が捨て身の突貫を勝家に敢行し長政から引き離した。

勝家までもが抜かれて織田家の陣は第十陣と第十一陣、そして僅かな兵だけ詰めている本陣のみである。このうち本陣は兵数が足りず、第十一陣は戦では無力な津田信澄が率いているため宛にはできない。事実上、第十陣が最後の盾であった。

「止まりやがれです、浅井長政ッ！」

第十陣の守将、明智光秀は虎の子たる精鋭鉄砲隊を長政らに差し向けた。

百名ほどしかいないため万の相手に弾幕を貼ることはできないが、今の長政は三千騎ほどしか引き連れていない。

号令をかけると共に鉄砲隊が火を吹く。

いかに長政達が強いとはいえ、二倍の兵力の中を長時間駆け抜けていればさすがに足が鈍る。ここに鬼札の鉄砲隊である。長政達の脚がようやく鈍った。

「相手は百程度だッ！ 構うな！ 進め！」

「くっ、この期に及んでなんて胆力ですか！ さっさとくたばれですう！」

家臣達が撃ち落とされていく中、なおも長政は果敢に前へ進み続ける。

十兵衛はその威に肝を冷やしながらも、丁寧に事を運んだ。

そうして、十兵衛放った弾丸が一発。

長政の兜に的中した。

「ぐっ……」

弾が当たった衝撃で兜の前立てが折れて脳が揺れる。

思わず意識を手放しそうになる。

が、長政は齒を食い縛って耐えた。ここで脚を止めてはこれまでの進撃が無為になる。諦観も決意も全て水泡に帰する。それだけは許せなかった。

視界が不明瞭ながらも体勢を整えた長政は腿で馬の背を締めて指

示を与える。長政の意を理解した愛馬はヒイインと甲高く嘶くと、力強く地を蹴った。

「なんと……」

これに驚いたのは十兵衛だった。

直撃していながらも銃弾に怯まない人間がいるとは思えなかった。その決めつけが、勝負を決めることとなる。

「はあああああアツ!!」

裂帛の気合いと馬の駆ける力と、長政の意志がないまぜになった渾身の一振り。

十兵衛は咄嗟に種子島を横にして受けたが、どうしようもない。

種子島はひしゃげ、十兵衛は鞠のように吹っ飛ばされた。

「また、ですか。また、十兵衛は信奈様を守れないのですか……!」

強かに身体を打ちつけた痛みにその秀麗な顔を顰めながら十兵衛は呻く。

長政はもう地に落ちた彼女に見向きもしなかった。

十兵衛が突破されたのを見て、第十一陣は戦わずして恐慌状態に陥っており、容易く通過を許すことになる。

「ようやく、信奈殿の本陣か」

永遠にも感じられた突破戦の果て、ついに長政は永楽通宝の旗を捉えた。

なんとか信奈は逃げようとするが長政の方が速く、間に合わない。

だが、不思議なことに長政は信奈本陣に向かわなかった。否、向かえなかった。西方から千騎の騎馬隊が神速で駆け寄り、強引に長政隊の側面を殴りつけられて、脚を止めさせられたからだ。

「……長政」

幻の第十二陣。運命を背負った隅立て四つ目……六角高村は神妙な面持ちで彼の名を呼んだ。

第69話 解

前を見る。

居並ぶのは三つ盛亀甲の騎馬三千。元は一万いたが、織田軍二万の中を凄絶な突撃で貫き通してここにいた。……まったく主に似て強情な奴らだと思う。敵ながら天晴れだが、これ以上は見過ごせないから俺が来た。

「高村……！」

息も絶え絶えに長政が俺の名前を呼ぶ。

自軍に倍する織田軍を貫いた代償はかなり大きく、今の長政はかなりボロボロだ。

まず兜の前立ては一部欠けていて、普段結えている髪も解けて総髪となり、兜からこぼれている。槍も甲冑も血に塗れ、死臭が正直鼻につく。

そんな形になっけていても、その瞳だけは鋭くこちらを貫いてくる。それを理解すると全身が総毛立った。

嫌でも分かる。

今、この時こそが浅井長政の頂点。すなわち全盛期なのだ。

「長政……！」

もう一度かの敵の名を呼んで駆ける。

迷いも悲しみも今だけは雲散霧消した。

本気の長政を、最高の状態の好敵手を堪能したい。そんな戦闘狂じみた欲求が俺を突き動かす。

……ああ、こんなだから俺たちは戦いをやめられないのだろうな。だって、互いにどちらが上かはつきりしないと気が済まないのだから。それでいてとことんまでやらないと満足できない質だ。なら、そうすつぱりとやめられるわけもない。

「来い！ 高村！」

その証拠に長政だって瞳孔を開いて、その端正な唇を吊り上げさせている。

(まったく、馬鹿だよな。俺たちは)

一抹の自嘲を残して、俺とあいつは衝突した。

*

東方で砂塵が巻き上がるのを、確認すると義定はにわかに笑みを浮かべた。

「良かった。たどり着いたんだね。なら、わたしの仕事は終わったわけだ」

開戦してすぐ攻め寄せてきた朝倉軍一万六千に対して六角軍は六千。三倍に迫る兵力差だが、朝倉軍の目的がうだうだ戦って六角軍を足止めすることだとすぐに高村と義定は気づくと彼らは戦い方を変えた。主力の蒲生軍を後退させ、平井定武の隊と切り替えたのだ。

氏郷は優秀だが、自ら先陣を斬りたがる悪癖があるため前線におけば戦局は必然激戦になる。高村は、いや正確には義定がそれを嫌った。

だが、ただ替えるだけでは芸がない。義定はあえてその交替に時間的猶予を作った。そこに機を見て敏と判断した二人の武将が突っ込んでくる。

「フハハ！ 六角勢がだらしない腹を晒しているわ！ いけすかない鏡姫は突出するなというていたが、惜しいッ！ 往くぞ、直澄イツ！」
「応ともよ、姉上！ 我ら鬼真柄の武勇を見せてやるぞ！」

真柄直隆と直澄の姉妹。金ヶ崎の戦いでは逃げる相良良晴をしつこく追い回し、痛撃を与えた朝倉軍きつての豪将たちだった。ただ互いに武勇を頼みにしすぎるところがあり、腺病質な景鏡に従うつもりがなかったのが、今回は災いした。

「あからさまに釣りだと分からないかなあ……。長夜又どのの家臣らしくない。小次郎、わたしが鎬矢を放ったら鶴千代と平井のおじさんに挟撃するように伝えて。その後はいいや、新十郎と一緒に突っ込んでいいよ」

気怠げに指揮を出した後、義定は弓を構える。

放たれた鎬矢は風切り音を周囲に撒き散らした後、直隆の頭蓋に突き刺さる。変に外す趣味は義定にはない。即死だった。

「姉上ッ！」

遺された直澄が慟哭の声を上げたが、もうどうにもならない。

六角高村に蒲生氏郷、平井定武。義定の懐刀である小次郎率いる旗本までもが殺到し、瞬く間に直澄もまた姉の後に続いた。

義定からしたら会心の勝利ではある。しかし、彼女の機嫌はあまり良くない。

「これで朝倉家で血の気の多い奴らは消えた。後の攻勢は緩くなるだろうな。それにしてもらしくないな。こうもお前が主体的に動くなんて」

「そうだね。でも、新十郎もらしくはないよ。いつもより動きにキレがないもん。やっぱり、浅井が気になる？」

「まあ、それはな」

義定に指摘されて固まる高村。高村自身は隠していたつもりだが、どうにも気になって頻りに東の戦線を確認してはそわそわしていた。その集中が切れる様を義定は見逃さなかったのだ。

「溜め込んでる四千で長夜叉どのが何をしたいのかは知らないよ。でも、もう余程なことがない限りこっちの戦線は崩れない」

「だがなあ、俺が総大将だぞ？　これほどの大戦ならやはり俺が留まらなくちゃな」

「最近の養生でその役目をわたしにぶん投げてたけどね。おかげでわたしも二カ国ぐらいなら面倒を見れるようになったよ。新十郎の代将をするために一月ぐらい色々詰め込んだけどさ。まあ、わたしの話はいいや。織田軍はもう無理だよ。完全に猿夜叉丸に呑まれちゃってるから。新十郎ならわたしの勤が無駄に良いのは知ってるよね？

多分、今から出ないと間に合わなくなると思うけど」

容赦なく、義定は高村に突きつける。

今が決断の時だと。だが、高村が迷うことはなかった。いや、迷わせてさえくれなかった。

「大局を見て残るのは将としては悪くないよ？　でも結局さ、新十郎以外の誰かが赴いて決着がついた時、新十郎は納得できるの？」

更なる義定の追撃が高村の胸に刺さる。

良くも悪くも義定の言葉は高村の心の最も柔らかい所をごとつそり抉っていた。

「それは……ッ！」
できない。

答えはせずとも、高村は言外にそう言っていた。

察した義定は呆れた顔になって深くため息をつく。

「はあ、不器用で臆病なんだから。……行つといで。しつかり、答えを見つけてきて。待つてるから」

かくして、半ば追い出されるように高村は六角軍から千の騎馬隊を抽出して向かうことになるのだった。

*

六角高村と浅井長政の一騎討ちは続いていた。

長政は息を切らし、高村は頬に一文字の傷を負い、血を流すままにしている。

馳せ違った当初は高村が優位と見られていた。これまでの武勇譚、特に北畠具教を討ち取っていることは浅井方としても無視できない。無惨な敗北を長政が喫して終わるのだろうと大方の者は見ていた。

しかし、その予想は覆る。

長政の鋭敏かつ豪壮な槍捌きは何度も高村に血を流させていた。

対して高村の刃は長政に届くことはない。何度か届きかけるが、すんでのところその肉を裂く事はない。

（はあ、はあ。今ならば、より深く分かるッ！ 高村の呼吸がっ！ 意思がっ！）

極限まで振り絞られた力と長年にわたって高村と打ち合いを重ねてきた経験がここにきてものを言う。

高村の目線だけで、高村の息遣いだけで今の長政は高村の挙措がある程度分かる。

その感覚に従い槍の穂先だけが届く間合いを確保し容赦なく振り抜いていく様はまるで円舞のようで、美しさすら想起させてしまう。

「……ッ！」

そんな長政の攻勢に対して高村はじつと耐えていた。

槍を弾こうにも振り抜かれる力に負ける。隙を見て飛び掛かろうとすれば、すぐさま長政は無防備な土手つ腹を穿つだろう。

(天敵、だな)

高村の誘いや崩しにかからず、ひたすらに槍の間合いで応ずる。

それが高村を攻略する技術的な方法である。だが、高村の実力の向上も相まって今や畿内でそんな真似をできる将などいない。……いないはずだった。

「どうしたッ高村！ よそ見をしている場合かッ！」

「馬鹿言え。今のお前相手に目線を切れるわけないだろ、まったく面倒な相手になりやがって……！」

半ば忌々しげに高村は長政を睨む。

今までは足りなかった。しかし、今は違う。思えば、高村の刀を最も知悉した浅井長政こそが高村を打倒し得る最も近い位置にいた。

全てを賭けた直近の戦闘経験が、今になって長政の潜在能力を徹底的に掘り起こして高村の天敵に仕立て上げている。

(だが、やりようがないわけじゃない。確かに今の長政は俺の天敵かもしれない。……しかし、今の状況をどれだけ続けられるかだ)

打たれ続ける中で、高村は不思議と感じ取っていた。

今の長政の力は彼の器には過ぎた力だと。なれば、いつかは破局の時は訪れる、と。問題はそれまで自分が保つかどうかだ。二刀目を惜しみなく抜き放ち、弾きいなし逸らしあらゆる技術を使って長政の攻勢を凌ぐ。

(やはり、新十郎。お前は私の先を行くか……)

内心、舌を巻く長政。

押しているようで流されて、決定的には攻め切れない。もつれあうように馬を走らせ、どこか穴がないか見て回る。

……そんな、長政が攻め手を抑えた瞬間を高村は見逃さなかった。

突然に視界が揺れ、甲高い馬の鳴き声が辺りに響く。

その時、長政は自分が何をされたのかわからなかった。自分の愛馬が苦しみがくことでようやく状況を把握する。

高村の馬が愛馬の首に噛みついたのだ。長政の馬が離れようとも

がくが離さない。その口の端から血が滴り落ち、長政の袴を濡らす。
……やられた。

ことここにいたって、ようやく長政は高村の仕掛けた陥穽に落ちたことを理解した。

「……ようやく、捕まえたぞ」

完全に詰められた間合い。気づけば、高村が馬の首を足場にして長政へと躍りかかっていた。

槍の石突でなんとか高村を突き返そうとするが間に合わない。右腕から振り下ろされる出鱈目な太刀はすんでのところ受止め。だが衝撃は、下に叩きつけられる力までは完全に防げなかった。

「……くっ！ けほ、けほ……」

地面に叩きつけられる。その際に口の中を切ったのか、鉄の味が口内を満たした。

高村が悠然と馬上から降りてくる。長政は最後の意地で槍を突きつけようとするも、冷静な高村は一太刀で槍を打ち落とした。

今の長政は完全に無手。高村は警戒を崩さずに刀を構えてにじり寄る。

(こうなってしまったては、どうにもならないな……。ああ、結局のところ私は届かなかったのだな……)

皮肉げな笑みと共に長政の力みが抜ける。それを見て高村は刀を下ろした。

かくして、六角高村と浅井長政。近江を南北に分つ名将の立ち合いは存外静かな形で幕を閉じることになる。

*

一陣の風が吹いて頭がようやく冷えた。

そして、実感する。俺が勝ったのだと。

「満足したか、長政」

「……ああ、こうまでやって届かないのなら納得もいこう」

倒れ伏す長政の顔はどこか爽やかで、冷たかった。

ああ、こいつはもう死を覚悟している。俺が、彼女の願いを打ち砕いた。生きる理由を、戦う理由を奪ったのだ。

「思えば、我々二人も遠くに来たものだ。初めは同じ机を並べていたところから、それぞれの国に帰り、そして果し合い、片や堂々と立って、片や地に這いつくばっているのだから」

長政は、いや猿夜叉丸は言うが、そんなこと聞きたくはなかった。だつてまるで、別れの挨拶みたいじゃないか。

「……そんな、恨めしい顔をしないでくれ、新十郎。それが私達が決めた道ではないか。もう戻れはしない。だから、一思いに終わらせてくれ。お前に終わらされるなら悪くはない」

猿夜叉丸は言う。

否やおそらく許されないのだろう。

浅井長政は江北の貴公子とあだ名される青年大名にして、今川幕府に仇なした逆臣なのだから。その身に背負わされた名前と悪名がその選択を許しはしない。ことさら、畿内の秩序の担い手になろうとしている六角高村にとっては許してはならない相手だ。

「……わかった」

刀を振り上げる。

猿夜叉丸に、いや浅井長政に止めを刺すために。

こいつは浅井長政なのだ。猿夜叉丸でもない。ましてやお市なんて姫君でもない。

こいつ自身が、そうあれかしと望んだのだ。ならば、その選択を全うさせてやるべきなのでは？

腕が震える。でも、やると決めた。決めたんだ。

……ああ、でも忘れられない。懐かしかったあの日々が、愛しかったあの横顔は。

俺は、それを守りたいんじゃないのか？　なのに、どうして。

刀を振り上げた姿勢のまま動けない。懊惱が身体を支配する。だが、今更もう迷えない。決めなくては、やらなくては。

感情が置いてけぼりになって義務感だけが残り、身体を突き動かした。

だが、悩むあまり俺は周りが見えていなかったのだろう。

「猿夜叉丸様をやらせはせんぞ！　新十郎オオオツ!!」

右後方から遠藤殿の怒号が聞こえる。肩をいからせている辺り、渾身の一撃を振るおうとしているのがわかった。距離は近く、避けられない。

長政に振るわれるはずだった一太刀は軌道を変えて遠藤殿に向かう。

「……やはり、新十郎の一太刀は重いな」

真一文字に斬られ、血飛沫を上げる遠藤殿。明らかかな致命傷だが、その顔には笑みが浮かんでいた。気づけば、長政はもういない。遠藤殿は陽動だったのだろうか。

「これから死にゆくというのにどうして笑っていられるんだ、おっさん」

「あれだけ仲が良かった猿夜叉丸様と新十郎が殺し合うのは間違っておる。わしはそう思った。見たくないものを見ずに済んだ。そう思えば、喜ばしいことよ」

そう笑ったまま遠藤直経は頷れる。この人はいつもそうだ。好き勝手に遊ぶ俺たちを見守り、時には叱る。義務感や忠義心だけを持っている人ではなく、本当の優しさを持っている人。

だから長政は頼りにしていたし、浅井家臣であると分かっているながらも俺や義定が懐いた。

「さよなら、懐かしい人よ。そして、申し訳ない」

正直なところ、俺の迷いが遠藤殿を殺したようなものだ。

だが、おかげで俺は解を得た。

結局のところ、俺は浅井長政を殺せないのだと。

否応なしに気づかされたのだった。

第70話 変われなかつた男

六角高村の手によって浅井軍本隊が潰走したという報はたちどころに姉川の緒戦域に伝わった。

「高村がやったんだ！ もはや浅井軍の勢いはない！ 姫さまを救うんだ！」

活気付くのは織田軍。この機に巻き返しを図り、特に不本意な形で抜かれた柴田勝家は奮戦して本陣への道筋を半ば強引に切り開いた。勝家が作った道を織田諸将がたどり、柴田勝家と明智光秀、相良良晴の三軍合計三千が織田の本陣に救援に向かう。今までは軍の結集を妨害していた藤堂高虎が長政の代わりに退却の指揮を取ったのも大きかった。

しかし、強壮だった浅井軍が去ったといえど織田の勝利が決まったわけではない。

「者ども、かかれ！ あれこそが織田信奈の本陣！ 陥として天下に朝倉ありと示しなさい！」

なにせ、織田の本陣は朝倉景鏡率いる四千の別働隊に迫られていたのだから。

敵の索敵にかからないように戦場の北辺を密かに移動させ、意地悪く浅井の突破の後をたどったため、ほぼ無傷。六角に手出しさせないために一万六千の本隊を壁にした大博打は長政の覚醒により想定をさらに上回る効果を発揮する。六角は動けず、戦い疲れた織田には厳しい。

この別働隊こそが朝倉義景が、いや朝倉景鏡が用意していた追い討ちの切り札であった。

「こうも上手く嵌まるとはな」

「想定以上よ。長政殿があまりにも眩しい活躍をしたから気づかれることはなかった。後は義兄様がしくじらなければ策は成るわ」

「ふふふ、よもや余の一世一代の求愛すら策に用いんとするとはな。

総大将を策の一駒として放りこむとは普通ならば考えぬことだ」

「使える物はなんでも使うわ。此度の道具が義兄様だっただけのことよ」

淡白に景鏡は言い放つ。

義景の倒錯した風流趣味なんて正直どうでもいい。ただその行為に織田信奈の知恵を曇らせるという利があるから放任しているだけだ。

大事なものは、この場の勝利。そして朝倉家が、いや朝倉景鏡が天下を取ることにしか考えていない。

（我が従妹ながら苛烈な女だ。余は天下を本当に取りたいのはお前だと知っている。平穩を愛する余にとつては傍迷惑な話だがな。されど、その過程で織田信奈を、理想の女人をこの手に出来るなら文句はない）

義景は義鏡の野望を知り、なおかつ許容していた。それどころか（余ではなく景鏡が当主であれば、収まりがよかつたのだろうな）ときえ思っている。

「余は余で本懐を遂げてくるとしよう。任せたぞ、義鏡」

言つて義景は単身で本陣を後にする。その目には狂気の光が宿っていた。

かくして、織田軍の本陣周りが騒がしくなり姉川の戦いはいよいよ最終盤を迎える。

敵味方問わず人馬の流れが織田軍の本陣に殺到する中、一人その流れに逆らう者がいた。

「姉川における俺の役割は終わった。……それに、もう戦いたい気分じゃないからな……」

六角高村は、一人本陣を逆走する。

もう戻れないあの日々を追走しながら。その寂しげな背中を呼び止める者はいなかった。

*

結論から先に言えば、姉川の戦いは織田・六角連合軍の勝利で終わった。

最後の激戦地となった織田軍本陣での戦いは、朝倉義景を信奈の元

へ抜かせてしまうという失態こそあれど、勝負を決めに来た朝倉軍四千を柴田勝家らが撃破。信奈に狼藉を働こうとしていた義景も相良良晴が撃退している。これが決め手となり、最後まで戦いを続けていた朝倉軍は撤退した。

「私たちの勝利よ！ 勝鬨を上げなさい！」

高らかに勝利を宣言する信奈。それに応じて諸将たちも鬨の声を上げる。

しかし、それは名ばかりのどこか空々しい物に聞こえてしまう。

（確かに勝った。勝ったが、これはあまりに惨い……）

良晴は密かに眉を顰める。

総兵力にして五万六千の兵が相争った姉川の地は屍山血河の状況になっている。

勝ちましたものの、諸将たちは肌で感じ取っていた。

あまりに血を流し過ぎた、失ったものが多すぎた、と。

例えば浅井軍は遠藤直経ら侍大将級が三人討ち死にし、苛烈な突撃の過程で多くの兵を失っていた。六角軍もまた旧六宿老の生き残りである三雲定持を討たれている。

被害が大きかったのは織田軍と朝倉軍で、朝倉軍は本隊の代将を務めていた朝倉景健と真柄姉弟を討たれており、織田軍は主だった将こそ討たれなかったが二千近くの兵が討ち死にしている。ただ織田家の場合は、半分程度の浅井軍に本陣までの肉薄を許したという事実が重くのしかかっていた。

*

「帰ってきたんだね、新十郎」

「ああ」

早々と織田軍は転進し、朝倉軍は本国に、浅井軍は小谷城に引いた。姉川に残っていたのは六角軍だけだった。

「どうやらその顔は答えを見つけたようだね。どこか吹っ切れているように見えるよ」

「そうか？」

義定は楽しげに笑うが、俺にはあまり自覚はなくて首を傾げる。

……ああ、でも心当たりがないわけではない。

「結局のところ、当主とかやつても俺は変わってなかったんだよ。国益のためだとか色々考えたんだけどさ、俺はずっとお前や猿夜叉丸と一緒に居たいだけの男だった」

定頼様が果たした畿内の秩序の担い手という役割も、信奈公の天下布武は突き詰めていけば、天下か一地域かの違いはあるが、泰平にながる。

そして、俺の夢はそんな穏やかな状況でしか叶えられないだろう。つまるところ、俺の夢と定頼様の目標も信奈公の野望は地続きでずっと同じことのために頑張ってきた訳である。そして、いずれかを為したとしてもそこに猿夜叉丸の、お市の姿がなければ意味がないことを思い知った。

「我ながらどうしようもない欲張り野郎だと思っよ。万一俺を信奉している奴がいたら聞いて呆れるわな」

ほとんどの学友共も、遠藤殿ももういない。お市だつて失われかけたようとしている。あの頃を知る者は本当に少なくなった。

けれど、俺は変わらない。いや、変わらない。たとえ守りたかったモノがとうに不可逆なモノであつたとしても、俺はきつと手を伸ばし続けるのだろう。

「いいんだよ、新十郎はそれで。そのために頑張ってきたんでしょ？」
穏やかに笑う義定。俺はそれにぎこちない笑みで応える他なかった。

なにせ、その笑みはあまりに優しく、溺れそうになってしまふ。もし、彼女の優しさに溺れたらきつと帰れなくなる。そう思えてならなかった。

*

「そうか。浅井朝倉は結局勝てなかったのだな……。となると、いよいよあたしと織田信奈が本格的に相見えるわけだ」

姉川の捷報は、岐阜城を攻囲していた武田信玄にも届く。

戦後、横山城を陥として浅井を封じ込めた以上、織田信奈は岐阜に

転進してくることは明らかだった。

高村の長躯により犬山城の調略を挫かれたのち、信玄は小牧山城に拠点を置き、尾張の要地を制圧する方に舵を切る。領地切り取りもあるが、何より尾張における高村の行軍の自由度を下げるためだった。家臣では山本勘助には中濃三城を再奪取させ、三河の元康に關しては馬場信春に命じて浜松城と岡崎城を繋ぐ吉田城を占め連絡を断つて孤立せしめている。

犬山城や清洲城など、一部攻略していない所もあるが、ほぼほぼ信玄は尾張と三河を制圧したと言っている。後は道三が籠る岐阜城さえ落とせば濃尾三全域の領国化は完了するだろう。最早武田が王手をかけている段になっての織田軍の転進であった。

（岐阜城の道三の病は篤く、織田軍本隊もかなりの手負い。戦えば、まず勝つ。だが……）

己の軍勢の強さに信玄は自信があつた。赤備えならば、織田の弱兵など取るに足らぬ、と。

しかし、敵に六角高村がいる。

とみに犬山城で一度見た神速の騎馬隊の存在は信玄を悩ませていた。

（本音を言えば、尾張を抑えずに一気呵成に岐阜を攻めたかった。しかし、無闇に攻めれば、高村の騎兵が横槍を刺すことは明らか。ふふ、まるで高村に匕首を突きつけられているかのようだ）

だが、だからと言って引くつもりは信玄にはなかった。

岐阜城さえ抜きさえすれば、転進してきた織田軍本隊を倒しさえすれば、ついに西上作戦は成って瀬田に武田菱が翻るのだから。

「来い、織田信奈に六角高村。あたしが、武田信玄が待っているぞ……！」

西の空を見据えながら獯猛に信玄は微笑む。

美濃を制する者は天下を制する。その要たる岐阜城にて今一度、天下を定める戦いが始まろうとしていた。

第9章 Rebel lion tiger

第71話 老境の身を顧みて

岐阜城は堅城である。

北と東は山々に囲まれ、長良川が天然の堀として機能する。濃尾平野に屹立する金華山を丸ごと要塞化したその威容はなるほど天下の名城であると信玄をも唸らせていた。

「だからこそ、惜しい。これほどの城で相見えるのが、老いさらばえた蝮であることがな」

嘆息する信玄。

織田と六角が姉川で対峙していた時に道三と相手をしたが、連戦連勝だった。兵力の差はもとより、何より道三の出方がわかりやすかったからだ。岐阜につながる要点を抑える……確かにこの戦略で道三は犬山城を守ることはできている。

だが、本当に信玄を倒そうと思うなら岐阜城と桑名の中間に位置し、尾張に向かって大きく張り出している美濃竹が鼻城を最重視するべきだった。ここさえ抑えていれば、なお武田の後背を脅かし戦況によつては逆撃すら可能だったのだろう。

「勘助、当代きつての梟雄がこのような及び腰を取ることなどあり得ようか？」

「梟雄といえど人にございますれば。死期を悟れば、否が応でも守りに入りまする」

「そういうものか、勘助」

問いかけておきながら、半ば興が削がれたようで信玄の対応はややそっけない。

（余人なれば、死期を悟れば守りに入る。それが人の世の定めよ。されど、それがしは違う。最期まで攻めの姿勢を崩さぬ。そう決めた）
一方で勘助は瞑目する。

勘助自身も死期が近い身として、うら若き姫武將に積年の夢を懸け

た男として、道三の心理はわかる。彼女を守りたい、老いさらばえた自身のせいで迷惑をかけたくない。……確かに自分もそうだ。

けれど、けして道三のような手は打つまいと決意する。

なにせ最期の最期まで歩き続けないと夢は叶わないと。長年の漂泊の末に信玄を……武田勝千代を見つけた勘助は知っていた。

まず、その初手として。

「お館様。この勘助に岐阜を獲る策がございますれば。御耳を拝借してもよいでしょうか？」

勘助は己が主君に耳打ちした。

*

緊迫する濃尾戦線に比して、横山城では平穏な時間が流れていた。

姉川の戦いの後、俺は即座に兵を動かして横山城を落とした。横山城の近くには美濃に向かう街道があり、この城を落とすことで俺は織田軍の背後を確保した形だ。小谷城にもほど近いため、有事があればすぐに対応することができる。

(とはいえ、有事などあるだろうか……)

姉川の戦いは浅井と朝倉の全てを賭けた大戦だった。だが、彼らは敗れた。

決意の突貫を試みた長政は打ちのめされて、朝倉義景は当人にとっては命すらも賭けた求愛を拒絶された。確かにまだ戦うに足る兵数はあるのだろう。だが、彼らはその信念を挫かれた。

そうなってしまつては、しばらくは動けない。

そして、それは俺も同じだ。

六千の兵では小谷城を落とすことなどできない。むやみやたらに浅井方の小城を落としていくのも、割に合わない。何より遠藤殿にあまで言われてしまえば、徒に浅井を攻める気にもなれなかった。

要するに小谷城戦線にはもはや燃え滓しか残つていなかったのである。

「六角殿、良晴様は大丈夫なのでしょうか？」

思案する俺を見つけてきたのは、年端もいかない少女だった。

名前は浅野長政。史実では後の五奉行筆頭にあたり秀吉の正室お

ねの一族の出身。この世界でもねねの親戚のため、数少ない相良良晴の身内に当たる。一応、横山城の城代には彼女を置くように信奈公から指示を受けている。将来的に北近江は織田の頸動脈と言つていいほどの要地になるだろう。信奈公子飼いの筆頭たる相良良晴をそこに置くのは悪い選択ではない。

「相良は大丈夫だ。あいつはそんな簡単に死ぬタマじゃあない。あの金ヶ崎ですら死ねなかつたんだから」

「そうですか。名高い六角殿が言うのであれば、そうなのでしょうね！」

軽く励ましてやると浅野長政は笑つて俺の前を去る。きつちりしていないながらも根が快活なのは、ねねとの血の繋がりを感じさせる。

（励ますためとはいえ、あまりに楽観的なことを言つちまつたな……）

言つてから悔やんでしまう。

対武田の戦線は正直厳しい。なにせ道三殿の狙いと武田信玄の狙いがずれていたのだから。道三殿は岐阜城に踏み込ませまいと中濃三城と犬山城の今で言う日本ライン近辺を優先した。

一方で信玄の狙いはあくまで尾張三河の領国化と尾張を封鎖すること、桑名の騎馬隊を無力化すること。そのため小牧山城や東三河吉田城、蟹江城など手広く切り取った。

激戦地になつたのは美濃竹が鼻城くらいで、ここの攻防を制した信玄公が優勢となり岐阜城の戦いに至ることになる。

岐阜城に織田本軍が到着するにはまだ四日はかかる。距離的には姉川と岐阜は近いが、巧遅より拙速を重んじる信奈公がそれだけ妥協しなければならぬほど、織田軍は傷つけられていた。

結局のところ、やはり織田家単体ではこの対武田戦を乗り切ることではないだろう。仮に乗り切れてもかなりの痛手を負うことは避けられない。

「この状況、俺が天下を狙う梟雄ならば第三極として願つたり叶つたりなんだがな……。あいにく俺はそうではない。むしろ天下を押しつけた側だ。……致し方ない。その責任を果たすためにも一丁前に頭を痛めて軍師役を全うするとするかね」

やはり、織田が負けるのはこちらとしても都合が悪い。最早口唇の関係にあるとすら言える。

俺は、近くにいた京極高次に命じて諸将を集めさせるよう手配した。可能な限り早く急がせる形になるが致し方ない。

尾張を固めた武田は今や越年すら可能だ。早めに手を打たねば、終わるのはこちらだ。

「すまないな、信玄公。もう一度、梯子を外させてもらおうか。まあ、恨んでくれても別に構わんがな」

きりきり動く高次を横目に俺は心にもない詫び言をつぶやいて、広げた地図に目を落とすのだった。

*

「むむむ、いよいよ儂も年か。いよいよ智慧の鏡が曇ろうとしているわい」

岐阜城下に大挙する武田勢を眺めながら道三は苦笑いを浮かべていた。

犬山城下で高村と山本勘助率いる武田の別働隊が衝突した後、濃尾の防衛戦は再構築された。

その狙いは遅滞。どうしても岐阜城を預かる部隊の数は少なく、最終的には押し切られる。ならば、犬山城や竹が鼻城など要点を固めて遅滞させ、浅井朝倉戦線の終結を待つ腹づもりだったが、それが裏目に出て信玄に尾張の席卷を許した。

だが、それでも武田の補給を断つという道三と高村の取り決めた方針は変わらない。

「かくも優れた戦略眼よな。流石は定頼の薫陶を受けた者ということか」

六角新十郎高村。

伊勢新九郎盛時、長井新九郎規秀ら天下の秩序を乱す悪党たちを一つ上回るように願われてつけられた名前だと、他でもない名付け親である定頼から道三は聞かされていた。

『わしの寿命が尽きようとも、新十郎が其方のような天下を乱す者を鎮めてくれよう。あやつにはそれだけの器がある。新十郎が一廉の

将として大成したその時、お前たちの時代は終わるのだ』

いつか定頼と対面した時に、彼が吹いていた言葉を思い出す。

「忌々しいことだが、定頼。お主の見立ては正しかった。いまや畿内の誰もが高村殿を恐れないわけにはいくまい。お主は未来に心配なく逝けた。今となつては、それが少し羨ましい」

義龍とは道を違えて殺し合い、利治はまだ育ち切らない。

信奈どのは器こそあれど、生来の巨大な感受性に振り回されている。まだ、天下人というには遠い。

つくづく心配事ばかりよな……。

思わず、道三はひとりごちるのだった。

第72話 泥に塗れて

「結局のところ、今回も広域戦になったな……」

軍議を終えて、まず口についたのがこの一言だった。

やはり、包囲網は戦況が煩雑になる。今回も事態を整理すると対武田の戦線をぎっくり三つに大別される。

一つは言わずもがな岐阜城防衛戦。ここには道三殿たち岐阜城守備隊が三千がおり、寡兵ながら武田軍の本隊の二万と睨み合っている。織田本軍は後ほどこちらに後詰めするつもりだ。

二つ目は三河吉田城。ここでは松平軍三千がなんとか領国が分断された状況を解消しようと籠る馬場信春率いる五千に攻めかかっていた。

三つ目は美濃竹が鼻城。ここはまだ合戦にはなっていないが、山県昌景が赤備えを含めた四千の兵で詰めている。これは尾張と俺への睨みだろう。信玄公は俺が行った戦略をそのままやり返してきている。

今回の軍議では、この三つ目の戦線に六角が介入することに決まった。

「俺と義定は今からここを離れる。頼んだぞ、紀之介」

出立する直前に紀之介……大谷吉継の頭をなでる。

頭巾や首巻きで顔を隠しているため表情は分かりづらいが、俺は知っている。一箇所を固守させるなら家中でも紀之介を置いて他はない。

「それにしても、もう顔は隠さんでいいだろうに。承禎様はもういないんだから」

「確かに承禎様はおりません。されど、殿が下さった品なので手放しがたく……」

「気に入ってくれてるなら、それはそれでいいか。見せて減るものでもないが、無闇に晒すものでもないしな」

そう言うと、紀之介の口角がやや上がった気がした。素の表情はさ

ぞかし可愛らしいものだろうと推察する。それを直で見られないのは惜しいが、致し方ない。

「この紀之介。必ずやご恩に報います。殿たちこそご健勝であつて下され」

「ああ、行つてくる」

紀之介に見送られて、俺と義定が向かったのは桑名。

そこでは、伊右衛門によつてすでに出陣できる体制が整っていた。「すまないな、さすがに姉川戦線が厳しくてしばらく手放しにしておいた」

手始めに俺は頭を下げる。姉川で睨み合っているうちに、信玄公は美濃竹が鼻城を攻め立てた。攻めた理由は竹が鼻城は美濃国内で尾張に向かつて迫り出している要衝であること、俺が忙しくて対応に時間がかかること。この二つだろう。

俺の騎馬隊は異常な即応性を持つが俺が決定を下し、場所を指定できねば最大の効果を発揮するとは言い難い。この弊害を信玄公は的確に突いてきた形となる。

「それは致し方ないことにごさいます。それで、殿がここに来られたという事は、竹が鼻城を攻めるということですね」

「その通りだ伊右衛門。らしくもなく、今回の武田は俺の自在の騎馬隊による牽制を真似してきた。だが、この戦略の本来本元は俺だ。対処の仕方もある。というわけで、行くぞ伊右衛門」

すぐに一豊が用意した四千の軍で俺は竹が鼻城に向かう。すると、目前の羽島で武田菱の旗が俺たちを待ち構えていた。

「止まるぞ、伊右衛門。どうやら、相手方もやる気のようにだな」

隣で待る伊右衛門を手で制止する。

整然と並ぶ赤で統一された具足。

その先頭に立つ少女は小兵ではある。その矮躯にははち切れんばかりの闘志が押しこめられているのがわかった。

俺たちが止まったのを見計らうと、件の少女はカツカツと馬蹄を鳴らして前に出た。

益荒男ばかりの赤備えには似合わぬ貴族めいた端正な顔立ち。そ

の口の端が吊り上がる。

「来たわね、六角高村……。この地は渡さないわ、赤備えの名にかけて！」

山県昌景。前情報で知っていたとはいえ、武田四天王随一の闘将が岐阜ではなく竹が鼻で俺を待ち受けているとはいささかしつくりこない。

……これはかなり俺を気にしてやがるな、信玄公。

そう静かに毒付いて、羽島の地にて騎馬隊は衝突した。

*

「父上、本当にそれでいいの？ 此度の戦は私たちが今まで戦ってきた意義が問われているのよ？」

奥美濃の山中にて、斎藤龍興は血相を変えて父である斎藤義龍に食いかかっていた。

きっかけは義龍に武田の軍師・山本勘助から参陣要請が届けられたことにある。道三らが出払った岐阜城に北から攻めかかり、空城になった岐阜城を奪え、と頼まれていた。

「織田が弱っているこの機しか美濃に返り咲く機会はない。なのに、どうして……？」

龍興が問うも、義龍の返事はない。いや、返事をする余力すらも残っていないのかもしれない。

押し黙る義龍の体軀はひどく痩せていて、六尺五寸とからかわれていた頃の面影はない。この男がかつて柴田勝家と互角に打ち合った武士だと言われても、もはやほとんどの者は信じないだろう。

「……わしはもう長くはない。今更、戦場に出たとて何の役に立とうか……」

声ももう張りが無い。枯れ木のような身体を身じろぎさせて義龍は言う。

腸の病を得て、美濃の山深い奥地に籠り戦から離れた義龍にはかつてのような闘志はない。ただ、去就を決めかねている。

龍興を食わせるために何処かの家中にねじ込むか、病で死ぬぐらいならと華々しく道三に最後の戦いを挑むか。……考えても決まらな

い。

ただ、最後までいいは正しいと信じられることをしたい。

その一念だけが、死にゆく義龍の添木となっていた。

*

羽島の平野で赤と黒の騎馬隊が舞う。

ところどころ灌漑で作られた溜池や、氾濫の後に残された三日月湖が点在するこの地は入り組んでいてあまり騎馬隊に向かない。

(確かに、各地に騎馬隊を送り込むにはこの地は適しているだろうな。だが、氾濫原や沼沢地での戦いは慣れてるんだ)

六角の本拠地である南近江もまた美濃同様氾濫原が広がっているため、高村は騎馬隊を縦横無尽に動かせる。

山県昌景もはじめは振り回されていたが、逆に高村隊を追わずに守りを固めることで凌いでいく。

この昌景の対応には高村も齒噛みした。

「ちっ、重騎馬の装甲の厚さを利用してやがる。いくらこつちが機動力に優れていたとはいえ、攪乱して崩れなきや意味がない。馬上の利もなく、練度も高い。……こうなつては此方には決め手がないな」

高村にとつては口惜しいことに単純な馬上戦闘では硬い装甲と鉄の規律でまとめられた赤備えには劣る。乗り掛かっても、赤備えにさしたる打撃を与えることはできていない。これにはさしもの高村も少し落ち込んだ。

「……まあ、やりようはある。気長にやるさね」

だが、高村はすぐに切り替えて笑みを浮かべた。

実のところ、高村騎馬隊の強さは高村の作戦能力に依存している。思い描いた戦略を完遂させる練度と機動力と扱いやすさ。この三拍子揃った騎馬隊を高村が手足の如く扱うことで、高村自身もその騎馬隊も天下にその令名を轟かせてきた。

「なに、相手が赤備えだとしても、やるべきことは変わらん。うまいこと転がして勝つ。それだけだ」

旋回させていた軽騎兵たちを手元に戻して後退する。

山県昌景は流石に伏兵があると睨み、動かない。いや、動けない。

（決め手がないから、相手は退いたのだわ。ならば、無闇に追う必要はない。ここは温存しておくべきだわ）

（本当に何にもないんだがなあ……。まあ、時間をくれてありがたいからいいけどさ）

悠々と高村は隊を退かせ、昌景は攻め気を抑えた。

このままだとしたらとした膠着戦になるだろう。だが、高村にそんな気はなかった。

「相手が退いたわね。追うことはしないわ。私達も帰るわよ」

高村の撤退を見届けた後、竹が鼻城に戻る道中。

泥田に挟まれた一本道の上で、昌景は鎗矢の音を聞いた。

「……まさか。見えないと思つたら、そこにいたなんて。六角義定」

夕暮れの中、視界は悪い。

そして、鎗矢が飛んできた方向に人影がない。だが、昌景は状況を理解した。そして、自分が嵌められていたことに。

畔の影に隠れていた弓兵。その数三百。

数からして騎馬隊同士が戦っている間に行軍路を検証特定し、仕込んでいたのだろう。その切り替えの速さと周到さに昌景は舌を巻いた。

「不味いわ……」

じとりと首に嫌な汗を感じる。

睨と呼ばれる泥田に挟まれた一本道では軍は身動きが取れない。まして図体が大きい重騎兵ならなおさらだ。

「もう、昼から待ったんだから。けれども待った甲斐はあったね」

にこやかに笑いながら、義定は馬上の赤備え達を泥田の中に落とすていく。

「馬装を捨てて、脇目も振らずに逃げなさい！ そうしなくては命はないのだわ！」

声を枯らして昌景は叫ぶ。

不意を突かれたとはいえ相手は少数。駆け抜ければ、被害は抑えられる。

そう判断してのことだ。

だが、そんな甘い目論みを許すほど六角軍は甘くない。

「予想通り、だな」

驟の上を恐ろしいほどの速さで駆けていくのは退いたはずの高村騎兵。

戦場から離れて態勢を整えたのち、赤備えが退いてきた道を彼らの倍の速度で後追いついてきたのである。

こうなってしまうのは、さしもの赤備えもなす術はない。

次々と猛者たちが馬上から引き摺り下ろされて泥田に沈められていく。

「不覚、屈辱だわ……！ 六角、高村……ッ！」

山県昌景もまた例外ではなかった。

撃ち落とされて美しい真紅の装束も、手入れされた艶やかな黒髪も泥に汚された。乙女として恥ずべき醜態だった。

だが、何よりも耐え難いのは。

赤備えの誇りにすら、泥を塗られたことだった。

いつかまた、振り返った時にこの戦いこそが輝かしい赤備えの戦歴にこびりつく一点の染みになるだろう。それが昌景は悔しくてならなかった。

第73話 山が動く

場所は離れて三河吉田城。

現在でいう豊橋にあたるこの地は奥三河と岡崎、浜松を結ぶ松平領の要といふべき地であった。

東海道から侵入した武田軍であったが、流石に帰りまで遠州を通ることはしない。東濃の岩村城、または三河の吉田城から奥三河を経て信濃に退却することになっている。

そのため、信玄はこの地にも重臣・馬場信春を配置した。

本隊が配置された美濃、重点的に制圧した尾張からも離れた三河の東の端。敵の松平は三方ヶ原で叩きのめしているとはいえ、敵地に孤立し分断させる任務は並大抵の武将では果たせない。武田四天王の中でも最古参にあたる彼女がその任を与えられるのは、半ば必然であった。

「……私は松平を食い止める杭となる。……それがお館様の勝利につながるのであれば」

能面のように変化に乏しい表情で信春は言う。

それでも、信春は高揚していた。なにせこの西上作戦が成れば、武田は瀬田に旗を立てることができるようになるから。

信春の感情は表情に出ることはほぼない。しかし、戦果には如実に現れていた。

奥三河から帰属した豪族の力を借りつつ、信春はすでに二回松平軍を後退させている。自らも前線に立ち、自慢の大槌で三人の兜首を潰してきた。そのくせ、当人は傷一つ負っていないのである。

竹が鼻城にいた山県昌景が破れ去り、尾北に後退したことを信春はまだ知らないのだが、その武者ぶりは不死身の鬼美濃の二つ名とともに武田の面目を天下に施していた。

「ううう、吉田城が取り戻せなくては私は岡崎に帰れず、奥三河のみなさんも完全に武田に取り込まれてしまいます。そうなってしまうては、松平は武田の奴隷になるしかありません！」

この信春の無双ぶりに嘆くのは松平元康その人。

信玄に捨て置かれ、信玄自身が織田と対峙している今こそ領土奪還の好機と見て、半壊した松平軍から三千をかき集めたまではないもののこの有様だった。

「もういつそのこと、織田を見限って武田につきますか？ 此度も先の大戦でも信奈姫はろくな援軍をよこされなんだか。それがしはもう辛抱たまりませぬ」

「そうだ、それがいい。それに信玄殿は姫様に『百万石を与えてもいい』と言っておったではないか」

「それは誠か？ ならば、姫様。いよいよ織田につく意義がないですな。早々と武田に降伏しましょう。正直、そちらの方が儲かります」

元康の横で三河武士たちが囃し立てる。

結束すれば、天下屈指の三河武士だが、まとめるのに非常に苦労する。良くも悪くも自分勝手な連中だった。

元康は信奈への友誼で動いているが、ぶつちやけ彼らには知ったこつちやないのである。

「お前ら黙れ！ 姫様を困らせるな！」

「作左殿の言う通りだ。……これ以上、うるさくさざめくなら蜻蛉切を持ち出すぞ……！」

本多重次と本多忠勝。元康に忠実な二人の本多が諫めるが、三河武士の喧しきは抑えられない。結局言い合いになり、そのまま乱闘になる。

こうなったら忠勝が相手側を無力化するまで終わらない。

「どうするもなにも、これじゃあ何もできません！ 皆さん落ち着いて下さ〜い！」

涙目になりつつ元康も収拾に回る。

そうして二、三人の三河武士が投げ飛ばされて地に延びている頃だろうか。

元康の背後に音もなく、半蔵が佇んでいた。

「半蔵、どうしたんですか〜？」

「姫様、お喜び下され。援軍です」

半蔵の言葉に、元康も延びていた三河武士も乱闘していた忠勝たちも思わず手を止め、見開いていた。

「九鬼嘉隆と加藤嘉明の水軍が六千の軍で伊良湖岬に着岸。今は田原の戸田氏の居城にて歓待を受けております」

半蔵はつとめて冷静に伝えるが、聞き手の三河武士たちはそうではない。

「よもや、こんな三河の片田舎にそれだけの軍を派遣してくれるとは……」

「流石は天下人、太っ腹ですな。これは勝ちましたぞ、ガハハ」

さつきまでの悪態が嘘のように口々に信奈と高村を崇め立てる。

その姿を見て「こんなんだから、三河は草深い田舎だと笑われるのだ……」と重次は頭を抱えていた。

*

三方から敵軍が押し寄せた吉田城でなおも信春は奮戦していた。

五千対九千。守城戦だからまだどうにかなる数字だが、他の戦線から孤立していることが痛い。援軍を得た松平の士気が息を吹き返したのも中々厄介だった。

「……それでも、まだ戦える……。われらは松平をここに縫い止める楔なのだから。狼狽えてはならない……」

黙々と大金槌を振るって信春は何人も三河兵を討ち取っていく。

この不利な状況でも、毅然とした態度は崩れない。

馬場信春の戦いぶりに華々しさはなく、堅実そのもの。特に山県昌景あたりと比べてしまうとひどく地味に見えてしまう。

だが、その寡黙な戦いぶりを信玄は認めて彼女を重用し、風林火山の『山』を背負わせてきたのだ。

このまま楔として松平を抑え続けて敬愛する主が天下の一番を制するまで待つ。そんな腹づもりの信春だった。

だが、戦でさんざ暴れて帰城自らを待ち構えていた人物の姿を見て信春は首を傾げた。

望月千代女。真田忍軍の一員にして盲目の歩き巫女である。彼女

がわざわざ姿を現すことはそれすなわち変事の知らせであった。

信春は千代女と二人きりになり、いくばくかやりとりをしたのち彼女を返した。

「……不可解に思われても、それがお屋形さまのご意志です。どうか従われますよう」

「お館様を疑うことは決して」

去り際に信春に念押しする千代女。周りの兵たちには何が何だかわからなかった。ただ、信春だけが事態の異様性を理解していた。

（昌景が美濃竹が鼻から尾張北部に退き、私が吉田城から尾張守山へ。高坂は変動する尾張の兵站の保護に。内藤某は……どこにいるのか、わからないな）

一人不明な者がいるが、何の因果か武田四天王のうち三人が尾張にいる。そして、自らを尾張に向かわせることで武田は自ら退路の一つを潰した。それも岐阜城での戦いに進展がない状況でだ。

（……おそらくはこの策はお館様ご自身にとっても乾坤一擲の策なのだろう……。なれば、わたしが余計な詮索をして乱すべきではない。ただ事を待つのみ）

口の動きは鈍重だが、信春もまた名将と称されるに値する才がある。頭の回転は悪くない。それでもなお、信玄の意図を掴みかねていた。

かくして変事は起きる。

千代女が来訪した翌日のこと。日没を迎えるやいなや、武田軍は突如吉田城を開城して北に撤退を始めたのだ。

今まで山のように動かなかった馬場信春の思案に元康は首を傾げながらも吉田城に入城する。なんにせよ、これで西三河と遠州がつながり、松平は寡兵とはいえようやく戦力として復活した。悪いことがあるわけでもない。

「皆さん、これで三河は取り返しました！ 次は尾張に向かいましょう。吉姉様を助けるのです〜！」

疑問を飲み込んで、快活に元康は笑う。今は艱難辛苦を超えた喜びを分かち合おう。悩むのはまた後でいいのだ。

第74話 知り難きこと陰のごとし

長く長く戦いは続いていく。

戦乱の世とはいえ、最近の畿内……六角を巡る動静は目まぐるしい。

織田との大戦以降、戦乱は止まず。摂津、姉川と来て尾張を武田から解放するべく動いている。

「多分、新十郎は尾張を取ることでも武田の戦略上の有利を除こうとしてると思うんだよね。成持くんはどう思う？」

僕直属の上役……義定様が戯れに話しかけてくる。おそらくはそうなのだと思う。高村様は迂遠ながらも真実を見抜く神通力というべきものがある。今回もおそらくそれだろう。

「……私にはそんな大それたことは分かりませぬ。ただ、やるべきことをやるのみ」

ただ、僕は緊張してそんなことしか言えなかった。

情けない？ 致し方ないだろう、なにせ僕は取り柄が六宿老の家に産まれてきたこと、性格が破綻していいこと、今までなんとか生きて来ていることの三つしかない凡庸な男だ。

三雲の嫡男の座だって野良田の戦いで姉が討ち死にしたから転がり込んで来たものにすぎず、ただ家格と性格が扱いやすいだけで用いられているだけで元来は義定様と轡を並べられるような男ではないのだ。

だから、こうしているだけで満足なのだ。満足するべきなのだ。決して言えない、認めてはいけない。こんな木っ端のような自分が、義定様に恋を。劣情を抱いているなどと。

(……それでも、近くで見るとより綺麗だなあ……)

片想いしている分、公正な見立てではないだろうが義定様は美しい人だった。栗色の長い髪に程よく肉付きの良い肢体、太陽のような笑顔も合わさり傾国とはかくやとばかりの美貌を持つ。美男で有名な江北の浅井長政を今蘭陵とするならば、義定様はそれこそ今西施と比

定して差し支えない。

義定様の幕僚などと分不相応な役目を負っているが、彼女の玉のような美貌を拝むことができる。こればかりは役得だった。

閑話休題。

高村様たちに引き連れられて、尾張を西から北へと横切っていく。津島という商いの要地を奪還し、信奈公が拠点とし守護所も置かれていた清須城を武田の攻囲から解放した。

まさに破竹の勢いで、いよいよ本格的に退路を断つべく六角軍は武田信玄が依っている小牧山城に向かうのだった。

だが、良かったのはそこまでだったと思う。

小牧山城の手前の街道で迎え撃ってきた武田軍は強かった。

高村様の攻めをあしらい続け、踏み込んだ高村様も一度退けられて下がらざるを得ないほどだ。

僕はなんとか命を拾って帰陣したが、思わぬ停滞に六角の陣営は動揺している。僕もまた知らずひとりごちる。

「信玄も四天王も岐阜城にいるはず……。ここまでの将がまだ武田にいたなんて……」

「いや、成持くん。その前提は見直した方がいいかも。……多分、あの軍は武田信玄が指揮してる」

「え？ 武田信玄が美濃から尾張に来てる？ いや、流石にそれは何かの間違いではないかと……」

いかに義定様の言葉とはいえど、信じがたかった。

確かに尾張は重要な地だとは思う。しかし、武田側にとつてはもう役割を終えた土地だ。抑えに誰がしかを回しはしても、織田の本隊が岐阜城にいる以上は主力をこちらに向けることはない。そのはずだ。

けど、道理では難しいはずなのに、義定様はどこか確信めいた予感があるらしい。

わからない。僕はどこまで行っても普通の武将だ。義定様や高村様、武田信玄と同じような視座を持つことが叶わない。こういう時に自分の凡人ぶりが悲しくなってくる。

ちよつとばかり、悲嘆に暮れていると高村様が刀を肩に担いだまま

こちらにやってくる。

「義定の言う通りだ、成持。相手は武田信玄に違いない。なにせ、この俺自身が直で見たのだからな」

「ということは、相手は本当に武田信玄なのですか……！」

僕が震えながら問うと、高村様は淡白に「ああ」と頷いた。

それと同時に僕は膝から崩れ落ちる。

敵地で戦国最強武田信玄と予期せぬ遭遇戦をする？

駄目だよ、流石に死んじやう。

半ば諦めた僕は密かに決意した。

遺書でも書いておこう、と。

*

崩れ落ちたいのは、俺もだよ。

そう思いつつ、明らかに変わった現状を整理する。

美濃竹が鼻城を獲った俺は津島から清須、そして小牧山城と尾張を西から北に攻めていった。

理由としては、美濃にいる武田本隊と尾張を分断して補給線と物資を減らすこと。折しも織田軍と分かれる前に半兵衛と練っていた水軍による三河入りによって馬場信春が退き、松平軍を北に回せるようになって尾張を占領する目処が立つようになったからだ。

(だが、今になってようやく分かった。多分、俺は信玄公にそう仕向けられていたんだろうな)

竹が鼻城の山県昌景は囷。とはいえ、対処しなければ赤備えが縦横無尽に動けるため、ここはどちらにしても手を出さなくてはならない。

そうして竹が鼻城が落ちた頃合いで馬場信春を三河から尾張入りさせて松平の北上を誘発させる。まるで、岐阜城で武田本隊と決戦するよりも、尾張奪還が狙い目であるかのように。そして、俺はまんまと釣り出されたわけだ。

(こうもしてやられたのは、初陣の具教公の時以来か……。武田信玄と面と向かってやり合うにはまだ俺には足りないらしい。完敗だ)

かつて俺は桑名の大戦で総力戦を厭って降伏した。おそらく、その

時に信玄公は理解したのだろう。俺が極力被害を避けるように立ち回る癖があることを。それを、ここぞという時に信玄公は活用した。(おそらく呼んだ松平軍は奇襲で処理されている気がする。かといって即座に逃げようにも、すでに手は回しているんだろう。山県昌景と道中で出くわさなかったのはそういうわけだろうから)

他にも南の馬場信春、おそらくは内藤昌豊。この辺りも俺に襲いかかってくるだろう。

完全に掴めてはいないが、もはや四方を包囲されているものと思っただ方がいい。

東は武田信玄の本陣。

兵数はこちらよりやや少なく、武田四天王は高坂昌信がいるのみ。割と岐阜城から移ってきて間もないから、やや疲れと浮つきがあるようにみえる。

もしさつきみたいなの探るような攻め方ではなく一気呵成に攻め立てたなら、もしかしたらがあるかもしれない。……だがまあ、正直なところ誘っているようにしか見えない。包囲を極められてからはなおさらにそう思えてしまう。

「はてさて、どうしたものかな……」

散らしていた軍勢を回収しながら思案を重ねる。

作り上げた武田信玄の虚像が手ぐすね引いて決断を待っている。そんな気がした。

第75話 一閃一条一文字 前編

「漸く、お前と雌雄を決することができると、高村……！」
その姫武将は柄にもなく武者震いをしていた。
泰然と床几に構えてこそ見せているが、右手に持つ軍配がふるると震えていて、隠しきれていない。

信玄が高村を初めて知ったのは、石山崩れの時だ。その時はなんと強い武将が畿内に生まれたのだろうと感嘆した。

先の大戦では、高村と手を組み天下を伺わんとしたが破れた。他ならぬ高村が、岡崎を落とせなかった自分に見切りをつけたことで。(今にも夢に見る。お前が降伏せずに最後まであたしと手を組んでくれているのなら、あたしは天下人になれていたのだろう。だが、わからない。確かに岡崎を落とせなかったあたしが悪いが、お前に見切りをつけられるほど弱くはなかったはずだ……！)

高村に見切りをつけられた。

この一事は信玄にとっては屈辱だった。かつての自分ならまだわかる。しかし、今の自分は古今無双に手が届かんとする名将なのだと自負していた。

そんな自分を置いて、織田信奈に耽溺するのだ。それが、信玄にとっては面白くない。

「織田信奈と雌雄を決する前に、まずお前を倒さなくてはならない。ここで先の雪辱を晴らし、あたしは堂々と天下取りに臨みたいのだ」
天下人たらんとするもの、いや最強の武将になろうとするならば、高村は必ずや上回らなくてはならない存在だ。

だから、信玄は万全を期した。
高村の性格を読み切り、狡猾に罠を張る。だが、それだけでは高村は生き延びてしまう。それだけの単騎の武力が高村にはある。

高村を孤立させ、過剰とも思える火力を押し付けなければならぬ。
い。

そのために、三河から尾張に進出してきた元康を内藤昌豊の伏兵で

叩き、三河に追い返した。

奥三河の退路を捨ててまで馬場信春を尾張に呼び寄せ、高坂昌信と真田昌幸に命じて尾張の戦線を組み直した。

山県昌景には意に沿わない困役をやらせた上で、後から退路を断たせる汚れ役を強いた。勘助と武田逍遙研と秋山信友らに織田の大兵が居並ぶ岐阜を放り投げ、信玄自身が小牧山に入った。

高村一人を葬るために、家臣団に多大な負担をかけてしまっている。

なればこそ、信玄は仕損じるわけにはいかないのだ。

*

「東を、武田信玄本隊を攻めるか。武田の本体に俺自らが風穴を空けて、他はそこを通って退却させよう」

高村様がぼつりと言った。

動揺が軍中に波打つ。

何気ないように、高村様は決戦を決断したのだから無理はない。

ただ、僕は首を傾げていた。高村様はこんな軽率に見えるような形で決断することはまずない。それに、こんな天に運命を擲つような真似は好まない。

義定様や田吾作ほど僕は高村様と親しくはない。けれど、十年來の付き合いだから高村様のくせはある程度は理解しているつもりだ。その傾向に照らしても、今回はらしくなかった。

「義定はどう思う？ 理屈はいい。感覚を教えてください」

らしくないことは高村様も自覚しているみたいで、義定様に話題を振る。

問われた義定様は少しだけ眉根を寄せたのち、言った。

「……いけると思うよ」

「そうか、じゃあ行く」

そう言つて、高村様は腰から一振りの刀を義定様に手渡す。

定頼様から授かった太刀。

いつしか六角を背負う者としての象徴が義定様の手に渡る。

これが意味することは一つしかない。

「この太刀をお前に預ける。……いや、返す。俺が横入りしたが、義治の次は義定。それが本来あるべき順序だった」

「願うだけだよ、そんなの。そもそもどうして当主が殿を務めないといけないのさ？」

「武田信玄相手に風穴を空けるなんて真似、俺しか出来ないからな」

この高村様の一言に僕らは何も言い返せず、義定様は静かに目を瞑る。

……行かせたくないはずだ。だが僕らには力がない。高村様を留まらせるだけの力がない。

(……だから、僕は高村様が嫌いだ)

自らを顧みないくせに義定様は珠のように大事にしてついていくことを許さないことも、あまりに強すぎてその重責を僕らが肩代わりすることができないことも。

全部が気に食わなくて、やるせなくて仕方がない。

僕らはそうして、死地に赴く主人を見送るしか出来ない。

正直、いつものことだけどそれが途方も無く悔しかったのは初めてだった。

*

不安だった。

恐ろしかった。

あえて過酷に見えるような道を選んだことを。

武田信玄の本隊に垣間見えたスキラしきモノ。

安直にも、俺はそこに踏み込むことを決めた。

多分、信玄公は俺が正解を見つけようとして長考することを望んでいたのだと思う。あと、可能な限り挟撃の形に持ち込もうとしているように思う。

現代の通信機器があったとて、所詮軍事は集団行動の伝言ゲームだ。タイムラグなしに包囲網を隙間なく、しかも等速に狭めることなんて難しい。

だから、言い換えればそれぞれ各個撃破の機会があるということだ。

（各個撃破のし易さ、それを考えたら退路を塞ぐが兵数の少ない山県昌景が上がる。しかし、昌景は赤備えの機動力で逃げ回ることと時間を稼いで、本隊を力づくで間に合わせるだろう）

だから、一番近くにおいて尺的には猶予がある武田本隊を選んだ訳だが、なかなか手厳しい。

急な行軍にも関わらず、武田本隊はしつかりと手堅く守ってくる。穿ち抜くことはできるのだが、すぐに穴を塞がれる。これでは、義定達は通れない。

「まずいな、義定達を通せるだけの穴がなかなか確保出来ねえ……」
押しではいるけど、あくまで俺の目的は義定達を逃がすこと。なれば、もう少しこちらに敵を引きつける必要がある。となると、やるべきことは限られるか。

「左平次、神次郎は馬上から敵の足軽頭を狙撃。田吾作と和気衛門は俺の後ろで並び押し立てて、俺が開けた風穴を押し広げろ。高次は後方から俯瞰して指示を出せ。伊右衛門は遊撃な」

指示を出したのち、燕のように旋回し武田本隊を再び視界に捉える。かなり角度のある旋回だったが、隊列は乱れることはない。ただただあいづらは一心不乱に俺についてくる。

かつて具教公や長政が至った一騎駆けの極地。どうやら俺もそこに到達したらしい。

（よかった。ならば、やれる）

知らず満足げな笑みが溢れてしまう。

俺は、馬具に挿してあった采配を抜き、振り下ろす。

「明暗ここに窮まれり、狙うは甲斐の虎・武田信玄！ お前らッ！ 往くぞッ！」

「二応ッ!!」

野郎どもが野太い声を上げて熱に浮かされたように武田軍に襲いかかる。

もう逃げも隠れもしない、戦国最強・武田信玄。その鼻面に俺は挑戦状を叩きつけたのであった。

第76話 一閃一条一文字 後編

軍の色が一変した。

そう形容することが相応しいぐらい、高村は攻め方を変えた。

武田本隊を一度貫いた高村騎兵が蜻蛉返りして再度武田本隊に攻めかかると、武田本隊は押されに押された。華麗な戦術機動に使われていた力を全て敵を貫くための力に変えているのだから、これは尋常な突破力ではない。

「思えば、お前は力の束ね方が上手い将だったな、高村……！」

苦笑いを浮かべる信玄。高坂昌信はすでに側になく、なんとしても高村の進撃を抑えようと最前線に赴いている。が、聞いた限り戦況は芳しくない。

「よもや、一気呵成に武田本隊を叩きに来るとは。どうにも、お前はあたしの思うようにはならないらしい。……いや、あたしの驕りが原因か」

信玄はこの時、ようやく自分の過ちに気づいた。

あまりに完璧な勝ちを求めすぎたのである。信玄はただ高村に勝つだけではなく、その才覚を含めて上回ろうとしていた。

あえて大掛かりな策を用いて敵を倒す、そんな用兵家にありがちな悪癖は信玄として逃れられるものではない。信玄の包囲網にその悪癖の陰翳を感じた高村は間違いではなかったのだ。

「だが、あたしの失策があったとて戦況が好転したとは言い難い。漸く五分に持ち込めたぐらいだ。あたし達がお前の攻勢を耐え切れれば、包囲網は完成する。山県もあと四半刻もすれば、到着する」

静かに采配を下ろし、深く信玄は息を吐く。

「あるいは、これで良かったのかもしれないな。この段階になれば策などいらぬ。あたしとお前、どちらが上なのかが如実に現れる。もう言い訳ができなくなるな」

即座に信玄は小幡昌盛と三枝昌貞、土屋昌統と土屋昌恒の姉妹を高坂昌信の後詰めに投入する。一点防御全振り、武田本隊のうち高村の

進撃を阻む可能性があるのは高坂昌信隊のみ。そう見込んだからの大勝負。この信玄の読みは正しく、潤沢な援軍を得た高坂昌信は踏みとどまる。

(六角高村は強い。ただ、彼一人が戦列を崩しているわけではない、ただ割れ目を作るだけ)

その観察眼で昌信は高村騎兵の動きを見る。確かに高村個人の武勇は光る。しかし、戦局を変えているのは山内一豊などの小隊長の働きも大きい。

目立たないものの有能な小隊長の下支えがあつて、高村の破壊的な進撃は成り立つ。

(だから、土台を崩そう)

小器用に昌信は腰に刺してあつた小太刀を抜き、投擲する。

狙つたのは、高村の後ろで驍勇を振るう和氣衛門。高村が作った割れ目を無理やりその剛力で押し広げる武田方にとっては傍迷惑な武者だ。

信玄の小姓になる前の昌信は甲斐の山で獵師をやっていた。その時の獲物は子兎、大きくてもたぬき。和氣衛門のような大柄な男ならば乱戦の中でも、ブレることはなくその頸動脈を射抜くことはできる。

「ッ！……」

首から激しい血飛沫が上がり、痛みで反射的に首に手を伸ばす。しかし、届く前に和氣衛門は絶命した。

どさりという音がして、高村は背後を振り返る。

(ああ、俺はまたしても学友を喪つたのか……)

言いようもしれぬ悲愴感が高村を貫き、彼は思わず天を仰ぐ。

(この感覚ばかりは何度経験しても慣れない。が、折り合いをつける方法はなんとなくわかり始めてきた……)

知らず、刀を握る手が強くなる。そして、キツと小太刀が飛んできた方を睨んだ。心を貫いた悲愴感をそのまま刀の冴えに変えていく。

知らず、高村の辺りには冷然とした空気が漂い始める。

遠目から彼を観察していた高坂昌信は震えた。そして、気づく。

(なんとという怒気……いや、鬨気……。もしかしたら、私は虎の尾を踏んだのかもしれない。ここは逃げましょう！)

脱兎の如く昌信は逃げる。ひたすらに生存本能が「逃げろ」と叫んでいた。

だが、更なる鋭さで高村は単騎で敵陣を切り裂き高坂昌信をその剛腕の射程に捉えようとする。その様はもう猟犬のようでついぞ昌信は逃げられなかった。

「……お前か」

視線で射すくめられて理解させられる。

私はもはや彼の獲物なのだ。理解したらもう足が動かなかった。振り抜かれた一刀、姫武将だからか殺さないためにわざと甲冑の上から斬り伏せられる。狂気の中でなお慣習を守ろうとするのが、かえって気味が悪かった。

斬撃というよりかは、身体がひしゃげるような埒外の鉄槌。

比較的華奢な昌信には到底耐えられるようなものではない。

「いやあああああッ！」

割れんばかりの悲鳴を奏でて昌信は意識を手放した。

*

迫り来る馬蹄の音が大きくなっていく。

高坂が囚われた。その報を聞いてあたしはついに覚悟を決める。

あいつはついにこの場にやってくるだろう。今更になって保身に走るような男ではあるまい。

二侯城では相良良晴の助言もあつて暗殺の危機を凌ぎ、運命を超えた。

だが、それだけでは足りない。武田信玄が天下を取り、古今無双の大將であると胸を張るには到底足りない。

(やはり、六角高村を倒さなくてはならない。織田信奈が頭を張っているが、今その剛腕で天下を回しているのはあいつだ)

冬の刺すような寒さの中、幔幕が揺れる。

北風ではない、強い西からの風。

「来たな」

立ち上がる。

それとほぼ同刻。

幔幕が斬り裂かれて突撃の勢いのまま、一人の騎馬武者があたしに躍りかかる。

「……………」

一閃。

咄嗟に受けた軍配越しに伝わる衝撃にあたしは顔を顰めた。

人馬一体となった渾身の一太刀があたしを轢き潰さんとする。負けじとあたしは軍配の裏に左手を添えた。

「あたし相手に上から斬りかかるなど頭が高いぞ、六角高村ツ！」

「知るかよッ」

「悪いが、あたしは負けるつもりはない！　ここで退いたら織田信奈と決着をつけることは出来ず、謙信を神から解放することもできやしない！　何よりお前に二度してやられるのが気に食わん！」

啖呵を吐きながらも、じりじりと高村に押し込まれている。

まったく、我ながら愚かなことをしているとと思う。村上義清も目じゃない膂力の高村の太刀を真正面から受けるとは。

だが、試されているような気がするのだ。

武田信玄という姫武将は天下を取るに足る器か。はたまた、これまでのあたしは虚飾にすぎず、脆くも地金を剥き出しにしてしまうのか。

ただの命のやり取りだけではない。

あたしの半生が、野望が問いただされている。

故に、不合理だと分かっていたとしても退くことは出来なかった。永遠にも思えるような鏝迫り合い。あたしの不利は否めないが、歯を食いしばって耐える。

だが、その終わりは案外あつけなく訪れた。

視界の端で白銀が弧線を描いて宙を舞う。巖のような重い手応えは失われて「チツ」と低い舌打ちの音が聞こえた。

「天運、俺に在らずか…………。ならば、致し方ない」

高村は淡々と吐き捨てて、馬蹄の音が後方へと流れていく。

残されたのは軍配を構えたまま立ち尽くすあたしと、その近くの大地に深々と刺さる半ばで断たれた白銀の太刀。

静々と手に持っていた軍配を眺める。

そこにはまるで抉り取られたかのような一条の傷が残っていた。隕鉄で作らせたこの軍配をここまで削り取るなんて謙信にすら出来やしないだろう。

「……まったく。恐ろしいやつだよ、お前は」

途方もない脱力感が襲ってきて、あたしは座り込んでしまう。

生き延びたのだ。乗り越えたのだ。

あたしの負い目はこの時、完全になくなったのだ。

そのことが嬉しくてたまらなかった。

*

武田信玄と六角高村の激突は痛み分けに終わった。

六角軍の決死の前進撤退で武田信玄本隊は痛手を被ったが、六角軍の被害も大きく犬山城に入城した後は動きを見せなくなる。

尾張に向かう道中で内藤昌豊による奇襲を受けた松平元康は清洲城に入城。六角軍と連携して武田信玄の美濃合流を牽制する形を選んだ。

ともあれ、尾張の戦線は完全に膠着し、六角と松平が描いていた尾張奪還の大戦略は頓挫する。

「信玄様、頼んでいた品物が完成致しました」

「そうか、ありがとう喜兵衛」

ある程度は暇になった信玄は武藤喜兵衛から一振りの太刀を受け取っていた。

「あの高村殿が使っていたとはいえさしたる名刀ではなく、しかもすでに折れた刀。それを小太刀にするなどいささか無駄ではありませんか？」

「そうだな、喜兵衛。余人には無駄遣いに見えるだろうな。だが、どうしても形に残しておきたかったんだ」

打ち替えられてもなお、鈍く光る白銀の輝きに信玄は目を細める。

「この小太刀の銘は『太平一文字』。天下人が持つのに相応しい太刀

だ」

それが今はこの手にある。

失わないように励まねばならない、と信玄は思った。

*

かくして織田政権対武田信玄の戦いは、岐阜城の戦いを残すのみとなる。

岐阜城東の加納で行われていた睨み合いは終始一進一退を演じていた。

だが、それは山本勘助の演出でしかない。

「天下の岐阜城での戦。さしもの織田信奈も蝮も時間をかけて攻略すると思うであろう。しかし、済まぬな。それがしには時がない。故に性急に戦わせていただく」

岐阜城での戦いを停滞させ、最大の敵である六角高村を封じ込める時間を作り、対高村が終わって初めて本命の策に着手する。それが勘助の構想であった。

「なんと……！」

戦場の真ん中で斎藤道三は自らが死期を迎えつつあることを忘れて曇り切った眼を見開いていた。

背後に聳え立つ岐阜城。その頂に「土岐の桔梗紋」が翻っていたのだから。

「……義龍。今になって襲いくるか……！」

腑が破れたような感触がする。口内に鉄の味が満ち満ちて、収まらない。

「済まぬ、信奈どの。これワシの罪が抱いた事態……！ 申し開きが出来ぬな……！」

懺悔しながらうずくまる道三。

最後の最後になって運命が、追いつかんとしていた。

第77話 父と子 前編

岐阜城に土岐家の旗が翻る。

その光景を目にした信奈は、呆然と立ち尽くしていた。

斎藤義龍。

かつて自身を苦しめた難敵。

六尺五寸と侮られながらも手堅い用兵や半兵衛の起用し、斎藤家が倒れてもなお六角や朝倉の下について織田軍に抵抗した。良晴の忍びである蜂須賀五右衛門による諜報で病を得て朝倉家を去ったと聞いたが、まさかここでも立ちはだかるとは……。

「蝮の言った通りになつたわね……！」

歯軋りする信奈。

油断ならない男だとは思っていたが、病を押し立てても戦いに赴く執念までは考慮できていない。

それに岐阜城の守備力を信奈は過信し過ぎていた。確かに岐阜城は難城だが、構造が分かり内通者がいれば落とすのは難しくない。現にそれをやってのけた人物が信奈の横にいる。

「半兵衛、この状況を覆す妙案はない？ このままでは、織田軍は山上の義龍と武田本隊に挟まれて壊滅するわ」

「すみません、信奈様。今の織田軍の状況は、軍略上ではもはや詰みです。ただ一つ、打開する策としては岐阜城に五右衛門さんや前鬼さんを入れて義龍どのの暗殺を図るしかないかと……」

竹中半兵衛ほどの智者をもってしても、状況は如何ともし難い。ただ、何もしないで滅びを待つ趣味はないので、一応信奈は半兵衛の献策を入れて五右衛門を岐阜城に入れることにした。

*

岐阜城に潜伏した五右衛門の動きはスムーズだった。

なにしろかつての居城だから地の利がある。するすると警戒の間をすり抜けて、ついに義龍が陣取る館にたどり着く。

「斎藤義龍っ！ お命御覚悟っ！」

舌足らず（三十文字以下だから噛みはしない）な声が、義龍の居室に響く。

しかし、そこに見覚えのある六尺五寸の大男はおらず、草臥れた若者のみ。

「うにゅ、間違えたでござる……。しかし、見られたからには仕方ない。きよろちゅじえごじやりゅ」

五右衛門が翻って若者に襲いかかるが、忍者刀がその首に届く前に腹が焼ける感触を覚えた。

「間違えてはおらんで、乱波。我が名は斎藤義龍に相違ない」

義龍の身体こそ衰えたが、技量は衰えない。それどころか、気配を読むことと無駄のない身体の動かし方については造詣を深めてすらいた。

義龍ではない、とわずかに油断した五右衛門の僅かな隙を捉えて義龍は五右衛門の腹に静かに脇差しを突き刺す。死期が近いことがかえって義龍の感覚を明敏なものにしていたのだ。

「すまぬな、乱波。この義龍、死期が近いとはいえど殺されてはやらぬ。最期に成すべきことがあるゆえにな」

痛みに身悶えする五右衛門に対して義龍は語りかけたのち人を呼ぶ。

「誰かある。この者を捕らえておけっ！　しかるのち、我らは事を始めるぞー！」

闖入者による遅延はあれど、義龍の計画は変わらない。

囚われながら五右衛門は（申し訳ござらぬ、相良氏……）と呻いた。

……
……

重い身体を引きずって、庭園に向かう。

この山寺で死にゆくと決めた時、義龍が第一に始めたのは庭園の造営だった。

理由としては、龍興と僅かな供回りに看取られて死ぬのでは少し物

足りなかったのもある。また美濃を失った今、龍興以外に残してみたかったのだ。この斎藤義龍が生きていた。そうとわかるように目に見える形で。

縁側から池を眺める。若かりし頃に道三から話に聞いた浄土庭園を模して作られた簡素な庭だが、義龍の心を慰めるにはちょうどよかった。

(この静謐は、戦国の世では叶うまい。……む)

鯉を眺めようと水面に身を乗り出した時、義龍は強烈な既視感に見舞われた。

数瞬、記憶を反芻する義龍。

そして、気づいた。理解してしまった。

「おおおおお……！」

思わず顔に手を覆ってうめいてしまう。

瓜二つだったのだ。

記憶の中の若かりし道三の面影と、今この水面に映る痩せ衰えた自分の顔が。

あまりに肉がついていたから、傍目にも自身さえも気づかないだろう。

だから、道三を憎む誰かが流した「義龍は道三の実子ではなく、土岐頼芸の息子」という噂が真実味を得てしまった。

そんな噂に踊らされて己たちは……！

「今になって、知りたくなかったぞ。いつそ夢であってくれたならよかった。これでは、まるで儂の生は愚鈍な道化そのものではないかッ！」

病に蝕まれていることすら忘れて、義龍は慟哭した。

……

……

待てど暮らせど五右衛門は帰ってこなかった。

朝に行かせてから今や日が沈もうとしている。

岐阜城方に何かしら異変があったわけでもない。五右衛門の生死はともかく、計略自体があまり思わしくない方向に進んでいるのは明

らかだった。

このことは、道三と信奈に敗北を覚悟させていた。

「信奈ちゃん、このような事になった以上は逃げよ。京に入り、高村殿を盾として洛西諸国の支配を固めて再起するのじゃ。殿はこの老耄に任せよ、元よりワシの不始末。尻拭いはせねばな……」

「嫌よ、蝮を置いていくなんて……！」

愚図る信奈。

合理的ではないことは理解していた。けれど、情動的にそれは出来なかった。道三の言うように逃げれば、信奈たち本隊は助かるだろう。けれども、劇的に数が減った道三たちが生き延びる目は完全になくなることもまた理解していた。

「甘ったれるな、織田信奈!! 天下布武を唱えるならば、ここは退け! もとよりワシは長くはない身! 今死のうが死に時はさして変わらん! だが、其方は違うであろう!」

鬼のような形相で喝破する道三。その勢いは凄まじく、信奈とて一歩後退するほどだ。

信奈との距離が空いたことを理解した道三はすかさず刀を抜き、切先を信奈に向ける。そして言い放った。

「この後に及んで、ワシに縋り付くようなら斬る。其方だけではない、親子の縁すら斬ろうではないか。もはや其方は天下をその手を掴まんとする王者よ。いい加減、親離れをせい」

信奈はもう何も言えなかった。……いや、言えずにいた。

悲しさと怒りと悔しさに震えて、言葉がまとまらない。

道三が口にした言葉は、それだけ信奈には重い。

父・信秀を早くに失い、生母からは愛されなかったために、痛々しいほど親からの愛を求めている信奈には。

そんな信奈の葛藤などつゆ知らず、戦況は動く。

岐阜城に翻っていた土岐家の旗が喊声を上げながら山々を駆け下る。

「親父どのを……お救いせよ!」

どういうわけか、武田軍を目指して。

織田武田諸將双方ともに義龍の行動は理解できなかつた。

不倶戴天の敵として今まで戦ってきた斎藤義龍。

それが今になって、織田方に加勢するなど。

誰が予想できただろうか。

「何故！ 何故だ、義龍!! 何故今になって……！」

勘助は狼狽した。

義龍の心変わりの理由はわからない。宿曜道で見たとてわからないであろう。

（お館様に申し訳が立たぬ……！ それがしの策を信じたばかりに……。それがしは途方もない大失態を犯した……ッ！）

予期しない逆落として武田軍に崩れが生まれる。勘助と秋山信友、信玄の影武者を務める武田逍遙軒が抑えに回るが、いかんせん足りない。高村との決戦のために信玄と武田四天王を引き抜いたのが、ここにきて勘助自身の首を絞めた。

突然の事態に硬直する織田軍だが、織田信奈のことだ。すぐに好機と見て攻めかかるだろう。

そして、懸念は犬山城と清洲城の二つの城に籠る六角高村と松平元康。双方共に手負いだ、武田本隊の有様を知れば嬉々として攻めかかるのは目に見えていた。

「全軍、関城あるいは加治田城に退却せよ。もはや岐阜城は獲れぬ。一刻も早く退路を確保すべし。殿はこの山本勘助が申し受ける……！」

武田逍遙軒に打診して、勘助は全軍の退却を取り付ける。

信玄にも申し開きの手紙を送った。

ならば、もうやるべきことは残っていない。

勘助は駆けた。

狙いは遅ればせながら動き始めた織田軍。

その只中に突入してなんとしても武田への追撃を抑えさせる。

「今まで動かなんだ我が五体よ！ 今だけは動け！ 動いて、お館様の道を開け！」

老いさらばえた身体に鞭を打つ。

勘助に付き従うのは同じく川中島で死に損ねた男たち。そして、武田に仕える以前から苦楽を共にしてきた山の民たちに、真田忍。

勘助の武勇は木端武者でしかないが、周りの死闘が道を無理矢理にこじ開けていく。

そうして、勘助はついに一つの陣にたどり着いた。

「居たぞッ！ 天命を動かす者よッ！」

相良良晴。

織田信奈の傍に立つ未来人。信玄の天命を変えるきつかけになった男。

命の灯火が消えゆく以上、最期に会って見たかった。そして討ち取る。

この男が、織田信奈を支えると決めてから何かが変わり出した。その狂いをここで正す。

それが最後の奉公であると、勘助は思い定めていた。

「その眼帯に面相……！ まさか、山本勘助かつ！」

勘助の侵入に気づいて槍を構える良晴。しかし、慣れてはいないのかやや腰がふらついていた。

拙い、ふと勘助は思う。これならば、自分でも殺せるであろう。

馬上から槍を突き出して、良晴に向かう。

しかし、槍の心得がなくとも良晴には天性の回避の才能がある。一歩、大股でステップを刻んで身を翻し、人馬一体の突進をかわしてみせた。

なにくそ、と勘助は馬首を翻して良晴に襲い掛からんとするが、それは叶わなかった。

空が見える。良晴の方を見ると槍を無防備に降ろして目を丸くしていた。

身体の側面が痛んで起き上がれず、赤い血溜まりが勘助を中心に広がっている。

「な、なぜじゃ、なぜ今なのだ……！ あと数瞬……！ それだけ命が

あれば、小僧を殺せたものを……！」

「爺さん、もういい。戦わなくていいんだ」

「いや、死ねぬ。武田の旗を瀬田に翻すまでは……」

「とどめは刺さない。だから、爺さん遺言を。このまま勝千代ちゃんに伝え残すことがあつていいのかよ……!」

「……勝千代ちゃん。お館様をそう呼ぶのか、お主は……」

頑なだった勘助の心がすつと溶けていくような気がした。

相良良晴。臆面もなく敵の大將を名前で呼べるこの男に本当の意味で敵はいないのだ。ならば、告げても良からう。

本当に自分がお館様に伝えたいことを……。

勘助が舌をもつらせながら告げ、良晴はそれを書き取る。

「もう言い残すことはないか、爺さん」

「ああ、すまぬ。……最期に救われた……」

思いの丈を全て語った勘助は満足して眼を閉じる。

その死に顔はとても悪辣な軍師のものとは思えないほど安らかであった。

第78話 父と子 後編

岐阜城の本隊が撤退したという報告は信玄の耳に届いていた。

斎藤義龍の翻心と勘助の死。西上作戦で描いた絵図は音を立てて崩れ去っていた。

「人の心とは、分からぬものだ。憎み合っていた者がその憎しみを解き、冷酷非道な男が最後にその身を擲つなど……」

濃尾国境の山中を抜けながら、信玄はひとりごちる。

岐阜から武田軍がいなくなった今、信玄が陣取っていた小牧山は武田の勢力圏では突出してしまう。岐阜の本隊が撤退を開始したと同時に、山越えで美濃の多治見に抜けることを選ぶ。

一方、山本勘助を失った武田本隊は織田信奈の追撃を受けながらも、退くと後退していた。中濃三城も柴田勝家の手により奪還され、木曾川を渡る直前の太田での会戦も大敗し、這々の体でなんとか多治見まで辿り着いていた。

「申し訳ございませぬ、お館様。岐阜城の失態で西上作戦が……!」

武田道遥軒と秋山信友が震えながら信玄の前に平伏する。

今後もうないような好機を逃し、あまつさえ戦国最強の名すら剥奪されかねないほどの大敗を喫したのだ。己の首が飛ぶことを二人は覚悟していた。

しかし、信玄はそんな二人を見て困ったように笑った。

「先の大戦が理詰め of 戦ならば、此度の大戦は感情の戦だった。……人の心はままならぬものだ。あたしが高村を上回ろうとしたのも、勘助が啄木鳥の策に拘泥したのも、斎藤義龍が変心したのも全て身に余る心の動きに因るものだ。分かっている、止められぬことはある。その方らはその余波に巻き込まれただけに過ぎない」

だから、お前たちの罪を減らす。沙汰は追って伝えよう。そう告げて信玄は二将は下がらせる。

信玄の関心事は二将の後ろで順番を待っていた望月千代女が伝えようとしている事柄。

「お館様、相良良晴からの書状にございます。『山本勘助の遺言を伝える』とのことでした」

手渡された書状を信玄は読み進める。

あの悪辣鬼謀な男のことだ、どうせ最期の策などが書いてあるのだろうとたかをくくっていた。

しかし、そうではなくただただひたすらに勘助の思いの丈が綴られている。

とつさに信玄は左手で目を覆った。

「……ずるいではないか、勘助。よもや、最期になってまともに泣かせてくるとは……！ この信玄とて、見切れぬわ……！」

この時ばかりは武田信玄は、いや勝千代は在りし日の勘助を想った。

涙は見せない、いや見せられない。家臣の前では究極で完璧な『武田信玄』でなくてはならない。そうしなくては、きつと勘助に叱られてしまうから。

だから、勝千代はしばらく左手を外せなかった。

*

快進撃を進める織田軍だったが、その陣中は空気は重い。

斎藤道三がついに床に臥したのだ。医師の見立てではもう保たないと見られている。岐阜城はお通夜の空気になっていた。

「再三言うておるように、どのみちワシはもう永くはない。なればこそ、気にせず武田をさらに攻め立てよ。東濃含めて美濃から追い出すのじゃ、あの武田に徹底的に打撃を与える好機ぞ、ワシの生き死になど放っておけ……！ ごほっ！ ごほっ！ ごほっ！」

激しく咳ごみ、喀血する道三。

誰が見ても死期が近いのは明らかだった。

義龍とはすでに和解し、別れている。だが、不思議なことに道三は信奈の面会を許さずにいる。

「何よ、強がってんじやないわよ、クソ蝮……！」

四度目の面会を蹴られて、地団駄を踏む信奈。

だが、その横にいる良晴は道三が頑なに面会を拒む理由をうつすら

と理解していた。

きつと齒痒くてならないのだ。

長良川の戦いの時から、どうにも、自分の存在が織田信奈の弱点になっていくのではないかと。痛々しいほど父性愛を求める信奈だから、道三との別れを割り切れないのではないかと。

戦国の世では別れは付きもので、少しは慣らしておかないといけないと思ったのかもしれない。自らの命を、その練習台として。

(けれど、それで二人はいいんだろうか？ 道三の最期に立ち会えないこと、それそのものが信奈の傷になったりはしないだろうか？ いや、どつちにしろ時間がねえ)

腹を決めた良晴はズカズカと道三の寝室の襖をこじ開ける。

そして、信奈の背中を押して部屋の中に押し込むと、襖を閉めてどつかりと座り込んだ。

「何をやる(のよ)、小僧(サル)!!」

道三と信奈が揃って良晴を非難する。しかし、それに良晴はふんすと鼻を鳴らして答えた。

「最期の最期まで意地を張りやがって、もう見てられないぜ！ 二人でちゃんと話をしてくれ。じゃないと俺はここから動かないからな！」

啖呵を切る良晴だが、その肩は震えている。正直、この後に激昂した信奈に何をされるか分からない。けれど、

(これでいいって思っちゃまったんだよな……)

どうしたって考えるより前に身体が動いてしまう。どうにも良晴のこの悪癖は変わらないらしかった。

良晴がビビりながら彼らの二の句を待つ。

しかし、それは杞憂であった。

「ぶはは、最期に小僧にしてやられたわい。こうなっちゃっては致し方ない。ワシも諦めるとしようかのう」

襖越しからでも道三が笑っているのが分かる。

それから、信奈と道三はぽつぽつとたとたとどしく、素直に本音で

語っていた。

(なんだ、本当は色々話したかったんじゃねえかよ、おっさん)

それに聞き耳を立てまいと良晴は務めながら、夜は更けていくのであった。

*

「こんなこともあるもんだな」

俺は岐阜の戦いの顛末を聞いてひとりごちた。

斎藤義龍の寝返りは、俺にもわからないことだった。だが、一つだけ言えることがある。

「この戦は終始、相良良晴と武田信玄、あと俺の戦いだったなつて。で、最終的には相良良晴が勝った」

相良良晴が武田信玄を暗殺の危機から救い、戦況が大拡大した。そして、それに対応しようとした俺と何故か俺に対してメタを張っていた武田信玄との激闘。

最後の義龍の件は、道三を生き残らせたことによる余録だろう。長良川で相良良晴が手を加えなければ、最期まで斎藤義龍は真実に気付けずに織田と対峙していたに違いない。

つまるところ、相良良晴に始まって相良良晴に終わるのだ。マッチポンプと言えばそれまでだが、何かしらの奇縁を感じる。それに、手遅れだと思ってた関係が案外なんとかなるらしいことがわかってちよつとホツとした。

「まあ、相良に関してはどういいうや。それよかこっちの対応をしなくちやならんしな」

左手で握っている書状を見やる。

差し出し人は武田大膳大夫信玄。中身は此度の大战の和睦について。

現状において織田軍は連戦の疲労から、武田軍は長すぎる退路からそれぞれ侍大将以下から和睦の声が上がっている。

信玄はそこに目をつけて、書状を送ってきた。

ただ、織田信奈に直接というわけではなく、俺に仲介役を頼むという手順を踏んでだ。

俺とて和睦には賛成だ。織田が武田に勝って美濃を完全に取り戻して自信をつけられたら、こつちの言うことを聞かせづらくなるし。あと、単純に俺は疲れた。

ただ、朝倉に浅井に、織田、武田、松平に加えて我らが六角。この六カ国の間を取りもたないといけないのが、非常にだるい。

「だるいが、今後もキャスティングボードを握るためならしやーなしだ。諦めよう」

重い手つきで信玄への返事をしたためる。

俺の苦勞で大戦が終わるなら安いもんだと、そう言い聞かせて。

第79話 日本初の試み

和睦をしたい勢力はことの他、多かつた。

武田と俺ら六角は無論のこと、浅井も姉川の総力戦の疲労が抜けず和睦に飛びついた。

松平も「武田を叩ける機に叩かないのは気になるけれど、それはそれで国力を休めたい」と言ってきた。まあそこは豪族の主張が激しいから誘導はしやすい。

何よりも意外だったのは、姉川の戦い後はぼろぼろながらも越冬を辞さない構えだった朝倉義景すら和睦に応じようとしていることだった。

（織田以外は和睦を求めているということになる……。この一事をちらつかせれば、さしもの信奈公も鉾を収めよう。……いや、それにしでは武田が余りにも隙を晒し過ぎているか……）」

退路が不確かな状況の武田。

兵はぼろぼろで首脳陣もわざわざ美濃まで出払っている。浅井朝倉が動き出すつもりがないなら尚更好都合。

本当の本当に洛東五ヶ国の全ての力を叩きつければ、あの戦国最強の武田軍はこの美濃で完全に過去の物に出来る可能性がある。

そうなれば松平は駿河南信を食って早くも拡大するし、武田と絶対に手を切つて独立しそうな真田も巻き込んで上杉を抑え込めば、東方問題は解決する。

兵は詭道なり、乾坤一擲の大勝負に持ち込み、制せれば天下の大勢はかなり織田側に傾く。

……ああ、本当に織田信奈が天下を取れるならこのシナリオを描けてしまうのだろう。そして、桶狭間のような千載一遇の好機をもたにして、先の大戦では俺の防衛策を力づくで破断したような女だ。

描けたら、間違いなくやる。

（俺は織田信奈に天下を取ってもらわねば困る。そこは変わらん。……けれど、自立して独力で好き勝手進まれる方がもつと困る。……

すまんなあ、信奈公。俺のわがままのために天下取りの道、十年遅滞してもらおうぞ)

武田崩壊へのシナリオ。

それを描かせない。描かれたとしても、実行させないようにしてはならない。

今のまま、信奈公に書状を送っても悪手だろう。

だから、場を整える。

信奈公や竹中半兵衛が落ち着いて考えられない、そんな場を。

*

色々手回しをしたが、実現したとなるや壮観だった。

織田軍と武田軍が対峙する多治見の一寺に、六ヶ国の首脳陣が集められている。

浅井からは藤堂高虎、朝倉からは前波吉継、織田からは織田信奈本人と滝川一益、相良良晴、竹中半兵衛の四名の大所帯。武田からは武田信玄本人が乗り込み、松平は元康本人と石川数正が出席。ウチからは俺と義定に長束正家の三人が出ていた。そして、公平性を期すために岐阜に滞在していたルイズフロイスも呼び寄せている。

これだけの面子が集まって、今から大戦の停戦交渉をするのだからただごとではない。

日本で初めて会議で歴史が動いたとされる清洲会議よりも早い、停戦と戦後交渉を兼ねた多数国の会議。似たような例は三十年戦争後のウエストファリア会議だろうか。過去を遡ってもあまり聞いたことがないような気がする。

(あれ、これ図らずも歴史に名が残るのではないか、これ)

ぶっちゃけ主宰しておいてなんだが、思ったよりも大事になりそうだった。

「まずは、遠路の中で御足労いただいたことに感謝を。もう戦うよりは会議でけりをつけた方が安上がりだろうと横着した俺に乗ってくれた者のあまりに多いことか。これより六ヶ国協議を始めさせていただきます、議長は発起人であるこの六角式部大輔高村が、見届け人にはイエズス会のルイズフロイス殿が務めましょうぞ」

俺の長台詞の後にフロイス殿が頭を下げる。

初めて見る宣教師の姿に信玄公や前波吉継は瞠目しているようだった。

「わざわざ六ヶ国から人を集めてよくやるわね。で、わたしは引かないわよ。今や有利なのはわたしたちだもの。このまま踏み潰してあげてもいいのだけれど」

作法もなく左脚を伸ばしながら、信奈公は言う。

それに対して反応したのは、信玄だった。

「ほう？ 義龍の寝返りがなければ、濃尾失陥待ったなしだった女がよく吠えるではないか。もう少し分を弁えろよ、うつけ者。この状況はけしてお前が作り上げたわけではないのだから……」

「なんですすつて？」

「なんだ、あたしはごく丁寧に事実を教えてさしあげたに過ぎないのだからなあ」

メンチを切り合う信奈公と信玄公。

まあ、ここの議題は最後までけりがつかないのは明らかだから放置でいい。

一番楽な浅井と朝倉の方から手をつけるとするか……。

*

やはりというか浅井と朝倉の停戦の話題はすぐに終わった。

なにしろ今の信奈公は武田を倒すことの方に重点を置いている。だから、浅井朝倉の停戦したいという申し出は彼女にとっては渡りに船だった。

だが、信玄公にとっては手痛い。武田軍に比べて多少は元気な織田軍とこのままならやり合わないといけないのだから。

「信奈公はノリノリだからいいものの、まだ武田とやるのは俺らにはきついよなあ数正殿」

「……左様にござるな」

やり合う信奈公と信玄公を尻目に俺は石川数正に話題を振る。

元康ではなく、数正。

石川数正は西三河の旗頭として豪族の利益を代表しなくてはなら

ないという宿命がある。

東三河の場合なら所領が武田に近く敵愾心も強いが、西三河はそうではない。むしろ、東のために西がなぜこうも持ち出しをしなくてはならないのかと憤慨している層もいると聞く。

……だから、取り込む目はあった。

「私としましては、吉姉様と武田と戦いたいのですが……」

「しかしながら姫様。織田に対しては今までを鑑みるに持ち出しの方が多過ぎる。我らが遠州で戦わねば、織田は姉川の戦いすら満足に戦えてないのでは？ 我らはあくまで対等な同盟であったはず」

「それはそうですが……」

数正に説かれて、元康は利害と友情の損得に揺れていた。気の荒い三河の豪族の機嫌を損ねれば、武田に走られる。そうなつては領国の安定もままならないだろう。

「信奈公。俺が持ち出しをするのは、一応従属した身だからまだいいが、松平にまで求めることじゃないだろうよ。……正直、松平はもうキツイ。休ませてあげたらどうだ」

ここで、信奈公に話を振る。

なにせ元康自身は放置すれば友情に振り切れるのはわかっていたからだ。

……だから、ここで松平に対して言質を取らなくてはならない。そして、その言質はほぼ取れる。

「……わかったわよ。それだけキツイなら松平はもう退きなさい」

すんごい渋々ながらも、信奈公が宣言する。

なにせ、ここには武田信玄の目がある。ここで松平を粗略に扱えば信玄公は確実に「織田は松平に、三河武士に冷淡である」と喧伝して利用するだろうから。元康自身は友情を守っても、その悪評を使って信玄公が本気で調略に入れば三河武士のほとんどは揺らぐ。だから、ここでは信奈公は松平に対して甘い顔をしなくてはならない。

「松平の協力を感謝する。和睦がなった暁には田峯城と長篠城を返還しようではないか」

ここで、信玄公が奥三河の主城2城の返還を切り出した。敵ながら

これは上手い。戦わずして松平にとつては取り返したかった城が帰ってくるのだ。これでは、織田の方に賛成することはあるまい。

「松平が帰るなら、俺たちも帰らせてえな。姉川に引き続き、対武田は重たい。それにさすがに財政もやばいからなあ」

疲れたように俺もまた和睦を切り出す。

俺たちが武器にするのは、長東正家に作らせていた（ちよつとヤバさを盛った）収支表である。これを信奈公ら織田家臣団に読ませて、なおかつ正家に「お金がない」と叫ばせる。

「織田家の皆さん、我々は戦うのに異存はないんです。けれど、流石に赤字が続き過ぎて破綻します。どうしても戦わせたいなら、流石に先立つものがないとちよつと……」

戦わせるなら金をくれ、とばかりに正家が信奈公らに詰め寄る。

ついでに（織田がちよつと無理をすれば出せない訳ではない額の）支援も募る。というか、支援なしに戦わせるなど脅した。

「高村……、あんた……！」

わなわなと震える信奈公。ああ、これは切れてるなあ。だが、こつちも引く気はない。

「元康と違って、俺はあんたの従属大名だからな。指示されたら従うが、そつちもそつちでこつちを保護する義務はあるだろ。今まではなんとか自力でやってきたがなあ、流石に辛いつて」

元康の論理を悪用して攻め立てる。そして、これもこちらが勝つ。なにせさつききの元康を通して俺を通さないのは、道理に反するからな。

「で、どうすんの？ お金出してくれるの？」

期待に目を輝かせるような演技をして、信奈公に追い討ちをかけた。

やるならやるでちよつと多めにお金をもらえるからどつちにしろ悪い話ではない。ただ、信奈公のやる気次第だ。

そして、どうやら信奈公のやる気は挫けたらしい。

「……いいわよ、あんたらも勝手にしなさい。今のわたしにそんな大金をポンと出せる余裕はないのよ」

完全勝利である。

あのけちんぼな信奈公から完全な譲歩を引き出した。

松平と六角が戦列から抜けければ、織田は独力で信玄入りの武田に勝つことはできない。会議の大勢は完全に決した感がある。

*

織田が折れたことで、六ヶ国協議は停戦を決めた。

その内容は、全勢力は一年間交戦を禁じる。武田は松平に田峯城と長篠城を返還し、織田には遠山領以外の美濃と尾張の領土を返還するの二つが大綱だった。

要するに武田の勢力がほぼ戦前のものに戻っただけである。浜松以外の遠州を再奪取しただけだった。

他に高坂昌信をはじめとする捕虜も無事な者は返還された。ついでにこの機にキリスト教の布教の解禁も参加国全てで成されている。

いずれの条約はフロイスの目の前で起請文として書き起こされ、血判を押して神前と仏前それぞれに供えられた。

「この起請文に背く者、仏やデウス、古今のあらゆる神々に罰を与えられるであろう！」

最後に多神教たっぷりの宣言を高村とフロイスで行って、六ヶ国協議は幕を閉じる。後世に多治見会議と呼ばれるこの会議の模様はフロイスの書簡を通じて欧州に渡り、のちのウエストファリア条約とそれが締結された会議に影響を与えたとされている。

第80話 信玄と信長

浅井に朝倉、織田と武田に松平、そして六角。

一箇所に六ヶ国の武將が集まれば、会議の裏でそれぞれの思惑が蠢く。

例えば、浅井と朝倉に対して織田は調略を仕掛けているし、松平は武田の様子見に余念がない。

直接的に矛を交わすことは一年ないとしても、敵対関係が終わったわけではないのだから。

そして、六角高村もまた人目を避ける形で一人の武將と対峙していた。

「……流石だな、高村。お前に頼って良かった」

「俺にとっても都合が良かったからいいが、それでもし信奈公が本気で戦う気だったらどうするつもりだ」

「その時は、その時。手負いの虎の恐ろしさをさんざ知らしめていたところさ」

獯猛に高村の会談相手……武田信玄は笑う。

その笑みに高村は僅かに冷や汗を垂らした。

高村は知っている。小牧で命を拾えたのは武田信玄の僅かな驕りを的確に突けて、その上で機を誤らなかつたから為せただけに過ぎないことを。

例えば、一国の存亡をかけた、驕りも油断も僅かな過失も許されなような戦いならば、正直なところ武田信玄に勝ち切る自信はなかつた。

「なるほど、それは恐ろしい……。それで本日はどうなされたので？

まさか信玄公ともあろう人が礼を言うためだけに俺と話したがるとは思えない。なんぞ、要件があるかとは思うのだが」

「ああ。とは言っても、調略とかではないのだがな。少しばかり胸のしこりを取り払って欲しいだけだ」

「胸のしこり、と」

高村にとって信玄の発言は意外だった。

見た目からして豪放磊落な武田信玄にそんなものがあるとはつゆとも思わなかったのだ。

「なんでお前はあたしを捨てたんだろうと思つてな。確かにあの状況で生き残るには、あたしを切り捨てるのはなくはない。だが、国益だけではない気がしてな。その辺り、どうなんだ？」

「いや、国益だよ。それ以外にない」

「それは嘘だ。国益だけならば、織田に服属した後はのらりくらりと援軍要請などはやり過ぎばいい。そうするだけの余力と影響力はお前にはあつた。……だが、実際はどうだ？ お前はわざわざあたしたちとの戦いの全権を握り、ついには終戦まで漕ぎ着けた。それだけじゃない、お前は高槻で律儀にも畿内の残存勢力を蹴散らしている。普通の従属大名なら、そこまで働いたりはしない。ならば、国益以外の理由があると踏んでいる。……さては、織田信奈を抱いたか？」

「なにをどうしたら、そうなる。信奈公なあ……。見てくれは悪くないんだがなあ……。気性が荒すぎるんだよなあ……。」「じゃあ、なんだと言うのだ。惚れた腫れたでないなら、もうあたしにもうわからんぞ。理由を聞くまでは帰してやらん」

ついに強硬策に出た信玄に高村は嘆息する。

（まったく、恐ろしい女だよ。伊達に戦国最強と呼ばれちゃいない。話さなきゃ、ダメらしい。だがなあ、どう言えば伝わるのか）

高村が曲がりなりにも信奈に従う理由は麒麟を呼ぶに足る為政者の才を見出しているからだが、対外的な評価では武田信玄が上回っている。

世評通り、確かに武田信玄の能力は凄まじい。

上杉謙信には劣るかもしれないが、戦国でもトップ級の軍才を持ち、内政面では貧しい甲斐を豊かにし大国として振る舞えるだけの地力を得ている。外交は悪辣だが国益に結びつかない成果を出すことはあまりない。

おおよそ完璧な武将ではあるが、高村は信玄を天下人候補としてはさして評価していなかった。

(信玄公になくて、信奈公にはあるナニカ。……後世で信長が戦国の革命児と言われた要素のことだ。だが、並の制度改革なら信玄公や北条氏康だっただけだ。楽市楽座も家臣集住も始めたのはウチだしな)

思えば、織田信長ほど評価が定まらない人物は難しい。革命児とされながら意外と保守的だと言われたりする。だが、それでも織田信長以前と以後では、明らかに時代の様相が様変わりしている。

その理由を高村はなんとなく想像がついていた。

(ああ、なるほど。ならば、この質問を逆にぶつけてやればいい)

考えを固めた高村は、信玄に向き直り口を開く。

「なあ、信玄公。逆に問うが、天下を取れたらどこに幕府を開く？」

「京か、鎌倉だな」

少し考えて信玄は答えたが、それを聞いて高村は笑った。

「そうか。なら、信奈公だな」

「何故だ」

言い切る高村に抗議する信玄。

京も鎌倉も以前に幕府が開かれていた場所。京なら室町幕府の後継として、鎌倉なら武家の王として象徴的に振る舞える。悪い回答ではないと思っていた。

「その二つの都市に幕府を開くことに意味がある。が、それでは人の心は変えられない。戦雲を払うことはできない。麒麟を呼ぶことも難しいだろう」

「じゃあ、お前ならなんと答えた。答えろ、高村」

「俺か？俺ならば大坂か観音寺だ。ああ、武蔵のど真ん中に新しい都市を作ってもいいな。とりあえず京と鎌倉は考えてないぞ」

聞いた信玄は押し黙る。高村の回答の意図を測りかねていた。観音寺は居城だからわかる。大坂は高村にさして縁がある土地ではないが、栄えてもいるし交通の要衝だからわからなくもない。最後の武蔵がわからなかった。

「多分、同じ質問を信奈公にしたとしても、大坂と観音寺は共通するだろうよ。……俺たちは自分の都を作るんだ。盛大に都市を一から十

まで開発して作り、『これからは自分の時代だ』と天下と人々に誇示するのさ。なんだかんだで目に見える形であつた方がわかりやすいからな」

武田信玄と織田信奈の差はそこだ。

伝承者であろうとする前者と創造者たらんとする後者。

後者のように強烈な個性が新たな時代の枠組みを提示しなくては、泰平の世は作れない。

織田信長も豊臣秀吉も、文化や建築に制度、合戦のやり方。あらゆる面でこれまでとは違うことを目に見える形で示し続けた。その結果、ようやく時代が変わつたのだと思う。

そんな彼らに対して半ばに死んだこともあるが、武田信玄が時代が変わつたと天下に示すだけのナニカが出来たとは思えないのだ。

だから、高村は武田信玄をいまいち天下人候補として評価しきれない。

高村の言葉を受けて、今度は沈黙考する信玄。少しして整理がついたのか、口を開いた。

「……なるほどな、確かにあたしには何かを一から作るといふ経験はさしてない。……実のところ、想像が湧かないのだ。天下を治めるといふことがな。天下は取れるかもしれないが、治めることはできない。高村、お前があたしに危惧することはそれか」

「ああ」

「なら、お前が治めるといい。天下を取りたいのは、あたしが古今無双の名将だと知らしめたいからでしかないのだ。だが、統治が出来ぬというならお前に任せる他ない。あたしにここまで講釈を垂れるのだから、当然出来るよな?」

そう言つて信玄は口の端を釣り上げる。対して高村は皮肉げに笑つた。

「出来るがしたくないし、割に合わない。俺は家の存続にしか興味がないからな。やる気があれば、焦土戦をしても織田信奈を領内に引き込み、そちらを無理矢理間に合わせようとした。甲斐を本拠にする以上、織田信奈以上に貴女は付け込みやすい。同盟者のふりをして天

下を篡奪しただろうよ」

「ならば、あたしがそうさせる。織田信奈を倒せば、お前はあたしの下に付かざるを得ないだろう。ならば、力づくでそうさせる。まだ、戦国の世だ。強者に従うのは当世のなりだろう？」

「あんたには敵わないなあ……」

苦笑いを浮かべる高村。

めんどくさい女に目をつけられたものだ、と辟易した。

*

信玄公との会合を終えて、俺は次の場所に向かう。

目的地には三盛り亀甲の旗が翻っていた。

「遅くなつてすまないな」

「いえ、わざわざ他国の当主に御足労願っているのですから、こちらには責める理由はございませぬ」

会釈して栗毛と黒髪が混じった長い髪が揺れる。

高村を出迎えたのは、藤堂高虎。浅井側の全権者だった。

「使い走りのようなことをさせて悪いが、この書状を長政に渡してほしい」

「それは構わないのですが、私に渡して宜しいのです？ 中を見て不都合だと判断して捨てたりしたらどうなさります」

「お前はそんなことをしない姫武将だとは思ってたから、あまりそこは考えてなかったなあ……」

藤堂高虎は七人の主君に仕えたが、調略で寝返ったことは一度もない。禄高や家中の人間関係に嫌気がさして離れたことはあれど、待遇に満足さえすれば犬のように働いていた覚えがある。

冷静に考えたら、ただの冷たいやつが徳川幕府で外様ながら信任されることなどないのだから。

「最悪、中身を見てもいい。内容はお前には絶対わからないだろうからな。二度命を救ってやった借りをここで一回分返すと思つてやつてくれればいい」

「そうまで言われるのでしたら、お引き受けします」

「ありがたい。じゃあ任せた」

書状を手渡して、別れる。

この書状は俺にとつてはある種の決意表明だ。

長政の手に渡っていたなら、僅かばかりでも俺に未練が残ってたのなら、なんかしらの反応は見せてくる。

武田とはしばらく大人しくできる。となると、目線は必然的に畿内に向くことになる。

こいよいよ、浅井を滅ぼさなくてはならない時が来るのだ。

第10章 Game of tag

第81話 やはり織田信奈は持っている。

多治見会議からはや半年。

信奈公、ひいては六角領国には平和が訪れていた。

浅井と朝倉には痛撃を与え、武田に関しては蓄えをかなり放出しただろう。しばらくは動けまい。

織田もまあかなり損耗していたがここは領国の地力か、数ヶ月で平時の体制に戻っていた。

東が大人しくなれば、西に備えを厚くする余地が生まれる。

織田は摂河泉三国への圧を強めて三好の色を消していた。また明智光秀を主将にして丹波国を治める赤井直正、あと在京していた義定を使って丹後に侵攻。一色氏を降伏させたのち、龜山に畿北方分として光秀を置いていた。

「さて、今日も京に行くとするかね……」

愛馬にハミを噛ませて跨り、手綱を握る。

俺自身はというと京の六角屋敷と観音寺、自領の栗東の間を行ったり来たりしていた。京の街の再建や自領での馬の繁殖に観音寺での決裁とやることが多い。……なぜや、なぜ平時なのにこんなにやることが多いんや……。まあ、平時にやるべきことが溜まるほど緊急時が長かったというのが正解だろうけど。

今回は信奈公に呼び出された形だ。……彼女に呼び出される時つて身の危険はないけどあんまりいいことが起きたためしがないんだよなあ、ふええ行きたくないよお……。

京に着いたらそのまま信奈公が常宿にしている本能寺に向かった。

「さすが、早いわね」

「まあ近いからな」

本能寺に設けられた茶室で信奈公と光秀が待ち構えていた。他の重臣の姿は見当たらず、どうやらこの三人で話すらしい。

「揃ったなら始めましょ。あんたら2人に今後の畿内をどうするか伝えるわ」

信奈公の話としては今後の畿内経略についてだった。

今回の丹後平定の後に信奈公は方分として畿北に明智光秀を置いた。畿北方分になったことで光秀には畿内の中規模（ギリギリ万を超えないぐらい）の軍の進退の自由を与え、自領外の知行宛行などの諸権利も後で信奈公の検閲があれば認められる。

まさしくのちの方面軍の原型となるようなシステムだろう。まあ俺はそこら辺が奪われていない従属大名だから今までと変わらないわけだが。

一応、俺の扱いは特別方分ということになっていて、畿内においては信奈公の検閲なしで兵数制限なく軍権は行使できる。他は光秀と基本的に変わらない。管轄は伊勢と伊賀と大和と紀伊の四か国で与力というか監視に松永久秀をつけるらしい。

摂河泉三国と山城は今のところ織田の直轄にするとのことだ。

（なんだかなあ……。やはり、いささか効率に寄り過ぎているように思う）

信奈公たちに気づかれないように俺は眉を顰める。

正直、俺はこのシステムについては否定的だ。

この手法は効率的に平定を進められる分、上に立つ者の格が求められる。なにせ、軍政両面を担う軍閥をみずから生み出してしまおうのだから。

一度当主が力を失う、あるいは次代の器量が足りなければ、野心あるものは信奈公の検閲など歯牙にかけずに嬉々として己の利権を広げにかかるはずだ。

近い例だと羽柴秀吉も徳川家康もそうして天下を奪った。古代を紐解けばアレクサンダー大王のデアドコイたちがいる。彼らのような傑物がいない場合でもこの手法は軍閥間のパワーバランスを当主が調整しなくてはならず、代々の当主のバランス感覚に左右される。一度致命的に過てば、すぐに戦乱の世に舞い戻る脆弱な国家権力を作りかねない。

……それでは、天下を統一したところで麒麟は来ない。意味がないのだ。

まあ信奈公も信長もそこはわかっているそうだが、分権というのは割とデリケートな問題なのである。

*

方分について話された後は、今後の戦略について知らされた。

浅井朝倉は停戦が明け次第攻撃を開始し、武田の畿内へのとっかかりを取り除く。

西に關しては明智光秀を通して播磨と但馬因幡の山名に働きかけて対毛利の下準備。

「問題は石山本猫寺よね……」

広げられた地図の一点を指差して信奈公は溜息をつく。

石山本猫寺。おそらくは史実における石山本願寺にあたる寺院は大坂の地に堅固な要害を築き、信仰王国を作り上げていた。

仏教の一宗派ではあるが加賀一国を門徒が丸ごと領国化し、三河では家中の半分を占めて内乱を起こし、長島でも門徒が織田と六角の介入を受け付けないでいる。紀伊の雑賀衆も大半は門徒だから勢力の中に加えてもいいかもしれない。

下手をしたら、どこの大名家よりも強大な兵力を抱えているのが本猫寺なのだ。

「猫を崇め奉る邪宗は排斥すべきです。なんですかにやむあみにやぶつなど……ふざけてるんですか？」

光秀が口を尖らせる。正直、俺もこの世界で本猫寺を知った時は俺はぼかんとアホみたいに口を開いたものだ。それこそ宇宙猫になっていた。

「だが、なおさら訳が分からないことにその邪宗こそが今もつとも人心を得ている訳だ。下手に手を出すとこちらが危ない」

「その邪宗が武装して石山とかいう要衝にして要害に陣取っているのが問題なんです。紀伊の片隅で念仏を唱えてりやこうも悩まされることはなかったんですが……」

普通なら触らぬ神にんとやらだが、本猫寺においては触らなければ

ばならない理由がある。なぜならば、彼らが本拠を置く石山は極めて重大な交通と経済の要衝だからだ。ここを宗教勢力に持たれるのはあまりに厳しい。

それにどうやら俺が観音寺に居座るせいで、信奈公は安土ではなく石山を最終的な本拠に見立てているらしい。

政教分離に地政学的な理由、しかも織田信奈の国家体制のグランドデザインといった諸々の理由から石山本猫寺は信奈公の大きな悩み の種になっている。

(最終的には相容れない両者。だが、だからといって無闇に仕掛けるには厳しい相手だ)

実のところ、石山本猫寺の取り扱いは難しい。特にキリスト教を受容した織田政権にとっては。

一歩間違えれば泥沼の宗教戦争になってしまい、それは大体長期化する。十字軍は8回も行われたし、未来にあたるが三十年戦争では神聖ローマ帝国の領地が荒廃し切るほどまでに戦った。

仮にこのレベルの宗教戦争が日ノ本で起きたのならキリスト教徒保護の名目で南蛮諸国が介入し、最悪は植民地になってしまうだろう。それだけは避けなくてはならない。

「石山本猫寺を取れば西国への海路が開けるわ。九州には明やイスパニアだけじゃなくてカンボジアとか琉球からも商人たちが来るそうよ。あそこまで行けば、世界が見えるわ」

瞳を輝かせて信奈公は海外への憧れを募らせるが、俺はどうも素直に首肯できない。

未知の可能性より安定択。

彼女には悪いが、俺にはどうも海外志向が地獄の釜を開けることになりかねない気がするのだ。そんな後ろ向きな危惧を抱いてしまうあたり、俺は時に自分の器量の底が見えて憂鬱になる。

結局のところ、当座の方策は三好に備えつつ浅井朝倉を一飲みにできるように国力を蓄えることになった。段階を踏んで着実に敵を潰していく理想的な方策ではある。

だが、信奈公は持つてるからな……。そんな上手いこといく気がし

ねえんだよなあ……。

*

京で信奈公らと会談した後、俺は堺に赴く。

目的は今井宗久との商談である。平和裏に半年間溜め込み、しかも丹後征伐の時に信奈公に恩賞として強請った金銭のおかげで六角の金庫はまた潤いを取り戻していた。

「けったいな買物納屋が持つ芝辻砲の在庫八門と予約で十六門をさればったな、高村はん。巷ではケチな男と呼ばれているのが嘘みたいやわ」

「こんな時じゃないと、軍拡はできない。……正家にはまた文句を言われそうな気がするが」

見た目だけはゆるふわな鬼の金庫番の顔を思い浮かべて苦笑いを浮かべてしまう。

あとは和やかに茶と菓子を楽しんで帰ろうとした時。後ろで静かに佇んでいた一氏が進み出てきた。

「御歓談のところ申し訳ありません、お館様と宗久殿。私の手のものから『淡路にて三好の水軍が大規模な演習を行った』とのことですよ」「なんやて一氏はん。それは三好が出陣する前に行う慣習や。ならば、間違いなく奴らは畿内に攻めてきはるで！」

動揺する今井宗久。堺で何年も商人として情報の最先端にいた男だ。ならば、その推測に否やを唱える意義は薄い。

「一氏、その報は信奈公にも教えてやれ。……俺らも観音寺に帰るか」半ばため息をつきながら一氏に指示を出す。

やはり信奈公は持っている。悪運だけではなく、どうしても敵を集めてしまう宿命を。

まあ、知ってたから驚くべきことではないのだが。

第82話 亡霊

俺が観音寺に大筒を牽引して帰っている僅か数日の間に畿内の情勢は一変した。

まず、三好は摂津尼崎に上陸を果たし、野田福島に陣取ったのだ。野田福島は現在でいう梅田の近所にあたり、淀川の河口の中洲に位置している。淀川の支流に囲まれたこの地は大阪湾から京を経て琵琶湖に出る水運ルートの起点にあたる。堺からの大量の物資も、美濃からの産物も全てはこの水路を通るところになる。つまりは、織田政権の経済的な基盤を大きく阻害する位置にあった。

これには信奈公としてもたまったものではないらしく、すぐに野田福島へ軍勢を向かわせた。こっちもまた京で在番してもらっていた山岡景隆を向かわせる。

(今までは馬鹿の一つ覚えのように京を目指していた三好三人衆だが、此度は何かが違う。あくまで今までは奴らが主体で動いていたはずだが、今回はなんとというか駒のような動きを演じているような気がする)

三好三人衆の野田福島の動きから敵の目論見を逆算してみる。

おそらくは初回の武田侵攻の時の俺の動きに近い。あの時の俺は信奈公の足止めに徹して、武田信玄を待っていた。野田福島と桑名の水塞は立地条件が似ていて足止めをしやすいのだ。

(……だが、あいつらは誰を待っている?)

武田のような決定的な戦力を持つ勢力はそう多くはない。

だが、まだ武田は動けないはずだし浅井朝倉は合力してももうそこまでの力はない。

ならば、毛利か?

そう思案を重ねていた時、山岡殿からの細作が旅籠で待ち構えていた。

「殿、姫様から伝言です。本猫寺が動いたと」

「……そうか、ありがとう。それで信奈公や山岡殿はどうした?」

「すぐさま野田福島の包囲を解き、吹田に退いたと」

続けて聞いた信奈公の動静に俺は舌を巻く。

流石は信奈公。軍の進退を弁えている。戸惑って少しでも移動が遅れれば、河川に挟まれた死地で本猫寺と三好三人衆の挟撃を受けていただろう。だが、それでも最悪の事態になっていないだけだ。

「本猫寺が動いたとなれば、伊勢長島と三河が荒れる。織田政権の動きが止まるな。山岡殿にその二ヶ国の警戒を務めるように伝えてくれ。それと浅井と朝倉は今どうなってる？ 正味、今の信奈公の状況は奴らが停戦を破ってでも攻めかかるに足るものだと思っっているんだが」

「殿のご懸念通り、両家は動きました。浅井長政は虎御前山に陣取る竹中半兵衛と浅野長政の隊を攻撃。朝倉義景は西近江を下り、坂本に迫らんとしています」

「そうか。これまた手厳しいことになってるな……。俺はまだ帰れないから蒲生氏郷に宇佐山城に救援の指示を。おそらくそこが激戦地になる」

略礼して細作は去るのを見送り、ため息をついた。

平時から急転直下で非常事態である。これには苦笑いを禁じ得ない。

結局のところ、信奈公は伊勢の大戦と同じ構図に嵌められた。

タンク役の三好三人衆と石山本猫寺に、メイン火力の浅井と朝倉。時間が経てば武田の再々西上もありえるか。

いささか面子が小粒に見えることはそんなことはない。これで確実に織田政権は停滞を余儀なくされる。にやんこう宗とはそれだけ手がかかる連中だ。なにせ史実での織田信長は石山戦争に十年を費やしたのだから。

——そしてにやんこう宗の門徒が形成する公界は武家社会や朝廷を受け付けない治外法権だ。例えば罪を犯した門徒が公界に逃げ込んでしまえば、こちらは安易に手を出せずにお手上げになってしまう。これでは法治国家としては示しがつかないし、税金逃れも横行するだろう。

三武一宗の法難と呼ばれる中国の仏教に対する弾圧もこの税金逃れを取り締まるためという側面があった。

ともかく、信奈公が戦略のために大坂を得たいように、俺にも畿内の秩序のためにはにゃんこう門徒の公界は破壊すべきだという信念がある。

奇しくも石山本猫寺は俺と信奈公の双方にとって宿敵と言えるのだ。

「観音寺に大筒を運び入れたら、また信奈公のところを足を運ばなくてはな……」

やるべきことが増えてまた肩の荷が重くなる。知らず足取りも重くなっていた。

*

堺の津田宗及邸にて。

得意先との茶会と称して宗及は密かに反信奈の首魁たちを集めていた。

「よもや、武田信玄がしくじるとは思うとりませんでしたなあ……。そこのところどう考えてはるんですか、無人斎殿？」

「算盤を弾くことしか脳にないうらなりがよう吠える。……が、儂も強くは出れん。勝千代の愚か者めが、目先の勝利に釣られて大魚を逸しおった。時間をかければかけるほど織田と六角は大きくなるぞ。次の機会などそう容易くは転がってはおらぬわ」

津田宗及と無人斎の折り合いは悪い。

宗及は無人斎を傲岸不遜な慮外者として嫌い、無人斎は宗及を銭のことしか頭にない青二才と侮蔑している。

普通なら到底この二人が杳を並べて歩を進めることなどできない。ない。

が、その異常を成した者もまたここにいる。

「二人とも、喧嘩はよそでやってくれないかな？　ただでさえ狭い茶室に男三人女一人詰め込んでるんだよ？　騒がれると鬱陶しいことこの上ない」

苦笑いを浮かべて少女が二人のとりなしに入る。

すると宗及は恐縮して、無人斎は眉根を寄せながらも座り直した。

「流石は姫様」

「うるさい、篠原。この二人は私の血の持つ権威に従っているだけだ。……まだ実力で黙らせてはいない。だから褒めないでほしい」

篠原長房の阿諛追従に少女は辟易した顔を浮かべる。その顔すらもどこか気品に溢れていた。

「まあ、無人斎殿。武田信玄のことは残念だったが、彼女に三度目の機会を訪れるよ。そのために私が三好三人衆と宗及殿、朝倉義景に命じたのだから。宗及殿、本猫寺に働きかけてくれてありがとう」

「ははっ」

「六角高村。その才覚と立ち回りは認める。下手をしたら武田信玄に並ぶ当代きつての名将だろう。けれど、武田にまでキリスト教の布教の許可を広めたのは勇足だったね。おかげで本猫寺は警戒心を抱いてくれた。包囲網を敷きやすくて助かったよ」

くつくつと愉快そうに彼女は笑う。

「西近江を経て朝倉が京に入り、三好三人衆と武田が輔弼する。三管領は多すぎたから朝倉と武田が管領家でもいいや。將軍を僭称した今川義元は姫武将だけど打首だね。……まだ幕府は終わらせはしない。この足利義栄がいる限りは」

第十四代室町幕府將軍・足利義栄。

前時代の亡霊がまたも織田信奈に襲い掛からんとしていた。

第83話 若紫

「いつまで寝ておるんじや、長夜叉ツー!!」

寒空の下、一人の少年が腹を蹴り上げられて宙を舞っていた。

鬼のような形相で蹴り上げた老人は怒鳴る。

周囲には少年の父もいたが、その乱行を咎めることが出来なかった。

老人の名は朝倉宗滴。

朝倉家の軍奉行として貞景と孝景の二代に支え、朝倉の武威を天下に轟かせた柱石である。朝倉の宿敵であるにやんこう一揆を一身に担い、細川高国派として六角定頼と共に足利義晴を推戴して戦ったこともあるという武功はあまりに大きく、当主の孝景ですら下手な口出しをすることはできない。

そんな宗滴だが、もはや老いていた。ゆえに長夜叉の代にまでその活躍に頼るわけには行かない。主家の先を案じたゆえのしごきではあったが、それで父の孝景は納得しても当事者たる長夜叉には受け入れがたかった。

(何故だ。何故に当主の息子として生まれただけでこのような仕打ちを受けねばならないんだ……)

痛みに呻きながら長夜叉は内心でぼやく。

高村や長政あたりが聞いていれば「それこそが血の重みだ」と言われるような長夜叉だが、不幸なことに彼らと長夜叉は性向が違った。

なんだかんだで彼らは自らの運命に対して真摯であり容易く避け得ないことを理解し強く自我と結びつけることができた。

だが、長夜叉の自我は当主としての運命に紐付けられることはなかった。ただ彼の自我は今亡き母に向いている。彼の母は長夜叉を産んですぐに早世しており、物心がついた頃には宗滴のしごきが始まり、守ってくれると信じていた父はそれを果たしてはくれない。

幼いながらに長夜叉の心は冷めていた。愛というものを感じられ

ずに育ったが故に。

(ああ、母上こそ存命であるならば、ぼくに愛を与えてくれたのではないか)

長夜又は長じると源氏物語に傾倒した。厳密に言えば光源氏にか。多彩な女性遍歴の中で光源氏は母の桐壺の女御の面影を探す。内心、長夜又は自分も光源氏のような男になるのではないかと予感していた。

けれど、時代は平安ではなく戦国。

風流など脇に置かれ、力こそがものをいう時代。そんな時代にあつて繊細な長夜又は宗滴の目には軟弱に見えて仕方がなかった。

「呆けておる暇があるなら、立て！ 立って太刀を持って！ その軟弱な性根を儂が叩き直してやるわっ！」

宗滴が怒鳴るも長夜又は立ち上がらない。痺れを切らした宗滴が長夜又の頭を掴み上げ、無理やり立たせた。長夜又の足つきはふらふらだが、目だけはしっかりと宗滴を睨みつけている。

「じじ様、何故当主が刀を持って戦わねばならぬのですかっ！ そのような事態になれば、朝倉家はもはや滅んだも同然ではないですかっ！」

「滅らさず口ばかり上手くなりおって……。だが、口ばかりでは渡れぬのが乱世ぞ。剣術よりまずお前は気概が足りぬ、敵に立ち向かう意志なくば当方滅亡ぞ！」

叫びつつ、宗滴はまた木刀で長夜又を打擲する。

痛み共に長夜又の視界は閉じていく。

「一度は齒向かって見せたとはいえ、この程度か、情けない。六角の新十郎、浅井の猿夜叉丸、織田の吉……諸国にはとうに英傑の卵が産まれているというのに……。ああ、この小倅に越前を託さねばならぬとは。不安で仕方ないわい」

ぼやく宗滴の声は長夜又にはもう聞こえなかった。

「あーあ、また扱かれてるね……。宗滴さまは怖いからなあ。新十郎も怖い怖い言ってたし……。あ、起きた」

痛みに堪えながら自室で目覚めると来客がいた。

元服を間近に控えた自分より一回り下の少女。未だ十にもならない年だが、栗色の髪は艶やかで顔立ちも極めて整っている。将来、確実に絶世の美少女となり得る資質を秘めていた。

「長夜又お兄ちゃん、今日も源氏物語の続きを聞かせてよ」

「ああ、いいとも。次郎姫」

朝倉孝景と六角定頼。両家の当主は共に高国派として戦い、浅井亮政の対処も行なったことから亮政の息子の久政が六角に従属し、その必要がなくなっても両家の交流は僅かながら続いている。

宗滴から絶賛を受けている六角新十郎には長夜又は近づき難かったが、その一族の次郎姫とはウマがあった。年に一度、次郎が来訪した時に源氏物語をはじめとする風流趣味を共有することが長夜又の楽しみだった。

長夜又の一族には孫八郎がいるが上昇志向が強く長夜又との相性は良くなく、孝景は風流好きの性向こそ近しいが病弱で頼りにはできない。宗滴は言わずもがな。朝倉家中で長夜又は独りだったのだ。
(次郎姫がぼくの妹だったのなら、何かが違ったのだろうか……)
だからこそ、誰か自分を見てくれる女性を長夜又は欲していた。

長夜又と次郎姫の邂逅はこの年限りとなる。

翌年、長夜又は義景になった。

……

「懐かしい夢を見たものだ……。まさか、今更宗滴と次郎姫の夢を見るとは……」

午睡から目覚めた義景は目を擦る。

義景の幼少期は宗滴の地獄の調練によって占められていた。

「次郎姫、今は六角義定と名乗っているようだが……。さぞや美しく育ったのだろうよ」

義景と義定はその後顔を合わせることはなかった。

伝え来る噂話では『江南の太陽』とあだ名されているようだが、義景はその噂を鼻で笑った。

(次郎姫は確かに冠絶した美貌の幼子であったが、太陽に比するよう

な性質ではない。あれは光幽けき月のような女子ぞ。掠れた心を風流で糊塗するような悲しき女子ぞ。そのような評価など似つかわしくない。……ゆえに、余の若紫たり得なかつたのだ」

小姓を呼んで自分が寝ている間に大将の代理をさせていた久政を呼ぶ。

姉川の戦い以後、浅井久政は長政のそばを離れ朝倉義景の近くに身を寄せていた。浅井の采配にもう関わらないという久政の意図もあったが、姉川以降戦意が落ちた長政を離反させないための人質としての側面も強い。

「義景どの。宗滴どのをお恨みなされるな。大名の子育てとはままならぬもの。まして世継ぎともなれば。わしは猿夜叉丸には何もしてやれなんだか……むしろ苦しめてばかりよ。……それでも、あやつはあやつ自身で大きくなりおった。嬉しい反面、親としては情けない」
「夢を聞かれていたか……。久政どの。貴殿の方が悔いているだけ親としてはまだマシなものよ。宗滴と父上は何も迷ってはいなかった。それが正しいのだと信じ切っていた」

「それは宗滴殿らの器よ。わしとは違う」

落胆する久政に興味をなくし、義景は戦況が書かれた手元の書状に目を写す。

坂本を抑えた宇佐山城は後詰に來た蒲生氏郷隊ごと攻め潰した。宇佐山城の主将の森可成と蒲生氏郷の叔父の青地茂綱は討死し、氏郷自身は森家の残党を引き連れ洛中に移動している。

「叡山は織田との和睦を守る以上、叡山越えはできぬか……。ならば、大津まで回り山科に入るとしよう」

織田信奈は摂津で動けず、伊勢長島で六角の動きを牽制した。京は目前にまで迫っている。義景はひとりほくそ笑んだ。

*

だが、結果として朝倉軍の進撃はそこまでだった。

大津を越え、山科へ向かう途上の逢坂の関にて、待ち伏せを受けたのである。

「近江はうちの庭だよ？　そこで好き勝手できるとは思わないで欲し

かったなあ……」

「親父の仇だ！ 者ども討ち取れ！ 首を取るだけじゃ足りねえ！ 内臓を引き摺り出して惨たらしく殺せ！」

坂上からの義定の弓隊による撃ち下ろしに山腹に潜んだ蒲生氏郷と森長可ら宇佐山城の残党によるゲリラ戦法。

数こそ少ないが容赦ない戦意で襲いかかる義定軍に朝倉軍は押されていく。

（連中の異様な士気はなんだ？ なにゆえにこのように鬼になれる？）

理解できないものには恐怖を感じる。おおよそ武士とはかけ離れた存在である義景には仇を討たんとする森家残党の意地は理解しかねた。

代わりに目に映るのは崖上で指示を出す義定の姿。

栗色の髪はそのまま長く伸ばされて戦陣の中でも映える。

緊張に引き締められた相貌は昔よりもなお凛として美しく。

織田信奈という運命に想い定めていた相手がいながら、義景は……長夜又は見惚れていた。

（あの次郎姫がかくも輝く美しい姫君になるとは。太陽と謳われるのも納得よ。随分と美しく育った。仮に織田信奈より先に出会えていたならば、余の理想とする紫ノ上となっていたやもしれぬ）

義定の艶姿に目を細めながら、義景は軍を引かせた。ここで義定に目を焼かれて我が物にしようとするほどの熱意はなかったのだ。

だが、義景の慕情はともかくとしてこの好機で逢坂を抜けなかったのは戦略的に手痛い。

なにせ織田信奈に、そして六角高村に事態に対処する時間を与えてしまったのだから。

第84話 罪科を背負う

観音寺から吹田まで輸送の遅れを取り戻すかのように高村は駆けた。

畿内及び洛東で火急の要件かつ密に話し合いの時間を持ちたい場合、乱波による書状では物足りない。なんだかんだで自分自身が走り、参じた方がはるかに効率も質もいいことを高村は知っている。

「まあ、だから俺の仕事が増えるんだろうけどな……」

ぼやきつつ、高村はかき集めた情報を精査する。

宇佐山城で手痛い被害を負った蒲生隊を退かせ、義定と吉継を当てる。拠点防衛に長けた二人を当てたことで辛うじて朝倉軍に洛中に踏み入らせてはいない。赤井直正も三千を率いてこちらに向かい始めた。

（朝倉軍の戦意のほどは分からんが一万はいる。二千程度の義定たちでは正直心許ない。赤井殿は丹波ではなく丹後から来るから時間がかかるだろう。他から持ってこようにも織田の勢力はにやんこう一揆の対応に追われて一国内単位でしかやりくりできない状況にある。……特に長島がチョークポイントだな）

濃尾勢三国の国境にある長島は木曾三川の中州に守られた天然の要害である。三国の陸路を扼する長島にはすでに2万の門徒が集っており、警戒のために濃尾の織田勢は兵を割かなくてはならなかった。

六角もまた伊勢に方面軍を展開しているが、これは加藤嘉明に領内の門徒をしらみつぶしにするためのものであり長島を想定したものではない。

（あと長政もな……。小谷に無理矢理押し込めないと厳しい）

小谷の浅井長政には相良良晴の分隊が当てられているが、いかんせん半兵衛頼りなのは否めない。本気の長政には抗し得ないからこちらにも六角の方から後詰を出さなくてはならない。

そうなるかどうかの戦線が打開されない限り、畿内に兵はこれ以上

回せない。織田信奈は現有の軍団だけでにゃんこう宗と雑賀衆、三好三人衆に当たらずにはならないのだ。

吹田の織田軍陣地に入ると高村は何度か止められるが「火急の要件だ。信奈公のところに通せ」と凄めばすぐに小姓たちは道を空けた。「うふ、ずいぶんと乱暴な御成ですこと。こどもも覇気を露わにしてはあの娘たちがかわいそうでしょ?」

「事実、急いでいる。久秀どのならば、今の状況が危ういかご存知だろうか?」

「ええ、にゃんこう宗が立ったとあれば畿内最大の危機ですわ。貴方と信奈様は眠れる狂猫を起こしてしまった」

最後に出くわした久秀がにたりとねちっこい笑みを浮かべて高村を信奈のもとに引率する。

久秀もまた事態がどれだけ逼迫しているかは知っていた。

なにせ彼女の旧主の父である三好元長や弟の義賢はにゃんこう宗と雑賀衆に討たれているのだから。

*

高村の来訪を知った信奈はすぐに高村を加えて軍議を始めた。

議題は対にゃんこう宗。

「民と争うべきではない」と主張する良晴により、結論は本猫寺との和睦に傾いていた。その会議の流れを高村は微妙な面持ちで眺めている。

(民を本格的に敵に回すのは、確かに本意ではない。……だが、敵とすべき教団が民と深く結びついている。なにせ、にゃんこう宗は御文と簡素な説法で他の宗派より近い立場で民に教えを根付いてきた。それににゃんこう宗の門徒が寄りどころにしている公界は教団が主催している。民に害意はないと喧伝しても彼らの寄りどころに踏み込むのならば、確実に抵抗されるのは想像に難くない)

思想や理念としては相良良晴の語る言説に高村は理解を示している。

だが、そこにたどり着くための手法がなかった。いや、話し合いの余地がなかった。

本猫寺のけんによの要求は織田政権下での聖俗の二重王権体制を施行し維持することと、土地を寄進してもらい公界を拡張することが含まれており、この条件を信奈は飲めなかった。

だが、民が相手だから武力を使うことを躊躇する。そして躊躇し続けて対応を遅らせれば先に朝倉が、次に武田が京や洛東に侵入してくる。

実に堂々巡りだった。

(和睦できるに越したことはないが、それは問題の先送りでしかないんだよなあ……)

軍議の結果、対にゃんこう宗には和睦という方策に決まり、それは別に長島の方にも門徒の暴発に対応するために2万近くの兵を配することになる。

この長島の抑えに高村は手を挙げた。

「あの辺りならある程度は土地勘がある。久秀殿は畿内に回して代わりに濃尾の指揮権を預けてくれるなら、長島は押さえつける算段が立つんだが……」

木曾三川地域で多度の水塞と羽鳥畷の戦いといった二つの大戦果を得た高村の言葉は重い。期待感に織田家諸将がどよめいた。

「……ああ、そういえばあんたは二回の大戦で大暴れしていたわね。また何か企んでいるの?」

信奈自身も水塞で手こずらされた記憶を手繰り寄せてしまい、眉根を寄せる。ただ、それだけの軍略を持つ男が今は味方なのが忌々しくもありがたい。

「一応な。伊勢に手をつける以上、長島はずっと頭の中にあつた」

「そう、なら任せろわ。お望み通り濃尾の指揮権を預けるわ。稲葉一徹と氏家ト全と話し合つてことを進めるのよ」

「承知した。すぐに領国に戻つて準備を整える」

軽く拝礼して高村は足早に陣を立ち去る。

にゃんこう宗に対して当座の対応を決められたことで織田家臣団には弛緩した空気が流れていた。

だが、彼らは知らない。おそらくは織田信奈も。

辛うじて久秀あたりが予感し得たぐらいか。

この抑え込みはそう上手くいくはずがない、と。

この長島包囲が後世の研究者に「六角高村の最大のやらかし」とま
で言われるほどの事態に発展するとはつゆとも分からなかったの
である。

*

木曾三川地域。

揖斐川、長良川、木曾川。

東海を代表する大河が一齐に流れ込むこの地域では川筋が入り乱
れて中洲が乱立し、土砂の流入が著しいことで河床が高いために常に
洪水に悩まされてきた。

そのため中洲にある集落を守るために堤防が築かれ、それが水塞が
連なるような外観を形成している。

その外観は水害だけではなく、敵兵も寄せ付けないため門徒たちの
楽園になっていた。

「攻めようと思うと非常にやりづらいなんだよなあ、これ」

俺は頬杖をつきながら、長島を眺めていた。

傍には中村一氏に蒲生氏郷。海上封鎖の人員に加藤嘉明と丹後か
ら流れてきた稲富祐直を付けている。

多度の水塞で戦ったメンバーをあらかた集めた格好だった。

「氏郷、一応は準備はできたか」

「工事は一通り。されどいいので？ 万が一の備えとはいえあまりに
大掛かり過ぎるのでは？」

「そのために、水塞を作る時に手をつけていたわけだ。まあ戦後に織
田側で一部破却されてしまったがな……」

おかげでまた直す時に長束正家に「戦になると金遣いが粗い。あれ
ばあるだけ使われるのは困ります」とどやされてしまったわけだが。
「用意させた側が言うことじゃねえが、これに関しては出番がない方
がありがたい。なにせ、あまりに与える影響が大き過ぎる」

打てる手は打った。だから後は石山の方の和睦の進捗を待つばか
りなのだが……。

(どうにも、嫌な予感がするんだよな……)

翌日、俺は悪い予感が当たったことを知る。

門徒たちが尾張や美濃、伊勢に暴発するのを防ぐために敷かれた此度の布陣だったが、俺たちが着陣したという事実そのものがすでに門徒たちを激発させたらしい。

尾張の小木江城を担当していた氏家ト全が門徒たちの襲撃を受けて討ち死にしたという報が届く。

知らず、俺は天を仰いだ。

「すまねえな、相良。申し訳ねえ、信奈公。どうやら、誰かが魔王にならないければにやんこう一揆は鎮められないらしい」

何事もなく和睦が成り、事が収まるという幻想は終わった。

残ったのは血生臭い現実だけ。

……つくづく嫌になる。こんなことになることが薄々分かっていたから、氏郷にあんなものを造らせたわけで。

それは、秩序のためならそのぐらいの犠牲が出ることを許容していたことにもなる。

それが齎す罪科を分かっているながら、俺は定頼さまと同じ轍を踏んだのだ。

第85話 クガイ、法難

氏家ト全討ち死にの報を受けた高村の動きは迅速だった。

すぐに包囲の一部を小木江城に傾けて奪還し、再度包囲を固める。

高村側としてはそれでもなおお事を構える気はなかったが、門徒側は完全に戦う気になっていた。

「今こそ、長島の公界を守る時だぬこ！ 者共、死なば極楽、退くは地獄だによ！」

長島きつての大寺である願証寺の住職が檄を飛ばす。

門徒たちは「にゃー!!」とそれに応じて雄叫びで返す。士気に関してはこの武家よりも高く、かつてはこの熱量で加賀一国を覆い尽くした。

(門徒どもは阿呆だが、これは使える。上手く軍略的に使えば、北伊勢や西濃は切り取れよう。わしや、北伊勢の残党たちの助けにはなる) だが、門徒たちに基本的に戦略や戦術的な素養はない。そのあたりを補うのが、斎藤旧臣だった日根野弘就や高村に取り潰された北勢の毛利家や河村家といった浪人たちであった。

長島の公界は来るものを拒まない。いわば乱世にあぶれたものの受け皿になっており、領国を追われた領主たちや浪人を抱えて瞬く間に総勢二万まで肥大化した。

「住職。小木江は取り返されましたが、まだまだ我々の意気は軒昂なれば、桑名や蟹江を取り来たるべき武田を待ちましようぞ」

「うむ！ 弘就どの。我らは燎原の火だぬこ。このまま織田領を焼き尽くすぬこー！」

住職の威勢のいい返事に弘就はほくそ笑む。

気持ちだけで戦っている門徒は煽れば煽るほど、命知らずに突撃を繰り返す。専門的な訓練をあまりしなくても通用し、数も多い。使い捨ての雑兵としては理想的だった。

*

無軌道なにゃんこ門徒の突撃に高村は手を焼かされていた。

一国を転覆しかねないほどの熱量は本来なら二万の兵で受けるようなものではないのだ。

(だが、ここで押し止められなければ織田領は終わる。軍の進退ができなくなり、三河にまで手を伸ばされるようなことになれば松平家すらも危うい)

力づくでなんとか長島に押し返し包囲する。だが、すぐに再起してやってくる。対症療法だけでは限界があった。

「二氏、大坂の状況はどうだ？」

「どうにも和睦は難航しているようで、使者として送った相良良晴はそのまま人質として囚われたようです」

捗々しくない上方の情勢に高村は頭を抱えた。

(どうする？ 今はまだ押しこめられているが、にやんこう門徒は追いついても追いついても襲いかかってくる。いずれはこちらの方が根負けし、ずるずると被害が増えるだろう)

高村の脳裏にちらつくのは、予め講じておいた策。

この策が上手く機能すれば、自軍の被害は限りなく抑えられることは分かっている。なら、使えばいいと思われるのだが、そう簡単ではなかった。

(あの策を使えば、長島は水に沈む。門徒を殺し過ぎるし、農地もまた潰れる。あまりに非道な策だから敬遠していた。だが、使わざるを得ないだろうか……)

最早、これ以上の被害を高村は看過できなかった。

一氏と氏郷に指示を出し、自らは陣に控える。

この高村の決断を境に長島包囲の意味合いは様変わりすることになるのであった。

*

高村の決断から翌日、長島の門徒に噂が流れ始めた『六角高村が木曾三川の堰を切り、長島の諸集落に水を流し込む』というものである。

この噂に対し、門徒たちの反応は半信半疑であった。第一次大戦の高村の水塞による水際防衛作戦の事を考えれば出来ないわけではない。あの戦で高村は水計で織田信奈の三千を押し流している。しか

し、それだけの席堰を木曾三川の下流域にいくつも用意できるかと問われたら疑問視するほかなかったのだ。

だから、初めは住職は「噂に構わず進軍するのによ」と指示を飛ばす。

しかし、噂は事実だった。

にやんこう門徒が小木江城に再度攻めかかった最中に、堰が切られて長島の北の輪中の三つの集落に川の水が流れ込んだのである。

その晩、高村からの書状が住職に届けられる。これを読んだ住職は身震いした。

『空事だと思つて侮つたな？ 俺は基本的に出来ることしか言わん。悪いことは言わないから抱え込んだ浪人を放つて降伏してくれ。次にまた攻め込んできたらまた一つ堰を切る』

もはや住職は高村の言を否定することはできなかつた。ただ猫耳と猫しつぽをふるふると振るわせるだけ。

自分は恐ろしい相手を敵に回してしまったと震えた。

だが、住職の意に反して門徒たちの士気はあまり下がらない。まだなお戦おうとしている。その裏には日根野弘就の扇動があつた。

「所詮は高村のこけおどしよ。手段がなくなつたからこのような手段に出たのだ。なに、次はない」

弘就にとつて門徒たちがどうなるうがどうでもよかつた。そして門徒たちも恐ろしい噂よりは明るい話題の方を信じたかつた。双方の思惑が戦意を先走りさせていたのである。

二日後。

住職の静止を無視した門徒が再び長島の外に攻め込んだ。したがつて高村は宣言通りに堰を切り、集落四つをまた水に沈めることになる。

「どうするのによ？ このままでは戦う前に本当に長島は沈められるによ……」

「だが、あれだけ大がかりな水計は何度も出来るわけじゃない。そうだ竹を堤防に植えるのだ。そうすれば堰は強くなって水害から身を守れるぞ」

「馬鹿なことを言ってる暇じゃにやいのだ、毛利殿。まともな策を捻り出すのにや〜！」

門徒の中でも二回目の水計は分断を生じさせた。

すでに水計に集落を飲まれた者たちとそうでない者の間に意見の差異が開始する。前者は盛んに進撃を支持し、後者は逆に守りを固めることを求めるようになる。

住職は後者に回り、前者には弘就や北伊勢浪人がついて対立構造が出来上がっていた。水計の被害を受けたくないため、後者の方がやや優勢か。

ただ、それで意見を固めることはできなかつた。

高村側が加藤嘉明と稲富祐直に命じて長島南岸へと安宅船からの砲撃を命じたのである。

「なんだにや、あの船は？」

「あかん、あれには大筒が積まれとる。逃げるのにや〜！」

高村が堺で購入した芝辻砲八門が火を噴く。

火縄銃には見慣れたにやんこう門徒衆であるから、火縄銃よりも長距離から大きい砲弾を放つ大筒の恐ろしさを理解してしまった。

しかも大筒を積んだ水軍に抗おうにも、二回の水計で保有する船の数は格段に減っている。ただただ撃たれるばかりであった。

大筒を止めるにはもう陸路で母港となつている赤堀を制圧するしかないが、攻め込んだら水計でまた集落が水に飲まれてしまう。

「住職様、どうするのにや？」

「住職様、何卒赤堀に向かって進軍する許可を」

「住職様、北の捨て鉢どもを止めて〜な。南部も水に沈みとうない」

「住職様、それがしは死ぬ覚悟ができてござる」

「住職殿、もう諦めて降伏しては？ それがしは所領を取り戻さなくてはならない。長島と運命を共にするつもりはない」

複雑な状況下に置かれた長島はもはやかつての団結力を失ってしまつた。

住職の元に多種多様な言葉が寄せられる。

公界は来るものを拒まない。だからこそ様々な立場の者が流入し

てくる。そして意見も様々。さらに戦局不利と見て高村と通じるものまで出始めていた。

だから、一度まとまりを欠けば再度まとめるのに骨が折れる。

心労で住職はもはや倒れそうだった。

『住職殿、もう十分であろう？ 降伏なされては。俺とて過剰に門徒をいじめて、集落を水に沈めるのは本意ではない。河村殿はこちらに降伏した。間違いなくこちらに降る浪人はこれからも増えるぞ。どうしようもなくなる前に降伏してくれば、住職殿の身柄と浪人の召し放ちだけで長島の民に手を出さないことを約束しよう』

疲れ果てた心に高村の書状に認められた文言が刺さる。

(もう疲れたにや……。これで終わるなら、もうなんでもいいにや……)

ついに、住職は精魂尽き果て降伏を決意するのだった。

*

住職が俺の元に投降し、長島のにやんこう一揆は一応は終結した。信奈公の元に住職を送らせ、俺は軍勢を率いて長島を接收に入る。(堰を二回切った。全部切らないうちに終わったと安堵しているのか、はたまた使ってしまったと懺悔すればいいのか……)

煮え切らない気持ちで長島を闊歩する。

俺は門徒たちの士気の高さと捨て鉢な戦ぶりを恐れていた。加賀を転覆したその力はいくら警戒してもしたりない。……だから、直接戦うことなく水計と大砲による心理的な圧迫によりその士気の中で暴発させ、教団を自壊させることを狙った。公界は構造上、分断させることが容易だったこともある。ちなみに木曾三川全域を沈めるのは流石に出まかせである。実際は集落を十一箇所冠水させる分しか作ってなかった。

ともかく、水計に切り替えたことで兵の被害は数百人に留まり、住職が降伏したことで敵とするべき教団は潰えた。成果だけ見ればこれ以上ない大戦果だろう。

後は門徒の武装解除や怪我人や流人の收容なのだが、これが上手くいかない。分かつてはいたが、苛烈な抵抗を受けたのである。差配し

ていた侍大将が二人討ち取られる事態にすら陥った。

「長島がわいの最後の居場所だったんだがや！ 返せや！ 返せや！
！……うぐ」

暴徒と化した門徒を殴りつけて黙らせる。こうした暴徒の被害は後を絶たない。全体を率いていた住職を失ってもゲリラ戦を駆使して接收を邪魔してくる。

やるせなかった。

勝つため、公界を潰すためとはいえ民生に多大なダメージを与えるような策を取らざるを得なかったことを。

そして、それでもなお至らなかったことを。

「二氏、氏郷、嘉明。民の収容はここまでする。民を引き連れて桑名まで行くぞ。長島を出たらば、街に火をかける」

「……はっ」

長島の完全な武装解除は難しい。ゲリラと化した門徒を制圧するのも同様だ。綺麗事のために無駄に家臣を死なせる趣味もない。なら、こうするほかなかった。

去り際に船の上から煌々と燃え盛る長島を眺める。

目を落とした先の川面に映る赫い炎は、俺の目に焼き付いて離れない。
い。

きつとずっと俺はこの罪を抱えて生きていくのだろう。秩序の守り手と謳っていた手のひらは焦げ付いてもう綺麗なものではない。

だが、それでも掴みたいものがあったのだ。たとえそれが自己の安寧のための天下泰平というひどく手前勝手なものだとしても。

最終的に長島の戦いで水計に沈んだ集落は七つ。長島の寺内町は砲撃と高村による放火で灰燼に帰した。

高村側包囲軍の被害は氏家ト全と六角の侍大将二人と九百人弱の兵。対する一揆勢は集った二万の門徒のうち千五百が討ち死にし、四千人が負傷。何らかの形で生活基盤に失った門徒は八千人に上った。教団側にとって辛かったのは、何より混乱を住職が制御できなかったことによる権威の失墜と分断しやすい公界の脆弱性が露呈したこ

とだろうか。

ともあれ、多大な影響を残した長島包囲を後世の研究者はこれを『長島の法難』と称した。

第86話 鬼ごっこ

織田家と石山本猫寺の和睦は成ったとの報せが届いたのは長島を焼いた翌日だった。和睦自体は焼き討ちの前日にはなっていたらしい。しかし、大坂と長島の物理的な距離の差で報は二日遅れて俺は伝えられることになる。

「織田家と石山本猫寺の和睦が二日前になったでござる。しかし、ちよきしゆでにおしよしだつちやよーにござるにや……」

水計を使わざるを得ない状況に追い込まれていたのは上方の信奈公や相良にも知れていたのだろう。止めるべく相良の忍びである蜂須賀五右衛門が遣わされて来ていた。だが、五右衛門が急いでも間に合わなかった。

「後、二日早ければな……。いや、言うまい。先走ったのは俺だからな」

無意識に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべてしまう。

あと二日だけ水計に切り替えるのが遅ければ、長島を焼き払い門徒を虐殺するようなことはなかっただろう。そう思うとやるせなかった。

「いずれ、信奈公から詰問の使者が来るだろう。……それが、相良だったら面倒くさいな」

五右衛門を帰した後、ひとりごちる。

長島を攻め滅ぼしたことによる利は確かにあった。だが、代わりに俺は人心を失ったのだ。畿内の秩序を守る者の手は焦げ付き血塗られ、もはや虐殺者の誹りは免れないだろう。

「高村様、私は……」

堤を作らせた氏郷もまた顔色を悪くしていた。無理もない、自らが長島を滅ぼす片棒を担ったわけだ。そりゃあ落ち込む。

「氏郷……、いや鶴千代。お前は自分を責めなくていい。責を負うのは俺の仕事だ。悔やむなら門徒たちの御魂を弔ってやれ。それに此度のお前は門徒たちをひどく苦しめたが、ああも見事に川の水の流れ

を操れた。ならば、今度は洪水を防ぐのもできるだろう？ 結局のところ技術は道具に過ぎん、使い所次第で結果は変わる。だから、責められるべきは使い方を誤った俺に他ならない」

鶴千代の頭に手を伸ばして撫でようとすると、俺はすぐに手を引つ込める。どうにもこの癖ばかりは治る気配がない。もう昔の妹分としての鶴千代はいないというのに。

「慰めてもらって悪いわね。……けれど、本当は新十郎様が慰められたかったんじゃないかしら？」

「それぐらいは自分自身で折り合いをつけるさ。家のために必要……おそらくそう言い聞かせれば、なんとかなるだろ」

「中途半端に樂觀的よね、新十郎さまって」

呆れたように笑う鶴千代。何やら言い草はひどいが、まあ元気が戻って何よりだということだ。

信奈公から詰問の使者が着いたのは観音寺城に帰ってすぐのことだ。

その使者がまさかの明智光秀。

俺は快樂亭の茶室で義定と並んで茶を点てながら彼女を出迎えていた。

「使者の行き違いこそあったとはいえ、何をしてくれてやがるんです高村殿オ！ おかげでまたにやんこう宗の反対派が勢いづきやがったんですよ？ せっかく結んだ停戦なのについてまで保つか分からないですう〜！」

両手でバンと畳を叩いて身を乗り出してくる光秀。うむ、でこが広い。

「悪いとは思ってるが、理念がハナから合わない連中だ。停戦できたのは重畳。が、その場しのぎ以上にはならんぞ。やっちまったもんは仕方ねえ、大事なはこの僅かな間を使って何をするかだ」

散々反省して自己嫌悪したため、もはやこの件に関しては開き直っていた。掘り返すのも億劫なので、光秀に話題の転換を促す。

(……俺の格を考慮しても、ただの叱責のためにわざわざ明智光秀を

使う意味はない。おそらく信奈公は戦略の聞き取りも兼ねさせている)

「どうやら俺の投げたボールはちゃんと光秀に届いていたらしい。居住まいを正し、咳払いをしてから話し始める。」

「ごほん、ともあれ長島一揆が潰れてにやんこう宗が停戦に入ったことは畿内に大きな影響を与えましたです。摂津に籠っていた三好勢は阿波に退き、堅田にいた朝倉軍は小谷城に移動。領国に籠りがちな義景ですが、あまり軍勢に被害が出ておらずまだ降雪には早い季節だからか畿内に残る選択をしゃがったようです」

「驚いた。まだそんなやる気あるんだ、長夜叉お兄ちゃん」

「俺はやる気だけではないと思うがな」

義定が目を丸くする。確かに朝倉義景にとつては異常な行動だろう。だが、逆に朝倉が放つて置けるほど浅井の勢力は残っていないという線もある。

つい先日、浅井でそこそこの武名を誇っていた宮部継潤や小川祐忠が寝返ってきたばかりだ。

「上杉は足利義輝を弑殺した三好陣営には組さないと表明しているし、毛利の動きは鈍い。……武田はまあ動かな。浅井朝倉だけではもうあの女の重い腰は上がらんだろう」

言っていて気づく。

おそらくは今こそが浅井朝倉を除く千載一遇の好機なわけで。

その俺が気づけるようなことを目の前のキンカン頭が気づけないわけがない。言動こそやや三下嚙ませが混じっているが、明智光秀は確かな実力で新参でありながら俺と並ぶ方分にまでのし上がってきた才女なのだから。

「ならば、浅井朝倉を片付けるです。高村どの、その軍才をお貸し願うですう」

だから、辿り着いてしまう。

出来ることならば、俺が無視していたかった結論に。

「……ああ、そうだな」

真摯に頼み込む光秀を前にして俺は首を横に振れなかった。

そうすると不自然だということもある。が、なによりもあいつとの決着に自分が介在しないということもそれはそれで嫌だった。

それからは術策の出し合いになった。

俺と義定は浅井長政と朝倉義景の古い知己であり、光秀は美濃から落ち延びて足利義輝の奉公衆になるまでの繋ぎで朝倉家に仕えていた過去を持つ。敵将の性質や敵国の地理まで知悉したこの三人は織田家中の中でも対浅井朝倉のプロフェッショナルと言っていていい。割とすぐに戦略の雛形はできた。

「流石は高村どの。この戦略で浅井朝倉も一網打尽ですう。私は岐阜に戻って信奈様に掛け合ってみるです。これで私の出世は間違いない。相良先輩も私にひれ伏して私との結婚を乞い願うはずですう」

「是非ともそうしてくれ。おそらくは通るだろうよ」

機嫌を良くして妄想を垂れ流す光秀を見送りながら、俺はまた茶を点ててこれをぐいと飲み干した。

そんな俺を見て義定が声をかけてくる。

「思ったより落ち着いてるね、新十郎」

「落ち着いてるというよりは諦めたが近いがな」

迫り来る運命からは逃れることはできない。今までは未然に防ごうとする方向で動いてきたが叶わなかった。どうやら何がなんでも俺たちの決着の場所は小谷城でなくてはならないらしい。

だから、俺は諦めて運命を直視した。

運命と真っ向からやり合う覚悟をした。

その果てに彼女が何を思うのか。おそらく全てはそれ次第だ。

あらかじめ布石として藤堂高虎に手紙を届けさせてある。

「あいつがまだお市でもあるならば、一縷の望みはある。それに約束したしな」

もつともあいつがあれば真に受けているかはわからん。少なくとも俺は真に受けてるけども。

「そう。なら、わたしは別にいいけど」

「むしろお前はどうか？　かなり義景と仲が良かっただろう」

「ああ、それね……」

逆に問われて義定は言い淀む。

風流狂いの義景だったが、義定とはかなり波長が合っていたように思う。祖父である定頼さまにすら少し隔意があった彼女が素直に懐いた稀有な存在であり、今の彼女の風流趣味の源流には間違いなく義景がいた。一種の師弟関係と言つていいかもしれない。

「長夜叉お兄ちゃんと戦うこと自体は別になんとも思わないよ。正直、その辺りの割り切りは新十郎より上手いし」

地味に毒を吐いてきやがりながら、義定は「ただ」と続ける。

「わたしは新十郎を得られたけど、長夜叉お兄ちゃんは最後まで得られなかったんだなって。隣にいてくれるだけで満たされるようなそんな人をついぞあの人は得られなかったんだなって。そう思うと可哀そうに思えてくる」

ただただ義定は義景を憐れんでいた。

かつて家中に居場所を得られなかった同類として互いの傷を舐め合うような関係性だったからこそ、彼の痛みもまた理解し共感していたのだろう。

「ねえ、新十郎。十兵衛と話していた時はわたしは小谷城の担当だったけど、やっぱり越前に移っていい？ ……たぶん、あの人はこのままだと一人で死んでしまう。まあ自業自得なところはあるけれど、それでもやつぱり寂しい」

「それは別にいいぞ。互いに悔いなくやるべきだ。 ……それがどんな結果になろうとも、な」

互いに頷き合つて、お茶を流し込む。

茶室に辛気臭い空気が漂う。だが、致し方ない。

おそらく互いにこれが最後の機会になることを予感していた。

親しい人との別れを覚悟した時というのはだいたいこんなもんだ。

*

小谷城の向かいの山に位置する虎御前山に木瓜と隅立て四つ目の旗がひしめく。よくよく見れば、織田信奈と六角高村両名の馬印が窺えた。

推定二万の織田六角連合軍が着陣するやいなや、小谷城内の空気が

変わる。

「見たか、長政。織田信奈の馬印があるぞ！ 本猫寺が停戦に合意したと聞いた時は諦めていたが、どうやらまだ余にも天運があつたらしい。この度を逃せば余が織田信奈を得る機会は無い！ 戦うのは今ぞ！」

朝倉義景が一人狂喜乱舞する一方、久政や浅井家臣団はだんまりを決めていた。

口は悪いが彼らは義景の信奈狂いを遊びとしか思っていない。義景はまた領国を攻められていないからまだ遊んでいられる暇があるのだと。

一方で浅井はもう後がない。家臣団もかなりの数がすでに降伏している。助けは朝倉義景が連れてきた一万二千のみ。武田を待つとかなるとかなり長く耐えなくてはならないだろう。あるいはもう武田信玄すら浅井を見限っていてもおかしくはなかった。

「義景殿はともかくとして、殿はどうされます？」

沈黙する家臣団を代表して高虎が長政に問いかける。

「……決まってる。抗うほかないであろう。抗って生きるほかないであろう。……それがどんなにか薄い光明の先にあるものだとしても、私は自分から歩みを止めることはしない。死にたくない気持ちもあるが、なによりもここで戦うことを止めたら私は私を許せそうにない」

淡々と告げる長政。

その確かな戦意に家臣団達は湧き立った。

ただ、誰も気づかない。

密かに袴の袖の裏に隠した高村が送ってきた書状を握りしめていたことを。

（待っているぞ、新十郎。必ずやこの小谷城の本丸に來い。そして、この書状に自ら書いたことをしかと果たせ）

長政は、猿夜叉丸はどうに決めていた。最後まで戦い抜いて、それでいて新十郎を本丸で待つ。自分が斃れた時はその時だと。

（どちらが先かだなんて、まるで鬼ごっこみたいだな）

家臣団や義景が軍議で白熱する中で、不意に長政はそんなことを思った。

第87話 臆病者

先に仕掛けたのは浅井朝倉の方であった。

小谷城の斜面を一万を超える軍勢が駆け降りてくる。

「この戦いぶりは優雅ではないがな……。余は血と泥に塗れても織田信奈を手に入れる！」

朝倉勢の先頭に義景自身が立つ。

戦を嫌う義景だが、朝倉宗滴の薰陶を受けたからかその武人としての実力は思ったよりも高い。なにより、当主自身が果敢に働くことこそが朝倉軍の士気を上げたことに意味がある。

なにせ、義景自身の動機はともかく「ここ小谷城こそが決戦の地だ」と諸将が腹を括ったのである。

家中随一の将である朝倉景鏡こそ連戦の疲労で帰国したが、山崎吉家らの働きは大いに織田の包囲陣を揺さぶった。

「文弱かと思えば、なかなかやるではないかあの御仁は。叶うなら最初からそれぐらいの意気で戦に臨めば、こうも苦しむことはなかったわけだが……。いや、言うまい」

戦線に朝倉義景が立つ一方、浅井長政は物見台から身を乗り出して虎御前山と小谷城の間の狭い平野を食い入るように眺める。浅井長政とその旗本三千は今や浅井朝倉が持つ数少ない決め手となりうる。長政はあえて先陣に出すのを控えてその投入時期を見定んとしていた。

（織田が一万三千、六角が七千……。武田への牽制があるにしろ兵数は織田にしては少なめだな……。よもや、罨か？ いいや、だとしても食い破る他ない）

この織田が一万弱しか連れていない状況は義景にとっては信奈を捕える好機にしか映らない。だが、それがおそらく高村が敷いた罨なのだろうと長政は推測する。

朝倉義景の信奈狂いは明確な弱点であり、確実に義景の大局観を曇らせるだろう。あの高村がそこを突かないとは長政には思えなかつ

た。

「高虎、いるか？」

「ここに」

「小谷城の尾根を渡り、山崎丸の辺りに移動し六角軍を見張れ。私の読みが正しければ、六角軍は朝倉軍を突出させてその側面を狙うのだろう。怪しい動きを見せれば、すぐに駆け降りてその出鼻を挫け」

藤堂高虎に備えをさせ、長政は戦局を見守る。

予想通り朝倉軍が突出し織田軍は引く、対して六角軍は西側面に回り始めた。

「ここだ！ 高虎に指示を出せ！」

長政が采配を振り下ろしてから僅か数瞬で指示が山崎丸に届く。

高虎は栗色の髪を靡かせて斜面を駆け降り、六角軍に食らいついた。

「やはり長政。手は打っていたか。まあ致し方ない、お前相手なら読まれて当然か。だが、ただでやらせるわけにはいかんなあ」

この対応には高村も苦笑いを隠せない。

軍才名高い高村とて一人の間人である以上、思考に癖というべきものが存在する。その癖をこの天下で誰よりも知悉しているのが幼少期を学友として共にした浅井長政であった。

だが、高村もまたそれは分かっている。信頼厚い加藤嘉明を置いている。

「またお前かッ！」

「……うるさい女だ……」

高虎はいきり立ちながら、嘉明は辟易しながらも互いの得物で打ち合いを始めていく。野良田以来の腐れ縁が、ここでも結ばれることになる。

主張が強い高虎と要らぬ言葉は話さない嘉明。互いの性向は真反対ながらもその有能さと武勇は肉薄していた。

かくして六角と浅井が互いを食い合い、朝倉軍は狂奔する。

ただ織田家のみが苦戦を強いられる格好だが、この織田の劣勢は半兵衛によってある程度操作されていたものである。義景を釣るため

というのもあるが、ただ織田信奈は時を待っていた。

「……来たわね。もういつまで待たせたら気が済むのかしら」

いらいらしながら床几に座る信奈の元に届けられた一通の書状。

書状を持ってきた密使が何事かを信奈に伝えたと同時に信奈は破顔する。なにせ、それはそのまま高村と十兵衛が描いた絵図の成功を伝えるものだったのだから。

「デアルカ。すぐにその報、浅井朝倉に触れ周りなさい。喜びなさい、これで浅井朝倉の征討は成ったも同然だわ！ 半兵衛と六にも伝えなさい「暴れていいわよ」ってね！」

*

信奈の下知により、織田軍の色は変わる。

竹中半兵衛の緩急をつけた采配に柴田勝家の猛攻。押されつつも緩やかに構築した鶴翼の陣を閉じた。

尾張弱兵なりに考え抜かれた反攻態勢。

だが、何よりも戦局を変えたのは先ほど信奈に伝えられた「明智光秀ら畿北方分軍一万二千が丹後から若狭国吉城入城」の報が朝倉軍に知れ渡ったことだった。

若狭の東端にある国吉城には十年來朝倉家に抵抗してきた粟屋勝久がいる。にやんこう宗に次ぐ宿敵と言っていい彼と一万二千の明智軍が手を組んだなら次は敦賀に軍を進めてくることはすぐに予期できた。

「なるほど、そう来るか高村は……。あいつは小谷城を落とすだけではなく、浅井朝倉両家との決着をここでつけるつもりだな……」

高村の狙いを悟った長政は長く息を吐いた。

そうしなくては複雑な胸のうちを整理することはできない。

もう、自分とは戦局を見る視座が違うと思いきらされた。もはや高村は織田政権の一大名としてではなく、天下人と並んだ場所に立っている。

もう高村はかつてのように全力でぶつかり合う好敵手として自分を見ていない。姉川で一度明確な格付けをされたとはいえ、その事実が長政の……猿夜叉丸としての自尊心をいたく傷つけた。

(だが、それでも私はお前をずっと見てきた自負がある。だから、そう易々と倒されてやるものか)

ただ一つ、高村の策を打ち崩せるその一点が長政にはずっと見えていた。

織田信奈。

政権の要石である最重要人物が義景を釣るためとはいえ常と比べると格段に少ない兵で小谷に突出している。やはり、ここを狙わない手はない。

朝倉は今現在はこの若狭の急報に慌てふためいている頃だろう。しかし、ここで織田信奈を倒せる目があると分からせられたなら、あるいは。

「皆の者、出るぞ……！ 狙うは織田信奈本陣。これが最後の大打打ぞッ！」

やはり、朝倉の気を惹きつけるほど好転させるには自身と虎の子の旗本三千が出るしかない。長政はそう決断してついに小谷を出た。

「何故だッ！ 姉川の相良良晴といい、織田信奈が間も無く余の物になろうという時に何故こうも邪魔に入るのかッ！」

長政が毅然と最後の大打打に打って出た一方で、義景は髪をかきむしりながら絶叫する。

不幸なことに敦賀からの火急の使者によつてばら撒かれた噂が事実だと裏が取れてしまったがために義景は惑った。

(ここで引けば、織田信奈はもはや得られまい。しかし、むぎむぎ越前に敵を通すのも腹立たしい)

総大将が迷えば、朝倉軍は停滞する。宗滴は亡く、景鏡は小谷までは来ていない。山崎吉家こそいるが、彼は具申こそしても決定実行する裁量はないのだ。

迷う義景の横を小谷城からの旗本三千が通り過ぎる。

先頭には長政が立ち、皆が皆死を覚悟した面持ちをしていた。

義景の姿を見つけた長政が馬上から叫ぶ。

「義景殿ッ！ 帰るか行くか、疾く決められよッ！ 今の我が家にはもはやそのような贅沢な時間はない！ 二家合わさって織田信奈本

陣を攻め落とさねばこの戦は勝てはしない！」

「余は……」

義景は思わず息を詰まらせてしまい、長政の問いかけに答えることができなかった。

重なったのだ、今の長政とありし日の朝倉宗滴が。

戦という死地に躊躇いなく踏み込める修羅の圧が義景を知らず縮こまらせていた。

長政はついで義景の回答を求めず、織田軍に突撃していく。

少く見積もつても四倍の兵力差に臆せず、激しく旗本たちに流血を強いながらも進んでいく。このままならもしや、と思わせる勢いであった。

「余は……！」

だが、義景は采配を振り下ろせなかった。「浅井長政に続け」と声を張り上げることができなかった。

恐ろしくて仕方がなかった。信奈への愛を狂気に変えてなお、義景の……長夜叉の臆病がそれに勝った。

(駄目だ、余は宗滴にはなれぬ。心から修羅にはなれぬ。あの激しき戦いに交われる気がせぬ。……すまない、長政殿。余はどこまでもいつても臆病者でしかなかったのだ……！)

力無く、義景はだらりと采配を下げる。

そして静かに命を下した。

「越前に帰る」と。

静々と退却する中、頭の中で宗滴が「臆病者」と自身を詰る声こだまする。義景は振り切るようにひたすら馬を走らせた。

第88話 餞別

浅井長政の旗本隊が突撃してからというもの浅井と織田の本隊は激しい乱戦状態となっていた。

遮二無二に長政はその槍の冴えで敵陣を穿ち抜き、獯猛な死兵たちがその破断点をさらに押し広げる。

ある程度、周囲の敵を薙ぎ払い終えた長政は馬を止めて近くに寄ってきていた脇坂安治に問うた。

「無心の境地で敵を討っていたゆえ分からぬが、今朝倉軍はどうしている？」

「恐れながら、殿の後に続いた形跡はありません。どうやら越前へと撤退した模様です」

「そうか……」

長政は思わず天を仰ぐ。

期せずして一世一代の大博打が不意に終わったことを知った。

織田軍の半ばまで攻め入ったものの、四倍の兵力差は如何ともしがたい。姉川の戦いの時に見せた勢いを恐れた織田軍が万全の対策を施していたこともあり、ついに長政の勢いは伸びあぐんでいる。

ここに朝倉軍が後詰として付いていたならば、まだやりようがあったが帰られてしまった以上はどうしようもなかった。

義景を詰りたい気持ち湧き上がってくるが、脇に追いやる。

「高虎に朝倉に退路を助けるように申しつけよ。我が浅井の滅びに義景殿まで巻き込むのはあまりに忍びない。我らも小谷に戻ろう。これ以上の戦いは徒に兵を擦り切らせるだけだ」

「殿……」

「安治。私たちはやれることは充分にやった。その上で届かなかつた。ならば、もう悔いはない」

退却の下知を出し、長政は馬首を翻す。

そんな長政を直指して柴田勝家と滝川一益ら織田軍の誇る勇將たちが迫りくる。

「浅井長政ッ！ お前はここで姫様のために死ねッ！」

裂帛の気合いで押し通らんとする柴田勝家に追い立てられていく浅井軍。長政は敢えて自ら殿に立って奮戦したが、分が悪かった。

天を裂くような銃声が長政の鼓膜を震わせる。

そして、右肩に激しい痛みが走り出す。もう槍を持つてはいられない。たまらず長政は槍を取り落としてしまう。

「姫の種子島も捨てたもんじゃないであろう？ 暴れるだけのかっちーじゃ出来ぬ芸当じゃ」

痛みにもうめく長政を見て勝ち誇った笑みを浮かべる滝川一益。彼女は暴れる柴田勝家の影に隠れてひたすらに銃撃の好機を待っていた。

（音に聞く滝川左近か……。確かに素晴らしい腕前だ。だが、そなたに私の命をやるわけにはいかない……。なにせ、新十郎と約束したのだ。小谷城の本丸でお前を待つ、と）

痛みを耐えながら長政はすると殿から隊の中に後退する。代わって出てきた旗本衆の豪傑七、八人の命を捨て石にして漸く長政は死地を脱した。

「長政が小谷に退いたならもう六角と良晴の軍だけで対処できるわ。これからは当初の予定通り朝倉軍を追うわよ」

長政が退いた後、信奈は態勢を整えて朝倉軍の追撃に入ることを決断する。

長政の抗戦と采配により想定より攻めるのが遅くなったがまだ修正がきく段階であった。

残されたのは相良良晴隊と六角軍。

「さて、猿夜叉丸。俺はこれから約束を果たしに行く。……だから、まだ死んでくれるなよ」

未だ悠然と聳え立つ小谷城を見上げながら高村は呟いた。

*

朝倉軍は疲労困憊の有様で北国街道を北上していた。

小谷城下での激戦の疲労が残ったまま織田家の調略により寝返った江北の諸豪族の攻撃を受け、さらに追ってくる織田の本隊と敦賀に

侵入した明智光秀にも気を配らなくてはならない状況はいよいよ朝倉軍を追い詰める。

（報せはないが、敦賀はもう落ちたものとして見なさなくてはならぬ……。であれば、中河内口か）

余呉湖畔からさらに北上し、山に分け入る中河内口を朝倉軍は退却に使うことを決めた。敦賀を介さずに今庄に抜ける短絡路だが、その分山間を通る区間が長く道は険しい。

だが、その険路ぶりは織田の脚を止めるのに役立つ。

老将・山崎吉家が「これが最後の御奉公ぞ」と唱え、幾人かの将を集めて道中の中河内砦に陣取って織田軍を迎撃。衆寡敵せず吉家以下二千の将兵が玉砕したものの、朝倉義景を一乗谷へとたどり着かせることに成功する。

「はあはあ……帰ってきたぞ……。ん、なんだあれは？ 待て、よるな！ 余を誰だと心得ているツ！」

しかし、それも結局遅きに失したらしい。

這々の体で一乗谷に帰った義景は畿北方分軍に取り押さえられ、自分が住んでいた館に連行されていった。

連行されながら辺りを見回すと一乗谷の至る所に隅立て四つ目の旗が翻っている。一乗谷はすでに完全制圧されていたらしい。争った形跡はさほどないため、抵抗はほとんどなかったのだろう。

「遅かったね、長夜叉お兄ちゃん。一乗谷はもう占領したよ？ 十兵衛は今朝倉景鏡を攻めてる。信奈ちゃんはまだ来ないから、それまでお話ししようか」

まるで自分の館のようにくつろぎながら義定は義景を待ち構えていた。その態度に義景は呆れた笑みを浮かべながらも応じる。

義定が小姓を呼んでお茶と茶菓子を持ってきてさせたのちは義景と義定の二人きりになった。

（逢坂峠で遠目に見た時にも思ったが、やはり美しい。昔の次郎姫とは大違いだ）

対面した義定の姿を改めて見て義景は目を細める。

昔は外面を取り繕うだけで内面の世を憐む繊細さの持ち主だった。

ひ弱だった長夜叉でさえ守ってやりたいと思うような庇護欲を掻き立てるような美少女だったのが、今や快活で華やかなそれこそ巷間の比喻で用いられる「太陽」に値するような美少女に育った。

何が彼女を変えたのか、義景には心当たりがある。

「気になってはいたが、次郎。そなた、よもや義賢殿を討ってないだろうな？」

「……討ってないよ。父上は病死だよ、ほんとに」

問うた瞬間、義定の目が泳いだことに義景は気づいた。次郎姫こと義定の昔からの癖である。取り繕うのが上手い彼女だが、無理がある嘘をつく時だけ僅かに目が泳ぐのだ。

「仔細は聞かぬ。……そうか、次郎は終わらせられたのだな。それは少し羨ましい」

義景は義定の復讐が遂げられたことを寿ぐ。

父への憎悪を向けていた少女と未だ見ぬ母への慕情を変質させた男。

同じ戦国の大名家に生まれ、家族への想いを拗らせて孤立していた二人は出会った頃から他人のような気はしなかった。

「新十郎とはうまくやれ。……あの男もまた修羅の道を歩む男ぞ。誰かの助けがなくなれば、鬼に堕ちる」

「長夜叉お兄ちゃんは手伝ってくれないの？ 一応わたしから助命してもらえるよう頼んでみるけど」

「余には無理だ。そもそも余を織田信奈は赦さぬであろう。おそらくは一乗谷と共に果てる定めだ。それに、なにより余は臆病者で力不足だ。助けられるとは思えぬ」

生存の難しさもあるが、六角高村の一助になれるとは義景には到底思えなかった。結局、長いこと居ておきながら次郎姫にだって何かをしてやれていた気がしない。

「確かに長夜叉お兄ちゃんは臆病だけど、わたしは助けられてたよ。確かにわたしが吹っ切れたのは復讐が終わったのと黙って見てくれた新十郎のおかげかもしれない。……けれど、長夜叉お兄ちゃんが風流で心を癒す術を教えてくださいなかつたら、わたしはそこまで辿り着け

なかった。……だから、ありがとう」

言い終えた後「やつと言えたよ……」と義定は破顔する。その笑みにはいささかの照れも入っていた。

義景にはあずかり知らぬことだが、ただこの一言を告げるためだけに義定は一乗谷を先んじて制して待ち構えていた。

織田信奈に先んじられていた場合は、このように悠長に言葉を交わす時間すらなかったに違いない。

「余がそなたの助けになれていたのか……それは良かった」

義景もまた破顔する。義景は安堵していた。

宗滴に蔑まれた風流趣味で次郎姫を助けることができている。それがわかっただけで今までの自分の半生が徒労ではなかったのだと証明されたような気がしたので。

亡き母の面影を追い求めながら、何も手に入れられず、一人で死ぬほかなかった男はこの時、僅かばかりの救いを得たのである。

それから義景と義定はありし日のことを話した。

稽古を嫌がり宗滴から逃げ回る長夜叉の話や源氏物語の推し姫でしようもない論争を繰り広げた話など様々。

話し続けて決められた刻限に近づいた時、義景はおもむろに床の間の方を指差した。

「あとそうだ次郎姫。そこの違い棚に茶壺と花入が、刀架に太刀が一振あるだろう。一乗谷から帰る時にそれらを持っていけ」

「これとこれ？ 明らかに格が高そうなやつだけではないの？ 刀に關しては宗滴殿が佩いてたやつじゃん」

義定が戸惑うのも無理はない。なにせ義景が指差したのは朝倉家累代の重宝ばかり。朝倉宗滴の佩刀だった籠手切正宗はもちろん茶壺も花入も朝倉孝景・義景所用の品として上方の文化人に知られたものだった。

「ああ。織田信奈はこの屋敷を、あるいは一乗谷そのものを余と共に焼き払うだろう。余はそれだけのことをしてかしたゆえ、致し方ない。……だが、風流には罪はない。余と共に潰えるのは口惜しいことだ」

「……わかった。持っていくよ」

「余からの最後の饞別だ。達者でやれよ、次郎姫」

優雅を気取って笑みを浮かべる義景。元服してからはいちいち鼻につくような言動をする男になったが、それでも義定にとっては恩人だった。

結果的に、このやり取りが義定が聞いた義景の最後の言葉になる。

*

義定と義景の対談の翌日に織田の本軍が一乗谷に到着した。

信奈は縛られた朝倉義景を見るや否や足蹴にし散々罵倒を浴びせた後、斬首を宣告する。義定が取りなしに入る暇もない。義景は従容とした態度で信奈の沙汰を聞いていた。

怒り故か信奈の対応は早く、その日のうちに義景の処刑は執行され一乗谷は炎に包まれる。

『源氏物語』の世界を再現していた義景の館も、長谷川等伯に描かせた障壁画も、小京都と謳われた一乗谷の街並みも、義定の思い出の地も全て紅蓮の中に包まれていく。義定に託された朝倉の重宝だけが残された。

英林孝景以来、越前を支配し北陸の雄として名を馳せた名門朝倉家は、ここに滅亡したのである。

第89話 浅井久政

長政の命を受け、朝倉軍の殿軍として中河内口まで働いた高虎が木之本に差し掛かった時、彼女は馬蹄を止めさせていた。

「ああ……なんてこと」

遠くに見える小谷城から火の手が上がり、空を赫く染めていく。

少し離れた木之本から見えるということは小谷城のかなり深部に放たれた物だということで、ややもすれば小谷城自体が落ちている可能性すらあった。

「姫、戻られますか？ もはや手遅れだとそれがしは断じまする」

「彼の言う通り、我々は命を拾いました。むざむざまた死地に戻るべきではありません。それに殿は落ち延びているやも……」

側近の二人をはじめとして動揺が藤堂軍内に広まっていく。だが、茫然と火柱を見上げていた藤堂高虎はすぐに平静を取り戻して告げた。

「おまえたち、それはありえない。藤堂家臣としての行いとしても、殿が逃げ延びたということも。どのような状況になり果てようと殿はあそこに残ることを私は知っている。なれば、馳せ参じるのが禄を受けた家臣の行いではないのか？」

「それは……」

高虎の一喝に側近の二人は口を噤む。

やることを決めた高虎はさらに行軍を早める。

(それにしても、見るんじやなかったなあ……)

手綱を握りながら、高虎は過日の自身の行いを後悔していた。

浅井長政の宿敵・六角高村から預けられた書状。「最悪、中身を見てもいい」と言われ、重ねて「内容はお前には絶対わからないだろう」と断じられた。

明らかに重大な書状であり、本来なら秘匿しなければならぬものなのだろう。

だが、高虎はどうにも気になって開けてしまった。そして見てし

まった。

……それだけならば、高虎はこうも後悔することはなかっただろう。

（あれで合点がいった。殿が帰参された際に高村が口にしたうわごとの意味を。実に、やるせないことだ）

不幸にも高虎は書状の内容を理解してしまった。あまつさえ、自らの主君の内心さえも全て。

（殿は……、いや姫様はあの燃える小谷城の本丸で高村を待っているのだ。『お市、お前を奪いにいく。だから小谷城の本丸で待っている』という言葉信じて……！）

この高虎の理解は偶然ではなく明確な理由がある。

端的に言えば、高村は失念していた。

藤堂高虎が利発な姫武将であることを。

ただの優れた武将というだけではなく乙女でもあったことを。

そして、かつて高村が長政に手を伸ばしながら『お市』と呼んだことを高虎に聞かれていたことを。

失念していなければ、高虎に高村は書状を託さなかっただろうが後の祭り。

こうして六角高村は藤堂高虎に『敵総大将への恋文』というその生涯における最大の恥部を握られたのである。

*

赫炎が空を舐める。

小谷城への高村の攻勢は実に苛烈だった。

あらかじめ宮部継潤から小谷城の縄張り図を仕入れていた高村は浅井家が大広間で最後の決戦を行うと見て、手を打った。

尾根伝いに城を攻めるのではなく、清水谷の沢筋から別動隊に急登を踏破させ本丸と小丸の結節点である京極丸を落とす策を本命に据えたのである。

この別動隊に相良良晴を当てて小丸の久政と対峙させ、自らは長政と雌雄を決する腹積りだった。

結果としてこの中入り策は当たり、いよいよ小丸の久政は追い詰め

られていた。

「……もう、どうにもならぬか……」

延焼する小丸を見回しながら久政はひとりごちた。

装いを白装束に変えて、赫く照り返る空を見上げる。久政はすでに死を覚悟していた。

「全ては我が罪よ。恨みと不満で大局を見誤り、子の道行を歪めたわしの罪よ」

自嘲する。

結局のところ、自分は長政に『浅井の独立と雄飛』という夢を見て、勝手に背負わせた挙句潰してしまった。いや、夢を見て背負わせただけならまだよかったかもしれない。結局のところ、自分も何かせずにはいられなくて口を出し、足を引っ張ってしまった自覚がある。

こうなってしまったら親としても為政者としても、三流以下だった。

だが、自覚した後の久政はひたすらになすべきを成した。

少しでも多くの家臣を自らの破滅に巻き込ませてはならじ、と熱心に世話を焼いていたのである。多くの者は利口だから久政の勧めに従って逃げた。だが、そう素直に退去しない頑固者どももいる。

敵の大將が六角高村と聞いた女中や姫武將たちは頑なに辱められるぐらいなら自ら死を選ぶと浅井家への殉死を選んだのだ。実態はもう違うのだが、六角と聞いた彼女たちは今だに六角承禎の頃の風紀の乱れを想起してしまっている。久政は一応は説得を試みたが諦めていた。

「高村はともかく、相良良晴は戦国の武將をするにしては甘い男だ。闘う意志がない者を討ち取るようなことはしないだろうから家臣や小姓は出来る限りは逃したぞ？ ゆえに、もうわしの周りに人はほとんどおらぬ。その方も逃げたらどうだ？」

久政が苦笑いを浮かべた先には律儀にも小谷城に舞い戻っていた高虎がいた。山崎丸と大嶽砦經由で本丸に向かおうとしたが、京極丸で阻まれて小丸に引き返してきていたのである。

久政の言葉に高虎は慚然とした態度で答えた。

「いえ、私も死ぬわ。禄を食んでおきながら逃げるなど武士にはあるまじきことよ」

「はっ、言いよる。村の阿婆擦れから成り上がったものを武士とは呼ばぬぞ。武士とはな、己の武と芸を主君に売りながら生きていく者のことよ。お前は小谷城を出て何処へと仕えるがよいわ」

高虎の殉死の申し出を久政は鼻で笑って蹴り飛ばした。

「なあ高虎。お前はまだその才幹を売り尽くしてはないだろう？ 忠や孝、生死を論ずる前にまずはお前の全能を使い尽くせ。いいのか？

高村に二度も生かされた拳句、無意味に死ぬのがお前の生き様か？

違うであろう？」

「しかし……」

「武士たる者、七度は主君を変えねば武士とは言えぬ。場を探し、その才幹を花開かせて下天を謀る姫武将となれ。それまでは、お前に死を飾る値打ちなどない」

この久政の激烈な言葉の前に高虎はようやくやく折れる。大人しく生き残りをまとめて小谷城を下山した。

「やつと帰りよったわ……。待たせたな皆の者」

その後ろ姿を見送った後に久政は佩刀を抜いて居残った者たちに呼びかける。

浅井の一族や敵の手に落ちて辱められることを拒んだ女中たち。彼ら彼女らは最早小谷城を生きて出るつもりがない……畢竟、久政が救えなかった者たちだった。

「その方らが行き場を無くしたのは、わしの不始末よ。なればこそ、わしが責任を持って浄土へと送ろう」

瞑目したのち、久政は自らの手で正室である阿古御前をはじめ殉死を志願した者らに刃を突き立てる。彼ら彼女らを久政は一人ひとり丹念に殺していった。そのたびに自らの罪の意識が増していく。

「殿、貴方と共に行くなら地獄までも……」

「お前には不自由をかけた。……わしもすぐに逝く。だから待っていてくれ、阿古」

最後に阿古御前が血溜まりの中に沈むのを見届けた後、久政は座り

込む。

小丸の中は殉死者たちの鮮血で赤黒く染まり、むせかえるほど血と肉が焦げる匂いが漂っている。その光景はさながら地獄と呼んでも差し支えないだろう。

そんな地獄の中に、新たに踏み込んだ者がいる。

京極丸を攻め立てた相良良晴その人だった。

良晴は小丸の惨状を見て思わず立ちすくみ、えずいてしまう。それを見た久政は「やはりお主は荒事が苦手よな」と苦笑いを浮かべた。

「それにしてもお主まで来るとは、賑やかな最期よな……。だが、ちようどよい。介錯人が欲しかったところだ。見よ、相良良晴。これが浅井下野守久政の責の取り方よ……！」

良晴に見せつけるように久政は自らの腹にも脇差を突き立てる。

肉を穿つずぷりという音が良晴の耳から離れてくれない。

久政はそれにも関わらず脇差を上下左右に動かしていく。

「おっさん、なんてことを……！」

半ば悲鳴じみた声を上げる良晴に久政は息を荒げながら、口の端を吊り上げた。

「はあ、はあ……これこそが……武家の責任の取り方よ。武家の当主はな、家臣の生き死にを背負い、領地の安寧を保つ務めがあり、その血脈を後世に繋がなくてはならぬのだ。それを果たせぬ者に生きる値打ちなどない。……相良良晴、お前もまたいずれ武家を率いることになるのであろう……？ ……ならば、わしのようになってはならぬ。訓戒として、我が姿をその目に納めよ……！」

苦悶しながらも久政は己が腹を十文字に掻き切り、項垂れた。

「……さあ、介錯をせよ相良良晴……！」

吐き出すように搾り出すように、告げる。

相良良晴や藤堂高虎にはともかく、猿夜叉丸に対しては告げるべきことはなかった。……いや、久政は告げるべきではないと断じた。

だから、遺言という形であっても、我が子を縛るような真似を久政はもうしたくなかったのだ。

遠のく意識の中、娘の先行きを願う。

（長政……猿夜叉丸、いやお市と呼んだ方がよいか？　もうどれでもよい。我が子よ、浅井の罪はわしが持つていく。だから、お前は新十郎と好きにやれ）

実のところ、あまり久政は心配していない。

承禎の陵辱を避けるために男武将として育てざるを得ず、敵地である観音寺に留め置かれて小谷城にも二、三回しか帰ることができなかつた過酷な環境下においても、彼女は強くしなやかに育つた。

そんな娘とあの忌々しい宿敵ならば、自分が考えるよりもよっほどいい結末にたどり着く。そう、久政は確信している。

だから、思つたよりも心やすらかに意識を手放すことができる。それが久政にとって幸運だった。

*

小丸が落ち、いよいよ小谷城の陥落も近づいてきた。

久政を討つた相良良晴隊が反転して京極丸の南にある中丸に取り付くやいなや、大広間で抵抗していた浅井軍の勢いも衰える。

特に亮政以来三代に渡って仕えてきた赤尾清綱が蒲生氏郷に討ち取られてからはいよいよ浅井は抵抗の主核を失い、本丸に後退せざるを得なくなつた。

長政もまた山道を馬で駆けあがり、本丸へと戻つた。

もとより少なかつたが、すでに浅井の兵は二千を割込んでいるだろうか。戦前の時点で寝返る者が多く、逃散した兵も多い。

一益に撃たれた肩の痛みに苛まれながら、長政は時を待った。

「小丸の久政様は相良良晴隊に討ち取られたとのこと」

「……そうか。して、雨森。他の三家老はどうした？」

「海北殿も赤尾殿もすでに討たれておりますれば、生き残りはそれだけですけにございまする」

項垂れる雨森を見て、長政はまた「そうか」と生返事を返した。

「殿。この上は、腹を召されますか」

「いや、私は高村を待つ。お前は下がれ。私のわがままにもうこれ以上付き合う必要はない。殉死は禁じる」

「重ね重ね、申し訳ござらぬ」

雨森清貞が去り、本丸で一人きりとなった。

久政が死に、浅井三家老も去り、藤堂高虎も脇坂安治もまた小谷城を退去している。

この時、ようやく長政は……猿夜叉丸は浅井家から解放されていた。

賭けに負け、浅井家ももう修復不可能となった以上は猿夜叉丸は生き方に迷う必要はない。

やるべきことを終えて、『お市』として新十郎を待つことができる。

……だが、その時間は長くないこともまた彼女は自覚していた。

いよいよ本丸にも回り始めた火に、止まらない肩の出血。

熱気で肌がちりちりとする感覚と、傷口から命が零れて体内が冷めていく感覚が同居する。

金創医なんてもう城内には残っていないだろうし、消火する人手もない。

彼女に出来たのは、煙に巻かれながら顔を蒼くして痛みを耐えることしかなかった。

(新十郎、早く来い。おそろく、私はもう保たぬぞ……！)

長政にもまた、死期が迫っていた。

第90話 小谷城の月

大広間を抜けるのにえらく時間をかけた。

炎で照らされて錯覚してしまいがちだが、とうに日は落ちて月が昇っている。大広間で指揮を取っていた赤尾清綱の抵抗が激しく、恥ずかしながら裏からの相良良晴の支援がなくては抜くのは難しかった。

「やはり、攻城戦……とくに力攻めは苦手だな」

本丸に向かって軍を進めながらひとりごちる。

攻城戦は苦手だ。わざわざ城という相手に利がある場所で戦わなくてはならないし、追い込まれた相手を分断させるのは難しい。その不利を自覚しているから、俺は今まで可能な限りは野戦で決着をつけてきた。長島攻略戦の時はまだ相手方の意思統一が図れていなかったから、割と俺のやりたいように出来た。だが、それが血族を中心とした統一が図られている武装集団となると難しい。

なにせ、死にもものぐるいの相手をさらに上回る力で叩き潰さなくてはならないのだから。ましてその相手が三代にも渡る因縁がある浅井家となるとより一層厳しいものがある。

ゆえに浅井の俺に対する敵愾心は強く、武勇にいくらか自信があった俺でも止められる場面があった。

振り返るに六角と浅井の因縁は深い。

例えば定頼様は朝倉宗滴と共に亮政をくじき、続いて承禎様は久政を屈服させた。そして、この俺……六角高村は長政を滅ぼそうとしている。

浅井と六角は共に天を戴くことができない、と何度も口にした言葉の重みを思い知らされた気分だ。

「そろそろ本丸の様ね……。どうするの？ 新十郎様」

鶴千代に問われてふと立ち止まる。

「今になって会うのが怖いと言ったら、義定に笑われるかな。……自分で始めた戦だというのに。俺はその結果を受け入れる覚悟がまだ

出来ていない」

「呆れた笑いを浮かべるでしょうね、きつと」

「だらうな」

突き放すように言う鶴千代の舌鋒に俺は思わず苦笑いを浮かべた。情けないことに俺は結末を知ることが恐れている。

いつかこの日が来るとは思っていた。あの光がない夜に俺とお市は離別した時からずっと。

浅井長政は小谷城で死ぬ。

その運命がずっと俺たちを支配していたのだ。

俺は俺なりに手を打ったが、それでもなお運命に打ち勝てたかはわからない。

(それに、お市があくまで浅井長政として生きると決めていたのならば、おそらくはここで腹を切るだろう。母のために観音寺から脱出し、父のために最後まで戦い続けたのが猿夜叉丸だ。家族と共に死を選ぶことだってあり得る)

家族のためなら躊躇せずに死に向かえるのが浅井長政であり猿夜叉丸の美德であり、欠点であった。浅井の大名として能く生きるなら、久政をまた押し込めてしまえばよかったのだ。けれど、長政はその選択肢を取り得ない。

容姿だけではなくその愚直さが俺には眩しくて……だからこそ俺は彼女を好きになったのだろう。

(彼女が最後まで家族を取ったとしても、とやかく言うつもりはないよ。……だけれども、お市として俺と一緒に生きてほしい気持ちもある)

ここも、結局のところお市の心次第なのだ。

彼女が誰として生きるのか、それで全てが決まる。

果たして『お市』として生きることを選んでくれるほどに、俺は彼女の心に居れたのだろうか。

「まあいい。時間がない。炎上した本丸が倒壊するのも近いからな。生死も答えもわからなくなるのは嫌だ。……どのような結末を迎えようとも目の当たりにしなかつたらしなかつたでそれは徒労でしか

ない。行こうか、鶴千代」

「人払いは？」

「任せた。大将直々に浅井長政を討つと明言すればいかに功に逸るものどもでも、邪魔はしてこないだろう」

「ええ、任されたわ。……せめて、新十郎様に悔いがないことを」

だが、それでも歩みは止めない。

祈る鶴千代を背に進む。

なにせ最も嫌なことが自分が逃げ出すことだからだ。そうしてしまえば、長政がどうなっていたとしても俺の負け。勝負を放棄し、約束を果たせなかった落伍者になり果てる。

かつかつ、と俺は一人で本丸への石段を登っていく。

空には満月と赫炎が照り映える空。忌々しいほどに月が綺麗な夜だというのに、拭えぬ赤が邪魔をする。あんまりな空模様のせいで嫌な予感で心がざわめいた。

だが、もうどうしようもない。全ての賽は投げられた後なのだから。

本丸の屋敷に踏み入る。比較的綺麗に建物は残っていた。本格的に戦場になる前に長政が逃したのだろうか、人っこ一人いない。

ならば、長政は……。

悪い想像をせずにはいられない。だって、長政が自分の責任を放棄するとは思えなかったからだ。久政は逃がせる家臣を逃したのち、殉死を希望する家臣を撫で切りにし最後は自ら腹を切ったのだという。

長政が同じことをしない保証なんてどこにもなかった。

屋敷の中を探し回り、やがて一番奥の部屋の襖に手をかける。どこか軋んでいたのか、ぎぎと音を立てる。

そこでようやく、彼女を見つけた。

長い髪を無造作に垂らしながら、屋根が焼け落ちて空いた穴から月を見上げている。地獄のような小谷城の中でその佇まいはあまりにも浮世離れしていて、そして凄絶なまでに美しかった。

ああ、変わらない。

どれだけ血に塗れようと、俺が好きな女は確かにここに居る。

「……ようやく、来たな。新十郎」

「済まない、待たせた」

じとりとした瞳をお市に向けられる。ただの目配せなのにいやに艶かしくて俺は思わず息を呑む。だが、それで引くには情けない。俺にだつて言いたいことがあるというのに。

覚悟を決めて俺は、静かにお市に向けて告げた。

「それにしても、月が綺麗だな」

「——ああ、死んでも構わん」

「……なあ今その返しはやめてくれないか。洒落にならんわ」

真顔になつて言う俺に対してくつくつと笑う長政。揶揄うにしても趣味が悪い。少なくとも瀕死の人間から聞きたい言葉ではなかった。……けれど、嬉しかった。

俺はこの時ようやく失つたものを取り戻したのだ。随分と遠回りをしたような気がするし、この一本道しかなかったような気がする。

まあそんな些事は今になってしまえば、どうでもいい。大事なのは、俺の隣に彼女が帰ってきた。それだけなのだから。

俺はそつとお市に右手を差し出した。

「さあ、観音寺に帰ろうか。だいぶ数を減らしたが、学友共あいつらが待つてる」

「……ああ」

お市はしっかりと俺の手を掴んで立ち上がる。

今度はしっかりと握りしめる。もう二度と彼女が離れて行かないように。

これは俺が奪い取った幸せなのだから。

かくして、月夜の晩に江北の雄、浅井長政は滅びた。

その晩、人々は小谷城の山裾を豪壮な武者に伴われて降りていく姫君を見たという。

炎にも満月にも負けぬ眩い美貌の彼女を指して、地元の人々は『小谷の城のかぐや様』と言いついには童歌として江北に広まることになる。

第91話 下天の君

越前一乗谷と小谷城。

朝倉と浅井両家が本拠は織田方の手に落ちた。

越前大野でなおも抵抗を続けていた朝倉景鏡は、義景処刑の報を聞くや否や降伏した。

「義兄様が降伏したのね……、上杉軍を待とうにも、大野の山中では地の利はない。越前篡奪の野望、ここで潮時かしら」

景鏡自身はまだ戦うつもりでいた。

浅井朝倉は滅びたがまだ越後の上杉謙信に武田信玄など織田信奈に敵対する大勢力はまだある。特に武田と上杉の調子が良ければ、山深い大野に籠って助けを待つ線もあった。仮に義景がこちらに逃げてきたのならば密かに始末し、自分が朝倉家を奪おうとも。

景鏡には義景への忠義はない。あるのは、分不相応な定めの下に生まれてしまったことへの憐れみだけ。義景よりもずっと自分の方が越前を、朝倉家をより良き方向に導けると信じていた。

しかし、伊達政宗が南奥州や北関東で蠢動したために上杉や武田、北条はその対応に追われて畿内に大軍を派遣する余力はなく、義景は六角義定に宗滴公の太刀を含めて家宝を差し出し、運命に身を任せたという。

（あの義兄様に自らの死を従容として受け入れられる度量があるとはね……。まあいいわ。全ては一度終わったことだもの）

かくして腹案は全て潰えた今、大野で粘る意味を景鏡は見出せないでいる。

「そのの貴方。惟任日向守の元に向かいなさい。朝倉景鏡、降伏仕る。と伝えるのよ。本意ではなかったけれども、私は一応最後まで織田信奈に抵抗した。これで天下への面目も立つでしょう」

翌日、景鏡の使者が光秀の元に届いて降伏は受理された。

光秀に降伏した景鏡は本領を一部召し上げられたものの出家や婚姻も迫られることもなく、やがて来る織田の越前国主の補佐を命じら

れることになる。

この景鏡の対応を筆頭に信奈の朝倉旧臣への対応はやや甘いものがあった。理由は明確には分からない。けれども文化都市として名高かった一乗谷を焼き滅ぼしてしまった引け目がそうさせたのではないか、と庶人の間で噂された。

光秀が越前の平定を完了させている間、高村は小谷城攻めの事後処理を行っている。小谷城から落ち延びてきた浅井旧臣たちは悉く相良隊と六角軍に捕らえられていた。

「私達、これからどうなってしまうのでしょうか……」

「やはり、揃って辱めを受けてしまうのでは……」

縄で縛られた姫武将二人が互いに身体を寄せ合いつつも震えている。

天下にその女好きぶりをすでに轟かせている相良良晴と、承禎の代に捕虜とした姫武将に対する扱いと高村による長島焼き討ちによって悪名がストツプ高になった六角軍。

仮に畿内の反織田の姫武将に「捕虜にされたくない武将・大名家格付」をさせた場合、武将部門と大名家部門でそれぞれ首位を獲るような面々に捕らえられた彼女たちは気が気ではなかった。

「いや、確かに俺たち侵略者サイドだけど怯えられすぎじゃねーかな」「相良、お前はともかく俺は承禎様のとぼちちりを受けたただけだからな？ お前と一緒にされるのは心外だ」

苦笑いを浮かべる良晴と高村。

この二人に姫武将をどうこうするつもりはなかったため、結果として彼女達の心配は杞憂に終わる。

領地の召し上げや滅棒などはあったが、彼女たちの貞操が組織的に奪われることはなかったのだ隠れたところでやる足軽などはいたが、軍規上は禁制である。実はお市を連れ帰ったのはかなりグレーだった。

信奈が乱取りに厳しく取り締まる姿勢を見せていること、高村が親友への罪滅ぼしとして浅井の旧臣を取り込む姿勢を見せていること、

相良良晴が性格的に黒い戦国的なことができないことの三つが噛み合って浅井への対応が柔らかいものになっていた。

多くの浅井家臣が捕らわれる状況ならば、彼女らとて例外ではない。

二人の姫武将が良晴と高村の前に引き出される。一人は四肢を縛められ、その豊富な肢体を強調した格好亀甲縛りのな奴で良晴と高村の前に転がされ、もう一人は腕を首の後ろで固められて腋と形の良い乳房がこれでもかと思えつけんばかりに服越しに主張していた。

藤堂高虎と脇坂安治。この二将もまた山刈りをしていた加藤嘉明に捕えられていたのである。片方が高村の見慣れた顔であることもあり、彼は呆れたように笑いながら声をかけた。

「さて、お前が縛られているのを見るのも三回目だな、藤堂高虎。流石にそろそろ慣れたか？」

「これがあの藤堂高虎なのか……。かなりスタイルがいいな……。それでいてバリバリ仕事ができるキャリアウーマンみたいな雰囲気もある。そんな娘がこんなあられも無い姿で……。隣の子もすごい綺麗な脇とおっぱいだ……」

「ごくり、と生唾を飲み込む良晴。基本的には女好きなのだ。ただヘタレであり、権力を嵩にきて乱暴な行いをするような体質ではないだけである。

「慣れるも何も愚弄するな、六角高村……。ッ！ それに相良良晴ッ！ 私をいやらしい目で見ろな！ お前ら男武将はいつもそうだッ！ いやらしい目でしか私達を見ていないッ！」

「ごめん、理屈はわかるが胸を強調された格好で言われても欠片も響かんし、無理だろ」

「くそ、そんな強気でいられるのは今のうちだ！ 六角高村、私はお前の恥部を知っているッ！」

「なんだと、言ってみろ」

「それはな、高村が敵将にこ、ぐふっ！」

「がなりたてる高虎にあくまで冷淡に接していた高村だったが、高虎が口を開くとそうも言ってられなくなった。」

咄嗟に転がされている高虎の腹を蹴り、無理やりに口を封じたのである。

(こいつ、あの手紙を読みやがった……！　んで、なぜか真実に辿り着いてやがる……！　ちい、やつぱりギリワンに託したのは失策か……！)

悔いた後、すかさず高村は高虎に近寄り、誰にも聞こえないように耳打ちする。

「……知られたとあらば、お前を自由にするわけにはいかない。さりとて殺すのも主義に反する。禄は相応にやるから俺に仕えろ。もはやお前に選択の余地はない」

「言われずとも、私は貴方に仕えるつもりでした。三度命を助けられ、姫の命まで救っていただいた。貴方には返しきれない恩がある。浅井の次に仕えるならば貴方と決めていました」

「なら、アレを口走ったのは算段のうちか……食べねえ女だ。まあそんなことをされずとも召し抱える気だったから蹴られ損だな」

げんなりする高村。

一悶着あつたが、ハナから高村は高虎を逃がすつもりはなかった。

浅井長政との戦いの中で長政の次に高村が警戒したのが藤堂高虎である。そんな姫武将をむざむざ反織田勢力に渡すわけにはいかない。さりとて、討ち取って高虎の才が失われることもまた厭っていたからいよいよ織田側に抱え込むしか無いのである。

(高村殿……、いや主が私の才を買ってくれていてよかった。紛れもなく今の時点で下天を司るのは我が主だ。主の側で学び追い越し、いずれは私が主を使って下天を謀ってみせる……！)

高村が打算の内に高虎を迎えることを決めていたように、高虎もまた身に余る野望を叶えるために高村の側に仕えることを決めていた。

藤堂高虎の他に脇坂安治もまた高村に仕え、海北綱親の娘の海北友松も召し抱える。相良良晴もまた浅井遺臣を取り込み、武家としての礎石を得た。

浅井家が亡き後も彼らは近江衆として天下を支え、その遺風を後世に伝えることとなるのであった。

*

戦地での処理を終え、織田信奈率いる織田本隊と明智光秀ら畿北方分軍、六角高村率いる浅井攻略部隊。

三軍が賑々しく、京の街を凱旋する。

電撃的に行われた浅井朝倉征討戦は畿内の政情を著しく織田政権優位に傾けた。長きに渡って北の脅威だった二家を取り除いた今、畿内に残る敵は本猫寺雑賀衆連合と時折四国からやってくる三好のみ。

このうち前者とはまだ和睦が有効なため争いは遠い。つまり、久方ぶりに畿内に平和が帰ってきたのであった。

「織田のおひいさまや……！ あなうつくしや……！」

「光秀公も高村公も凛々しゅうて……」

「なんでも、御所から大層な官位をいただくらしいで。それも今川將軍より上らしいでっせ」

「ほんまどすか？ まあ今信奈はんと高村はんや畿内の平和の立役者や、当然と言えば当然やな」

京の町衆がめいめいに騒ぎ出す。今や京はお祭り騒ぎであった。

信奈は馬揃えや凱旋行進など、民衆の目に武威を見せることを意識していた。形のない権威の効力を信じていない信奈はひたすらに魅せることで町衆や他国の間者に織田家こそが天下の主だと示そうとしていた。

高村による京の街区整理と復興もまたその一環であり、いよいよ京の民衆たちは織田政権の諸将を実感を持って「自分たちを守ってくれる英雄」として慕うようになってきている。

良くも悪くも織田信奈は世論がそのまま天下に影響することを肌感覚で知っていたのだ。

そんな彼女は馬上で町衆に笑顔を振りまきながら考えていた。

(……高村への恩賞、どうしようかしら?)

畿内最高の闘将。

そう称される彼は此度も浅井攻略部隊の大將として確固たる武勲を立てた。

浅井長政の討伐は越前を制圧した明智光秀には劣るがそれでも無

視できるようなものではない。

織田政権にとって高村は諸刃の剣だ。よく斬れるが、その分主張も激しい。

浅井長政討伐の他に北畠征討や対武田の水際防衛など破格の武勲を挙げる一方で、桑名以外の伊勢の知行を認めさせられたり対武田の和睦を強行されたりなど勝手次第な振る舞いもしてきている。

なくてはならない存在だが、絶えず頭を抱えさせてくれる存在なのだ。

(十兵衛の働きで織田の武威は確かに天下に示したわ。けれど高村も食らいついてくる。任せれば成果を上げるのはいいけれど、彼に近江はあげられないし、茶器でお茶を濁そうにも功績が大きすぎる……。いつそのこと、織田の一門に取り込んでしまおうかしら)

幸い津田信澄が信奈の実弟として残っている。向こうには遠縁ながら唯一の一門衆として重用されている六角義定が。

例えばこの二人に縁組を組ませれば、織田政権はいよいよ磐石になるであろう。利は間違いない。

(いえ、気の迷いだわ。そんなことをしてしまえば、私は良晴と結ばれる資格を失う。自分が好きな人と結婚したいと宣いながら、弟に政略結婚を強いるのは道理に合わないわ)

縁組という鬼札を切れないならいよいよ信奈には打つ手がない。

「……どうしようかしら」

織田信奈と六角高村。

天下布武による一元統治を為そうと思えば、基本的に両雄は並び立たない。どちらかを倒すか、どちらかが相手に迎合しなくては終わらない。だからこそ第一次伊勢大戦の時に織田信奈は六角高村を完膚なきまでに叩きのめさなくてはならなかったのだ。

凱旋の一週間の後に本能寺での祝宴が予定されている。

それまでに信奈は諸将と高村に与える恩賞を決めなくてはならなかった。

第92話 雛月院

本能寺での祝宴への準備は日に日に整っていった。

小谷城が落ちた時点で開催を決意したため、日程はあまりなかったが丹羽長秀や村井貞勝らが遺漏なく諸々の手続きを済ませていくあたりかなり信奈の無茶振りに慣れている。

そんな事務方とは対照的に信奈は珍しく自室でのひとり管を巻いていた。

「……やっぱり取り扱いに困るわね、あいつは」

期日まであと二日と迫った時点でも高村の処遇が決まらない。

正確に言えば、茶器などの副賞に当たるものはいくらでも思いつくのだ。だが、これらを並べたところで派手さに欠ける。

今回の祝宴では帰順したばかりの畿内の国人や公家、豪商が参列する。だからこそこの場であえて大盤振る舞いして見せることで信奈は織田家の勢威を示したかった。だが、高村に限ってはそうもいきそうもないし、そもそも名馬以外に高村が欲しがりそうなものがわからなかった。

「……高村に関しては恩賞自由にしてあいつの要望を聞いた方が良さそうね……」

現代で言えばプレゼントに困ってア○ゾンギフト券を渡すような結論だったが、これが安牌だった。高村もわざわざ自分から勢力均衡を崩しにくいような要求はしないだろう。その辺りの嫌らしい高村のバランス感覚については信奈も信頼はしている。

「さて、後は祐筆に書状を書かせればいいだけね！　さて、わたしも休憩しようかしら……」

悩み事を解決というか放り投げて一息つこうとした信奈の元に新しく取り立てた小姓の万見仙千代がやってくる。

「何よ、これから休もうとしていたところなのに……」

「お休みのところ、申し訳ございません。高村公の使者が取次を求めてきておりますれば」

「なんですつて、高村が？ 今すぐに通しなさい」
まさしく渦中の人物からの使いである。これには信奈も迅速に対応せざるを得ない。

仙千代に引き連れられてきたのは、山岡景隆。六角家の家老として義定と共に京都で外交事務にあたっていた武将であった。

「高村様から打診したきことがあつて参りました」

「デアルカ。聞かせなさい」

「では、恐れながら話させていただきます。……我が殿の婚儀について」

恬淡に口にする景隆に対し、信奈は何も言えなかった。

あまりのことに腰を抜かしてしまったのである。だが、呆けていては話が進まないので平静を装って続きを促す。

「……それで、相手は？」

「鄒月院と申す尼御前です。ただの女子ならば側室に入れればよいのですが、それが私生児とはいえ以前に閨白をされていた九条植通卿の娘御でございますれば、流石に信奈様に許可をと……」

「……デアルカ」

予想以上の大物の名前が出てきて困惑する信奈。

九条家といえは五摂家の一つであり、さらに言えば植通は三好義継の母の父であるなど反信奈側に近い位置にもいる。そんな彼が縁組を通じて織田政権に歩み寄るなど思いもよらなかった。

（この機に高村を三好側に取り込むつもり……？ いえ、そこまで彼も馬鹿ではないわ、今更落ち目の三好に奔る訳がない。ならなぜ……と考えるとくなるけれど、これはこれで使い出があるわ。けれども、危ういわね……）

現在、織田政権と公家衆との関係性はあまりいいものではなかった。よくて中立で大概の公家は越前の神官上がりである織田家を見下してすらいる。何より今の閨白である近衛前久がひどく非協力的だった。そんな近衛家に並ぶ五摂家の九条家が織田政権に接近したならば、近衛前久にも圧をかけられるようになるであろう。

だが、これはやはり諸刃の剣であった。

織田政権が公家衆に影響力を持つ代わりに、六角高村が五摂家の一員になってしまう。ただでさえ佐々木源氏嫡流という確かな血統を持つ彼に公家衆屈指の権威を与えてしまえば、いよいよ取り返しのつかないことになりかねない。事と次第によれば、日ノ本は二つに割れるだろう。

前触れなしに訪れた織田政権のあり方を問われる難題。即断即決を尊しとする信奈でもじっくり考えたい問題だった。

けれどもこれは祝宴で出す恩賞についての話でもある。つまり期日は二日しかない。なんなら関係各所と連携することも考えれば、事実上この場で決めるしかなかった。

これには信奈は悩みに悩んだ。

（高村の奴……！ 急にこんな難題をふっかけてくるなんて……！
いつか必ずぎやふんと言わせてやる……！）

焦りと知恵熱と怒りが混じって頭が茹だりそうになりながら、信奈はついに決断する。

「……いいわ。認めてあげるわよ。けれど、わたしとの相談なしに九条家の家督やわたしより上の官位や官職を授からないこと。この内容であいつに起請文を書かせなさい。それが条件よ」

もしかすると、これが六角高村に天下を奪われる遠因になるかもしれない。

……それでも、今まで打つ手がなかった公家衆に対しては大きな奇貨でもある。この機を手放すのは惜しかった。

迷ったら進む。その手を打てる果敢さがあるからこそ織田信奈は天下人になれたのだから。

（高村がどれだけ大きくなろうと、要は最後にわたしが勝てばいいだけの話じゃない。わたしは何を弱気になっていたのかしら。だってら、ここは賭ける価値はある。それに日ノ本の争いを長引かせる訳にはいかない。今こうしているうちにも世界は動いている）

景隆を帰らせた後、信奈はおもむろに地球儀を弄ぶ。

今は亡きザビエルからもらった世界への標。

信奈の目はあくまで海の外に向けられていた。

*

「え？ あれ通ったの？ 嘘だろ……。まあいいけどさあ……」

書状で景隆からの報告を聞いた俺は白目を剥いていた。

なにせ蹴られて当然の案件だと思っていたのだから。流石に五撰家との縁談は事が大きすぎる。

そもそもの話、この縁談はこちらにとっても事故のようなものだ。当初は連れ帰ってきたお市に適当な名家の養女になってもらって嫁いできてもらう事が目的だったのだから。

はじめはお市の希望を汲んで浅井の傍系ということにしたかったが、浅井の名はまだ天下をざわつかせるから断念した。次に京極家の養女にしようとしたが、そんなことをせずとも高次を娶ればいいと彼女の父の高吉殿に嫌がられて終わる。

以後は一色や若狭武田、義定や景隆が伝手のある公家に話を持っていった。その中に源氏物語研究で義定と親しくしていた九条植通がいたという訳である。

義定と植通卿は入魂の仲だが、反信奈の摂関家ということもあり可能な限り俺個人は九条家とのつながりを避けていた。しかし、俺よりも長く畿内の政争に身を置き、本猫寺にすら影響力を持つ植通卿は老獪だった。

長らく着いていた足利義栄と三好三人衆に見切りをつけ、畿内の名族に圧力をかけて九条家以外がこの話を受けられないようにしてしまったのだ。こうなってしまうえば九条家にお市を預けざるを得ない。だが、お陰で植通卿から織田包囲網の黒幕が足利義栄であるという情報を引き出せた。これからは西面を厚くして対応することになるであろう。

「……それにしても、長かったなあ……」

あの新月の夜から何年経つただろうか。

あの日からずっと手を伸ばし続けて、ようやくその手が月に届いた。

最後の仕上げも今、終わる。

お市と結ばれる。そんな日が来ることをあの日々の俺は夢見るこ

とは出来ても、信じ切ることではできなかった。

こんな日が来るとは思わなかった。

こんなに嬉しきで涙が落ちるような夜が、訪れるなんて思わなかったんだ。

*

いよいよ織田家の祝宴の日が訪れた。

本能寺には織田政権の諸将だけではなく、公家衆や豪商に果ては宣教師まで参列している。

「すげえ人出だ。畿内の偉い人はみんな来てるんじゃないか？」

「だいたいその認識で合ってる。物珍しいのは分かるが、あまりきよろきよると辺りを見回すなよ、相良」

俺は相良良晴を引率しながら本能寺の庭園を歩いていた。

今や俺は畿内では織田信奈に次ぐ権勢を持つ武家であり、良晴もまた織田信奈の寵臣として著名である。なんとかつながりを求めて話しかけてくる者は多い。

「六角高村公か。顔を合わせるのは初めてだな」

その中にひときわ目を惹く姫武将がいた。

戦国時代で長身の部類に入る俺や高虎、良晴と肩を並べられるほどの背丈を持ち、艶やかな黒髪は腰まで伸びる。

すでに酒を飲んでいたのでだろう、酔いが回っていいよそのきめ細やかな肌が桜色に染まり、えもいわれぬ色香を放っている。

間違いないかなりの美女だが、どこことなく粗野さを感じさせる。背に無骨な鉄棍をひさげているのが、何より彼女が単純な姫君ではなく武勇を売りにする者だと物語っていた。

「なんとという美女ッ！ お姉さん、名前は……」

興奮した良晴が問いかけると、彼女は笑いながら名乗る。

「荻野直正。そうさな、最近は赤井直正と言った方が通りが良いかもしれないなあ……」

「あの赤井直正だつて！ こんな美女がああ赤鬼と呼ばれたあのもっ？」

「ははっ、おおはしやぎじゃないか。美女と言われて悪い気はしない

ねえ……。相良良晴、あんたもサルだと言われちやいるが、ガキつぱくも精悍な顔をしている。いいねえ、いい男を二人も見れてあたしや眼福だよ」

カラカラと笑う直正殿。まさしく豪放磊落といった風情だった。

丹波に住まい、松永長頼を討ち取った姫武将にして史実では明智光秀を最も苦しめた武将である。

(そんな彼女だからこそ畿内鎮定の助けにした。彼女は戦は好きだが、中央に出てどうこうとは考えていない。組むには最適な人種だった)

世間には織田と松平の同盟が律儀と称えられているが、六角と赤井直正の同盟もそれに並ぶと思う。

彼女は俺と手を組んで丹波の最大勢力となり、俺が織田政権に組み込まれてからは丹波第一の武将として織田の西部戦線を支え、明智光秀の畿北方分にも主力として戦力を供出している。直正殿が後方を守ってくれたからこそ、俺は浅井や武田相手に好き勝手に戦える、いわば背中を預けた相手といふべき存在だった。

「直正殿、丹波の様子はどうか？」

「うん、まずまず。波多野の奴らはきんかんを気に入ってはないだろうけど。まだ抑えられる範囲かねえ」

「ならよかった。丹波が西国の要だからなあ。まとめられそうなら全然いい」

直正殿もまた連れ合いに加えて、近況を語らいながら本堂に進む。

互いにタメ口で話しても指摘する者はいない。それだけ六角と赤井の蜜月は畿内では有名な話だった。

本堂に入ると三人は別れて俺は上座にもっとも近い次席に、直正は中座あたりにある国衆の席に、良晴は末席に向かった。

俺の隣には義定と九条植通がいる。二人は先に入っていて源氏物語談義を始めていた。

「遅れてすまない、植通卿」

「別によい婿……。いや、まだ内緒だったかの、すまぬすまぬ」

わざとらしく言い間違える植通に白い目を向ける。

俺の前では種通は源氏物語をはじめとする古典の研究者として顔を前面に出し、義定と接していた。それこそかつて長夜叉殿と結んでいた同好の士としての繋がりだ。だが、ここへ来て一気に馬脚を表したのだから油断ならない老爺だった。

「疑われるのは分かるが、義定ちゃんと源氏物語談義をするのが楽しいのは本当じゃよ。まあ下心はあったがな」

「大丈夫だよ。種通おじいちゃんに下心があったのはあたしも知ってるから。あたしもあたしで実はこっそりうまく反織田から切り離せないかなーと思つてたり」

「ほっほー！ これは義定ちゃんにしてやられたのう！ いやはや、これはしたり」

これは一本取られたとばかりに顔を覆ってみせる種通。

どうも清濁混ぜ込んで両者はつるんでいたらしい。

もう呆れて何も言えず、先に出されたお通しをちびちびと口にしながら主役を待つ他なかった。

そして、その主役は前田犬千代を伴って現れた。

南蛮渡りの赤いピロートのマントにフリルの飾り襟が印象的なブラウス。いつもの虎皮は外せない。頭にはお気に入り羽帽子を被つていて日ノ本の姫武将というよりかは、西欧の姫君のような格好だった。

「どうもどうも。みんな、わたしのために集まってくれてありがとう！」

そんな信奈の前に典型的な麻呂姿の関白・近衛前久が並ぶと違和感がすごい。……さて、俺も確か一緒に官位をもらうんだった。前に出ないといけない。

信奈公と一緒に近衛前久の前に並ぶ。よくよく見れば、わなわなと震えていた。そんなに俺らに官位を渡したくないのか……。

「本日は、やまと御所より信奈どのに右近衛大将を、高村どのに権中納言の位を授けに來たでおじやる」

「デアルカ」

「ははっ」

信奈公は官位には興味ないからかそっけない。俺は一応は敬う姿勢を見せた。

……それにしても、やってくれたな前久卿。信奈公が与えられた右近衛大将も俺が与えられた権中納言も従三位。どちらも武家では破格の高位であり、特に信奈公が与えられた右近衛大将は四代足利将軍義持以降には代々任官されてきた官職であった。

つまり、これは朝廷が織田信奈をひいては織田政権を足利将軍と格だと認めたことに他ならない。この事実は古い権威を信じる者には効く。

だが、いやらしいのは俺をも信奈公と同じ位階に引き上げたことだ。おかげでまたも政権内での信奈公の突出は防がれることになる。

前久卿による官位授与の後は、織田家諸将の論功行賞が行われていく。

まずは史実通りに丹羽長秀が若狭一国を任じられ、明智光秀は坂本に加え丹波丹後を正式に知行地として与えられた。

柴田勝家は越前一国なものには変わりないが、与力に前田犬千代、佐々成政、不破光治に加えて朝倉景鏡もつけられている。滝川一益は桑名と長島に加え知多半島を含む尾張半国が与えられた。

「サルには北近江二十万石を与えるわ!」
一番参列者の反応が大きかったのは、相良良晴の国持ち大名化だろう。

功績で言えばむしろ妥当なのだが、武家ですらないそもそも身元不明の男がここまで成り上がることに周囲は困惑を隠せないでいた。

「どうしよう高村。俺、内政の経験なんてしたことないぞ……」

与えられた相良自体も困惑している。どうやら転生者らしからず彼は内政チート知識なんざ持ち合わせていなかったらしい。……まあ、そこは俺も強くは言えない。日本史よりは世界史の方が得意な高校生だったただだからなあ俺……。

「隣国だから本当にまずそうだったら人手を出してやるよ。領国統治に関しては俺の方が先輩だからな」

「ありがてえ……」

見かねて助け舟をやると、相良が拝みはじめてくる。いい加減うつとうしいので、俺はその後はその後はそつけない態度で流すことにした。

長かった論功行賞も終わり、宴もたけなわになってくる。

そんな中、信奈公はぽんぽんと手を叩いて注目をまた集めた。

「さてみんな、宴ももう終わりに近くなってきたけれどまだ伝えていないことがあるわ！ 植通卿、お願い！」

信奈公の後ろの襖が開く。

開いた襖の先にはいつの間座敷から姿を消していた植通卿とルイズフロイスと「彼女」がいた。

わかつちやいたが、俺は目を見開かずにはいられない。

まさか、この時代の日ノ本でアレを見るとは思わなかったのだから。

純白のウエディングドレス。

南蛮かぶれの信奈公らしいと言えはらしいが、まさかこの場でお披露目してくるとは思うまい。

驚く俺を見て、信奈公と相良がしたり笑いを浮かべる。腹立つがしてやられたのは確かだ。

「拙の息女たる市と六角高村は此度婚姻する儀となり申した。高村は拙の猶子とする。皆の衆、以後は我が九条家と六角家をお頼み申す」

植通卿……いや義父上が一礼するや否や、会場がざわめいた。それこそ相良良晴の国持ち大名化よりもっと大きい。

「植通卿、いかなる考えでおじやるか！ 猶子とはいえ、藤原氏以外のものを摂関家に入れるなど！ 耄碌されたでおじやるか！」

特に関白の前久卿は義父上に食いかかるほどだった。だが、これに義父上は動じずに「ほっほ」と笑い飛ばす。

「知れたこと。拙が関白に返り咲くためよ。それに幕府も公家も軍を持たず、今までのように守護や国司に兵を募るようでは天下は治められぬと知った。頭家公のような公家でも旧来の將軍のような武家でも構わぬ。強い軍を直接握る者が上に立たねば、天下は抑えられぬ。

前久よ、そちが昔に捨てた公武合体の志。あれは間違いではなからうよ。ただ公家が武家のように振る舞うだけではなく、武家が公家のようになってもよいと拙は思うのだ。公武関係なく国士として日ノ本を支える、これからはそんな世にしていかねば」

「結論を変えるつもりはないでおじやるか」

「ああ」

「ゆめゆめ思い知るでおじやるよ、種通卿。武家と公家は相容れない。麻呂は上杉謙信と行った関東遠征で嫌というほど思い知ったでおじやる。……後悔しても知らぬでおじやりますよ」

吐き捨てるように言つて前久卿が座敷を去つていく。

その言葉にはどうにも動かしがたい現実の重みがあった。

「やれやれ、前久よ。一応は晴れの席でなんと見苦しいことを……。まあよい、仕切り直しをすると致そう。これ、お市。お前から名乗りを。これよりは高村公の妻となりて彼の覇業を支えるのだ。諸将に顔合わせはしておかねば」

「はい、義父様」

凜とした声が水面に雫を落としたかのように響く。白けた空気は一瞬にして遠くなり、座敷の全ての視線が彼女に向けられる。

ヴェールに隠された顔が露わになり、誰かが思わず息を呑む。

清冽な佇まいの彼女は込み上げるナニ力をこらえながら、花のような笑みで名乗りをあげた。

「市に、ごいいます」

何人かは何かに気づいたようではつとして目を見開く。

俺はというと、もうこらえきれなくて泣いていた。

お市と結ばれた喜びもある。運命に打ち勝った歓喜も全部混ぜつつもうよくわからない。

ただただ、これでよかつたのだと静かに噛み締めていた。

人物特集 浅井長政／鄒月院

浅井長政

統率 87 武勇 92 知略 77 政治 63

今作のメインヒロイン。

高村とは学舎を共にした幼なじみの関係であり、互いに切磋琢磨して武将としての力を磨いてきた。

元は浅井家から人質として送られた姫君だったが、義賢の女漁りが激しいことから男として育てられ、猿夜叉丸の名を授かる。初めは男装し男として振る舞うが、高村にバレた後は内心気に入ってなかつた猿夜叉丸の名を捨てて、彼の前だけではお市として一人の少女に戻ることができた。

絶世の美少女であるため、成長するにつれて女であることを隠し切れなくなり、義賢に貞操を狙われるようになる。

ある日、母が目の前で義賢に犯されているのを見て脱走を決意。そして、男として浅井家の家督を継いだ時、新十郎に抱いていた淡い恋心は封印した。

以後は浅井家の当主に就くが久政の権力は隠然と残っており、亮政からの二代に渡る因縁も相まって家中の意思統一が上手くいかず反六角、反織田の方に舵を切らざるを得ず、家族に対して一途であるため久政の政治権力を完全に剥奪することも選択肢に取り得なかつた。

政治面ではやや不手際が目立つものの、野良田の戦いで六角軍を追い返し浅井を完全独立させ、第一次伊勢大戦では絶好機に伊勢本国に参戦し、高村の余力を奪って降伏させる決定打になったり、姉川の戦いでは織田軍の縦深陣に果敢に切り込み、本陣間近に迫るなど高村に比べれば一枚落ちるものの戦闘においては畿内屈指の実力を誇る。

小谷城の戦いで落城と共に焼け死に、遺体は残らなかつたという（建前で死んだことにされた）。

鄒月院

六角高村の正妻。

表向きは元関白九条種通の私生児で、生まれながらに寺に預けられていた尼僧。法体でありながらも冠絶した美貌と学識を持ち、高村が激しく我が妻に請うたために九条種通がその要望に応えたとされる。

実態は浅井長政。高村の初婚であり天下の耳目を集めてしまうことが予想されたために六角家の格と釣り合う名家と養子縁組する必要があったが故になされた処置である。

なお、信奈や相良良晴など頻繁に長政と顔を合わせたものなら鄒月院ニ浅井長政という正解を導き出せる。高村のこの婚姻に良晴は「リア充爆発しろ」と毒づき、信奈は「頭が切れる嫌な奴」から「でも一途なところもある奴」と高村の評価を改め「アイツにもこれぐらいの甲斐性があればいいのに」とひとりごちたという。

史実実在ルート

1545年生まれ。

浅井氏滅亡後に、九条種通の私生児と高村の婚姻を聞きつけた信長が介入し、自分の養女にして嫁がせたもの。高村との婚姻以前の経歴は上記の表向きの理由と同じ。預けられた寺では尼僧の主人として振る舞い、時には寺林に出現した猪を薙刀で仕留めるなど強気な性格だと伝わる。

高村の傍迷惑な一目惚れにより始まった結婚生活だったが、互いに武闘派であることや高村が概して彼女を尊重する姿勢を取るなど夫婦仲は良好で、最終的には当時としては晩婚ながら一男(嫡子高信)三女を設けた。高村には割と反抗した高信が鄒月院には逆らわない辺り家族の中のヒエラルキーは彼女が最上位だったことが窺われる。

豊臣政権時代には大国の妻として他の大名の妻子と交流し、高村閣と呼ばれる六角家を中心とした大名グループの形成に一役買った強妻。

1598年、死去。

その死に高村は深く嘆き悲しみ二月は政務が取れずに豊臣秀吉死後の政権の主導権争いに乗り遅れる。しかし、彼女の死により親豊臣を強硬に主張していた高信(宇喜多秀家と仲が良かった)との対立が

収まり、家中を二つに割ることはなかった。